

アーマードコアEX 女
レイヴンの日常は、血
と硝煙と愛に満ち

闇鴉慎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地球歴159年。

『大破壊』によって荒廃した地上を棄て、人類は地下複合都市に移住していた。

「政府」の概念は失われ、企業こそが世界の統治者となったのである。

だが――

全てが経済によって支配されるようになったこの時代。

その束縛を断ち切る唯一の例外が存在した。

何者にも与せぬ渡鴉。

巨大機動兵器アーマード・コア^Aを駆る無敵の傭兵たち^C。

——彼らは、レイヴンと呼ばれていた。

*

世界最大の地下都市アイザック・シテイ。

ここに住む女レイヴン、リンファ。

天才メカニック、エリイ。

伝説の傭兵の名を継ぐ者、ヨシユア。

これは、彼女らを襲う戦いの日常を描いた物語である。

(※この作品は、作者の個人サイトでも公開されています)

目次

第1話 青いブルース・ハーブ

01 女レイヴン、タオ・リンファ

1

02 ミッション：物資輸送車両護衛

17

03 アリーナ管理委員会の男

29

04 カウント・ダウン

39

05 リンファ vs ヨシユア

50

06 決着

60

第2話 純白ホンキイトンク・ラブ

01 淫蕩の宴

02 ヨシユアとの再会

03 盗聴

04 一時休戦

05 ヨシユアの怒り

06 ダルスロース

07 共闘、リンファ&ヨシユア

124

08 純白の世界に、愛を残して

133

第3話 ヘヴィ・メタル・シルバー

01 ボダ

02 リンファとヨシユアの腐れ縁

145

03	「ランカーACを確認しました」	239	04	ミッション：巨大兵器撃破	337
02	エアハルト	228	03	勝負	328
01	忍び寄る恐怖	221	02	ふいうち	317
第4話	ディーブ・クリア・ラップ	210	01	絶望の予兆	310
08	風よ、もう一度	199	最終話	真紅のジャム・セツション	300
07	緊急警報／レッド・アラート	188	09	ムラクモ・ミレニウム	288
06	シエリー	175	08	誘導結界（デコイフィールド）	278
05	戦うために創られたもの	166	07	『H-1』	270
04	ボダの脅威	156	06	ワームウツドの流星	260
03	一度は惚れた女だから		05	開戦	250
			04	アブソルート	

01	悪夢	417					
第6話	砂漠のグレイ・ロック	409					
	y, somewhere!						
	d. See you some day						
	That, snott he en						
	エピソード	400					
	と愛に満ち						
09	女レイヴンの日常は、血と硝煙	391					
08	女の戦い	380					
07	男の戦い	369					
06	ラスト・ミッション	358					
05	大破壊						
02	ミラージュ・ザ・サンドストー						
03	リンファの秘策	440					
04	対決！ リンファvsミラー	429					
05	汗の匂い	462					
06	ミラージュ、一世代の大勝負	452					
07	マスターアリーナ、開戦	473					
第7話	ムーンライト・セレナーデ	484					
01	追う者	496					
02	声を奪われた少女	506					

0 4	脱出	623
0 3	波間の美女	613
0 2	うろんな依頼人	602
		592
0 1	観光地下都市、コートデパール	
第8話	エボニー・コンツェルト	
0 9	真相	585
0 8	最後の手段	575
0 7	慢心	564
0 6	トラップ	555
0 5	アイリス	543
0 4	森林の戦い	532
0 3	// 絶対に//	519

0 6	貪り合う獣たち	741
0 5	娼婦アンジェリカ	730
0 4	できそこない	718
0 3	望まぬ再会	707
0 2	来襲	697
0 1	『坊や』	686
第9話	ブルーグラス・メモリーズ	
0 9	勝利の苦味	679
0 8	圧倒	668
657		
0 7	最強レイヴンの家庭の事情	
0 6	本当の依頼	645
0 5	弧雷のロレンス	634

08	邂逅	873
07	蘇る過去	860
06	細華（シーファ）	847
05	災患	835
823		
04	もうひとりの“あたし”	
03	“最強”を越えた女	812
02	襲撃	801
01	動き出した狂気	790
	最終話 緋色の瞳のラグ・ドール	
09	流星の墜ちるとき	782
08	ナターシャ	768
07	一蹴	756

09	ラスト・バトル（前編）	886
10	ラスト・バトル（後編）	898
	エピローグ	
	フルカラー・フュージョン	
	次回予告	
918		909

第1話 青いブルース・ハープ

01 女レイヴン、タオ・リンファ

「五万！ もうこれ以上は！」

景気の悪い声が古い工場に響き渡る。

時間的にはもう正午過ぎのはずだが、所狭しと散乱する——いや、棄てられている黒い機械類を照らすのは今にも消えそうな電灯だけである。

そこでさつきからああでもないこうでもないと怒鳴りあっているのは、オイルで汚れた茶色い作業服をまとったひげ面の男と、もう一人の若い女。

背丈は一・七メートル程度。

すらつとした肢体を包むのはラフなジャケットとゆつたりしたハーフパンツ。

湿気が多い地下都市では、特に珍しくもない服装である。

しかし、彼女がアジア系であることを示す首にかかってくるくらい黒髪、漆黒の瞳、やや吊り上がった目尻と、小さいが存在感のある鼻が、彼女の個性を描き出していた。

「もうちよつとなんとかなんない？」

彼女は器用にウイंकをして見せたが、ひげの男は渋い顔のままだった。

「しかしなあ……いくらリンファちゃん頼みでもこれ以上は無理だなあ……」

このオヤジがこういう言い方をするとき……それはあと一割くらいは値段が下がっても平気な時だということを、彼女——リンファはよく心得ていた。

リンファの右腕がすつと動き、ポケットから取り出したマネーカードを側のスロットに差し込んだ。

そのまま流れるようにひげの男の手元のキーボードを叩いて有無を言わせずリターンキーを押す。

淡い光を放つモニターに表示されていた兵器のCG……その上に文字が浮かび上がった。

『WG—M500/E 売約済み リンファ 嶺華』

「ち、ちよつとリンファ！」

「んじゃ、そういうことで」

必死に抗議する男を振り切って、リンファは一目散に工場から逃げ出した。

その速さたるや、四足ACさながらである。

後に取り残された男はしばらく呆然としていたが、やがて大きく息をついて呟いた。

「全く、かなわねえな。あの砂利レイヴンには……」

彼はまだ知らない。もう一度モニターに目をやったとき、あらためて驚愕の唸り声をあげる運命が待っていることに。

モニターの隅で、申し訳なきように点滅している文字があった。

『45000COAM（送料込み）』

*

「いやー、ほんつといい買い物したあ。

前から欲しかったんだよねー、あのマシンガン」

薄暗く、街灯もろくにない裏通りをほくほく顔で歩いているのは、言わずと知れたりリンファである。

夜も昼もないこの地下都市で年頃の女が一人歩きなど危険極まりないが、彼女はむしろ周囲の危険を楽しんでいますらいるようだった。

大破壊。人々がそう呼ぶ巨大戦争があった。

世界全てを巻き込み、人類は著しく個体数を減じた。

そしてその結末は、超大型衛星レーザー砲による地上の完全崩壊だった。

極度の汚染によって、地上は人類をはじめとする生物の生存を拒み始めた。

その結果、人は新たな都市計画の一環として建設されていた地下都市への移住を余儀なくされた。

人類は再び自らの業によって楽園を追われ、新たな故郷に降り立ったのである。

ここアイザックシティは、それらの地下都市の中でも最大の規模と最も長い歴史を誇っている。

したがって、まだ技術の確立されていない頃の無理な建設による歪みが、大破壊から五十年が過ぎた今になって現れは始めている。

数多くあるそんな歪みの一つが、リンファの住処がある『スクラップ地区』である。スクラップ、というのはもちろん俗称で、書類上は『K-3居住区』となっている。

高度な機械文明が産み出す副産物、すなわち大量の廃棄物が不法投棄されているため、この名がついた。

限りなく不衛生な場所ではあったが、そんな中でも人々はスラムを形成し、立派に暮らしていた。

リンファはここが気に入っていた。

他者から束縛を受けることがほとんどない、というのがその表向きの理由だが、本当

はただ物価の低さに惹かれているだけである。

幾つか目の角を曲がると、もうリンファの住処は目の前だ。

住処と言っても外見は倉庫以外のなものでもない。

一階に『商売道具兼相棒』を隠し、二階で寝起きしている。

家の入口は二つ。

『相棒』用の大きなシャッターと自分用のドアである。

リンファはいつものように、ドアの前を塞いでいる廃棄物を蹴飛ばし、ノブに手をかけた。

「……………？」

違和感。

リンファの第六感が激しく唸る。

家の中に誰かが……いる。

ノブから手を離すと、ホルスターに収めていた拳銃を構え、スライドを動かしチェンバーに弾丸を込める。

改めて左手でノブをゆっくり捻り、軽く押す。

微かな隙間から中を確かめ、目に見える位置に異状がないことを確認してからドアを蹴り開けた。

すぐに汚れた倉庫の光景が目飛び込んできた。

使えるものも使えないものも混ざった廃棄物の山。

一応整然と並べられているパソコン。

そしてなにより目を惹くのは、青いビニールシートが被せられた巨大なリンファの『相棒』。

しかし、それ以外には動くものも見えなければ微かな音も聞こえない。

「誰!？」

隙なく銃を構えたまま、試しに叫んでみた。

何か反応があるかとも思ったのだが、相変わらず相手は沈黙を保っている。

……かと思いきや。

「やれやれ。噂通り、物騒な女だ」

リンファの『相棒』の脇から人影が滑るように現れた。

暗くて顔は見えないが、背格好や声からして、おそらく男だろう。

……まあ、最近は見えた目で性別がわからないことも多いのだが。

「勝手に人ン家にしのび込んでいてあたしを物騒呼ばわりとは、いい性格してるじゃない。

……両手を上げたままじっとして」

人影は言われたとおりに諸手を上げた。

警戒を怠らずにリンファはドアを閉め、壁のスイッチを押す。

天井のボロな電灯が、数回ちかちか点滅してから明かりを投げかけた。

瞬間、男の姿がくつきりと映し出される。

一見して貧相な男だった。

百八十以上の身長がありながら、妙にひよろひよろして見える。

少し長すぎる手足をだるそうに扱う姿はリンファにテナガザルという大破壊以前の動物を連想させたが、そのテナガザルには似つかわしくない、異様に鋭い眼光を彼の瞳はほとぼしらせていた。

おまけにこのくそ暑いのに御丁寧にコートまで羽織り、それでいて額には汗を浮かべている。

リンファはその貧相な男に、暑さもわからない馬鹿、というレッテルを貼ろうとしたが、すぐに自分の構えている拳銃が汗の原因であることに気づいて、止めた。

「いつまで手を上げていればいい?」

「もう少しよ。そのまま後ろを向いて」

その辺に転がっていた手錠を拾うと、リンファは大人しく後ろを向いたテナガザルの手首に、後ろ手にそれをかけた。

小さな金属音がしたのを聞いてから男を地面に座らせる。

……この手錠、別にリンファが変な趣味を持っているわけではない。

傭兵稼業なんぞをしていると、敵を生かしたまま捕らえることも必要になる。

あくまでそのためのものである。

男が完全に無力化したのに安心して、リンファは手近の椅子を引つ張つてきて乱暴に腰掛けた。

銃を片手で弄び、男に言葉を投げかける。

「で、あんた何処の誰？」

「それに答える義務が、僕にあるか？」

「答えなきやここで撃ち殺すまでよ」

男は呆れたような笑いを浮かべた。

しかしそれがリンファの逆鱗に触れることはなかった。

「僕の名はワームウッド」

「レイヴンとしての名前は聞いてないの。本名は？」

「……バレてるか。」

本名はヨシユア。所属は……御察知の通り、ネストだ」

——レイヴンズ・ネスト。

大破壊で国家というシステムは完全に崩壊し、世界は企業によって統率されるようになった。

しかし、全人類が企業の束縛を受ける中、ただ一つだけ、例外が存在した。

レイヴンと呼ばれる傭兵たちである。

レイヴン達はコンピューターネットワーク上に存在するレイヴンズ・ネストなる組織に所属し、アーマード・コア、略してACというロボット兵器を駆る。

その戦闘能力は高く、合法、非合法を問わず依頼をこなすため、企業からの依頼は絶えない。

また、所属とはいえレイヴンがネストから受ける制約は何一つない。

リンファも、そしてこのヨシユアという男も、ネストに名を連ねるレイヴンである。

しかし同業者が泥棒とは。レイヴンも落ちたものだ。

リンファは自分が泥棒まがいの仕事を何度もやっていることを棚に上げて顔をしかめた。

「まったく、レイヴンがコソドロなんて情けない。

あなたにはフリーランスの心意気ってやつはないわけ？」

「泥棒とは聞こえがわるいな」

「的確じゃない。で、何盗ったの？」

「……このオンボロ倉庫に盗む物なんてあるか？」

そういうえば、リンファの家には現金など一銭も置いていないし、転がっているのはゴミばかり。

これではいくら治安の悪いスクラップ地区でも泥棒など入るべくもない。

「そ、それは……『ペンユウ』とか……」

「わざわざ他人のACを盗むレイヴンがどこにいる」

確かにACは金になるが、リンファの愛機『ペンユウ』にはリンファ以外には扱えないように、パーソナルコードが設定されている。

そのコードを書き換えることも不可能ではないが、当然手間も時間もかかる。

これは全てのACに共通したことだ。

要するに、盗むには向かない代物なのである。

「んじゃあんたなにしに來たのよ？」

「さあな」

あくまでもヨシユアはとぼけるつもりのようなだった。

リンファは諦めて、警察に突き出すことにした。

その方がよっぽど早いし、手間もかからない。

身動きの取れないヨシユアを放って、電話をかけるために後ろに振り返る。

電話まではほんの数メートル。

右足から踏み出して、続けざまに左足を床から離した、その瞬間。かちやつ。

小さな金属音に気付いたリンファがヨシユアに目をやったときには、既に彼の姿はなく、ただ締まったままの手錠が床に転がっているだけだった。

*

「ただいまりんふあちやくん」

間延びした声がリンファの耳に届いたとき、彼女は自分の相棒である『ペンユウ』を覆うビニールシートをはがしているところだった。

作業する手を休め、倉庫の入口を見遣る。

そこではリンファのもう一人の相棒が、両手いっぱい紙の買い物袋を抱え、ふにやつとした笑いを浮かべていた。

腰まである長い赤毛を三つ編みにまとめ、丸い小さな眼鏡を高い鼻にかけている。

ボディーラインがはつきりわかるデニム生地のスカートとやや丈の短いジャケット。

いつも笑顔を絶やさず、あくまでマイペースな振る舞いには惚れる男は多い。

しかし、リンファに言わせれば、「なんでこいつがあたしよりモテるのかわかんない」ということになるのだが。

彼女こそが、リンファを支える専属メカニック、エリイである。

「た〜だ〜い〜ま〜!」

りんふあちゃん、元気い?」

「ぜんぜん」

元氣も何も今朝会ったばかりなのだが、ズレたエリイの質問に真面目にかつ暗く答えるリンファ。

「あ、そ〜だ〜!」

あのねりんふあちゃん、やおやおじさんがおまけしてくれたんだよ〜!

やさしくね〜」

「聞けよ……人の話……」

無論リンファの暗い表情などに気付く由もなく、エリイはテーブルの上に買い物袋を立てて置くと、小さく首を捻った。

その横では置いたばかりの袋が倒れ、中からオレンジが転げ落ちる。

「はなし? おはなし?」

なにになに?」

「ワームウッド。知ってる?」

「わーむうっどくん? しってるよ。レイヴンのひとだよ。」

えっとねえ、四足限定アリーナで一位になって、マスターアリーナにノミネートされただけど、いきなり引退するっていつてどっかいつちやったの」

「マスターアリーナ!?!」

アリーナとは、企業がスポンサーとなつて開催される、レイヴン達の闘技場とも呼ぶべき場所である。

AC 同士の戦闘に、酔狂な金持ちが賭をして楽しむわけだ。

そこには百戦錬磨のレイヴン達が集う。

中でもマスターアリーナは最高レベルのアリーナで、そこにノミネートされるだけでも超一流レイヴンの証であり、他のレイヴン達からは羨望の眼差しで見つめられることになる。

もつとも、このアリーナを『レイヴンの仕事ではない』と考えて嫌う者も多いのだが。かく言うリンファもそんなアリーナを嫌うレイヴンの内の一人である。

「なにになに? わーむうっどくんがどうしたの?」

「んー……さつき泥棒に入られたのよ。逃げちゃったけど。」

で、そいつがワームウッドって名乗ったわけ。本名はヨシユアとか言つてたけどね」

「えく？　いくなく、えりいもわーむうつどくんあいたいよ〜」

子供のように駄々をこねるエリイ。確か彼女はリンファより年上だったはずだが……

リンファは頬を膨らませるエリイの横の机から、転がったオレンジを拾い上げた。

柑橘類特有の甘酸っぱい香りが辺りを万遍なく満たしていく。

「ほんと、エリイ好みのいい男だったよ。若いけど腕は悪くなさそうだし」

「……若い？」

突然、エリイの声のトーンが変わった。

それまでのふにやふにやした声が急に張りを帯びる。

驚いたリンファがその顔を見ると、そこにはコンビを組んで二年間、リンファすらも滅多に見たことのない落ち着いた表情が浮かんでいた。

ごくまれに、エリイはまるで別の人格に支配されたかのように『変わる』ことがある。『変わった』後のエリイは豊富な知識と冷静な判断でリンファに幾度となく的確な助言を与えてくれた。

一体どちらが本性でどちらが偽物なのかわからないが、きっとこれが昔科学者だった頃の名残なのだろうと、リンファは納得していた。

「おかしいわ。」

ワームウッドが活躍したのは今から四半世紀も昔。

当時二十代だったらしいから、今は最低でも五十くらいにはなってるはずよ。

どう鼻屑目に見ても若くはないわね」

それだけ一気に言い切ると、エリーの表情はまたいつものおっとりゆつくりしたものに戻っていた。

「なのでえ、ひとちがい、じゃない〜?」

「かもね。ま、どっちでもいいか。」

それよりエリー、実は仕事入ったの」

「ほんと〜? やったね!」

「なににのしごと?」

「依頼主はオムニシヤンス・インダストリー、依頼内容は物資輸送車の護衛。」

予告状叩き付けるような大馬鹿テロリストを捻り潰すだけで、なあと報酬四万コーム!」

「すつ〜い!」

「お・い・し・い・おしごとちゃん、いらつしや〜い!」

COAM
コームはこの時代に最も広く使われている通貨である。

レイヴンへの依頼料の相場は二万から三万コームで、四、五万ともなればかなり依頼

料は多い方だ。

また、それなりのACを一機持つには七十万から百万コームほどかかる。

「新しく買ったマシンガンが届いたら、早速装備して出るよ。」

ソフトの追加、お願いね！」

「りよ〜かい！ む〜、まくまくするう！」

「……わくわく、じゃないの？」

浮かれて準備を始めるエリイの背中を見つめながら、リンファは何か漠然とした予感のような物を感じていた。

あの男……ヨシユアは、きっとまた現れるに違いない。

根拠も何もない。

ただ、背中を冷たいものが駆け抜けていく、それだけのことだった。

つづく。

02 ミッション：物資輸送車両護衛

「所属不明MT確認。機数5。戦闘モードに移行します」

リンファは愛機ペンユウのコックピットの中で冷たい機械の声に耳を傾けていた。

ACの頭部パーツには一応目のような形の視覚センサーが付いているが、別にそこでもしか外界を確認できない訳ではない。

こういう大型ロボットを操縦する場合、視界の広さは重要な条件になるのだ。

従って、このペンユウも四方のセンサーによって三百六十度見渡すことができるようになっていている。

外は暗い。

地下都市の中なのだからそれは当然だが、特にこの都市同士を繋ぐ地下幹線道路の中は明かりが乏しい。

加えて道の脇の舗装されていない部分には大きな岩などの遮蔽物もあり、襲撃するには最適な場所である。

三台の物資輸送車の前を先導していたリンファは、レーダーを確認しながら通信を開き、すぐ後ろの車に繋いだ。

「敵MTを確認しました。」

前方に三機、後方に二機。

前方の敵を排除しますから、その際に全速力で通り抜けてください。

あとはこつちで片付けます」

マッスル・トレーサー

M Tは、高度な大型ロボットの総称である。

その中でも「コア」を中心として各部パーツを共通化したものはC M Tと呼ばれ、さらにその中で重武装がなされているものをA Armored Core Cと呼ぶ。

汎用性ではA Cの方が上だが、M Tには目的に合わせて製造時から機体を特化できるという利点がある。

侮つてかかれる相手ではない。

ともかく、リンファの通信に答えたのは渋い中年男性の声だった。

『頼んだぞ。この試作品だけは何かがあっても失うわけにはいかんだ』

どうやら輸送しているのは何か研究途中の試作品のようだが、そんなことはこの際関係ない。

が、相手の男の必死さは伝わってきたので、落ち着かせる意味も込めてリンファは答

えた。

「お任せ下さい。そのためのレイヴンですから」

この科白が功を奏したのか、輸送車の男はさつきより落ち着いた声で健闘を祈るとか
なんとか言ってから通信を閉じた。

——さあ。

リンファは操縦桿を握り直した。

——ここからが本番だ。

リンファの愛機ペンユウは中量二足タイプ。

右手には新しく買ったマシンガン、左手には以前から使っているレーザーブレード、
左肩にはエリイ特製のレーザーキャノンを装備し、右肩のレーダーで索敵することも忘
れない。

レーザーキャノンは特製と言ったが、これは不法投棄されていた不良品を拾ってきて
改造したものである。

三連誘導砲身を使用した強力な兵器を、随所を強化プラスチックで軽量化することで
通常の半分程度の重量にしている。

ペンユウ最大の火器だが、無理な改造が祟って五発も発射するとオーバーヒートして
整備が必要になるのが難点である。

全身をワインレッドに塗装された巨人……ペンユウは、リンファの操作に素早く反応して右手のマシニングンを構えた。

ギャンツ！

ブースターを噴かせて、一気に加速する。

さすがは超大出力ブースター、前方の三機のMTとの距離は一気に縮まった。

「それで隠れてるつもり!?!」

木陰に身を潜めていた敵の一機を、マシニングンの掃射で薙ぎ払う。

あまり装甲が硬いMTではないのか、数発で完全に沈黙した。

慌てたのは敵の方だ。

完全な不意打ちをするはずだったが、逆に一瞬で仲間が倒されてしまった。

まともに浮き足立ち、てんでばらばらに隠れ場所から躍り出る。

「甘〜」

左右に一機ずついるMTを、それぞれブレードの一撃とレーザーキャノンで片付け、輸送車に合図を送る。

「今のうちに、早く〜」

『恩に着るよ〜』

輸送車は意外と速いスピードでペンユウの横をすり抜けて行った。

あとは、挟み撃ちにするつもりで後ろから来ている二機を倒せば作戦終了である。

リンファはもう一度ブースターを噴かした。

敵までの距離はおよそ三百メートル。

レーダーによると、二機が固まって動いているようである。

あまりにも愚かな行動だった。

これでは、まとめて片付けてくれと言っているようなものだ。

当然、リンファはペンユウにレーザーキャノンを構えさせた。

狙いを定め、撃つ！

……ゴオ……ン……

手応えあり。

どうやら仕留めたようだ。

これで作戦は完了。

あとは家に帰って報酬を受け取って、シャワーを浴びて寝るだけである。

ほつと息を吐くと、リンファは操縦席のシートに身を投げ出した。

「ふう、楽な仕事ね。

装甲板にも傷一つついてない。ちよつとつまんなかったかな」

『それなら僕の相手を頼めるかな』

突如として入ってきた通信に、リンファは弾かれるように飛び起きた。

この声、聞き覚えがある。

レーダーに反応は……ない。

ペンユウが装備しているレーダーはかなりの広範囲を索敵できるが、通信の相手はその外にいるらしい。

「残念だけど、姿を見せてくれないと相手にしようがないの。」

わかる？ 泥棒さん」

『憶えていてくれたとは光栄だな。』

それじゃあ、リクエストに応えるのでしょうか』

通信は、そこで途切れた。

間違いない。

相手はヨシユアとか名乗ったあのレイヴン……『ワームウッド』。

ただの泥棒でないことは確かだが、一体何の用があるのか……

「まさか……あたしに惚れたか？」

『それはない』

通信……開きっぱなしでやんの……

独り言のつもりでいった冗談に他人からつつこまれるというのは、想像以上に恥ずか

しいものである。

「思わずリンファは赤面した。

が、それも束の間。

突然、レーダーの端に赤い点が現れた！

「AC確認。機数1。所属不明」

「んなこたアわかってんのよっ！」

思わずコンピューターに当たり散らすリンファ。

それでもレーダーの反応を確認することは忘れない。

速い。

かなりの高速で移動し続けている。

おそらく相手は四足ACだろう。でなければ超軽量二足だ。

レーダーによると、そろそろ射程圏内に入る。

リンファはペンユウを動かし、岩陰に隠れた。

相手もレーダーを装備している以上、完全に身を隠すことはできないが、遮蔽の役には立つ。

十分に引きつけてからマシンガンで蜂の巣にする予定だ。

そして……ついに距離二十メートル程度まで近付いた！

適当に狙いを定め、岩陰から躍り出る！

「そっ………に、いない!？」

距離的には見えていなければならぬのに、何処にもACの姿はない。

相手を捜そうとしたその瞬間、リンファは背筋に悪寒を感じ、その場から飛び退いた。
ガガガガガッ！

無数の弾丸がさつきまでペンユウが立っていた場所をえぐり取る。

一瞬遅れて、そこに青いACが着地した。

青い、蜘蛛のような四足AC。

ガトリングガンが内蔵された武器腕。

これがヨシユアのACらしい。

どうやらさつきは、リンファがレーダーから目を離し、岩陰から飛び出すまでの一瞬の隙に空中へ飛び上がったらしい。

こちらの行動が完璧に読まれている。

おまけに今撃ってきたガトリングガンは、リンファにとって自分で使うには大好きだが相手にするのは勘弁してもらいたい武器の一つだ。

「今度こそー！」

急いで向きを直し、リンファはトリガーを引いた。

敵のACに向かって高速連射のエネルギー弾が容赦なく飛んでいく！

しかしそれも、回避行動を取った敵の装甲板をかするだけに終わった。

敵ながら、四足ACならではのスピードを見事に生かした戦い方だ。

『どうした？ 当たらないぞ』

「うっさいっ！ いちいち話かけんなっ！」

叫びながら、今度はブレードを一閃する。

敵の『ワームウッド』は空中に飛び上がってこれをかわす。

リンファの予想通りに。

「ワームウッド破れたりいっ！」

大破壊の遙か以前に地上の日本にいたという、サムライなるものの口調を真似しつつ、リンファはペンユウを空に舞わせた。

超高出力だけあって、あっという間にペンユウはワームウッドを追いつめた。

その肩に準備されているのは、強力なレーザーキャノン！

『馬鹿な!？』

そんなものを地面で支えず撃とうなどと……』

「できちゃうのよ、それが！」

ゴバアッ！

砲身が火を噴き、四足ACワームウッドを吹き飛ばした！

同時に天地がひっくり返るかのような反動がペンユウとその中のリンファを襲い、ワームウッドとは逆方向に吹き飛んで地面に叩き付けられた。

「ちよつち……無理あるけどね……」

通常、二足歩行のACがキャノン型の兵器を使用するには、地面に片膝をついて安定させなければならない。

さもないと発射時の衝撃で撃った方もダメージを受けてしまうのである。

しかしながら、超人的な操縦技術で反動を逃がすことができれば、理論上は立ったまま、或いは空中でもキャノン砲を発射できるはずなのだ。

リンファは今、それをやろうとして失敗したわけである。

かなりペンユウがダメージを受けてしまった。おそらく歩くのが精一杯、というところだろう。

「あくあ……またエリイに怒られちゃうよ……」

『他に心配することはないのか？』

リンファは耳を疑った。あの直撃を受けていながら、装甲が薄いことで有名な四足ACが無事にいるというのか？

彼女の疑問を裏付けるかのように、闇を切り裂き、青い蜘蛛が姿を現した。

その動きに鈍りは見られない。

それでもやはりダメージはあったようで、所々装甲が剥げ落ちている。
「お互い、満身創痍つてとこね。」

「……そっちは機関部が生きてるみたいだけど」

『君のACのデータは全て得ているからな。』

発射のタイミング、弾速、その他諸々のデータをな。

完全回避は無理だったが、なんとか身をそらす程度のことではきたよ。

「これで、僕が泥棒じゃないことがわかったかな？」

『なるほど……立派なデータ泥棒つてわけね』

『口の減らない女だな。』

どうせ、もうまともに動くこともできないだろう。

そこで僕の仕事ぶりを見ているといい』

「……仕事？」

リンファの問いには答えず、ヨシユアはワームウッドを動かして道の向こうに消えて行った。

「あの方向は……まさか、輸送車!?!」

間違いない。

ヨシユアのACはさつき輸送車が逃げた方向へ行つた。
もしも奴の狙いが輸送車の破壊か奪取だったとすれば……
リンファは口の端をつり上げ、ほくそ笑んだ。

つづく。

03 アリーナ管理委員会の男

ワームウツドのスピードを生かし、ヨシユアは輸送車を追った。
もう目と鼻の先にいるはずだ。

彼が引き受けた仕事は、この輸送車の破壊、もしくは奪取。
うまく奪取できた場合には、成功報酬が加算される契約だ。

テロリストを舌先三寸で焚きつけて、護衛のレイヴンを引き離すことにも成功した。
そしてヨシユアの予想通り、事前に護衛をするレイヴンの家から拝借したデータを有効利用してそいつを倒すこともできた。

全てヨシユアの計画通り。

まあ、機体修理に予想外の金がかかりそうだが、大したことはない。
やがて輸送車の姿が見え始めた。

テロリストを切り抜けたと思って安心しているに違いない。

一発撃って脅して、操縦している人間を追い出し、あとは三台の車をレッカーして帰

れば終わりだ。

ヨシユアは引き金を軽く引いた。

ガガッ!

車の行く手を遮るように、弾丸が地面にめり込んだ。

慌てて停車する三台。

ヨシユアはその三台に対して通信を開いた。

「中にいる奴、車から降りろ。」

十秒以内にしないと一台ずつ破壊するぞ」

すぐさま、車のドアを開いて男達が降りてきた。

そのままどこかへ走り去る。

随分と責任感のないことだが、ヨシユアにとってはその方が都合がいい。

徐に一台に近付き、牽引用のワイヤーを垂らす。

……と、その時!

突然、輸送車の一台、ワームウッドの間近にいた奴が爆発を起こした!

衝撃でワームウッドは吹き飛ばされ、地面に叩き付けられた。

「くっ……まさか、ダミー!?!」

体勢を立て直そうと、操縦桿を起こす。

しかし、やたらと反応が鈍い。

おまけに脚部から煙を吹いているようだ。

どこか機関部が故障したに違いない。

舌打ち一つしたヨシユアの耳に、追いついでサイレンの音が聞こえてきた。

「治安組織か……ここまでだな」

ヨシユアはワームウッドを動かすと、その場から素早く去っていった。

「やってくれるよ……あの女ツ！」

*

『いやはや、全く助かったよ。』

見事な仕事ぶりだった』

「いやー、それほどでも」

所変わってここはリンファとエリイの自宅。

リンファは椅子に腰掛けて、パソコンの画面に映った依頼主と話していた。

横からは時々青い光や大きな音が飛んでくる。

エリイがペンユウの修理をしている最中なのである。

「それで、報酬の件なんですけど……」

『うむ、今回はこちらが通達した以上の戦力がいたらしいからな。』

特別加算込みで、すでに口座に振り込んである。

後で確認してくれ』

「まいどど〜も」

依頼主に対してはやたらと愛想がいいのがリンファの特徴だ。

いつものようにとびきりの営業スマイルを浮かべると、リンファは通信を切った。

途端に体中の力が抜けて背もたれに身を投げ出す。

「りんふあちゃん、お話、おわったんならつてよお〜」

「はいはい、今行きますよ〜だ」

仰向けに寝転がった状態のペンユウの上から呼ぶエリイに、リンファはしびしび立ち

上がった。

「で、何すればいいの?」

「動作確認、するのお。」

そこにあるやつでえ〜、ソフト、うごかしてえ〜」

エリイが指さした先にあるのは、二人が共同で通信等に使っているパソコンではな

く、エリイ専用のハンディコンピューターである。

整備やら何やらに使う難しいソフトが山のように入ったやつだ。

OSすらもリンファの知らないものを使っているようだが、適当にいじってみるとそれらしいのが見つかった。

「この、『AC動作点検ソフト』ってやつでいいの?」

「そう。それそれ、はやく〜!」

「急かさないでよ……つと」

いくら慣れないコンピューターだと言っても、ソフトを動かす程度のことにはわけない。すぐにACの点検が始まった。

……しかし、次の瞬間!

バヂイツ!

「うにゃ〜!」

やたらよく響く音がして、ペンユウの上にはいたエリーの体が痙攣を起こした!

そのまま下へ転がり落ちてくる!

慌ててリンファが走り転げ落ちてきたエリーの体を受け止めた。

エリーはすっかかり目を回している。

「ち、ちよつと! エリー、大丈夫!?!」

「はにゃ〜……びりびりするう。えへへ〜」

「えへへって……」

どうやら感電したらしいが、相変わらずの軽い調子のまま……大丈夫なようである。思わず緊張の糸がほぐれ、ほっとした表情を浮かべるリンファ。

「も〜、心配させないですよ!」

「はにゃ〜、しっぱいしっぱい。」

りんふあちゃん、たくす〜け〜て〜くれたの〜、ありがと!」

言っていきなりエリイはリンファに抱きついた!

これにはさすがにリンファも驚き、まともに慌てて暴れ出した。

「エ……エリイ!」

うわっ、ちよつと止めてよっ!

あたしにはそーゆー趣味はないんだってば……うわわっ!」

あんまり慌てたせいで、体勢を立て直すこともままならず、リンファはエリイに押し倒される形で地面に倒れ込んだ。

丁度その時だった。倉庫のドアが開いて、一人の男が入ってきたのは。

「失礼ですが、リンファさんとエリイさんのお宅はこちらで……?」

男は、床でもつれ合う二人を見て露骨に顔をしかめたのだった。

*

「い、いやあ、お邪魔でしたかなあ。ははは」

「あ……い、今のはこの娘がちよつとふざけてただけで……あははははっ」

テーブル越しに向かい合って腰掛けたリンファと客は、お互いに乾いた笑いを交わした。

どちらも顔が引きつっている。

当のエリイはと言えば、すかさずペンユウの修理に戻ってしまった。

「え、えくと……それで、あなたは……？」

「ああ、失礼。

申し遅れましたが、私はアリーナ管理委員のシロウコバヤシという者です」

「アリーナ管理委員……？」

リンファは、自分の正面に座っているぴしとした身なりの男を改めてまじまじと見つめた。

前にも述べたが、バトルアリーナ、略してアリーナは、企業をスポンサーとするレイヴン達の『闘技場』である。

そこでの戦闘は酔狂な資産家達の賭の対象となり、出場するレイヴンにも強さに見

合った賞金が与えられる。

しかしスポーツのような正々堂々としたものとは程遠く、まさにレイヴン同士の戦闘そのもの、勝つためには手段を選ばない、常に死と隣り合わせの戦いなのだ。

そのアリーナの管理運営は、公正を期すため企業とは異なる第三者が行っているという。

それがアリーナ管理委員である。委員のメンバーは引退したレイヴンや企業での物好きから選ばれているというが、実際に会ったのはこれが初めてだった。

それというのも、リンファがアリーナに出場しただけでなかったせいである。

「早速本題に入りますが、実は貴女にアリーナに出場していただけないかという話がありましたね。

私どもが運営しておりますアリーナには、ノーマルアリーナとその予選のサブアリーナ、四つの脚部限定アリーナがありまして、さらにその優勝者のみがノミネートされるマスターアリーナがあるのですが……

今回貴女に出場の話を持ち上がったのは、それとは異なるゲストアリーナなのです」コバヤシはテーブルの上に何枚かの紙を並べた。

リンファにとっては全然興味の湧かないことがずらずらと書かれている。

リンファは耳の後ろを人差し指で掻いた。

「このゲストアリーナではランキングを付けず、その都度ゲストを招待してエキシビションマッチを行っているのですが……」

「残念だけど、あたしはパスね」

「……は？」

溜息混じりに言い捨てたリンファに、コバヤシは資料を指す手を止めて、顔を持ち上げた。

「それは、どういう意味でしょうか」

「そのまんまの意味よ。」

見世物になるつもりは毛頭ない」

「え〜っ？ でよ〜うよ〜！」

どうやらこっさり話を聞いていたらしく、ペンユウの上からエリイが顔をのぞかせた。

一体どういう風になっているのか。逆さまにぶら下がっている。

鼻にかけた眼鏡がするりと落ちて、乾いた金属音をたてた。

それを追って、エリイも宙返りをしながら地上に降り立った。

「アリーナ会場のしよくどうにね、しんめにゆるーができたんだってえ。えりいたべたいよお〜」

「そんなの別に出場しなくても食べに行けばいいじゃない……」

ま、それはともかく」

リンファは正面に向き直ると、難しい表情をしたままのコバヤシの目を見据えた。コバヤシの額に汗が浮かぶ。

並の人間なら思わず怯んでしまうほどの、鋭い眼光をリンファの瞳は放っていた。

「こつちにもプライドとかポリシーってモノがあるわけ。

こんな腐った『時代』を玩具にしてるようなイカれた連中に、付き合ってる暇はないのよ」

「なるほど……しかし」

コバヤシは恐る恐る口を開き、言葉を紡いだ。

声が震えていなかったのはさすがである。

「相手が伝説のレイヴン『ワームウッド』だと聞いても、同じことが言えますかな？」

つづく。

04 カウント・ダウン

意外と綺麗な食堂の隅のテーブルで、リンファは紅茶をすすった。

ほのかに甘く、のどに引つかかる苦みがほとんどない。

なかなかいい紅茶だ。

アリーナ会場の中にある、噂の食堂である。

レイヴンが集まるところと言えば大抵はゴミ溜めのようなもので、リンファはそれが嫌で仕方がなかったが、ここはその例に当てはまらない。

優しい照明や白塗りの壁も含めて、内装は明るく上品。

なおかつ料理の味や店員の接客態度も悪くなく、とても荒くれ者だらけの店とは思えなかった。

よく考えてみれば、アリーナ会場にはレイヴンだけでなく、一般人や企業のトップも観客としてやってくるのである。

ならばこの店の様子もしかるべきものなのだろう。

「えへへ、りんふあちゃん、みてみて」

本当に嬉しそうに、エリイがトレイに乗った料理を指さした。

これが話していた新メニューというやつらしい。

「おいしくよ。りんふあちゃんもたべればいいのね」

「あたしはいらない」

エリイは気付いていないようだが、リンファはいくらいい店だといつてもこんな状況で食事をする気にはならなかった。

というのも、周りにいる男達が、例外なく全員、リンファとエリイに注目していたのである。

それも無理はないことで、実はリンファとエリイのコンビはレイヴン内では有名だったのだ。

凄腕の女レイヴンと同じく女のメカニック、しかもどちらもかなりの美人とくれば、むさくるしい男のレイヴン達の間で評判にならないほうがおかしいというものだ。

リンファは十七歳で、近所のパーツショップのオヤジには砂利扱いされているが、同時に多感なお年頃。

一方のエリイも言い寄ってくる男は多い。

それにもかかわらず、リンファはいまいち男に興味を持たないせいで、エリイは極度

の面食いなせいで、未だに恋人の一人もいない。

それはともかくとして、リンファは一挙一動を絶えず監視されている状況下で普段通りに振る舞えるほど神経が太くはなかった。

もう一度、リンファはエリイがスプーンを口に運ぶのを眺めながら紅茶をすすった。

店は次第に混雑しはじめ、リンファの背中側にあるすぐ隣の空いていたテーブルにも、一人の客が腰掛けた。

リンファは紅茶のカップを口許で止めた。

「これはこれは、先日はどうも」

リンファの冷たい声は、周囲の喧噪に掻き消され、エリイにすらも届かなかった。

「相変わらず嫌味な言い方だな」

彼も同じように小声で答えた。リンファの真後ろ、テーブルに腰掛けたままで。

エリイは顔を見たことがないから気付かないだろう。

今日の対戦相手、『ワームウッド』がすぐそばに居ることに。

「まあ、ダミーの輸送車に爆弾を仕掛けるような陰險な奴なら仕方ないか」

「負け惜しみは醜いねえ、ヨシユア君」

「全く、本当に口の減らない女だ」

「……やめてくんない、その言い方」

静かにゆつくりと、リンファはカップをテーブルの上に戻した。その瞳は真剣そのもの。

「いちいち『女』って強調しないでよ」

「安心しろ。手加減は絶対にしない」

ヨシユアは椅子を蹴って立ち上がった。

そのまま自然に歩き、リンファ達のテーブルの横を通った。

「君を対戦相手に指名したのは僕だ。決着をつけようじゃないか」

「……………楽しみにしてるわ……………」

*

「ね〜ね〜りんふあちやくん、さっきのひとだれだれだれ〜?」

出場者の控え室……………と言ってもACの格納庫も兼ねた場所だが、そこでペンユウの前に立ちつくすリンファにエリイがまとわりついた。

さすがのエリイも、すぐ横に人が立って入れば気付くらしい。

さっきからあれは誰だと聞き続けている。

リンファは少し、エリイの男性の好みがわかったような気がした。

「アレが今日の相手、『ワームウッド』よ。」

本名はヨシユアっていうらしいけど」

「わーむうつどくん？ でもわかひとだよ？」

「あれから『ワームウッド』のことを調べてみたの。」

そしたらどうだったと思う？」

エリイはぶんぶんと首を横に振った。

わからない、ということらしい。

「あいつは『ワームウッド』の二代目なのよ。」

マスターアリーナを辞退したってのは奴の父親なわけね。

で、そのAC……これがワームウッドって名前なんだけど、それを受け継いで自分もレイヴンになったんだってさ」

「おとうさんのおしごとをついだのねえ。」

えらいですなええ」

「さあ」

へらへらとヨシユアを褒めるエリイから目をそらして、リンファは前髪を掻き上げた。

「どうだか」

最後のその言葉は半分溜息が混ざっていた。

そしてリンファは自分の巨大な相棒を見つめた。

かつてないものになるであろう死闘を前にして、緊張の一つもしていない機械の姿がそこにあつた。

*

『じゅんびい、できたよ』

あくまでいつもの調子を崩さないエリイの声が、コックピット内のリンファに届いた。

試合開始まで、残り数分といったところだ。不思議と重圧も緊張もなかった。

いつもは完全に一人での戦いだが、今日はそうではないのが原因かもしれない。

いざというときには、エリイが通信でアドバイスすることができるとだ。

……まあ……エリイのアドバイスがどの程度当てになるかは非常に疑問なのだが

……

『そうびはねえ、いつもどおりなの。』

でもあたらしいきのうつけたよ』

「新しい機能？」

『えつとねえ、みぎがわにぞうせつしたレバーあるでしょ』

リンファは言われるままに右を見た。

確かに、見慣れないレバーが増えている。

『それをうごかすとおう、だいくとれすぽんすモードになるのお』

「ダイレクト……レスポンス……って、もしかしてコンピューターの操縦補助をなくすってこと？」

『あたりく！ データはぜんぶバレてるのでえ、いざとなったらしゅどうでうごかしてね』

「……簡単に言ってくれるけど……」

何はともあれ、これでなんとかヨシユアの裏をかく要素は整ったようである。

覚悟を決めたリンファは、ジェネレーターの起動スイッチを押した。

初めてリンファが依頼をこなしたとき、その報酬で真っ先に性能を上げたのはジェネレーターだった。

その後も優先して強化していった結果、今では現行の最高性能のものを使用している。

リンファがここばかり鼻根にする理由はただ一つ。

なかなかエンジンが動かないとイライラするからである。

と、いうわけで、高性能のジェネレーターはストレスを感じさせることなく動き出した。

A Cの各部にエネルギーが供給される。

その時だ。いきなり通信が入ってきて、電波越しにあのコバヤシとかいうアーリーナ管理委員の男が話しかけてきた。

『リンファさん、準備はよろしいですか？』

「いつでも」

『ではリフトに乗ってください』

言われるまま、リンファはペンユウを動かしてガレージの隅にあるリフトに乗せた。

すぐにリフトが上へ……試合の会場へ向かって動き出す。

視界の隅に、必死に手を振るエリーの姿が映った。

「なんだ……エリーってば、実は心配してたのね……」

『なんですか？ よく聞こえませんでしたか？』

「あ、ううん、こつちの話」

『では、今回の試合について簡単に説明させていただきます。』

試合会場は地上、旧北アメリカ大陸C地区。

制限時間は十分。

その間に相手のACを戦闘不能状態にするか、相手に降伏宣言させれば貴女の勝利です。

制限時間を越えた場合、管理委員による判定で勝敗を決めます。

なお、試合中はあらゆる行為が認められません。相手を倒すために全力を尽くしてください。では、幸運を祈っております』

言いたいだけ言つて、コバヤシは一方的に通信を切つた。

何が幸運を祈っている、だ。

リンファは内心毒づいた。

こんなところで戦つてること自体、この上ない不幸なんだぞ。

しかしまあ、こうなつてしまったものは仕方ない。

それにヨシユアとは、いずれは決着をつけておきたい。

リンファは深く考えるのを止めた。

何事にも明るく楽しく前向きに、というのが彼女の信条である。

『やつほく、りんふあちゃん、きつこえるう？』

そんなリンファも全くかなわないくらい底抜けに明るい声が響いてきた。

言うまでもなくエリイである。

そういうえば、エリイに比べて自分はファッションに気を遣わないな、とリンファはふと思つた。

そして、今日もらう賞金で、エリイと一緒に服を買いに行こうと決めた。そう、彼女はもう勝つつもりでいた。

「きこえるきこえる。なんかヤル気でてきた」

『ほんとおく？ でもお、よしゆあちゃんころしいちややくよく』

「はいはい。了々解」

一体あんな嫌味なネクラ野郎のどこがいいんだか。

ま、多分顔なんだろう。

だいたいあいつは因縁ある敵なんだから……

ん？　　そういうえば何の因縁だったつけ？

こないだペンユウをぼろぼろにした因縁……いや、確かもつと前だ。

最初に会つたのはあいつが泥棒に入つて来たとき……

リンファの頭の中はヨシユアで埋め尽くされた。知らぬ間に。

リンファ自身が気付かぬ間に。

彼女はあまりにも自分を知らなすぎた。

やがて、カウントダウンが開始された。

このカウントがゼロになった瞬間、このリフトは地上にたどり着き、同時に戦闘が始まるのである。

あと十秒。リンファが右手を軽く動かすと、それに反応したペンユウがマシンガンを構えた。

あと五秒。額を汗が流れていくのを感じた。自分らしくないという気がした。

あと二秒。もう地上の明かりで周りがはつきり見えるようになった。

そして……

つづく。

05 リンファア vs ヨシユア

カウントがゼロになった瞬間、ペンユウは真横にブースト移動した。

ついさつきまでペンユウがいたところを、ガトリングガンの弾丸が通り過ぎていく。リンファが相手の姿を確認したのはその後だった。

前に見た、青い蜘蛛のようなAC。

武器腕のガトリングガンと、肩に背負ったレーザーキャノンがその武装。

火力も機動力も兼ね備えた、できれば相手にしたくない奴である。

ヨシユアの性格から、最初に不意を付いて攻撃してくるのは予想していた。だからこそかわせたのである。

『よく避けたものだ』

こんな時に、余裕があるのかバカなのか、ヨシユアが通信を入れてきた。

同時に、ワームウツドは一気に加速して近付いてくる。

『いい勘をしている。親父を思い出すな』

「そりやどーも……」

敵に褒められても大して嬉しくはない。

ペンユウは牽制のつもりでマシンガン撃った。

別に当たるとは思っていなかったが、やっぱり当たらない。

マシンガンは諦め、今度は自分からダツシユをかけた。

正面から二体がぐんぐん近付いていく。

『チキンレースでもする気か』

「まさか」

バシユツ！

まさに激突寸前となったとき、ペンユウが左手を振るった。

レーザーブレードがワームウッドの装甲板をかすめる……が、それだけだった。

一瞬速く反応したワームウッドが、ブレードのある腕と逆方向に逃げたのである。

これでペンユウは横を取られる形となった。

『言っただろう、データはこちらにある、とな！』

ワームウッドの肩のレーザーキャノンが火を噴いた。

このままではペンユウに直撃する！

「食らうかつー！」

しかしその瞬間、ペンユウがマシンガンを放り投げた！

レーザーはマシンガンに着弾し、爆発を起こす！

ペンユウはマシンガンを失っただけで無傷。

だが安定性のない四足ACであるワームウッドは、衝撃で大きくバランスを崩した。

すかさず、ブレードがきらめきワームウッドの右腕をもぎ取る！

そして素早くペンユウは離脱し、再び間合いを取った。

今の一瞬の攻防で、ペンユウはメイン火器であるマシンガンを、ワームウッドは両腕

の武器のうち片方を失った。

状況的にはほぼ五分と五分。

次に聞こえてきたヨシユアの声に、さっきの余裕はなかった。

『やってくれるじゃないか……』

「ま、あなたの父親を思い出させるくらいの勘の良さだから」

今度はリンファは軽口を返した。

彼女の中には、少し思い当たる節があった。

「ヨシユア、あんたさっき言ったよね。

親父を思い出させる、って。

どういうこと？ あんたは父親と戦ったことがあるわけ？」

ヨシユアは答えなかった。

それでリンファは確信した。

ゆつくりと強靱に、自分の確信を言葉にして紡ぎだしていく。

「父親を殺したのね、ヨシユア」

しばらく沈黙が続いた。

今ここで何も言わないということは、認めているにも等しい行為だった。

リンファは小さな彼の溜息を聞いたような気がした。

『奴は……戦うことを棄てた』

聞こえてきたのはヨシユアの声だった。どことなく疲れているようだった。

『だから死んだのさ』

ペンユウの肩に付いた、エリイ特製のレーザーキャノンが準備された。

これでいつでも撃てる。

リンファは、この男には一発お仕置きをしなければ、と思った。

『僕はその男を越えてしまった。だから……』

「寝言は寝てからいいなさいよ！」

リンファが一喝すると、彼の声は止まった。

「あんたは父親を越えてなんかいない。」

それどころかあたしを越えることだつてできない！」

『面白い』

ワームウッドが、動いた！

『試してみようか！』

その時、今まで話を黙って聞いていたのだろうか、エリイから通信が入ってきた。

『りんふあちゃん、レバーー！』

「わかつてるっ！」

リンファはすぐさま右手でレバーを下ろした。

これで、火器制御や機体制御にコンピューターの仲介が入らない。

自動標準も利かなくなるが、同時に余計なタイムブランクもなくなる！

近付いてくるワームウッドに対して、マシンガンで牽制……

「あああああつ！ マシンガンがないっ！」

仕方なく、上空へ飛び上がってワームウッドのガトリングガンをかわす。

無防備な空中にいるところを狙って、ワームウッドがレーザーキャノンを連射する。

なんとかそれをかわしながら、ゆっくりと地上に降りていくペンユウ。

と……

『りんふあちゃん、ワナよっ！』

「!？」

ほとんどエリイの声に驚いて、リンファは着地寸前でブースターをふかし、上昇した。その足のすぐ下を、レーザーキャノンの弾が過ぎ去っていく。

ヨシユアはまず単調に攻撃を放ち、リンファが地上に着地するように仕向けた。そして、着地の一瞬の隙を狙ってレーザーキャノンを撃ち込んだのである。

リンファはこのことに気付かなかった。

もしエリイの警告がなかったら、今頃直撃を食らっていただろう。

『君のメカニックはいい腕をしているようだな』

『えへへ』

「うるさいっての！ エリイも照れてんじゃないっ！」

幸い、ここは切り立った岩が連立する荒野。

ペンユウは岩の後ろに着地した。

それにしてもマシンガンを失ったのは痛い。

牽制に非常に重宝する武器なのだ。

「こうなったら……イチかバチか！」

ペンユウは岩陰から飛び出すと、ワームウッドへ向かって走り出した。

しかしこれでは撃つてくれと言わんばかりである。

『甘いぞ、リンファ!』

ガトリングガンの弾丸が飛んでくる。それをペンユウは再び空中に飛び上がってかわした。

『ダメよお〜! それじゃさつきと……』

「同じことはいないっ!」

リンファは乱暴に言い放つと、ペンユウが肩のレーザーキャノンを構えた!

空中で撃つ気だ!

ヨシユアは内心ほくそ笑んだ。

前に戦ったとき、リンファは空中でキャノンを撃とうとして失敗している。

確かに撃つことは不可能ではないだろうが、機体に及ぶダメージも半端なものではない。

加えて、この距離ならワームウッドの機動力をもつてすれば簡単にかわすことができる。

つまり、もはやヨシユアは勝ったも同然。この一発はリンファのやけくその一撃。

ヨシユアはそう読んだ。

そして、ペンユウがレーザーキャノンを撃った!

……空中で機体を安定させたまま!

『何い!?!』

「ほらほら、早くかわさないと直撃するぞ!」

『くっ!?!』

驚きが先にでて、回避動作が一瞬遅れた。

そのせいで、なんとか回避はできたものの、衝撃でワームウツドの動きが鈍る!

「とどめだつ!」

ペンユウが放った第二射は、今度こそワームウツドを直撃した!

ぼろぼろになり、びくりとも動かないワームウツド。

その正面に、ペンユウは降り立った。

「さあ……」

——大人しく降伏しなさい。

リンファがそう言おうとした、その時!

バシユツ!

ワームウツドのレーザーキャノンが火を噴いた!

油断していたリンファの裏をかき、ペンユウの左肩に直撃した弾丸は彼女の愛機の左

腕を切り離した!

衝撃で、片膝を付くペンユウ。そのコックピットの中、リンファは唇を噛んだ。

そう……相手が降伏していないうちは決して勝った気になってはならない。その大原則を、リンファはすっかり忘れていた。

『ふ……油断大敵、つてのは確かアジア人の諺だったよな』

ワームウッドがゆっくりと、機体全体をきしませながら起きあがった。

全身はぼろぼろだが、まだペンユウに止めを刺す程度の余力はあるようだ。

リンファは考えた。

レーザーブレードを装備している左腕を斬り飛ばされ、残った武器は肩のキャノンのみ。

だがこれは準備に時間がかかるため、この距離で悠長に準備していたらその前に止めを刺される。

ほとんど状況は絶望的だった。

『それにしても、どうして空中でキャノンが撃てた？』

前はわざと失敗したのか？』

「……別に。」

ただ、コンピューターの仲介がなかったから思い通りに機体を動かすだけよ」

『なるほど……大したものだ』

キュインツ。

小さく音を立て、ワームウッドのキャノン砲が向きを変えた。

いよいよ……来る。

「全く……あんたの言う通りよ。」

油断大敵つてのは……」

リンファが、にやつと口の端を吊り上げた！

「アジア人の諺よっ！」

瞬間、ペンユウの右手が地面に落ちた左腕をつかみ、ワームウッドに投げつけた！

……腕に内蔵された予備電源で生み出された、光の刃と共に！

『うおおっ!?!』

ブレードは狙い変わらず、ワームウッドのコアと脚部のつなぎ目を斬り裂いた！

そして、衝撃で発射されたワームウッドの弾丸もまた、ペンユウのボディを全く同時

に貫いた！

つづく。

06 決着

「引き分けえ!？」

勝負を終えたリンファの第一声がそれだった。

あまりの剣幕に、知らせを持ってきたコバヤシがのけぞる。

リンファの大声はACの格納庫に響き渡り、エリイは止めどなく耳を襲う反響音に頭がくらくらした。

今にも噛みつきこうとするリンファをなんとかだめて、コバヤシは言葉を続けた。

「確かに貴女は対戦相手を行動不能にしましたが、同時にあなたのACも行動不能になりました。」

よって引き分けです。

言つときますけど、判定は覆りませんよ」

「ぬあんでよっ!？」

あいつが弾を撃ったのは胴を斬られた衝撃があつたからよ!？」

あたしの方が早かったにきまつてるじゃない！」

「いや、それはわかります。」

でも結果的にですねぇ……」

「……………あ」

横でコバヤシに食ってかかるリンファを眺めていたエリイが、小さく声をあげた。格納庫に入ってきた者がいる。

「ふっ、やはり駄々をこねているようだな」

「あーっ!? ヨシユアっ！」

何しに来たのっ!？」

「聞きたいことがあったから来ただけだ」

ヨシユアの顔を見ると、リンファはコバヤシから手を放した。

自分よりずっと背の高いヨシユアの顔を見上げ、にらみ合う。

「どう……」

「断る」

いきなりの返答に、ヨシユアは戸惑いの表情を浮かべた。

まだほとんど何も言っていないのだが。

「せめて質問くらいは聞いてもいいんじゃないか？」

「聞かなくてもわかるから聞かなかったのよ。」

どうせ、どうして父親を殺したとわかった、とかなんとか聞くつもりでしょ」

「ああ……」

ヨシユアはリンファの言葉をあつさり認めた。

それに満足したように、リンファは人差し指を立てて、ヨシユアの唇に押し当てた。

「自分で考えなさい」

*

「ほお、そいつは大変だったねえ」

PARTYショップのオヤジは全然大変そうに思っていないような口調で言った。

もう少し、演技なりなんなりをしてもバチは当たらないと思うのだが。

今日は、リンファはエリイと一緒にPARTYショップへやってきた。

そのエリイは、さつきから店のジャンク品を見てにやにやしている。

そして、リンファの服装はいつもとは違う。

エリイと一緒に買った、デザイン重視の服である。

今日ここに来たのは、その『モニターテスト』も兼ねているのだ。

……が、オヤジはリンファの服には全く興味を示していないようだった。「別に大変でもなかったけどね。」

ACの修理代は管理委員が出してくれたし、なんか特例とかで賞金ももらえたし」ややムツとしながたリンファは言った。

今回のアリーナ戦は、コバヤシ曰く『歴史に残る名勝負』だったらしく、幾つもの企業がリンファとヨシユアをお抱えレイヴンにしたがったらしい。

リンファが言っている賞金とは、こういう企業が出した金である。

そこには勧誘の意味が強く込められていたが、リンファもエリイも、全く気付いてはいなかった。

「えへへへ、みてみておじさくん、しよきんであたらしいふくかったの〜」
「へえ、よく似合ってるじゃないの。」

ん？ そういえばリンファちゃんもいつもと格好が違うな」

やかまひい。なにがそういえば、だ。

こうなると余計に腹が立つ。

腹癒せにリンファは足下のジャンクを蹴り飛ばした。

その下から何か青いものが転がってきた。

リンファはそれを拾い上げると、まじまじと見つめた。

見慣れない、四角くて細長い青い金属に、四角い穴が沢山空いていた。

「これ……なに？」

「ん……？ はて、なんだろうな。」

その辺のはスクラップを適当に集めてきたものだからなあ」

「あー！」

エリイがリンファの指の中にある青いものを指さして声をあげた。

「どうやらこれが何なのか知っているらしかった。」

「それ、はーもにかだよ。むかしのお、楽器ー！」

「ハーマニカ……」

リンファはもう一度それを見つめ、ハーマニカ、という言葉は何度も頭のなかで繰り返しながら指で弄んだ。

やがて飽きたのか、リンファはオヤジの方に向き直って、そして言った。

「これ、もらうね」

THE END.

第2話 純白ホンキイトンク・ラブ

01 淫蕩の宴

青い空が見える。

太陽が燦々と照り輝き、白い光を放つ。

緑色の草達は、それを全身で浴びて、恵みを享受していた。

ここは生き残った大地。人間によつて滅ぼされた地上に残った、数少ない楽園の一つ。

こここの存在は誰も知らない。

彼女を除いて。

彼女は小屋の戸を開けて、光が降り注ぐ外へと歩み出た。

強い陽射しが彼女の白い肌を焼く。

不意に吹き抜けた風に、彼女の白いスカートが少しはためいた。

彼女はつばの広い、真っ白な帽子をかぶっていた。

それは太陽の助けを借りていつそう鮮やかに輝いた。
純白の世界が、そこにはあつた。

*

彼は隅のテーブルでバーボン・ウイスキーをすすつた。

そして辺りをさり気なく見回す。

薄暗くて広大なパーティ会場。

幾つも並べられたテーブルには、それぞれ鷹揚に酒を交わす身なりの整つた男達。

ある者は下品な笑いを浮かべて、またある者は無表情を装つて。

美しい女達が彼らのグラスになみなみと酒を注ぐ。

彼はまた、バーボンを少しだけ口に流し込んだ。

——ぼったくりだ。

彼は表で平静を装いながらも、心の中では苦虫を噛みつぶしていた。

あるテーブルに付いていた男が立ち上がった。

そして、ひときわ美しい女を従えて、奥の扉の向こうへ消えていった。

別に珍しいことではなかつた。

これは、そういうパーティなのである。

金さえ払えば、会場の中にいるどんな女性でも、夜の相手をしてくれる。そのかわり、法外な入場料を払い、バカ高い酒を飲まなくてはならない。

—— だいたい、会場に入るだけで三万コームだと？

無茶苦茶もいいところだ。

彼はもう一度心の中で毒づいた。

彼はこのパーティの常連ではない。

むしろ、こんな場所とは程遠い貧乏人である。

しかも彼はこういう類の商売が非常に嫌いだった。

にもかかわらず彼がここに來た理由はただ一つ。

仕事だから、である。

彼は相場の十倍はするバーボンをまた少し飲んだ。

酔いはない。

彼は結構酒に強い。

彼はグラスの中身を乾かしながら、遠くの方を見遣った。

そして、よく見慣れたものを視線の先に認めると、一瞬だけその手を止めた。

すつかり空になったグラスをテーブルに置くと、彼はロング・コートをはためかせて

立ち上がった。

すぐさま会場の隅に控えていた男が駆け寄ってくる。

「いかがでしたでしょうか？」

突然の質問だが、ここでは、どうする、と聞かれれば問われていることは一つしかない。

「あの、左の隅にいるアジア人の女」

彼は、目立たないように気を付けながら指さした。

男がその方向を確認する。

そして納得したようだった。

「あいつにしよう」

「かしこまりました」

男は彼を、部屋へと案内した。

*

「はー……全く、金つてのはあるところにはあるのねえ……」

彼女はパーティー会場の奥の方で誰にともなく呟いた。

肩までの黒く艶やかな髪。

小さく突き出た鼻。

深みのある黒い瞳と、彼女にしては珍しく口紅で色づいている唇。

誰が見ても、彼女がアジア系の血を引いていることは明白だ。

彼女は名をリンファという。

リンファは、このパーティーの接待嬢の制服をまとい、男達に愛想笑いを振りまいていた。

しかし、そろそろうんざりしてきている。

「エリイ、ちよつと」

リンファは横にいた恐ろしいほどの美人を引つ張つて、会場の外へ逃げ出した。

会場でピアニストが弾く美しい音色がドアの向こうから微かに聞こえる以外は全く静かなものである。

「ほえ？　りんふあちゃん、なにになに？」

リンファが引つ張つてきた女性性は、口の中をもごもごさせながら言った。

妖艶な容姿にそぐわない、とろとろとした口調である。

彼女の名はエリイ。

リンファの相棒である。

いつもは三つ編みにしている赤毛を今日はストレートに伸ばし、野暮ったい眼鏡もはずしている。

そしてリンファと同じ制服に身を包めば、もはや普段とは別人のようになってしまっている。

その美しさたるや、女のリンファが見とれてしまったほどである。

「エリイ、何本気になって食べてんのよ！

早く仕事終わらせて帰るよっ！」

「りよ〜か〜い。えへへ〜」

彼女らの仕事とは、このパーティーの接待ではない。

リンファの本職はレイヴン。

荒廃した世界で暗躍する、無敵の傭兵である。

レイヴンは主に企業からの依頼で、護衛、襲撃、奪取、テロ、その他諸々の闇の仕事をこなす。

とはいっても、生身で戦うわけではない。

ACと呼ばれる大型ロボットがレイヴン達の武器。信頼できる相棒なのである。

リンファは先日、とある企業から依頼を受けた。

その内容は……

「アルバートⅡマックスとイリーガル社の癒着を示す証拠を手に入れる……

遊び半分でできるような仕事じゃないわよ」

「あいあい。わかってますます」

……本当にわかつているのだろうか？

イリーガル社といえば、ACやMTのジェネレーターの最大手。

総資産は千億コームを越える大企業である。

最近急速に業績を伸ばしていて、工業系企業のトップに立つプログテック社に迫る勢いだ。

とはいえ、まだまだその差は大きいのだが。

対して、アルバートⅡマックスは悪名高い裏の世界の元締めである。

彼の名は、ここアイザック・シティに住む者なら子供でも知っている。

確かに、この二者が癒着しているとすれば、かなりのスキャンダルになるだろう。

敵対企業がイリーガル社を潰しにかかる口実としては十分すぎるものがある。

まあ、依頼主のことには深く詮索しないのがレイヴンとして長生きする秘訣である。リンファとしてはそんな企業間の争いなど、はつきり言ってもよい。

大事なのはこのパーティーの主権者がアルバートⅡマックスであるということだ。

アルバートⅡマックスはこのパーティーには必ず顔を出す。

というよりも、彼の住処がここなのである。癒着の証拠をつかむにはこれ以上の機会はない。

「とりあえず、なんとか抜け出して……」

リンファが言いかけた、その時だ。

ドアが少し開き、その中からまだあどけなさの残る女性が顔を見せた。

リンファ達と同じ制服を着ている。

このパーティ会場で知り合った……確か、名前はキャロルとかいったか。

「あの……リンファさんとエリイさん、よね。どうしたの？」

どこか具合でも？」

「あ、ううん、大丈夫。心配しないで」

「そう？　ならないんだけど……あ」

キャロルは小さく声をあげた。

彼女の視線がリンファ達の後ろに向けられる。

リンファはそれを追って振り返った。

このパーティの接待役は女性ばかりではない。

黒っぽい服で身を固めた男も、客の案内役として会場に控えている。

リンファ達に近付いてきたのは、そんな案内役の中の一人だった。

「うにやあああああ」

リンファはエリイのほつぺたをつねって伸ばさずにはいられなかった。そんなリンファ達を見つめ、キャロルは眉をひそめていた。

つづく。

02 ヨシユアとの再会

仕方がない。

悪いけど、相手の男にはしばらく眠っていてもらおう。

リンファは決意して、5番の部屋へ向かった。

ポケットには即効性の睡眠薬が入った注射器が入っている。

しかし、そんなことをすれば正体がばれるのは必至。

もう一刻の猶予もない。

ここを乗り切ったらずぐにでも行動を起こすつもりだった。

部屋はすぐに見つかった。

渡された鍵を使つて、ドアを開ける。

あとはここにやってきた不運な男を眠らせれば当面の安全は確保できる。

リンファは部屋に踏み込んで、中を見回した。

薄いピンクに内装は統一され、お世辞にも品がいいとは言えない。

ただ、さすがにベッドだけはいいクッションを使っているようだが……
リンファの思考はそこで止まった。

かちやっ。

小さな音がして、背中に硬い物が触れる感触があつた。

今まで何度か同じ経験をしている。

——拳銃。

迂闊だった。

まさか、もう正体がばれていたとは……

リンファは背中を冷たい汗が流れるのを感じた。

「こんなところで何をしている?」

「……?」

後ろからかかった声は、聞き覚えがあるものだった。

まだ若い、優男の声である。

リンファはゆっくりと振り返り、そこに見知った顔を認めた。

「ヨシユア!」

「バカ、声が大きい!」

男はリンファの口を手のひらで無理矢理塞ぐと、周囲を確認してドアを閉めた。

この部屋は消音設計。

ちよつとやそつとの音は外には漏れないようになってい

安心して話が出る状況になってから、彼は手を放した。

「リンファ、こんなところで何をしている？」

「バイト」

「レイヴンが娼婦まがいのバイトとは、墮ちたものだ」

「冗談よ。本気にしないでくれる？」

リンファは懽然として答えた。

この男は以前知り合った同業者で、名をヨシユアという。

百九十を越える身長と鋭い眼光が特徴的な、それなりのナイスガイだが、手足が長いせいか、少し痩せすぎて貧相なようにも見える。

しかしレイヴンとしての腕前は文句なく一流で、そのことは身をもって体験したリンファが最もよく知っている。

「で、本当は何をしていたんだ？」

「仕事に決まってるでしょ」

「もしかしてイリーガル社か？」

ずばり言い当てられ、リンファは顔をしかめた。

ひよつとしてイリーガル社とアルバートの癒着の話は有名なのだろうか？

リンファの顔色を見て凶星と見抜いたのか、ヨシユアは興味を失ったように溜息をついた。

「それで？ あんたこそ何してんのよ？」

まさか、本気で遊んでたわけ？」

「まあな。たまにはこういうのもいいだろう」

冗談めかして答えると、ヨシユアは突然リンファの腕をつかんだ。

不意のことに驚き、リンファは目を見開く。

呆気にとられるリンファの腰に、ヨシユアの手が伸びた。

「君を指名したのは僕だ。相手をしてくれるんだろ？」

「げっ!!」 冗談じゃな……!」

必死にリンファはヨシユアを振りほどこうとするが、見た目の細さにそぐわない力で硬く握られた腕は全く動かない。

逆に体勢を崩してベッドに押し倒された。

薄笑いを浮かべたヨシユアの顔が目の前にある。

自然と顔が紅潮していくのがはつきりとわかった。

自分の腕を押さえつけるヨシユアの力強さ、その体の重みと温もり、小さな金属音、彼

の顔に浮かぶ妖艶な笑み……

……小さな金属音？

リンファが異状に気付いたときには、もうヨシユアはリンファを放して立ち上がった。いた。

手が動かない。

リンファが自分の背中の方を見ると、そこには後ろ手に手錠をかけられた自分の両腕があつた。

「おやあ？」

「何をその気になつてんだ。」

僕があんたみたいなガキ相手に本気になるとでも思つてるのか？

こつちの仕事を邪魔されては困るんでな。そこで大人しくしておけ」

「ガ……ガキイ!？」

激高したリンファが立ち上がる……が、両腕を拘束されているせいでバランスが取れず、ヨシユアの軽い足払いでまたベッドへと倒れ込んだ。

呆れたような表情でリンファを見下ろしながら、ヨシユアはドアを開けて外へ半歩踏み出した。

「そうやってすぐムキになるところがガキなんだよな。」

あのメカニック……エリイだったか？

あいつも来てるだろうから、後で助けに来るように言っておいてやるよ」

「あつ！ ちよつと待……」

リンファの文句から逃げるようにヨシユアはドアを閉めた。

鍵をかける音が小さくリンファの耳に届いた。

「あんの野郎ッ！」

叫びながらリンファは立ち上がろうとして、もう一度転んだ。

*

パーティ会場は広い。

一階部分には幾つものテーブルが並べられているだけだが、二階のVIP専用フロアにはカウンタバーやビリヤード台も置かれ、幾人かが女性をはべらせてそれに興じている。

人々はみな、それぞれにこの闇のパーティを楽しんでいた。

彼らのほとんどは企業のトップか、でなければ裏の世界の大家である。

見る者が見れば戦慄を覚えずにはいられないほどの顔が揃っている。

そんなパーティの客達のなかに、ざわめきが起こった。

最初は二階の壁際、ドアのすぐそばからだった。

そこではある男がブランデーのグラスを片手にビリヤードに興じていたが、彼は弾かれたようにドアから入ってきた男を見上げた。

銀色の短髪。

若く頑丈な彼の肉体を象徴する広い肩幅。

それによく似合う黒のスーツ。

そして何よりも、まるで飢えた野犬のような青白く不気味に輝く瞳。

アイザックシテイの闇を牛耳る狼、アルバートⅡマックスその人である。

アルバートは左右の客達と挨拶を交わしながらゆつくりと歩いた。

彼の後についてざわめきも移動する。

バーテンダーが近づき、ワイングラスを手渡す。

その中身には口を付けずに、アルバートはたつぷり時間をかけて会場の中央にあるステージへ上った。

側に仕えていた黒服の男がアルバートのスーツの胸に小さなマイクを取り付けた。

アルバートは周りを見回し、ざわめきが収まるのを待った。

ざわめきはなかなか収まらなかつたが、逆にそれが彼を満足させた。

アルバートは静かに右腕を持ち上げた。

ただそれだけで、会場の全ての人々が水を打ったように静まりかえった。

そして、徐にアルバートは口を開いた。

「諸君」

アルバートの声は適度に低く、えも言われぬ迫力があつた。

「今日は我が宴へようこそ。」

思う存分楽しみ、そしてストレスと金を棄てて帰つていただこう」

小さくだが、笑いが起こつた。

そしてアルバートが手に持つていたワイングラスを掲げると人々はそれを真似た。

「乾杯」

あちこちでガラスがふれあう音が響いた。

アルバートはその様子を見届けると、ステージから降りた。

不意にアルバートに黒服の男が近付き、何かを耳打ちした。

アルバートはワインを一口飲み、男に小さな声で告げた。

「すぐに行く、と伝えろ」

男は敬礼一つすると素早く立ち去つた。

アルバートはまた周囲の客達に愛嬌を振りまきつつ会場を後にした。

つづく。

03 盗聴

「せえーのっ!」

気合い一発、リンファはドアに体当たりを仕掛けた。

しかし、頑丈なドアはびくともしない。

逆にはじき飛ばされ、尻餅をついた。

痛みをこらえてリンファは立ち上がった。

とりあえずこの部屋から抜け出さないことには仕事にならない。

数歩後ずさつて勢いを付け、もう一度ドアに……

ぶつかる前に、ドアが開いた。

突然のことに対応できず、開いたドアの向こうに飛び出した。

そこにいた女性を巻き込んで盛大に転ぶ。

「どうわっ!」

「きゃっ!」

手錠のせいで手を付くことはできないが、リンファは何とか膝立ちになった。

そして、自分の下敷きになっている女性に目を遣る。

リンファと同じ制服に、茶色いセミロングの髪。

キャロルだった。リンファは慌ててキャロルの上から飛び退いた。

「ご、ごめん……でも、一体どうして……？」

「リンファさんの様子がおかしかったから、あとをつけてみたの。」

そうしたら、リンファさんが入った部屋に変な黒いコートの男が入って行って……」

キャロルは上半身を起こすと、髪の中から何かを取り出した。

小さな黒いヘアピンが光を受けてきらめく。

まさか、とリンファの口が歪んだ。

「閉じこめられちゃったみたいだから、これで鍵を開けたの」

「へー……」

ヘアピンで鍵開けるのって本当にできるんだ……」

「後ろ、向いて。手錠も外してあげる」

リンファは言われるままにキャロルに背中を見せた。

様子は見えないが、かちやかちやと金属の触れ合う音がして、やがて両手を拘束していた重みが消えた。

リンファは自由になるなり立ち上がった。

手を差し伸べてキャロルが立ち上がるのを助け、服の埃を払い落とした。

「ありがと。たすかったわ」

「いいの。」

それより、気を付けてね。

ワケありなんでしょ？」

リンファは目を丸くした。

よく気の回る人である。

もう一度笑顔で礼を言ってからリンファは駆けだした。

とりあえずエリイと合流して、すぐにでも行動を起こさなければならぬ。

その背中を見つめながら、キャロルはポケットの中をこそごと探り、中身を取りだした。

彼女の手のひらの上に、二つの鍵が横たわっていた。

*

「イリーガル社の者が来ただと？」

「専務のクライド＝カーチスのようです」

足を止めることなく尋ねたアルバートに、一人の大男が丁寧な口調で答えた。

そのまま、廊下を進むアルバートの後ろに付いて歩き始める。

アルバートもかなりいい体格をしているが、その男はそれをさらに一回り上回っていた。

彼の名はジョルジュ＝ミニオン。

アルバートの右腕として仕える男である。

とはいえ、どちらかという腕っ節だけでのし上がってきたような男で、お世辞にも賢明さは感じられない。

アルバートはむしろそのジョルジュの愚鈍さを評価していた。

頭のいい手下なら他にいくらでもいる。

しかし、彼が求めるものは頭脳ではない。

彼は自分の側にジョルジュを置くことで常に自分の行動を反省しているのである。

廊下を歩きながら、アルバートは振り返りもせず口を開いた。

「ジョルジュ、お前は俺を裏切るか？」

「いいえ、決して」

「イリーガル社の連中と通じれば、俺を蹴落とすこともできる。」

男は、いつか頂点に立つという野望を持ってしかるべきだ」

ジョルジュは何も答えようとはしなかった。

アルバートは落胆の溜息をついた。

そして興味を失い、話題を変えた。

「今日はクライド一人か？」

「はい。しかも予定外です。何か企んでいるのかも……」

ジョルジュの声が止まった。

廊下の向こうから千鳥足の男が近付いてきている。

ロングコートを着た陰気な男だ。

おそらく酔ってパーティ会場から迷い込んでしまったのだろう。

会話を聞かれるのはまずいが、さしあたって無理に排除する必要はなさそうだった。

アルバート達は男とすれ違った。

その時、ふらふらしていたせいで酔っぱらいの肩がジョルジュと当たったが、それだけだった。

やがて酔っぱらいは曲がり角の向こうに消えていった。

*

応接室のソファに腰掛けていた男が立ち上がり、アルバートに軽く礼をした。

アルバートも礼を返し、男の向かい側のソファに腰を落ち着けた。

ジョルジュはその斜め後ろに仁王立ちする。

この男がイリーガル社専務クライド・カーチスだ。

ネズミ色のスーツからはセンスが感じられないが、眼鏡の奥に光る曲者の瞳はアルバートも気に入っている。

「どうも、本日は突然のことで申し訳ありません」

「いえ、かまいませんよ。」

ですがこちらも予定が積んでいましたね。簡潔にお願いします」

それでは、とばかりに、クライドは眼鏡のズレを直し、身を乗り出した。

「本日はイリーガル社としてではなく、個人的にお願いに参りました」

「ほう、私にできることでしたら」

アルバートは目の前の冴えないサラリーマンの口調に、何か妙なものを感じ取った。全身から吹き出す雰囲気。

たとえるなら群のボスと対峙する雄ライオンのような雰囲気である。

「アルバートさん。あなたに、イリーガル社に対して仕手をしかけていただきたい」

*

トイレの中で、ヨシユアは一人で眉をひそめていた。

あまりスマートではないが、このパーティー会場で一人になれる場所といえ、ここくらしいものである。

もつとも、イヤホンを耳に当てているだけなら音楽を聴いているとも思われるだろうが、念には念を入れておきたかった。

酔ったふりをしてジョルジュのスーツの裾に取り付けた盗聴器が、ヨシユアに彼らの会話を送り続けている。

『失礼、今なんと?』

『聞き間違いではありませんよ、ミスター・アルバート。』

我が社に対して仕手戦を仕掛けていたのだきたいと、そう申し上げたのです』
ヨシユアはもう一度眉をひくつかせた。

仕手とは、株取引の技法の一つである。

まず圧倒的資金である企業の株を買い占める。

その企業の株の30%ほどを手に入れば、株主としてはかなり大きな顔ができる。

そしてそれが50%を越えたとき、企業の実権は株主に移ることになる。

企業としては、どこの馬の骨とも知れない人間に会社を支配されるわけにはいかな
い。

だからこそ企業側が仕手側の株を多少の高額でも買い取ろうとするのである。
仕手が成功すれば膨大な金が手にはいる。

もし資金が尽きるまで企業側が耐え抜いた場合、仕手側は全財産を失うことになる。
いわば超高レートのギャンブルのようなものである。

「イリーガル社専務クライド・カーチス……裏切るつもりか」

ヨシユアは納得してイヤホンを耳に強く押し込んだ。

さらにはつきりと密談が聞こえてきた。

『貴方の資産は百億コームを越える。』

これだけあれば、我が社の株を50%所有することも可能です』

『ふむ、確かにそうかもしれない。』

だが、そうすることで私に……いや、そもそも君に何の利益があるのかね？』

『わずか数年でイリーガル社は急速に成長を遂げました。』

当然、それをよく思わない方々もいらつしやる』

——工業系トップのプログテック社、か。

ヨシユアは勝手に想像したが、あながちはずれてはいない。

今のご時世、イリーガル社を蹴落とそうとする企業など他にはありえない。

『それはプログテック社の連中のことかね?』

『その通りですよ。』

貴方は仕手によつて膨大な利益を得る。

プログテック社は大量の売り抜けによつて株価が下がったイリーガル社を握りつづす。

そして私は、プログテック社で然るべきポストに就く』

『成程。』

同時に私はイリーガル社に代わつて工業系第一位のプログテック社にコネができる、
というわけか』

アルバートの口調に、僅かに楽しんでるような色が混じった。

*

アルバートはソファから立ち上がった。

そのまま右手をクライドに差し出す。

——握手。

クライドは最初少し面食らった様子だったが、やがて口の端をにいと吊り上げた。そして、眼鏡を直して立ち上がり、アルバートのごつごつした手を握った。

「君の策略に私も乗らせてもらおう。

よろしく頼む。

それにしても、君のような真面目な人間がよく企業を裏切る気になったものだ」
「貴方がいつもおつしやっていたではないですか……」

クライドは満面の笑みを浮かべてアルバートを見据えた。

アルバートはこういう目をした男が大好きだった。

そこには野心の持つ危険さと美しさが共に孕まれていた。

「男はいつか頂点に立つという野望を持ってしかるべきだ、と」

アルバートは軽く笑った。

背中の方では相変わらずジョルジュが仁王立ちしているが、このサラリーマンを見習って欲しいものだ、と思った。

「さあ、あまり長居をすると上に気付かれる恐れがある。

今日はこの辺りで切り上げましょう。おつてこちらから連絡しますよ」

「感謝します、ミスター・アルバート」

クライドは最初と同じように礼をした。

ジオルジュがすかさずドアを開け、クライドのために道を作った。

そのとき、一瞬だがアルバートの目にジオルジュの背中が映った。

——!?

「ジオルジュ、背中に付いているのは何だ!？」

ジオルジュはしばらく唾然としていたが、やがて自分の背に手をやった。

指先に何かが当たる。

小さくて硬い物……慌ててはぎ取り、手のひらに載せ、まじまじと見つめた。

盗聴器だった。

つづく。

04 一時休戦

「気付かれたか……」

ヨシユアは舌打ちをして便器から立ち上がった。

『さっきの酔っぱらいか……』

俺としたことが、気付かなかったとは……』

これはアルバートの声だ。

妙に大きな声が伝わってくる。

盗聴器のすぐ側で話している証拠だった。

『誰だか知らないが、盗み聞きとはいい趣味だ。』

……生きて帰れると思うな』

小さな音と共に盗聴器から伝わる音が途切れた。

踏みつぶしたか、地面に叩き付けたか。

どちらにしろ、盗聴器はもう役に立たないようだ。

ヨシユアはイヤホンを耳から外し、ポケットの中の受信機をトイレのゴミ箱に放り込

んだ。

「さすがは裏の元締め、怖い怖い」

口をすぼめて息を吐く。

完全に馬鹿にした口調である。

それもそのはず、ここまでは完璧にヨシユアのシナリオ通り。

「シアて……本番、行くか」

トイレのドアを蹴り開け、ヨシユアは外に飛び出していった。

*

「あー、りんふあちやんだー」

リンファはその光景を見るなり硬直した。

一体どうやってくすねてきたのか、エリイは山と積まれた料理を片っ端から口に放り込んでいた。

——あ……あたしがピンチのときにこオの娘ツ子は……

「あのねえええエリイイイイイ!?」

「うにやああああおかえりりんふあちやああああん」

全く、この状況でお帰りもなにもなさそうだが、リンファにほつぺたを引き延ばされなからもエリイはいつもの調子を崩さなかった。

「まあいいわ。こんなことしてる場合じゃないし。」

「ヨシユアがここに来てるの」

「よしゆあくんですかあ。おしごとですかあ？」

「多分ね。もうゆつくりしてる暇はないわ」

「は、い、りよ、か、い」

今回の仕事には、エリイの協力がかせない。

まずリンファが騒ぎを起こす。

それに乗じてエリイが内部からハッキングを仕掛け、癒着の証拠となるデータを盗み出すのである。

もしハッキングに失敗した場合は、リンファが直接最深部に乗り込んで要る物を盗んでくる予定だ。

「じゃあエリイ、予定通りにね」

「あいあい」

軽く返事をしたエリイにうなずくと、リンファは適当に走り出した。

「いい、一体どういうことですか!」

クライドの狼狽えようは半端なものではなかった。

親企業を裏切ろうとしている最中なのだから多少の異常事態に過剰反応するのも無理はないが、こんな状態ではぼろを出す恐れがある。

アルバートにとっては、クライドを落ち着かせることが最初の急務だった。

「侵入者です。」

なに、心配はありません。

顔もわれていますし、すぐにつかまえますよ。

それより今は身の安全を最優先なさった方がいい。

……ジョルジュ」

アルバートの呼び声にジョルジュは何をしいのかわからず立ち尽くした。

「専務をお宅まで送って差し上げろ。」

安全確保が第一だ」

「了解しました。さあ、こちらへ」

ジョルジュはまだ不安そうな表情のクライドの背を押して、応接室の外へ連れ出して

いった。

とりあえず当面の邪魔者は排除した。

あとはあの酔っぱらいを装っていたコートの男をなんとかしなくてはならない。

アルバートは専用の通信機のスイッチを入れた。

この会場の中にいる全ての部下に同時に命令が送れるようになっていた。

「侵入者だ。」

早急に排除しろ。

身長は百九十cm以上。

黒いロングコートを着た男だ。

レイヴン、もしくはは企業のエージェントの可能性がある。

射殺してもかまわん」

これで優秀な部下達がネズミ取りに動き出す。

この緻密な網をくぐり抜けられるネズミはいない。

アルバートはそう自負していた。

「ドブネズミめ……俺を甘く見るなよ」

*

このパーティ会場はアルバートの住処である。

客に解放されている部分も多いが、立入禁止になっている場所がほとんどである。知られてはならない秘密が隠してあるとすれば、そういう場所以外にはない。

リンファは手の中の爆破スイッチを握りしめた。

これを一押しすれば、パーティ会場に仕掛けておいた爆薬が炎を吹く。

無駄に死者を出さないように爆発力は押さえてある。

ある程度中心部に近付いてから爆発させれば格好の陽動になる。

『ね〜ね〜りんふあちゃ〜ん』

突然通信機からエリイの声が聞こえてきた。

胸ポケットの端末のスイッチを押して答える。

「なに？」

『だめなの〜。だいじなデータはあ、ネットからかくりされてるのお』

「了解。こつちでなんとか探してみる」

『それとね〜、しんにゆうしやがいるとかさわいでるよお〜。』

くろいコートきたおとこのひとだつてえ〜

黒いコートの男……どうやらヨシユアが見つかったようである。

リンファは鼻で笑った。

人を閉じこめたりした報いだ。

お陰でこつちから敵の目も逸れる。

「わかった、ありがと。

エリイは早めに逃げて。

……また料理食べたりしちやだめよ」

『あいあゝい、ばいばいりんふあちやゝん』

エリイからの通信はそれで途切れた。

ここからが本番である。

リンファは手の中のスイッチを押した。

……

遠くから振動が伝わってくる。

これで騒ぎはいっそう大きくなったはずである。

リンファはすぐさま奥へ向かって駆け込んだ。

今回はACが使えない。

従って、迅速な行動が勝負の決め手だ。

エリイがハッキングして手に入れた地図を頼りに、目指すはアルバートIIマックスの

私室。

——次の角を右だ。

リンファは曲がり角を一気に駆け抜けた。

……その時!

「うわわわわっ!?!」

「きゃっ!?!」

角の向こうから走ってきた男と、リンファは真正面から激突した。

互いにはじき飛ばされ、尻餅を付く。

リンファは痛みに顔を歪めながら相手に目をやった。

黒いコートの貧相な男……ヨシユアである。

「あ、リンファ」

「ヨシユア! あんたさつきはよくもっ!」

「……話は後だ!」

ヨシユアは立ち上がるが早いかリンファの手を引いて駆けだした。

その表情にいつもの余裕はない。

額には脂汗が浮かんでいる。

リンファは突然背中に悪寒を感じ、走りながら振り返った。

そこにいたのは、紛れもなく銃を構えて狙いを定めている黒服の男！
バシユツ！

空気が抜けたような間拔けな音がした。

これは……サイレンサー付きの拳銃のようだ。

「うそおおお!?」

「こつちだ!」

続けて飛来する数発の弾丸を避けて、二人は角を曲がった。

不意にヨシユアが手を放した。

リンファにうなずきかける。

次の瞬間、警戒することもなく角を曲がってきた黒服の男にヨシユアの拳がめりこみ、同時にリンファの肘打ちで男は完璧に気絶した。

走り回ったせいでリンファは息が切れている。

深呼吸して心臓をなだめ、小さく息を吐く。

「……つたく……なんであたしまで追いかけれなきやなんないのよ」

「盗聴してたのがバレてな。さつきからこの繰り返しだ。」

「参ったよ、早いとこアルバートにお目にかかりたいんだがな」

ヨシユアはいつと口の端を吊り上げ、右手をさしだした。

「そこで……ここは一時休戦・協力する、つてのはどうだ？」

リンファはこいつのこういうところが嫌いだ。

クールなのかと思えば妙に間抜けなこともしてみせるし、そもそも敵同士だったのに急に協力を申し出たりする。

しかも急に裏切るから信用もできない。

しかし今回はリンファにも余裕がない。

ここはどうやら協力するのが吉、のようである。

ガスッ！

リンファの肘がヨシユアのみぞおちに食い込んだ。

思わずうずくまり、呻きをあげるヨシユア。

「OK、一時休戦よ。」

……ちなみに、それはあたしを閉じこめてくれたお礼だから」

「くそ……根に持ちやがって……」

つづく。

05 ヨシユアの怒り

「まだ捕まらないのか？」

アルバートは通信機に向かって怒鳴った。

彼が命令を出してからはや一時間。

今までこれほど時間がかかったことは一度もない。

それだけでも苛ついているというのに、通信機の向こうの部下もなかなか答えようとしない。

「どうした？ 早く答えろ！」

『す、すいません……残念ながらまだ……』

「どうやら侵入者に仲間がいたらしく、手間取っております』

「何？ 一体何者だ？」

『女です。』

接待嬢の制服を着ていますので、おそらく雇われるふりをして忍び込んだものと思われ
れます』

「チツ……この大胆な手口、どうやらレイヴンのようだな。

わかった。しかしだからといって言い訳にはならん。一刻も早く捕まえる」

アルバートの口調がさつきとはうってかわって落ち着いたものになった。

普通に考えれば、冷静になったとみなせるだろう。

しかし彼に限っては違う。

アルバートは、頭に血が上れば上るほど、落ち着き払った行動を取るようになるのだ。

それは常に四面楚歌の闇の世界で生きていくために必要なことだったのかもしれない。

すぐにかつとなって殴りかかっているようでは、だましあい詭道の世界を渡り歩くことはできないのだ。

アルバートの部下はみんなそのことを心得ている。

通信している部下も例外ではなく、慌てて返事をして、通信を切った。

アルバートはソファに身を投げ出した。目を閉じて頭を整理する。

自分にイリーガル社を裏切るよう勧めてきたクライド。

これはいい。バックボーンにプログテック社を持つのなら願ったり叶ったりだ。

そして、レイヴンとおぼしき二人組。

恐らくそいつらを雇ったのはイリーガル社と敵対する、あまり規模の大きくない企業

だろう。

自分とイリーガル社の癒着の証拠をつかみ、堂々とイリーガル社を潰しにかかるに違いない。

——さてよ。

アルバートの脳裏に一つの考えが浮かんだ。

もしかしたら、これは利用価値があるかもしれない。

アルバートは徐に立ち上がった。

思いつきを実行に移すために、自分の部屋を後にしようと、ドアノブに手をかける。

ドアはアルバートが力を加えるまでもなく自然に開いた。

驚くアルバートの目に、一組の男女の姿が映った。

「……貴様らッ……！」

「ハアイ、ミスター・アルバート」

二つの銃口がアルバートの胸に向けられた。

言うまでもなく、リンファとヨシユアだった。

*

「リンファ、お先にどうぞ」

「あ、そう？ それじゃあ……」

リンファは手錠で手を縛られ床に座らされたアルバートを見下ろした。

「イリーガル社の裏帳簿……あんたが管理してるはずよね。」

素直に渡してくれたら命は助けてあげるわ」

「そのコンピュータからデータベースに入れる。」

パスワードはIRG—3350Sだ」

意外にもあっさりアルバートは口を割った。

むしろ、嬉々としているようにも見える。

逆にリンファの方が呆気にとられた。

リンファはアルバートが指さしたデスクの上のコンピュータを動かした。

データベースにアクセスし、言われた通りにパスワードを入力する。

しばらく待たされた後、画面に何かの表が表示された。

間違いない。イリーガル社の不正取引の記録……いわゆる裏帳簿である。

これならアルバートとの癒着どころか、イリーガル社が行っていたあらゆる不正行為

の証拠になる。

リンファはすぐさま持ってきたディスクにそれを写し取った。

コンピュータが作業を始めたのを確認して、拘束されたままのアルバートに目を遣った。

「不思議がることはない。

色々事情があるのだ。

それに君たちはレイヴンだろう？

仕事さえこなせば文句はあるまい？」

アルバートが見つけた利用価値とは、これのことである。

仕事を仕掛けてイリーガル社を潰すためには、リンファを雇ったのであろう第三者に同時に攻撃させた方が都合がいい。

全て計算づくである。

リンファにはその辺りのことは想像が付かなかつたが、どちらにしろ損はなさそうだと納得した。

「……まあいいか。

ヨシユア、あたしの方は終わったけど」

リンファが呼んでも、ヨシユアは全く反応しなかった。

銃をアルバートに突きつけたまま微動だにしない。

やがて、ヨシユアは徐に口を開いた。

「シユイジンを知ってるか？」

「……知らない」

ダンッ！

リンファは息を飲んだ。

飛び散る血しぶき。

弾ける肉片。

ヨシユアが放った銃弾は、アルバートの左耳を吹き飛ばしていた。

「うぐあああああつ?!」

「もう一度聞く」

ヨシユアの声は冷たく澄んで、まるで研ぎ澄まされた刃物のようだった。

「シユイジン、という男を知っているか？」

「し……知らないッ！ 本当だッ！」

「じゃあ質問を変えよう」

ヨシユアの持つ拳銃が、今度は右の耳をポイントした。

引き金に指をかける。

ほんの少し力を加えれば凶弾が弾けるだろう。

ヨシユアを止めなければ。

リンファは漠然と感じた。
しかし体は動かなかった。

まるで何かに縛られたかのように、指先まで完全に硬直してしまっていた。

「マーサ、という女を知って……憶えているか？」

アルバートは喉を鳴らした。

おそらく知らないのだろう、ということにはリンファにも想像がついた。

しかし何故ヨシユアがここまで残忍な行動をとるのかは全くわからなかった。

「し……知らない……」

左の耳が吹き飛んだ。

悲鳴を上げ、虫のように床で蠢くアルバートの姿が、リンファの目に映った。

ヨシユアはもう一度引き金を引いた。

今度は弾丸は左肩を貫いた。

幾度となく破裂音が響き、両手と両足が順番に打ち抜かれていく。

そして最後に顔に銃口が向けられたとき、リンファの金縛りが解けた。

「殺しちゃだめッ！」

リンファはヨシユアに飛びかかり、その右手をつかんだ。

銃口の向きを変えようとするが、それより一瞬早く弾丸は発射されていた。

弾丸はリンファの右腕をかすり、そしてアルバートの頭に食い込んだ。

悲鳴を上げる暇さえ与えられず、アルバートは事切れた。

リンファも傷口を押さえてうずくまる。

「……リンファ！ 馬鹿なことを……」

ヨシユアはコートの裏ポケットから消毒薬と包帯を取りだし、リンファの腕に応急処置を施した。

レイヴン稼業を続けていると危険も多い。用心深いヨシユアはいつもこのくらいの備えをしている。

処置が終わるなり、リンファはヨシユアの胸ぐらをひつつかんだ。

「馬鹿はあんたよっ！ 一体何考えてんの!？」

殺す必要なんてなかったじゃない!」

「……リンファ、お前この仕事始めてどのくらいになる？」

まさか、今まで人を殺したことがない、なんて言う気じゃないだろうな?」

「あんないたぶるようなやり方、おかしいよ!」

どうかしてるんじゃないの!」

激しい剣幕で食ってかかるリンファから目をそらして、ヨシユアは立ち上がった。

リンファの純粋な瞳の色が、ヨシユアには耐えられなかった。

「おかしくなんかないさ……僕はまともだ」

ヨシュアの言葉が終わるか終わらないかのうちに、部屋のドアが外側から開いた。

入口に立ち尽くし、黒服の男が一人、地面に転がるアルバートの死体を凝視していた。

——見つかつた!?

リンファが理解するよりも早く、黒服の男は走り去つた。

その手には、通信機が握られていた。

「ここまでか……リンファ、話は後だ!」

「逃げんじやないわよっ!」

つづく。

06 ダルスロース

アルバートⅡマックス、死亡。

その知らせは瞬く間に部下全員に広まっていった。

もちろん、ジョルジュも例外ではない。

通信機が鳴ったのは、クライドを車で送り届けるため地下のガレージにやってきた時だった。

ジョルジュは懐から四角い端末を取り出すと、そのスイッチを入れた。

「なんだ？」

『ジ……ジョルジュ！ 大変だ、アルバート様が死んだ！』

通信を横で聞いていたクライドの顔が引きつった。

無理もない。

今、彼の安全を保証してくれるのはアルバートただ一人なのだから。

『殺ったのは二人組のレイヴンだ。ジョルジュ、どうする？』

『このままじゃ組織自体が危ないぜ！』

「そんなー！」

クライドはジョルジュにつかみかかった。

そうしたところで事態が好転するわけではないのだが、混乱したクライドにはただ叫ぶことしかできなかつた。

「私はどうなるんだっ!？」

「これじゃあ私は……私は破滅じゃないかつ!」

「うるせえっ!」

ジョルジュは自分の胸ぐらを揺するクライドを殴り飛ばした。地面に叩き付けられ、クライドはうずくまった。

「くくく……ザマアねえぜ……」

何が男なら、だ!

死んじまつたら終わりじゃねえか!」

ジョルジュは通信機に向かって怒鳴りつけた。

無駄に大きい濁声がガレージに響き渡る。

「いいか、今から俺がボスだ!

今さらレイヴンなんざどうでもいいが、これもけじめだ。

絶対にそいつらをぶち殺せ!」

『な……何言つてんだ！ お前がボスだと!?』

ふざけんじゃ……』

ブチッ。

ジョルジュは相手の言うことに耳を貸さず、一方的に通信を切った。

彼は本当に、自分が組織を牛耳れると思っていた。

自分はアルバートの右腕だった。

そしてそのアルバートが死んだ。

ならば、自分がその跡を継ぐのが筋というものではないか。

おそらく、ジョルジュがただのボディガードだったということに気付いていないの

は本人だけだろう。

組織の間は誰一人ジョルジュの命令に従いはしない。

ジョルジュはふと、あることに思い当たった。

「そうか……レイヴンだったな……」

ガレージの奥に、普段は整備員以外立ち入らない場所がある。

ジョルジュは思った。

自分の輝かしいデビューを飾るには、あれを使うのがふさわしい、と。

次の瞬間、彼はそこへ向かって走り出していた。

*

もうどの位走っただろうか。

リンファの持つ地図を頼りに出口を目指すこと十数分。

もう出口は目の前だが、ここまで何一つ障害に出会っていない。

いないのである。警備員も、追っ手も、誰も。

これはこの組織がアルバートのワンマン組織であったことの証明である。

おそらく、もう組織は再起不能だろう。

分裂し、自然消滅していく運命である。

「その扉を抜ければパーティの会場に出るわ」

リンファが指さす先には、一つの大きな扉があった。

ここに来てから何度もお目にかかっている。

間違いなく、あの忌々しい宴が開かれていた広間へ通じる扉である。

「なら協力はここまでだ」

「せいぜい死なないように気を付けることね」

ヨシユアは扉には入らずに廊下の向こうへ消えていった。

言いたいことは山ほどあるが、とりあえず今は自分が逃げるのが先決である。リンファの相棒であるAC『ペンユウ』は、パーティ会場の地下のガレージに隠してある。

比較的目立つものだが、滅多に人が寄りつかないような隅なら見つかることはない。リンファは瓦礫がちらかり、誰もいなくなったパーティ会場に足を踏み入れた。

言うまでもなくリンファが仕掛けた爆弾のせいである。

広間の端にある階段を目指し、駆ける。

……その時。

「リンファさんっ！」

突然後ろから声がかかった。

リンファは反射的に背後に銃を突きつけた。

「……キャロル……？」

いつの間にか後ろに立っていたのはキャロルだった。

リンファの銃に怯え、両手を控えめに掲げている。

「あの……手、降ろしていい？」

「あ、ぐめん……」

まだ逃げてなかったの？」

リンファは銃を懐にしまい込んだ。

とりあえずキャロルには敵意はなさそうだったが、爆発が起きた場所に何故いつまでも留まっているのには何か理由がありそうだった。

「リンファさん、あの赤いAC、あなたなのでしょう？」

「え!?! ペンユウを見たの!?!」

「大丈夫、見つかりにくい所に隠しておいたの。」

「こつちよ!」

呆然とするリンファの手を引き、キャロルは走り出した。

*

薄暗いガレージの中で、赤い巨人が立ち上がった。

リンファの相棒であるAC、『ペンユウ』である。

武装は肩のレーザーキャノンと右手のマシンガン。

それに左の手の甲にはレーザーブレードが搭載されており、必要に応じて光の刃が敵を切り裂く。

そのコックピットのシートに腰掛け、リンファは操縦桿の調子を確認する。

右手の微かな動きに反応してペンユウはゆっくりと歩き出した。

この快適なレスポンスは、メカニックであるエリーの腕のたまものである。

リンファはモニター越しにペンユウの足下に目を遣った。

そこではキャロルが心配そうにこちらを伺っていた。

リンファが最初ペンユウを隠していた場所には、一台も車が残っていなかった。

つまり、頻繁に使用されていた場所だったわけである。

それに対してここはゴミ捨て場だか駐車場だかわからないような場所で、まさに隠すにはうってつけだった。

それにしても、本当によく気の回る人である。

リンファはスピーカーのスイッチを入れて、外に呼びかけた。

「ありがと、助かったわ。

あなたも早く逃げて」

キャロルは軽く手を振ると、ガレージの奥に消えていった。

あとは脱出するだけ、である。

微かな外の灯りを頼りに歩みを進める。

出口はそう遠くない。

……と、その時。

「AC確認」

「!?」

コンピューターの声に、慌ててリンファはレーザーを確認した。

赤い点がレーザーに一つ。

距離は五百メートルほど、ここより十数メートル高い位置にいる。

ここが地下のガレージだから、相手は地上……というか、地下都市の地面の上にいるらしい。

一瞬、ヨシユアかとも思ったが、コンピューターの第二声がそれを否定した。

「識別信号確認。イリーガル社製局地防衛用AC『ダルスローズ』」

——イリーガル社製!?

ということとは、リンファが盗んだデータを回収するためにイリーガル社が送り込んできたのだろうか？

いや、それにしても対応が早すぎる。

ともかく、リンファは右側にある赤いボタンを押した。

「戦闘モードに移行します」

これで、戦闘に必要な操作系が全て動き出す。

リンファはマシンガンが問題なく動作するのを、二、三発撃って確かめた。

慎重に出口のスロープに近付き、レーダーをもう一度確認する。

相手の『ダルススロース』とかいうACはさつきから全く動いていない。

ここの上上に近い場所でじっとしている。

リンファは訝しがりながらも、ブースターを噴かして一気に上へ飛び出した。

そこで待ちかまえていたのは、一機の間型重量ACだった。

全身が太く、まるで太った男のようである。

肩にはミサイルが装備され、その攻撃力を誇示している。

そして白に統一された塗装が目を惹く。

ペンユウがマシンガンをダルススロースに向けた瞬間、相手から通信が入ってきた。

『くくく………てめえがレイヴンだな？』

「……話をしている暇はない。」

見逃してくれると嬉しいが、どうしてもというなら手加減はしない」

リンファは意識して声を押し殺し、迫力を持たせて言い放った。

想像はしていたが、やはり相手の笑い声が漏れ聞こえる。

『女か………フン、女に殺されたんじゃアルバートもザマアねエな。

まあいいさ、もう終わっちゃったことだ。

とりあえず名乗っとくぜ。

俺はジョルジユ。

この組織のボスだ』

リンファは自分の耳を疑った。

一体どこの組織のボスが自らACで出陣するというのか。

おそらくこいつはアルバート亡き後に勝手にボスを名乗っているだけだろう。

リンファはそう納得した。

『正直言つてレイヴンなんざどうでもいいんだがな……』

けじめはつけてやる。死になッ!!』

つづく。

07 共闘、リンファ&ヨシユア

次の瞬間、ダルスロースが動いた。

肩のミサイルポッドが火を噴き、六発のミサイルが発射される！

しかし、弾速が遅い。

これならば回避は難しくない。

リンファはペンユウを操り、真横に飛びすきった。

そしてさつきまでペンユウが立っていた場所をミサイルが通り過ぎる……はずだった。

突然、ミサイルが90度向きを変え、ペンユウに迫った！

「うっそおおおおっ!？」

どんなに叫ぼうが、この状況ではもはや直撃は免れない。

リンファは直後に来るであろう衝撃に身をこわばらせた。

……その時！

ガガガガガッ！

視界の外から降り注いだガトリングガンの弾丸が、全てのミサイルを撃ち落とした。間髪入れず、通信が入ってくる。

『苦労してるようだな。手伝おうか？』

「ヨシユア！」

リンファは、この時ばかりは喜びを隠せなかった。

嫌な奴ではあるが、ヨシユアの腕は一流。

彼が加勢すれば、まず負けることはないだろう。

しかし、次のヨシユアの言葉にリンファは沈黙した。

『報酬、半々でどうだ？』

「……………」

『冗談だ。3割にまけといてやるよ！』

その言葉と同時に、ペンユウの隣に青い蜘蛛のようなACが降り立った。

四足タイプ特有の高機動力を誇り、肩のレーザーキャノンと武器一体腕のガトリングガンの火力は凄まじい。

「AC確認。ランカーAC『ワームウッド』」

——知れたことを！

リンファは心の中で自分のACのコンピュータを罵った。

並んでダルスロースと対峙する二機に、ジョルジュは再び通信を送った。

『そうか………そういやア二人組ってことだったな。』

いいぜ、二人まとめてかかってこい！』

『正気か、おい？』

ヨシユアが眉をひそめるのも無理はない。

レイヴン二人を相手に一人で戦おうなど、身の程知らずな奴である。

ダルスロースはゆっくりと、本当にゆっくりと歩き出した。

あまりに緩慢な動きで、生身の人間が走った方がまだ速いのではないかと思えるほどである。

重量AC最大の欠点、根本的な機動力の不足、である。

その代わりに積載能力や装甲の面で優れているのだが……

その姿は、まさに『のろまなナマケモノ』の名にふさわしい。

『遅いッ！』

ワームウツドのガトリングガンが弾丸を放った。

あの動きでかわせるはずがない。

……しかし、弾が突き刺さる直前、突然ダルスロースはブースターを噴かし、それを

かわしきった！

『何!?!』

「気を付けて！ あいつ、反応がやたらいいわ！」

ダルスロースがミサイルを放つ。

さつきとは異なり、真上に数発のミサイルを打ち上げた。

ある程度まで上ると、そのミサイルはペンユウとワームウツドに降り注ぐ！

ワームウツドは持ち前のスピードでなんとかこれを避ける。

そしてペンユウは……まっすぐ前に、つまりダルスロースの懐に飛び込んだ！

ヴンツ！

左の手の甲からレーザーブレードが飛び出し、ダルスロースを襲った！

——しかし！

ダンツ！

レーザーブレードが届く一瞬前に、ダルスロースのハンドガンが火を噴いた！

回避などできるはずもなく、三発の弾丸がペンユウのコアに食い込んだ。

「ツ!?!」

ダメージそのものは大したことはないが、衝撃ではじき飛ばされ、ペンユウは片膝を付く。

そこを狙ってダルスロースのミサイルが発射された。

『リンファ、動くなよッ!』

ヨシユアの声に驚き、反射的に操縦桿を握る手を止める。

次の瞬間、ガトリングガンの弾がミサイルの全てを撃ち落とした。

言うのは簡単だが、高速で飛行しているミサイルを撃ち落とすなど容易くできることではない。

ヨシユアの腕の証明である。

しかし今問題なのは、目の前のダルスロースだ。

「助かったわ……それにしても何なのよ、あの反応は？」

はつきり言って人間技じゃないわよ!？」

『……《キンドル》だ』

ヨシユアの言葉に、リンファは凍り付いた。

《キンドル》……化学工業系企業の大手であるヴェスタル・フアナス社が開発した能力強化薬物、アダードラッグの一種である。

皮下注射すると、まず精神が高揚し、次に反射神経が異様に強化される。

人間の限界を超えた超反応が可能になるが、慣習性や中毒性も非常に強く、あまりの危険性を恐れた大企業によってヴェスタル・フアナス社ごと駆逐されてしまった。

要するに、まともに太刀打ちできる相手ではない、ということである。

「ちよつと、どーすんの？ やばいんじゃないの？」

『まア見てな』

ワームウッドが地を滑り、一気にダルスロースとの間合いを詰める。

そこを狙って六発のミサイルが同時に飛来する！

『生つちよろいんだよッ！』

リンファは目を見張った。

一体どういう風に操縦桿を動かしているのか……ワームウッドはミサイルとミサイルの隙間、AC一体が通り抜けるのがやつと、位の部分を縫うように駆け抜けた！

しかし、ここからが問題だ。

あの超反応をもってすればいかにワームウッドのガトリングガンが素早いとはいえ回避されかねない。

リンファが見守る中、ワームウッドは……そのままダルスロースに体当たりを仕掛けた！

流石にこんな原始的な攻撃がくるとは思っていなかったらしく、ダルスロースはまともに体当たりを食らい、吹き飛んだ！

*

——逃げなければ——

とにかくクライドは今、それだけを考えていた。

どこへ、どうやって逃げるか……そんなことは全く思いつかない。

それでも逃げなければ、遠くへ行かなければ、あるのはただ死のみ。

逃げられるはずはないのだ。

イリーガル社を裏切り、おそらくプログテック社にも見捨てられるだろうし、頼みの綱のアルバートは死んでしまった。

もはやどこにも……表の世界にも裏の世界にもクライドの居場所はない。

クライドは走った。

無我夢中に、ただ灯りが見える方向へ。

息が切れる。

心臓は今にも弾けそうだ。

埃を吸い込みすぎて、肺までが痛み出していた。

クライドはふと前を見た。

そう、今までは前すらも見ていなかったのだが……とにかく、前に小さな灯りが見え

た。

地下駐車場から外へ出るための、スロープである。

そこから外の灯りが漏れだしていた。

クライドはスピードを上げようとした。

しかし彼にできたのは、震える膝をなんとか前に出すことだけだった。

疲労はもう限界だ。

それでもクライドは走った。

……いや、喘ぎながら前へ進んだ。

スロープにたどり着いたときにはもう一步も歩けないような気がしていたが、それで

もなんとかスロープを登り切った。

クライドは辺りを見回した。

白い物が見えた。

白い、大きな人のような形をした物。

それは空を飛びながら、だんだんと大きくなっていった。

近付いてきているのだ。

吹き飛ばされたダルスコースだった。

*

ズ……ン……

重い音と砂煙を巻き起こし、ダルスロースは地面に倒れ込んだ。

丁度そこは地下へ降りるスロープがある場所だ。

もし人がいれば潰されていただろうが……この際それはどうでもいい。

『リンファ、今だ！』

「OK！」

リンファは操縦桿に付いているボタンを思いっきり押した。

マシンガンの弾丸が勢いよく飛び出し、ダルスロースの白い装甲をえぐり取っていく。

そこにワームウツドのレーザーキャノンも加わり、爆風を巻き上げた。

息もつかせぬ連射……二人がボタンから指を放したのは、ダルスロースの周りが完全に荒野と化した後だった。

つづく。

08 純白の世界に、愛を残して

「……終わった？」

『いくら重装ACでも、これだけの攻撃を耐えるなんて……』

——無理だ。

ヨシユアは最後まで言い切ることができなかった。

もうもうと巻き上がる煙の中に、白い輝きが見えたのだ。

輝きはゆつくりと立ち上がり、人の形を取った。

ダルスロースの装甲はいたる所で剥がれ落ち、傷口から金属骨格が痛々しく顔を見せ
ていた。

相当ダメージはあったようだが、行動不能なほどではなさそうである。

『アブねえところだったぜ……』

だが、どうやらこいつの装甲のおかげで救われたみてえだな』

ヨシユアはちいさく舌打ちをした。

どうやらこれは、厄介なことになったようである。

というのも、ワームウツドの弾薬はもう底を尽きかけていたのである。

残っているのはガトリングガン50発分と、レーザーキャノンがたったの3発。かなり余裕がない。

一方のリンファも、レーザーキャノンは残っているもののマシンガンは既に空っぽである。

『そんだけ撃つてりや弾切れだろう？』

覚悟しな、ゆつくりと料理してやるぜ！』

ダルスロースのミサイルが天空へ打ち上げられた！

最上点まで上ると、ペンユウとワームウッドめがけて降り注ぐ！

「ちつくしよおおおっ！」

リンファは操縦桿をなぎ倒した。

無理な操縦にもペンユウは俊敏に反応し、なんとかミサイルをかわしきる。

ワームウッドも後退しながら回避行動を取った。

弾薬が尽きかけていても、そのスピードをもってすれば回避はたやすい。

……しかし、突然ワームウッドの動きが止まった！

ガゴオオオンッ！

空気を振るわせ、ワームウッドの装甲が弾け飛ぶ！

ミサイルは直撃である。

「なにやってんの、ヨシユ……」

文句を言いつつリンファはワームウッドの方に目を遣った。

傷つき、四本の足のうち一本が取れかけているワームウッド……

その足下に、人がいる！

リンファは映像を拡大した。

茶色いセミロングの髪で、リンファと同じ制服を着ている女性……

「キャロル!？」

リンファと別れた後で何をしていたのかと思えば、よりにもよってこんな所にいたとは。

どうやらヨシユアは、キャロルをかばってわざとミサイルを食らったようである。

やがて、ヨシユアがスピーカーを通してがなり立てた。

『速く逃げろっ!』

かなり余裕がないヨシユアの声に、キャロルは弾かれたように走り出した。

やはり生身の人間の足だけあって遅い。

それでもしばらくの後にキャロルの姿は建物の陰に消えた。

それにしてもあのヨシユアが見ず知らずの人間をかばうとは。

きつと精神的に成長したんだろう、とリンファは勝手に納得した。

『くそっ……悪い、リンファ！ 僕は逃げるっ！』

「……はっ」

——前言撤回ッ!!

ワームウッドは意外と俊敏な動きで後ろへ下がりはじめた。

見た目にはダメーじは大きそうなのだが……もしかして本当は大丈夫なのか？

しかし、ジョルジュもそれを黙って見逃すほど甘くはない。

すぐさまワームウッドめがけてミサイルを放つ。

『食らうかッ！』

ワームウッドは、残りのレーザーキャノン三発を近くの建物に向けて連射した。

ミサイルは崩れ落ちたコンクリートに着弾し、爆発する。

そして煙がおさまった時には、すでにワームウッドは全く見えないとところまで逃げお

おせていた。

リンファのリーダーにも映っていない。

どうやら移動能力はこれっぽっちも低下してはいなかったようである。

『逃げられたか……まあいい、てめえだけでも殺してやるぜッ！』

……はた迷惑な執念である。

しかし、リンファはさっきのヨシユアの行動で、既に活路を見いだしていた。

ダルスロースが毎度おなじみのミサイルを放つ。

打ち上げ型ではなく、異様に追尾性能がいい方である。

ペンユウはそのミサイルに向かって突っ込んだ。

そしてミサイルが命中する直前、微かに機体を横にずらし、ミサイルの隙間をすりぬける！

——ヨシユアにできてあたしにできないはずがないっ！

しかし、さすがは追尾性能の高いミサイル、ペンユウの横を通り過ぎた後で、百八十年代方向転換する！

ミサイルを後ろにしたがえて、ペンユウはまっすぐダルスロースに近付いた！

*

ジョルジュはほくそ笑んだ。

敵のACはダルスロースの放ったミサイルを引き連れてこっちに向かっている。

どうやら映画とかでよく見る、相手のミサイルを誘導して相手自身にぶち当てる、という戦法のようなのである。

「見え見えなんだよッ！」

《キンドル》のおかげで相手の動きはハエがとまりそうなくらいゆっくりとして見える。

ジオルジュは慌てることなくブースターを噴かして上空へ飛び上がった。

ペンユウは……上空のダルスローズにミサイルを誘導するのは無理と判断したのか、そのままダルスローズの足下を通り過ぎた。

……勝った。

ジオルジュは確信した。

理由など特にないが、あるいはドラッグの作用で気分が高揚しているせいかもしれない。

しかし次の瞬間。

ガッ！

ダルスローズの機体が揺れた。

何かが頭上から降ってきて、ダルスローズに当たったのである。

このとき、もしジオルジュがペンユウの姿を見ていれば、何が起きたのかを理解できたのかもしれない。

ペンユウはレーザーキャノンを発射して、ダルスローズの側の建物を崩したのである。

その破片が、空中へ飛び上がったダルスロースを墜落させることを見越して。そして……ジョルジュが最後に見たのは、自分が放った無数のミサイルの姿だった。

*

派手な爆発音を立てて、ミサイルは墜落したダルスロースに命中した。しかしこれだけではまだ不安だ。

リンファは引き金を引いた。連射力では劣るが、単発の威力は高いペンユウのレーザーキャノンが、こんどこそダルスロースのコアを狙い違わず貫いていた。

*

太陽のまぶしさも、白い帽子が防いでくれる。

彼女は花畑の向こうを見遣った。

大きな青い蜘蛛から、降りてくる人影があった。

彼女は大きく息を吸い込んだ。

深呼吸をしても差し支えないほど、ここの空気は澄んでいる。

地上でこんなことができる場所など、ここ以外にはないかもしれない。そよ風が彼女の茶色い髪をたなびかせた。

彼女は風を頬に感じながら、蜘蛛から出てきた男が来るのを待った。

男は、やがて彼女のすぐそばまでやってきた。

彼女が真つ白な服で身を包んでいるのに対して、男は全身が真つ黒だった。

コートまで着込んでいて、この陽射しの中では少し暑そうだった。

「ひさしぶり、ヨシユア」

「ああ」

ヨシユア、と呼ばれた男は短く答えた。

表情は微笑んでいたが、心の中は曇っているのだろう。

彼女には、それが手に取るようにわかった。

「さつきはありがとう、助けてくれて」

「気にするな、キャロル」

キャロルはセミロングの、茶色い髪を掻き上げた。

「姉さんの敵、討ってくれたんだね」

「シユイジンもだ」

かつて、シユイジンという名のレイヴンがいた。

仕事でヨシユアと出会い、意気投合した二人は数々の依頼を協力してこなしていった。

そう、相棒と呼ぶのがふさわしい関係だっただろう。

そのシユイジンには将来を誓い合った女がいた。

名はマーサ。

ヨシユアも何度かあったことがある。

落ち着いているが、どこかとぼけた感じのする、かなりの美人だった。

よくシユイジンを面食いだとからかったものだ。

しかし……一週間ほど前。

マーサの妹であるキャロルから、不意にヨシユア宛のメールが届いた。

マーサが自殺した、というのだ。

自殺の数日前、マーサが働いていたバーに一人の男が現れた。

アルバートⅡマックスである。

そして、よりもよってマーサはアルバートに目を付けられてしまったのである。

マーサは当然、なんとかして逃げだそうとした。

しかし、抵抗も空しく――

マーサは自殺した。

事実を知ったシユイジンは、ヨシユアの制止も聞かず単身アルバートの牙城に乗り込み、そして返り討ちに遭って死んだ。

「でも……約束、違うじゃない」

キャロルは顔を伏せた。

輝くものが頬を伝い、落ちる。

「わたしにやらせてくれるって……言つたじゃない」

何も、ヨシユアは言わなかった。

キャロルはうつむいたまま、ヨシユアの胸に顔をうずめた。

小さな嗚咽の聲がヨシユアの耳に届いた。

風が吹き抜けていく。

キャロルの帽子が、風に乗って飛んだ。

側の赤い花の上に、純白の帽子が横たわった。

ヨシユアはそつと、手をキャロルの肩に置いた。

まだ涙の取まらぬキャロルを優しく引き離す。

帽子を拾い上げて、砂埃を払う。

それをキャロルにかぶせた。

「人の命を背負うには、あんたの腕は細すぎる」

ヨシユアの声は、深く澄み切って、果てしなく優しかった。

「ここで、静かに暮らすんだ。

何もかも、忘れて」

キャロルは何も答えなかった。

その姿は悲しみに耐えているようにも、怒りに震えているようにも見えた。

やがてヨシユアは背を向けて歩き出した。

風がコートををはためかせる。花の向こうに消えていく背中を見つめながら、キャロル

はその場に崩れ落ちた。

大地に座り込んだまま、溢れ出してきた涙で頬を濡らす。

涙は花の上に落ち、露のように輝いた。

太陽の光を浴びて、風が微笑んでいた。

純白の世界が、そこにあった。

*

青い蜘蛛にヨシユアが帰り着いたとき、彼が最初にしなければならなかったのは、リンファから届いた苦情のメールを処理することだった。

T
H
E

E
N
D

第3話 ヘヴィ・メタル・シルバー

01 ボダ

靴音が暗い空間に響き渡り、果てしなく深い闇を二本の光条が切り裂く。

靴音は、闇の中を歩く二人の男のものだった。

どちらも警察組織『ガード』の制服を身に纏い、手には懐中電灯を掲げている。

普通は拳銃で武装しているものだが、今は丸腰である。

非武装である理由はただ一つ。

つまり、危険なのである。武装をしていると。

二人の警官は暗く長い通路を、懐中電灯の明かりを頼りに進んだ。

この先には、一つの独房がある。

そこへ行くには幾重にも張られた電子ロックをくぐり抜け、監視システムが網のよう
に仕掛けられた通路を通らなければならない。

おまけに独房はハッキング対策として古風な錠前で閉ざされている。

神経質すぎるほどの警備……

事情を知らない人間はそう思うだろう。

しかしガードの面々にとっては、これでもまだ恐ろしくて夜も眠れないほどだった。だからこそ、複数の監視カメラで常に見張っているにもかかわらず、こうして警官が十五分に一回見回りに来るのである。

それほどまでに独房の中にいる男は恐れられていた。

もし奴が脱走するようなことがあれば……このアイザックシティ・ガード本部が全滅しないという保証はどこにもなかった。

長い長い通路を通り抜けて、警官二人はドアの前にたどり着いた。

持っていたカードキーをスロットに差し込み、その隣の手形に手を押し当てる。

さらに壁に付いているセンサーを覗き込んだ。

カードキー、指紋、網膜。パターン。

オーソドックスだがこれだけ重なっていると安全性はかなり高い。

ドアは音もなく開き、警官達を中に招き入れた。

さらに廊下が延び、その奥にまた一枚のドアが見える。

警官達はドアの前に立つと、横の壁に付いているモニターを覗き込んだ。

独房の中の様子が見える。

簡単な作りのベッド、備え付けの便器……

そして、床に散らばった赤黒い液体と、その上にうつぶせに倒れた左腕のない男。

「お、おい！ 見ろよ、これ！」

モニターを覗き込んでいた警官が、もう一人に促した。

言われるままにモニターに目を遣り……そして、青ざめる。

「まづいな……」

よし、俺が衛生班を呼んでくるから、ここは頼む」

「急げよ……」

一人はきびすを返して元来た方に消え、もう一人はややこしい操作をして独房の扉を

開いた。

床に散る血とおぼしき液体に顔をしかめながら、警官は倒れた男に駆け寄った。

この男に左腕がないのは元からだ、やはり気になり、警官は男の肩口に手を伸ばした。

——次の瞬間。

ぐきゅっ。

警官の首は、いきなり起きあがった男の右腕によってへし折られていた。

*

簡単なことだ。

留置所つてやつ環境は悪い。

食事も例外じゃない。

大抵はかすかすの古パンと鍋の底が焦げ付いて赤黒くなったトマトスープ、つてところだ。

食器もアルミの安物で、時々二枚重なってることもある。

その余りの食器に、スープを取っておく。

それを床にぶちまければ……暗い部屋の中なら、血のように見えるだろうさ。

*

警官は急いでカードキーをスロットに差し込んだ。

ドアが音もなく横に開く。

早く衛生班を呼んでこなければ。

裁判前の囚人に死んでもらっては困るのだ。

ああいう奴は、きちんと法の裁きを受けてもらわねば示しが付かない。もっとも、その法も企業が私利私欲のために定めた法にすぎないのだが。彼は足を速めた。

嚴重にロックされたドアはもう一つある。

そこを抜ければ、通常の署内である。

こんなときは、いつも自分たちの命を守ってくれている警備システムが恨めしく思える。

どうしてこんなに面倒なんだ、と内心毒づきながら再びカードキーを通し、指紋と網膜を照合した。

——それが彼の最期だった。

彼は自分に何が起こったのかさえもわからなかっただろう。

彼の背中に食い込み、肋骨の隙間を抜けて心臓を貫いていたのは、小さな金属片だった。

*

武装しない、つてのは賢い判断だ。

もし俺が逃げ出しても、凶器を奪い取ることができないんだからな。しかし、俺をなめてもらつちや困る。

人なんて脆い生き物さ。

殺すのなんてわけない。

あんたたちがハッカー対策でわざわざ用意していた錠前……

あの長い鍵、あれなら十分、人の心臓くらい貫けるんだぜ。

*

「ちくしょう、またかよー！」

小太りの警官が、自分の手札をテーブルに投げ捨てた。

そのカードのすぐ側にあるクチャクチャの紙幣を、別の瘦せた警官が懐に入れる。

勤務時間中に賭とは感心しないが、倉庫番などという退屈な仕事ならばそれも仕方ないのかもしれない。

「いつも言うけどよ、お前は戦略ってやつがなつてないんだよ」

「うるせえ！ くそつ、今度こそ取り戻してやる！」

「おいおい、まだやる気かよ？」

それよりそろそろ見回りの時間なんじゃねえのか？」

「知るかよ！ どうせ倉庫の見回りなんて必要ねえだろうが！

行きてえなら一人で行け！」

痩せた警官は肩をすくめた。

全く、男のヒステリーは……とりわけ勝負に負けて起こした奴は醜いものだ。

仕方なく痩せた方の警官は一人で立ち上がった。

部屋の奥にある扉に歩み寄り、カードキーを通す。

この扉の奥は証拠品や押収品をしまう倉庫になっている。

入口はここしかないし、普段人がいる場所でもないので見回りの必要性は確かに薄いのである。

開いた扉をくぐろうとしたとき、警官は背後に何かの気配を感じた。

相棒の小太り警官の気配だろうか？

いや、もつと何か異様な気配である。

恐る恐る振り返り、そして彼は凍り付いた。

いつの間にかそこに立っていたのは、小太りの警官の頭を手にした左腕のない男の姿だった。

その足下には、首から上を切り離された警官の死体が転がっていた。

「お……お前はボ……！」

その言葉を言いきる前に、彼の首の骨は男の右腕によってへし折られていた。

*

まあ、俺の気配を感じたのは誉めてやるよ。

いい勘してる。

だがな、せっかく立派な銃を持ってたつて、いざつて時に使えないんじや宝の持ち腐れだ。

さてと、丁度倉庫の戸も開いてることだし、アレを返してもらおうか。

全く、俺の大事な腕までとつちまうんだから、ガードつても慈悲のねえやつらだな。

*

天井の小さな灯りが無数に並んだ棚を照らし出す。

棚に並べられているのは、奇妙な形の刃物、改造拳銃、毒物、多種多様なアダードラツ

グ……

押収品の中でも極めて違法性、危険性の高い物である。

男は倉庫の一番奥にあるこの部屋を歩き回って、ある物を探していた。

右腕一本で棚をかき回し、目的の物を求めて歩き回る。

それは倉庫の一番奥の奥に後生大事にしまつてあつた。

男はそれを見つけるなり狂喜し、右腕でつかみあげる。

義手である。

男は義手を自分の肩にはめ付けた。

何度か腕を振り、動作を確認する。

捕まつたときに奪い取られた左腕を、ようやく男は取り戻した。

肘のあたりまでは生身の腕とほとんど変わらないが、そこから先は機械骨格がむき出しになっている。

ガードがわざわざ義手などを没収していた理由はそこにある。

この男の最大の武器、それはこの義手そのものなのである。

男は満足げに口の端を吊り上げた。

そのまま踵を返し、倉庫の出口へ向かう。

さて、これからどうしようか。

男は考えた。

ここにいるガードを皆殺しにするのもいいかもしれない。
しかし……。

男は急いで倉庫を出た。

二つの死体が転がるさっきの部屋に戻り、死体の腕時計を確認する。

やはりもう夜明けが近い。

必ず夜に『仕事』をするのがポリシーである彼にとって、もうガードを壊滅させるだけの時間は残されていないかった。

仕方なく彼は少し簡単な道を選んだ。

そうだな、このあたりで妥協しようか。

考えがまとまった丁度その時、部屋の入口に新たな気配が現れた。

「悪い悪い、交替の時間過ぎちまつ……」

男は入口の方に目を遣った。

一人の若い警官が立ち尽くし、目を見開いて彼を凝視していた。

彼は迷った。

今ここであの不運な警官を殺すべきか。

それとも——そう、あえて泳がせて恐怖をばらまかせるか。

男は後者を選んだ。

「ボ……ボダ!？」

警官は悠長にも男の名を叫んだ。

そして次の瞬間、派手に悲鳴をあげて何処かへ逃げ去って行った。

さあ、楽しくなってきた。

男は……ボダは、たまらずに奇妙な甲高い声でわめいた。

見える。

恐怖し、絶望する人々の姿が。

ボダはそのためにも生まれてきた。

愉快。

ボダの頭の中にあるのは、ただそれだけだった。

つづく。

02 リンファとヨシユアの腐れ縁

奴が逃げた。

その知らせは瞬間に広まり、辺りは騒然となった。

すぐさまガード幹部が中央制御室に招集され、第一種警戒態勢……

つまり軍に攻撃を受けたのと同等の警戒配備がなされる。

武装規制も完全解除され、無数の警官達が手に凶悪な兵器を持ち、あの男を追い回している。

ガードの総司令官は頭をかかえていた。

制御室に飛び込んでくる報告の全てが、こちら側の被害を伝えるものばかり。

すでに数十人の警官がボダの手にかかり命を落としている。

「第三狙撃部隊……全滅です」

またか。

この総司令官が、ボダ逮捕の知らせに狂喜したのはつい一週間前のことである。

それが今また、ガードの総力をあげてボダと相まみえることになるうとは。

彼は遅ればせながらも後悔していた。

自分の心の中に、油断があつたに違いない、と。

「奴はどこに向かつている?」

「この進路だと……西門から脱出するつもりだと思われます」

総司令官は考えを巡らせた。

西門のあたりにあるのは……警官の宿舎と訓練施設、あとは重機のガレージくらいのものだが……

彼はふと、あることに思い至つた。

「おい、確か明日はデモ行進の監視任務があつたな?」

「は? ええ、確かに……」

「ということは、『トラッカードッグ』はどうなつている!？」

制御室の中にいる全員が凍り付いた。

そしてオペレーターの言葉を待つ。

「じ……実弾が装填されていますッ!」

誰もが言葉を失つた。

最悪の事態……考えようによつてはガードの全滅よりもまずい。

すぐさま対応できたのは総司令官だけだつた。

「可能な限りの『ビシヨップ』と『ステインクバグ』を出动させろ！」

『トラツカードッグ』の警護を……

いや、動き出す前に破壊しろ！」

オペレーターはすぐさま命令を伝えた。

しかし心の中には一抹の不安がよぎる。

廉価だけが取り柄の『ビシヨップ』や『ステインクバグ』に、戦うために生まれてきたようなACを止めることなどできるのだろうか、と。

*

『もったいねえよなあ……あれを壊しちゃうなんて』

「仕方ないさ。ボダに奪われるよりはましだ」

胴体に二本の足がついただけ、という単純な構造のMT『ビシヨップ』のコックピットの中でパイロット達がぼやいていた。

ガレージの中で動いているのは、まだこの二機のビシヨップだけである。

他の連中は準備が遅れているらしい。

なんにせよ命令を実行しなければならぬ。

二機は急いでガレージの奥へと向かった。

そこに仁王立ちしているのは、白と黒で塗装された一機のACである。

ガード所有、プログテック社製威圧用AC『トラッカードッグ』である。

その周りには装備品のバズーカ砲と、その追加弾倉が整然と並べられている。

どうやら、まだ異状はなさそうである。

『おい、本当にやるのか?』

「命令だろう。やるしかないさ……」

俺はそれより、こいつの機関砲でACを破壊できるかどうか、つてことの方が心配だね」

『全くだ……っ!?』

ぐああっ!』

——なんだ!?

もう一人が異状を察知するが速いか……

彼の乗るビシヨップもまた、突然動き出した『トラッカードッグ』のバズーカ砲によって、粉々に粉碎されていた。

そう。

すでに遅かったのだ。

ボダはトラツカードッグのコックピットのシートに身を埋め、満足げに哄笑をあげていた。

*

酒の匂い。

弾けるようなピアノの音。

マスターがオーダー通りにジンを小さなグラスに注ぎ、カウンターに置く。

黒いコートを羽織った長身の男はそれを少し口に含んだ。

飲み下すと、喉に熱い感覚が広がる。

男は思った。

やはり酒はこのくらいきつくなくては。

この店には初めて来るが、なかなか雰囲気の良い店だ。

何より酒が旨い。

彼はそう酒好きではないが、ここにならまた来てもいいと感じた。

戸が軋み、ゆつくりと開いた。

外の湿った風が薄暗い店に忍び込んでくる。

誰か客が来たようだった。

カウンター席に腰掛ける男の背中の方で、なにやらざわめきが起こる。それも男の声ばかり。

彼がふと顔を見上げると、マスターもまた目を細めていた。靴音がざわめきを切り裂く。

この音は、おそらくハイヒールだろう。女か。

彼も周囲をざわめかせるような女に興味がないわけではないが、今日は女に用があつてここに来たわけではない。

女の靴音は彼の真後ろで止まった。

彼の隣の席にその女が腰を下ろす。

女は澄んだ声でマスターに言った。

「白乾児、^{バイカル}ある？」

マスターは渋い顔をした。

「ないならいいわよ。」

彼と同じの

「ジンのストレートだぞ。」

大丈夫なのか？」

女は彼の言葉を鼻で笑った。

声を聞いただけでわかる。

この女に会うのは……これで三度目だ。

黒い瞳と黒いショート・ヘア。

目尻はやや吊り上がっていて、挑発的な雰囲気を漂わせる。

アジア人に許された小さく引き締まった鼻。

淡い色の口紅で一層映える唇。

彼と同じ、レイヴンと呼ばれる傭兵の中の一人。

それが彼女、リンファである。

リンファ、という名は、今や闇の世界の傭兵達の間で知れ渡っている。

彼が気に入らないのは、なぜか噂の中でリンファの相棒にやたら腕の立つ黒いコートの男がいる、と囁かれていることである。

今日は、リンファはやけにめかし込んでいる。

普段ならハイヒールなど絶対に履きそうもないのだが。

リンファはカウンターに置かれたジンを、グラスの半分くらい一気に飲み下した。

横で彼が目を見張る。

彼も結構酒には強い方だが、どうやらこの女には敵わないようである。

「最近よく遇うわね、ヨシユア」

「遇いたくはないけどな。」

「……お前もか？」

ヨシユアと呼ばれた黒いコートの男はぶつきらぼうに問いかけた。

リンファもヨシユアも、繁栄する社会の闇を駆け抜ける傭兵、レイヴンである。

同じ所で行くわすということは、同じ仕事である可能性が高い。

「殺人鬼ボダ……こないいいネタ、独り占めにはさせないわ」

リンファの声は、隣にいるヨシユア以外には聞こえないくらい小さなものだった。

殺人鬼ボダ。

大破壊以後最大級の凶悪殺人犯。

二年ほど前に突然犯行を始め、犠牲者はざっと千人以上。

そのうち、追っ手のガードが半分を占める。

一日に一人か二人は殺していた計算になる。

その手口は残虐……ある者は首の骨を折られ、またある者は胸板を手刀で貫かれ、ボダに出会って生き延びているものは両手で数えるほどしかない。

十日ほど前に、ついにそのボダがガードによって逮捕された。

その当初はかなりのニュースになり、誇らしげに逮捕時の状況を語るガードの面々がテレビで連日放送されていたのは記憶に新しい。

その話題性たるや、ガードのスポンサーであるプログテック社の株が急騰したほどだ。

しかしつい三日前のことである。

ボダは拘置所を脱走。

立ちはだかるガード百二十六人を殺害し、ガード所有のACを強奪した。

慌てたガードは急遽ボダに賞金を懸けた。

賞金額は七万コーム、賞金首の生死も問わない、という異例の好条件に、普段は企業からの依頼を主にこなすレイヴンたちが飛びついた。

そんな中で、リンファとヨシユアはこのバーにボダが現れる、という噂を聞きつけたのである。

「僕と同じ情報を探り当てたか。流石だな。

……どうだ？

奴は手強い。

「ここは一つ、手を組まないか？」

「冗談。あんたと組んだりしたら賞金半分になっちゃうじゃない」

「実は、ガードのお偉いさんにコネがあつてね。

僕に限り賞金が十万コームでるのさ。

二人でする楽な仕事で報酬は五万コーム。

悪い話じゃないだろう？」

いくら二人組だろうが、凶悪な殺人鬼を相手にするのが楽な仕事かどうか……

リンファは迷った。

ジンの残り半分を一気に飲み干す。

熱い感覚が喉を通り抜けていった。

グラスをカウンターに置くと、リンファは隣でちびちび飲んでる男に視線を送った。

「いいわ、協力しましよ。

でも、後でそのお偉いさん紹介しなさいよ」

「憶えてたらな」

ヨシユアのグラスも空になった。

つづく。

03 一度は惚れた女だから

話もまとまったし、あとはボダがこの店に現れるのを待つだけだが……

本当にここに現れるのかもわからないし、もし来るにしても今日来るのかもわからないのだ。

と、リンファが考えた一瞬後に、後ろのテーブル席から濁声が聞こえてきた。

「ボダ!？」

二人の肩がぴくりと震えた。

全く同時に、肩越しに後ろに目を遣る。

そこでは無精髭を生やした中年の男が、席で酒を飲んでいた女にからんでいた。

さっきの声は女のものである。

「そうよ、俺は怖あゝい殺人鬼なのさ」

「やめてッ！ 放してよッ！」

ヨシユアの眉がひくついた。

その耳元でリンファが囁く。

「ねえ……」

もしかして、この店に現れる『ボダ』って……」

「……アレのことか……」

どうやら、これはガセネタだったようである。

リンファは溜息をついてカウンターに向き直った。

今日はただ、飲んで帰るだけになりそうだ。

その時、不意にヨシユアが立ち上がった。

「……ヨシユア?」

怪訝そうなりリンファの声を無視して、ヨシユアは今だテーブル席で女にからみ続ける
中年男に近づく。

その顔には冷たい笑みが浮かんでいる。

「よう」

男は鬱陶しそうにヨシユアを見上げた。

「ああ? なんだ、てめーは」

「あんた、ボダっていう名前なのか?」

男は一瞬唾然とした後で、下品に笑った。

半分笑い声を混ぜながら嘲るように答える。

「ああ、そうさ。」

「てめーも殺されたくなかったらとつとと失せな」

「なんだつて？ よく聞こえないな」

「あ？」

ゴッ！

鈍い音が響き、男のみぞおちにヨシユアの拳がめり込んだ。

そのままヨシユアは拳に力を込める。

次の瞬間、男の体は宙を舞った。

ヨシユアに投げ飛ばされた男は、背中から床に叩き付けられる。

男の苦しそうな呻きがリンファにも聞こえてきた。

「もう一度聞く。」

「……あんたがボダか？」

「ひっ……ち、違う！」

「俺じゃねえよ！」

ヨシユアは怯える男を放り棄てた。

男は床を這いずるようにして逃げ去っていった。

肩をすくめ、リンファは追加注文をした。

それにしてもヨシユアも物好きだ。

見ず知らずの女を助けるとは……

ひよつとして口説くつもりだろうか？

だとしたらさっきの偽ボダよりたちが悪い。

マスターがリンファのグラスにジンを注ぐ。

早速リンファはそれに口を付けた。

「大丈夫だったか、シエリー？」

ぶっ。

思わずリンファは酒を少し吹き出した。

——知り合いですか……

「余計なことしないで」

シエリー、と呼ばれた女は席を立ち、ヨシユアと正面から向かい合った。

リンファも酒を飲むふりをして様子をうかがう。

よく見るとかなりの美人だ。

リンファの相棒のエリイという女性も相当なものだが、シエリーにはそれとは異なる

魅力があった。

長く伸ばしたストレートヘアの金色の中で、口紅の鮮やかさが引き立つ。

滑らかなボディラインの見える革のパンツ、その上に羽織った革のジャケット。

少し吊り上がった目尻が整った表情にアクセントを添える。

どこか陰があるその姿には、むしろ女の方が憧れを抱きそうだった。

「一度は惚れた女だ。

放っておけるかよ」

「昔にこだわら過ぎるのはあなたの悪い癖ね。

私はもう、あなたとは何の関係もないわ」

シエリーはテーブルの上に代金を置くと、ヨシユアの横を通り抜けてバーから出ていった。

しばらくヨシユアはその背が消えたドアの方を眺めていたが、やがて溜息をつくとりンファの横の席に腰を落ち着けた。

「なに、昔の女？」

「うるせえよ」

リンファがからかうと、ヨシユアは小さく吐き捨てた。

「どうやら機嫌が悪いようである。

無理もないと言えば無理もないのだが。

「付き合えよ」

「え？」

「飲まずにいられるか」

ヨシユアはグラスを軽くカウンターに叩き付けた。

こんこんと小さな音が響き、それを聞きつけたマスターがすぐに酒を注ぐ。

酒に口を付けるヨシユアに向かって、リンファは意地悪く微笑んだ。

「おごつてくれる？」

「先に潰れた方がな」

*

「ほらっ……もう、しっかりしてよ！」

「う……ぐう……」

地下都市特有の湿った空気が肌にまとわりつく。

薄汚い裏通りを吹き抜ける風が、酔って火照った顔を撫でていった。

酔いつぶれて相手の肩を借りているのは……ヨシユアである。

彼も酒には相当強い方だが、リンファはそのレヴェルを遥かに越えていた。

ヨシユアはもうリンファに支えられながらでないとまともに立つことすらできないほど酔いが回っていた。

結局あの後、二人でジンのボトルを六本空けてしまったのである。

ヨシユアのようにするのが当然だが、リンファは全く平気そうだった。

「なんで……俺と同じペースで飲んでて平気なんだよ……お前は……」

「は、『俺』ね。」

いつもは『僕』なんて言って気取ってるくせに」

ヨシユアはリンファの肩にしがみついたままふらついた。

おかげでリンファもバランスを崩し、転びそうになる。

リンファは何とか足で踏ん張った。

こんな汚い通りに転んだら、せつかくのドレスが台無しになってしまう。

「……うっ」

「きやつ!？」

やだ、ちよつとこんな所で戻さないでよ!？」

ヨシユアが呻くと、リンファは大げさに叫ぶ。

戻しはしなかったが、気分が悪くなったヨシユアはその場にうずくまった。

その背をリンファがさする。

——悪寒。

バツ!

ヨシユアは突然リンファを突き飛ばし、自分も転がってその場を離れた。

次の瞬間、黒い影が二人の間を駆け抜けた!

銀色の煌めき……

刃物の僅かな反射光に、黒い糸が照らし出された。

リンファの髪の毛が数本斬り取られていた。

もう一瞬、ヨシユアの行動が遅ければ……

真つ二つにされていたのはリンファの首筋だっただろう。

ヨシユアは舌打ちを一つした。

「酔いが醒めちまった」

コートの内側から拳銃を取りだし、闇の中に潜む影に狙いを定める。

「顔を見せろよ、坊や」

リンファは慌てて立ち上がった。

ドレスの中に隠していた小型拳銃を構え、目をこらす。

影はゆつくりと動いた。

街灯の薄暗い光の中に入る。

影が光の帯によって拭い去られた。

立っていたのは一人の男だった。

まずやたらと高い身長が目を引き。二メートルは超えているだろう。

引き締まった獣のような筋肉。

金属でできた左腕。

その前腕から突きだした、湾曲した銀色の刃……

噂に聞いた通りの姿……

殺人鬼、ボダ。

どうやら、この辺りに潜んでいるという情報は間違っていないようである。

「あんたがボダね!」

ボダは何も答えず、代わりに口の端を吊り上げた。

氷のように冷たい笑みがリンファに身震いをさせた。

次の瞬間!

つづく。

04 ボダの脅威

ギインツ！

甲高い音が響く。

一瞬にしてリンファの眼前に近付いたボダが、彼女に刃を叩き付けた。

かろうじて拳銃で受け止めたが、銃は手を離れ、はじき飛ばされていた。

衝撃で尻餅を付いたリンファに、銀色の刃が迫る！

「動くなっ！」

叫びながらヨシユアは引き金を引いた。

弾丸はボダの刃に命中する。

軌道をそらされた刃はリンファの耳の横を通り過ぎた。

すかさずボダの腹にリンファの蹴りが入る。

ボダは派手に吹き飛んで地面に転がった。

しかし、すぐに立ち上がる。

蹴られたときに自分で後ろへ飛んだせいで、大したダメージにはならなかったのである。

それでも一瞬の隙は生まれる。

リンファとヨシユアは一瞬ずつずらして弾丸を撃ち込んだ。

同時よりこの方がかわしにくいのだが……

ボダの左腕が動く。

バチッ！

リンファは火花が飛び散るのを見た。

二つの弾丸は、腕の刃によって叩き落とされていた。

「……………ッ！」

「化け物め！」

憎まれ口を叩く暇もなく、ボダは再び走った。

呆然とするリンファの頭をつかみ、放り投げた。

壁に背中を打ち付け、呻くリンファ。

ボダはそのままの勢いで左腕を振るった。

目標はヨシユア。

——刃が来る！

ヨシユアの意識が殺人鬼の左腕に集中する。

しかし次の瞬間、ヨシユアに叩き付けられたのは右の拳だった。

予想外のフェイントに、銃を取り落として地面に倒れ込む。

そこを狙って今度こそ刃が煌めいた。

……手に触れる硬い物。

ガッ！

刃はヨシユアの顔の目の前で止まった。

彼の命をすんでのとところで救ったもの……

それは、地面に転がっていたワイヤーケーブルだった。

両手でワイヤーの端を持ち、全体重を乗せたボダの刃を受け止めたのである。

手のひらに激痛が走った。

ワイヤーを伝って血がしたたる。

重みに耐えきれず、手のひらの肉が裂け始めていた。

ヨシユアは冷たい笑みが張り付いたままのボダの顔を見上げた。

狂人は今まで何人も見てきたし、自分がそうでないという保証もない。

しかし、こいつは普通の狂人……というと妙だが、ともかくそういった連中とは一線を画していた。

勝負は次の一瞬で決まる。

ボダが次の一撃を繰り出すために刃を引くその一瞬が全てである。

ふっ、と手のひらの痛みがひいた。

ガッ！

刃は、こんどは地面に突き刺さった。

倒れたまま身を捻ったヨシユアの頭のすぐ側に。

流れるようにヨシユアは落とした拳銃を拾って撃った！

弾丸はボダの頬をかすめて上空へ突き抜けた。

勝った。

彼はそう思った。

ボダが刃を引き抜く。

体勢を崩したヨシユアに、次の攻撃をかわすのは無理である。

そして！

ごっ！

鈍い音が響く。

空から降ってきた植木鉢が、ボダの後頭部を直撃した。

さすがのボダもこれにはたまらず倒れ伏した。

ヨシユアが狙ったのはボダではない。

横の建物の壁から突き出した不安定な木板。

それを支える支柱を撃ち抜いたのである。

支えを失った板は傾き、その上に載っていた植木鉢も当然下に落ちる、というわけである。

ヨシユアはゆっくりと立ち上がった。

いくら殺人鬼ボダといえど、こんなものを食らっては生きてはいないだろう。

小さく息をつくとき、未だに呻いているリンファに歩み寄った。

「生きてるか？」

「まあね……」

「！ 後ろ！」

リンファは慌ててヨシユアの背後を指さした。

弾かれたように振り返ると、そこには笑みを浮かべて立ち上がったボダの姿。

そのとき、突然上空が明るくなった。

朝日……ではない。

地下都市の天井についた強力な電灯の光である。

地下都市には本来夜も昼もない。

しかしそれでは人間の時間感覚は麻痺してしまう。

そのため、地上の日照時間に合わせて人工の昼夜を作り出しているのだ。

まぶしさにヨシユアの目が眩んだ。

まぶしい、と思うよりも先に……

ボダは踵を返し、何処かへと消え去っていった。

*

「まけちゃいましたあゝ。あははははは」

『負けてないッ!』

珍しくリンファとヨシユアの声はぴったりと一致した。

青いビニールシートが被せられた山。

転がる何かのスクラップ。

手入れだけはしっかりしているAC用のパーツ。

テーブルが一つと、その周りに椅子代わりに置かれている木箱。

散らかるゴミ。先週の女性向け写真週刊誌。

それとテーブルの上のパソコン。

ここにあるのは言ってしまうばそれだけである。

薄暗く汚れた倉庫の一階……

リンファがACを格納するガレージとして使っている場所である。

ちなみに、二階は寝床になっている。

そこで木箱に腰掛けているのはリンファとヨシユア。

そしてもう一人、腰まである赤毛で大きな三つ編みを作っている女性。

小さな眼鏡を高い鼻にかけ、へろへろした笑顔を浮かべている。

リンファ専属メカニック、エリイ。

過去の経歴は何もわからないが、腕は本物である。

無然とした表情を浮かべながらも、ヨシユアは手のひらを差し出した。

エリイの手で消毒薬と包帯による処置がなされる。

一体どこで身につけたのか、エリイは機械の扱いのみならず医学の心得も多少あるようだった。

「それにしても、なんなのよあいつは……」

銃弾はたき落とすわ、植木鉢脳天に食らって平気な顔してるわ……」

「なんだ、知らないのか？」

ヨシユアは手を握ったり開いたりして調子確かめた。

さつきまでの痛みはほとんどない。処置が確かな証拠だった。

「ヴェスタル・ファナス社の人間兵器……」

ネストで公然と流れてる噂だ。

どうせ見てないんだろ」

「うっ……」

「えりいもみたよ〜！ あははははは」

レイヴン達が所属する『レイヴンズ・ネスト』は、コンピューターネットワーク上に存在する組織である。

特定のレイヴンを指名しない依頼の紹介や、ネットを介したAC用パーツの販売、アリーナ管理委員会と連携した『バトルアリーナ』運営など、その活動は多岐にわたる。

三年ほど前に一度、突然消滅したことがあったが、引退したレイヴン達によつてその後再結成されたようである。

ネストにあるレイヴン向け公開ノードでは、企業や依頼、レイヴンに関する様々な噂が飛び交っている。

そんな噂の中の一つに、賞金首ボダに関するものもある。

「ヴェスタル・ファナス社は知ってるか？」

「それくらいはね。」

「キンドル造ったところでしょ？」

キンドルとは、化学工業系企業のヴェスタル・フアナス社が製造した能力強化薬物、アダードラッグの一種である。

人間の反射神経を研ぎ澄ます効果があるが、あまりに慣習性・中毒性が強いために使用が禁じられ、ヴェスタル・フアナス社自身もより巨大な企業によって潰されてしまった。

「そのフアナス社が極秘に製造していた兵器……」

それがボダだ。

「お得意のアダードラッグや人工器官によって肉体の能力を極限まで高めた生体暗殺兵器ってやつだ」

「にねんまえにいく、けんきゆうじよをだつそうしちやつたです」

「なるほど……強いわけよね……」

リンファは足をテーブルの上で組んだ。

目を閉じて、なにやら深く考え込む。

その横顔にヨシユアが声をかけた。

「で、どうするんだ？」

目を開けてリンファは立ち上がった。

「決まってんじゃない」

*

地下都市アイザック・シテイの外れに、大きなプラントがある。

いくつかの工場施設とタンク、倉庫が建ち並び、人々がその間を忙しく駆け回っている。

シエリーはそのプラントの中を見回っていた。

「監督！」

背中にかけられた声に、彼女は振り返った。

黒いレザージャケットの上を長い金髪が流れる。

青い瞳が相手を見据えた。

「何？」

「シエリーさん、三番倉庫の商品は今日搬出でしたよね。」

まだ受取側から連絡がないんですが」

「おかしいわね。」

「わかった、連絡してみるわ」

「お願いします」

シエリーは男と別れて歩き出した。

その背を見つめながら、男は心の中で呟いた。

——大したものだ。あの若さで工場監督とは……

*

突然、外が暗くなった。

それに連動して室内の灯りが付く。

地下都市に疑似の夜がやってきたのである。

シエリーはノートパソコンの画面から目を離して、窓の外を見つめた。

事務室の奥にある工場監督室の隣は丁度三番倉庫になっている。

結局受取側はやってこなかった。

再三連絡したにもかかわらず、である。

おかげでこんな時間まで工場に残っていたのが無駄になってしまった。

これでいて、監督というのも辛い仕事である。

まあ、辛くない仕事なんていうものがあるのかどうかは疑問だが。

シエリーは溜息をついてパソコンを閉じた。バッグにパソコンを詰め込み、立ち上がる。

もう今日は帰ろう。

シエリーは部屋の灯りを消した。

そのままドアから外へでる。

外の冷たい空気が頬をなでる。

地下都市はその広大さから、あまり空調設備が行き届いていない。

空気は地上からファンで取り入れているのだが、汚染された空気を洗浄するのが精一杯で、気温や湿度の調節までは手が回らないのである。

従って、地下都市の気候は地上に左右される。

夜は寒くなってしまうのだ。

シエリーは徐に歩き出した。

側には彼女自慢の赤いスポーツカーが止めてある。

工場にマッチした車ではないが、趣味なのだから仕方がない。

工場の職員の中にもカーマニアは沢山いる。お互い様、である。

スポーツカーのドアを開く。

助手席にバッグを放り込んだ時、シエリーは妙な感覚を憶えた。

背筋を冷たい汗が流れていく。

悪寒、というやつである。

シエリーは辺りを見回した。

暗いプラント。動くものは何も無い。

その時、誰かが彼女の頭をつかんだ。

つづく。

05 戦うために創られたもの

リンファは注意深く辺りの様子をうかがった。

暗く、人通りもほとんどない道路。

昨日ボダに襲われた場所からそう遠くない地区である。

この辺りはどこぞの企業のプラントが立ち並ぶ工業地帯だ。

ボダは夜にしか殺人をしない。

これもネストでつかんだ情報である。

だからこそ、昨日は朝が訪れると同時に姿を消したのだ。

リンファとヨシユアがとった作戦……囮作戦である。

おそらくボダはそう遠くへ行っていない。

ならば夜にこの辺りをうろつけば、また襲ってくるだろう。

そこを返り討ちにする、というなんとも力押しの作戦である。

右手には通信機の端末が握られている。

エリイにもヨシユアにも、これ一つで連絡が取れる。

できれば助けを呼ぶ為には使いたくないものだ。

ピピッ。

通信機が小さな電子音を立てた。

端末のスイッチを押して口許に持つていく。

「誰？」

『僕だ。異状は？』

「まだ、ない」

聞こえてきたのはヨシユアの声だった。

そういえば、決めておいた定時連絡の時間を過ぎている。

リンファの方から連絡を取るはずだったが、すっかり忘れていた。

『今どこだ？』

「えーと……なんか、プラントの前よ。」

ブラックスマイス……ケミカルズとかいう企業の」

『ああ、あの辺りか。』

大体位置は……』

その時。

甲高い悲鳴が、闇を切り裂いた！

*

「!?」

通信機から聞こえてきたのは、間違はなく女の悲鳴。

声が遠いことからしてリンファではなさそうだが、どこかで聞いたことがあるような気がする。

ヨシユアは通信機に向かって叫んだ。

「どうしたんだ？」

『悲鳴よ！ 工場の中から聞こえた！』

探ってみるわ！』

「お、おい！ ちょっと待……」

通信は一方的に切られた。

溜息をつき、ヨシユアは端末をコートのポケットに放り込む。

「無鉄砲な奴だ……」

一人でボダをなんとかできるとでも思ってるのかよ」

ブラックスミス・ケミカルズのプラントは……

ヨシユアは西の方に目を遣った。

確か、あつちだ。

思うが速いか、ヨシユアは走り出していた。

*

カチャツ。

リンファは拳銃のスライドを引いた。

ムラクモ・ミレニウムという企業の名銃である。

小型で扱いやすく、リンファはこれが気に入っていた。

しかしその企業が三年前に滅びてしまったため、蓄えてある千発の弾丸を使い切った。もう弾が補充できないのが難点である。

プラントの中は暗く静まりかえっていた。

とりあえず近くにあるのは、そびえ立ついくつものタンク。

それぞれがパイプで繋がっている。

知識がないリンファには何の設備だか見当も付かないが、隠れるには最適な場所であ

ることは確かだ。

足音を殺し、リンファはゆっくりとタンクの一つに近付いた。

注意深く様子をうかがう。

ヒュッ！

銀色の煌めきが、リンファの目の前をかすめた。

もし一瞬早く後ろにのけ反っていなければ、リンファの頭は今頃ナイフに貫かれていただろう。

ナイフが地面に突き刺さった直後に、上から一人の男が落ちてきた。

空中で一回転し、器用に衝撃を緩和する。

まるで猫か何かのような身の軽さである。

言うまでもない。ボダである。

リンファは銃を彼の方に向けた。

「出たな、妖怪」

別にリンファの科白に笑ったわけではないだろうが、ボダはいつもの冷笑を浮かべ、走った。

一瞬にしてリンファの懐に飛び込む！

——そう何度も食らうかッ！

慌てることなくリンファはボックスステップし、握っていた左手を放した。空中に舞うもの……砂。

ざあっ！

これはかわしようがない。

ボダは正面からまともに砂を食らった。

当然、目の中にも砂が入り込む。

たまらずボダは目を閉じた。

その動きが一瞬止まる。

「そこだあっ！」

ダンッ！

リンファの銃が火を噴く！

銃弾はまっすぐにボダに迫り……

叩き落とされていた。

ボダの左手の義手からのびた銀色の刃によって。

——本当に目が見えてないのか!?

疑問に思う間もなく、ボダが再度迫る！

目は、確かに閉じられたままである。

刃がリンファの首を襲う！

ダンッ！

その時、一発の銃弾がボダの左腕を貫いた！

衝撃で刃の軌道が逸れ、リンファの鼻先をかすめる。

リンファは銃声がした方に目をやった。

煙を立ち上らせる拳銃を両手で構えた男……

ヨシユアが、鋭い目つきでこちらを睨んでいた。

「く……か……」

ボダが声をあげる。

リンファは慌てて距離を離し、隙なく銃を突きつけた。

穴の空いた自分の左腕をまじまじと見つめ、ボダはしばらく呆然としていた。

しかし次の瞬間、大きく口を開いた。

「くくくくくかかかかか、けひやはははははっ！」

笑っている――

リンファは背筋を冷たいものが流れるのを感じた。

この男は、痛みすらも感じてはいない。

まさに戦うためだけに生まれた兵器。

勝てるのだろうか。

こんな機械に。

次の瞬間、ボダは地を蹴った。

リンファの頭上を飛び越え、その先へを走り去る。

「あつ!?! 逃げた!」

「追うぞ!」

二人はボダの後ろ姿を追った。

奴がまっすぐに走る先にあるのは、一つの工場施設らしき建造物である。

壁のいたるところからパイプが飛び出し、他の建物と繋がっている。

ボダはその工場の入口から中に入ったようだった。

二人も工場までたどり着いた。

入口のドアの前で頷きあい、互いに拳銃を構える。

リンファがドアノブに手をかけ、開くと同時にヨシユアが中に飛び込んだ。

視線を銃口と一緒に左右に振る。

暗い工場内。

タンクやパイプが複雑に絡み合っている。

暗くて奥の方までは見渡せない。

ヨシユアは手招きをした。

リンファが銃を構えながら中へ入る。

途端に彼女の顔が歪んだ。

——鼻を衝く不快な刺激臭。

「何……この臭い？」

「アンモニアだな。」

……全く、スマートじゃないぜ。

こんな所に逃げ込むとは」

さすがのヨシユアも眉を歪めている。

一体何のプラントだか知らないが、面倒なことになったようである。

臭いを堪えて二人は工場内を見回した。

一体どこにボダが隠れているかわからない。

一瞬たりとも気は抜けない。

その時、リンファは闇の中に何かか蠢くのを見た……ような気がした。

ヨシユアに手招きで知らせ、遠くのある一点を指さす。

二人は目を凝らした。

しかし何も……

いや、確かに何かいる！

二人はすぐに走り出した。

やがて蠢くものがはつきり見える場所まで近付いた。

リンファが見たものは、ボダの背中と、地面に転がる一人の女だった。

ボダはその女の頭を鷲掴みにしている。

とても生きているようには見えなかった。

そしてヨシユアはもう一つのものを見た。

ボダに頭を掴まれ、力無く倒れている女。即ち……

「シエリー」

ヨシユアの口を、その名がついて出た。

「シエリー……って、まさかあの!?!」

ようやくリンファも思い出した。

確かに前にこの近くのバーで会った女である。

ボダは声に気付いて振り返った。

その口は大きく裂け、狂喜の笑みを浮かべている。

そして彼は、左腕を振るった。

ごとり。

重い音。

リンファは思わず目を反らした。

首を切り離されたシエリーの肉体が、支えるものを失って床に転がった。

つづく。

06 シェリー

「ねえ」

その声はか細く、まるでそよ風のようにだった。

しかし甘えの色はない。

風はヨシユアの体を優しく撫でていった。

「どうして？」

暖かいものがヨシユアに触れた。

また風が動いたのだ。

風の視線は彼に向けられているようだった。

気付いてはいたが、彼は目を合わせようとはしなかった。

代わりに腕を曲げて風を抱き寄せた。

「さあな」

風はその答えに満足したようだった。

一体何が聞きたかったのだろう。

彼にはわからなかった。

また風が動いた。

彼は風と自分の境界線がわからなくなってしまうた。

「どうしてだ」

彼がはじめて風を見つめた。

金色の糸の束が妖しく自分にからみついているのが見えた。

風は青い瞳を輝かせていた。

「どうして、ここにいる」

風は彼に酔った。

そして唇を触れ合わせた。

「風は、流れなければ生きていけないのよ」

*

憤怒

殺意

悲哀

絶望

懷古

同情

風。

ヨシユアの中に渦巻いていたのは、そのどれでもなかった。

その全てをあわせた、その全てを越えたもの。

それを形容する言葉を、彼は知らない。

「ボダアアアアアアアアアアアアッ!!」

ヨシユアは走った。

銃を連射しながらボダに迫っていく。

全ての銃弾を叩き落とし、ボダは突っ込んでくるヨシユアの頭をつかみ取った。

腕一本でヨシユアの体を持ち上げ、地面に叩き付ける。

く……はっ……

ヨシユアの口から呻き声が漏れた。

「お……マ……え……」

ヨシユアの眼前に顔を近づけ、ボダは喉からひねり出すように声を出した。

アクセントも発音もおかしい。

まるで質の悪い機械のような声だった。

「おま……エ……オもし……ろイ……ぞ」

両目を見開くヨシユアに向かって、銀色の刃が振り下ろされる！

……と、その時！

ゴバアツ！

轟音を立て、工場の壁に大穴が空いた！

砂煙を突き抜けて、一台のトラックが工場に突っ込んでくる。

それを見たボダはすぐさま立ち上がり、闇の中へと消えていった。

慌てて追いかけようとするリンファの背中に声がかかる。

「りんふあちやくん！」

振り返るとそこには、トラックの運転席から上半身をのぞかせたエリイの姿があった。

そういえば、トラックの荷台にのっている、ブルーシートを被せられたものは……

「おまたせ！」

*

「戦闘モード起動」

愛機『ペンユウ』のコックピットの中で、リンファはコンピューターの声を聞いていた。

自ら機体を覆うシートを剥がし、トラックの荷台から立ち上がる。

「エリイ、聞こえる?」

『きつこえまゝす。』

りんふあちゃん、ここくさいね〜』

「我慢して。」

それよりヨシユアは大丈夫?」

『うん、だいじよぶだよ。』

わーむうつどにのるって』

「わかった。エリイは早く逃げて」

『りよ〜かい!』

リンファはレーダーに目をやった。

すぐ近くにある光点はエリイが乗ってきたトラック。

遠くから近付いてくるのはヨシユアのACワームウッドだろう。

そして、リーダーに新たな点が表示された。

「AC確認。」

アイザックシテイ・ガード所有、『トラッカーカードッグ』

「やっぱこの近くに隠してたのか……」

リーダーによると、どうやらボダは隣の倉庫にいるようである。

エリイから受け取った地図と照合する。

第三番製品貯蔵庫……

何が貯蔵されているのかまでは書いていないが、暴れ回るスペースは存分にありそうだった。

エリイはもうトラックで外へ逃げ出している。

結構逃げ足は速い。

リンファもペンユウを操作し、その穴から工場の外へ出た。

三番倉庫は少し北にある。

リーダーの反応に注意しながらペンユウは倉庫に忍び寄った。

おそらく製品の搬出にMTか何かを使っているのだろう。

ACが余裕で通り抜けられるくらいの大きな扉がついている。

鍵が閉まっているだろうが、今は緊急事態である。

きっと、ヨシユアがコネがあるというガードのお偉いさんが弁償してくれるだろう。
ガガガッ！

リンファはトリガーを引いた。

ペンユウのマシンガンが火を噴き、扉を粉々にうち砕いた。

工場の中を覗き込む。

レーダーの光点と同じ位置に、銀色の巨人が仁王立ちしていた。

ガード所有の威圧用AC『トラッカードッグ』……塗装は変わっているが、間違いな
い。

バズーカと追加弾倉のみ、などという意味不明な武装をしたACは他に聞いたこと
がない。

ペンユウのマシンガンが再び火を噴いた。

高速の銃弾が雨あられとトラッカードッグに迫る！

しかしトラッカードッグはバズーカを地面に向かって放ち、その爆風で弾丸を吹き飛
ばした。

どうやらボダは、兵器の巧い使い方を知っているようである。

砂煙を煙幕代わりにして、ペンユウは工場の中に飛び込んだ。

レーダーの光点はこちらとの距離を一定に保って移動している。

中距離……バズーカが最も効果を發揮する間合いである。

しかし、今は砂煙のおかげで視界が悪い。

こういう状況ではマシンガンの方が有利！

レーザーから相手の位置を算出し、火器制御機関にデータを入力する。

あまり正確ではないが、だいたいこの位置にロックオンすることはできる。

ガガガガガッ！

マシンガンの銃弾が煙を貫く！

しかし……手応えはない。

そのかわりに、レーザーの光点が大きく右に動いた。

回避行動をとった証拠である。

その軌道を頼りに敵位置をより正確に算出する。

これを繰り返せば、いずれは相手に当たる！

エリート特製FCS補助ソフト、『ペンゴくん三号』である。

なかなか便利な代物だが、名前がいまいちなところが難点だ。

リンファが再度トリガーを引こうとした、その時！

レーザーの警告音が鳴った。

トラッカードッグが猛スピードで近付いてくる！

収まりかけた砂煙を切り裂き、銀色の巨人が姿を現す。

そのままトラッカードッグは、ペンユウに体当たりを仕掛けた！

かわしきれずにはじき飛ばされるペンユウ。

ブースターで体勢を立て直すも、その目の前にはバズーカの弾丸が迫っていた。

——直撃!?

リンファは覚悟して目を閉じた。

ドグオアアアッ！

ペンユウの眼前の空中で、突然バズーカ弾が爆発を起こした。

衝撃がペンユウを震わせるが、直撃ほどではない。

『気を付けろ、手強いぞ』

「ヨシユアー！」

青い蜘蛛……ヨシユアの四足AC『ワームウツド』が、壊れた扉から滑り込んできた。

どうやらさつきは、ヨシユアが敵弾を撃ち落としてくれたようである。

ペンユウが体勢を立て直している間に、ワームウツドはトラッカードッグに攻撃を仕

掛けた。

肩に装備しているレーザーキャノンを乱射しながら相手を追いつめていく。

しかしトラッカードッグは、避けるどころか真っ正面から弾幕に突っ込んでくる！

身を低くしてキャノンの弾丸をかわし、そのままワームウッドに迫る！

バズーカの銃口は真つ直ぐにワームウッドのコアに向けられている！

バズーカの弾丸はワームウッドの足下に着弾した。

慌てて回避するも、爆風からは逃れられない。

安定性のないワームウッドは大きく吹き飛ばされた。

そこを狙ってさらにトラッカードッグのバズーカが火を噴く！

——させるかっ！

ペンユウはすでに体勢を立て直している。

マシンガンを構え、右から左へと掃射する！

ガガガガガッ！

マシンガンは狙い変わらずバズーカ弾を撃ち落とす。

同時に後ろのトラッカードッグにも弾丸が迫る。

トラッカードッグは空中に飛び上がりそれをかわすと、自分の肩に手を遣った。

左手でつかんだものは……バズーカの追加弾倉。

規格品通りなら、あの中には十発分のバズーカ砲弾が入っているはずだ。

必要に応じて弾丸を補給できるわけだが……

……ということ、まさか!?

リンファの予感通り、トラツカードッグは追加弾倉をもぎ取り、ペンユウに向かって投げつけた！

足下に転がる幾つものバズーカ弾……

そして、トラツカードッグはそれを狙ってバズーカ砲を撃つ！

「やばっ……!?!」

慌ててリンファは操縦桿をなぎ倒した。

しかし……間に合わない！

ゴガアアアアアアンツ！

つづく。

07 緊急警報／レッド・アラート

爆発の衝撃が、コックピットを襲う。

機体が激しく揺れ、いくつものレッドランプが一度に点灯した。

警告音はさつきから鳴りっぱなしである。

頭が痛い。

揺れのおかげで打ってしまったようだ。

額に当てた手に赤黒い血がこびりついた。

ヨシユアは舌打ちをした。

損害を確認する。

動かないことはないが、機動性能は30%以下にまで低下しているだろう。

さすがはバズーカ砲。威力は半端なものではない。

その時、不意に通信が入った。

『ヨシユア、大丈夫!』

リンファである。

かなり大丈夫ではないが、無駄に心配させてもしょうがない。

それに……リンファをかばったのはこっちなのだ。

ペンユウにバズーカ砲が命中する直前、ワームウツドが飛び出したのである。

砲弾はワームウツドの胴体に食い込み、床に散らばった追加弾倉には誘爆しなかった。

「喋っている暇があつたら自分の心配でもするんだな」

そう言いつつもその声には余裕がない。

それもそのはず、操縦桿を倒しても、出力がほとんど上がらなかったのである。

ヨシユアは外部モニターを見遣った。

トラツカードッグがこちらに迫ってきている。

止めを刺すつもりだろうか。

その時、突然視界の外から赤いACが飛び込んできた。

マシンガンの掃射でトラツカードッグを追い払う。

言うまでもなくペンユウである。

『ヨシユア、どうせもうまともに動けないんでしょ？』

今のうちに撤退しなさいよ』

「冗談じゃない。

それより……」

ヨシユアはモニター越しに倉庫の中を見回した。

立ち並ぶ何かのタンク。

そこにうがたれた内容物を示す文字。

「時間、稼げるか？」

できるだけ奴を動き回らせて、だ」

『簡単に言ってくれるよね』

文句を言いながらも、ペンユウはトラツカードッグを追い始めた。

マシンガンで牽制し、わざとそれをかわさせている。

さすがに巧い。

ヨシユアはまだ生きている動力を全てレーザーキャノンに回した。

慎重に標準を合わせる。

あとはタイミングを計るだけ、である。

彼の額から汗が流れた。

汗は血と混ざり合い、髪をべつとりと顔に張り付けた。

ヨシユアはトリガーに指をかけた。

*

ガガガガッ！

マシシガンを放つ。

ヨシユアは時間を稼げと言ったが、別にこのまま倒してしまっても良いわけである。もちろんリンファは手加減などせず本気で狙っているのだが……当たらない。

トラツカードッグの動きには予想以上にキレがある。

下手に手加減などしようものならこっちが危ない。

実際、さつきからいくつものバズーカ砲弾がペンユウの装甲をかすめている。

リンファはさらにトリガーを引いた。

トラツカードッグは、弾丸をかわしてこちらに突っ込んでくる！

「馬鹿の一つ覚えっ！」

リンファは叫んだ。

トラツカードッグのこの動きは予想済み。

レーザーブレードの出力を最大まで上げ、突っ込んでくる敵に斬りつける！

しかし、直前でトラツカードッグは方向を変えた。

ブレードの届かないペニュウの右手に回り込み、そして……

左の拳を、そのままペニュウに叩き付けた！

ごっ！

コックピットが揺れる。

まさか、ブレードも装備していない素手で殴りかかってくるとは……

ダメージは大したことはないが、一瞬機体が揺らいた。

その隙に、もちろんトラツカードッグはバズーカを構える！

「目には目をっ！」

ペニュウは左腕を振り回し、トラツカードッグのバズーカの銃身を弾いた。

ことわざの使い方は間違っているが、効果はある。

弾丸はペニュウから大きくはずれ、床で爆風を撒き散らした。

ブースターを噴かし、ペニュウは飛びすぎる。

バズーカをかわしにくい近距離での戦いは不利である。

——まだ!?!

リンファはワームウッドに目を遣った。

レーザーキャノンを構えたまま、ぴくりとも動こうとはしない。

そうこうしている間にもトラツカードッグは再び近付いてきた。

バックジャンプしながらマシンガンを掃射し、距離をとる。

その時、トラップカードツグが天井に向かってバズーカを発射した。

瓦礫と砂埃で視界が封じられる！

リンファはすぐさまリーダーを確認した。

しかし、リーダーに映るのは妙なノイズばかり。

「!?」

リンファは天井の、バズーカで撃ち抜かれた辺りを見上げた。

へし折れた鉄骨が巨大な怪物のような影を作り出す。

電気配線のコードは絶縁体がとけて、そこから青白いスパークを飛び散らせていた。

……スパーク？

まさか!?

気付いたときにはもう遅い。

ボダは、電磁波によってリーダーを攪乱し、同時に視界を煙で遮って、そこに襲いか

かるつもりなのである。

条件は向こうも同じのはずだが、あの妖怪野郎ならこちらの駆動音で位置を特定す

る、なんていう技が可能かもしれない。

リンファの予感は的中した。

砂煙を突き抜けて、銀色のトラッカードッグが突如姿を現した。

位置は……ペンユウの真後ろ！

どうやらペンユウの後ろにあったタンクに上り、そこから飛び降りてきたようである。

とても回避が間に合う状況ではない！

……と、その時。

『伏せろっ！』

ヨシユアの声が、コックピットの中に響き渡った。

*

がっ！

ワームウツドのレーザーキャノンは、狙い違わずそれをぶち抜いた。

即ち……トラッカードッグが乗っていたタンクである。

タンクは大きく裂け、そこから内容物が吹き出してきた。

無色透明な液体。

見ただけでは水と区別がつかないかもしれない。

その液体は、トラッカードッグを押し流した。

ペンユウは、タンクの真下にいたせいで液体はほとんどかからなかった。

しかし、背筋に悪寒を感じたリンファは慌ててその場を離れた。

タンクの外壁には、大きくこう記されていた。

《Nitric Acid》——《硝酸》、と。

*

ギアの駆動音が響く。

ペンユウは片膝をついた。

コアにあるコックピットの扉が開き、そこからワイヤーが垂らされる。

リンファはワイヤーについた足場をつたってペンユウから降りた。

先にワームウッドを降りて溶解していくトラッカードッグを見つめていたヨシユアの隣に並ぶ。

ヨシユアは珍しく煙草を吸っていた。

紫煙が立ち上り、リンファはむせた。

それに気付いたのか、ヨシユアは煙草を吐き捨てた。

「終わったわね」

ヨシユアは何も答えなかった。

ただじつと、硝酸の海に飲み込まれていく銀色の機体を見据えていた。瞳は研ぎ澄まされた刃のように輝いていた。

リンファも彼と一緒にその光景を眺めていた。

もし死体が残らなかつたら、ガードは賞金を支払わないかもしれない。そんなのは嫌だな、と漠然と考えていた。

その時、酸の海の中で何かが煌めいたような気がした。

最初は銀色の装甲板かとも思ったが、それとも多少違つて見えた。

ずぶりっ。

鈍い音がここまで届いた。

間違いない。

溶け去っていくACの外装を突き破つて、誰かの左腕が姿を見せた。リンファはあんな腕を持つ男は一人しか知らない。

刃が付いた義手。

ばじゅっ！

跳ね飛ばされた装甲板が、酸に触れて音を立てた。

ACの残骸から這い出てきた男、ボダはその装甲板を足場にして酸の海を飛び越えた。

「生きてる……」

ふとヨシユアを見ると、彼の額には脂汗が浮かんでいた。

ひゅー、ひゅー。

ボダの荒い息づかいが聞こえてきた。

肩を上下させ、生きているのすら辛そうだった。

リンファは息を飲んだ。

ボダの顔面は、酸のせいであちこちが焼けただれていた。

全身の皮膚が黄色く変色し、いくつもの水ぶくれが生まれては弾け、また生まれてを繰り返している。

「野郎」

ヨシユアが唸った。

血に濡れた手をコートの中に入れる。

拳銃を取り出すと、すぐさまボダに向けた。

ボダはきびすを返すと走り出した。

向かう先は倉庫の入口。

逃げるつもりだろうか。

リンファがそう思ったときには、ヨシユアはすでに走り出していた。

つづく。

08 風よ、もう一度

「ボダー！」

ヨシユアは叫んだ。

冷たい闇の中、殺人鬼の動きが止まる。

そいつは、ゆっくりと振り返った。

工場の外の空気は思ったよりも冷たかった。

しかしヨシユアの身震いは、寒さのせいではなかっただろう。

そのまま彼は右手の拳銃を持ち上げた。

銃身がまっすぐボダの方を向く。

黒い小さな鉄のかたまりが、彼の手の内で死を振りまく時を待っていた。

対峙する二人を、リンファは遠くで見つめていた。

何か言葉をかけなければ。

頭ではそう思っているのに、言葉は喉でただの吐息となって流れてしまう。

リンファは漠然と感じた。

自分は今、やっとヨシユアのかけらを見た、と。
時間が流れた。

永劫にも等しい時間の流れだった。

やがて、風が吹いた。

風はヨシユアの左の頬を撫でていった。

ボダが走る。

真つ直ぐ、ヨシユアに向かって。

ヨシユアは引き金を引いた。

しかし殺人鬼ボダにとっては、銃弾をかわすことなど造作もないことだった。

*

「風？」

彼は風の言葉を繰り返した。

何を言っているのか、彼にはわからなかった。

自分と今、身を重ねているこの風は詩人だ。

でも自分は違う。そう思った。

「あなたは水」

風は彼の胸に指をはわせた。

お互いがお互いの暖かさを感じあっていた。

それはきつと、肌の暖かさではなかっただろう。

「水は鴉の足を捕らえる。

でもやがて、鴉は水で喉を潤す」

彼は黙って風の言葉を聞いていた。

何のことだかわからなかった。

「ある時、水は滝となって流れ始めるわ」

彼は笑った。

それが風の気に障ったようだった。

風は頬を膨らませた。

似合わない表情だ。

でも、それでもいい。

風は、似合わない表情を他人に見せることは決してないのだから。

「まるで占い師だな」

彼は言った。

昨日二人で出かけたとき、暗い裏道で出会った老婆がこういう雰囲気のことを口走っていたのを思い出した。

老婆が言うといわくがあるように思える言葉だが、風はそれには少し若すぎる。そして美しすぎた。

「わたしはそんなに偉くないわ。

だって、風なんだから」

風の言葉は、彼の胸の中に忍び込んできた。

でも、これはどうでもいいことなのだと思った。

風にとってはどうでもいいこと。

彼にとつては大事なこと。だから彼は、聞いていないふりをした。

今はそれでいいだろう。

今は、この温もりだけで十分だ。

*

重い音が響いた。

彼は自分についた傷に手を遣った。

べとべとした赤い物が手にこびりついた。

信じられない。

それだけが、彼の心の中にあつた。

ボダは倒れた。

胸板を、銃弾に貫かれて。

それをヨシユアは黙つて見下ろしていた。

左手に持ったもう一丁の銃は、彼の左側に回り込んだボダを確実に捕らえていた。

わかりきっていたのだ。

一発目をかわされることは。

わかっている、あえて撃った。

そして一瞬遅れて左側に銃弾を放つたのだ。

——あ——

ボダのうなりが聞こえた。

わからないのだ。

なぜ、左手に回り込むことがわかつたのか。

ボダは息を吐いた。

そして、ゆっくりと目を閉じた。

もう二度と動くことはできない。

生まれて初めてだった。こんなに、怖いのは。

何も言わず、ただヨシユアはその場に突っ立っていた。

しばらく地下都市の天井を見上げていて、そしてふとあることを思いついた。

なぜ、風が吹いたのだ。

地の底にあるこの都市に、風が吹くわけがないではないか。

さつき吹き抜けた風。

自分の左の頬を撫でていった風。

ボダが回り込む方向を、教えてくれた風。

あれはなんだったのだろう。

その答えが見えた時、ヨシユアは地面に膝をついた。

拳銃が手から滑り落ちる。

コンクリートの床とぶつかり合って、それが乾いた音を立てた。

「シエリー」

もう一度、風の名を呼んでみた。

何も起こらなかった。

風は吹かなかった。

眩きは冷たい夜の空気に吸い込まれて、こだますることもなかった。

リンファは遠くですっとそれを見つめていた。

何もできない。それはわかっている。

これはヨシユアだけの問題なのだ。

リンファには何もできない……わからない。

悲しみを背負ってやることも、怒りを分かち合うことも。

一つだけあるとすれば、それはきつとこの姿を目に焼き付けることだけだろう。

リンファは初めて、男の涙を美しいと思った。

その姿をじつと見つめて、いつまでも憶えておこうと思った。

自分が死んだら、誰かがあんな風に泣くんだろうか。

そう考えたとき、リンファは今まで封印していたことを認めざるを得なかった。

——子供だな、あたしって。

THE
END

第4話 デイープ・クリア・ラップ

01 忍び寄る恐怖

黒い空。

あんなどろどろした色をしているのは、雨雲のせいだけではないだろう。

永い時をかけて汚染された自然環境は、五十余年前の大戦争『大破壊』によって止めを刺された。

極度に汚染された大気。

多くの有害な化学物質は酸性雨に混じって降り注ぐ。

少々浴びる程度ならどうということはないが、決して飲料水や各種用水に使えるレヴェルではない。

そんな地上を、三つの影が駆け抜けていく。

赤い巨人、青い蜘蛛、そして一台の大型トラック。

彼らは雨から逃げるように歩みを進めていた。

赤い巨人——二足AC『ペンユウ』のコックピットの中で、一人の女性が舌打ちをした。

瞳と髪の色は漆黒。やや幼さが残るが、アジア系の美女である。

リンファ、といえば地下都市アイザックシティでは名の知れたレイヴンだ。

舌打ちをした理由はただ一つ。

こんなに雨に濡れてしまうと、ACが金属疲労をおこしてしまうのである。

帰ったらメンテナンスをしなければならぬ。

『あつめあつめやつめやつめそうこうがあ〜』

通信機を通じて脳天気な歌が流れてきた。

いまトラックを運転している、リンファの専属メカニック、エリイの声だ。

『とろけてどろどろかなしいなあ〜』

「別に溶けはしないですよ」

全く、今日についていない。

希少鉱物の鉋山を制圧する依頼を受けて、知り合いのレイヴンを誘って出撃したはいものの、いきなり雨が降り始めたのである。

このご時世、雨もばかにならない。

長時間うたれ続けると、金属疲労どころか体にも良くない。

と、いうわけで日をあらためることにしたのである。

『笑い事じゃないかもな』

今度の通信は青い蜘蛛、四足AC『ワームウッド』からのものだった。

昔とある事件で知り合った、リンファの同業者ヨシユアである。

『このままじゃ帰り着く前に溶けちまう』

「脅かさないでよ……」

『とけますとけます。あはははは』

リンファは溜息をつく、この周辺の地形図をモニターに表示させた。

どこか雨宿りできる場所を探さないと、本当に洒落にならないかもしれない。

そのとき、リンファの視界の隅におぼろげながら黒い影が映った。

「……ヨシユア、北北西……距離約2キロ」

『なんだ？』

ペンユウの足が止まった。

黒い影が見えた方向に向き直り、その映像を拡大する。

「なんだろ、あれ」

『大きいな……工場施設か？』

「……マップに載ってないな』

確かに拡大映像では巨大な直方体のように見える。

雨のせいではつきりとは見えないが。

いずれにせよ、しばらく雨露をふせぐことはできそうだった。

*

「ほお……これはこれは」

ワームウッドから降りるなり、ヨシユアは感嘆の声をあげた。

彼の言うとおり、この建造物は巨大な工場のようなだった。

中はACが楽に活動できるほど広い造りになっている。

薄暗く、端まで見通すこともできない。

この広大な部屋でも、まだこの施設の一割に満たないだろう。

入ってくる時に破壊したシャッターから雨粒が入り込んでくる。

三人は機体を奥までしまいこんだ。

「随分広いわね」

「大破壊以前の施設だな」

ヨシユアは近くで埃をかぶっていた作業用MTを手でさすった。

埃が落ちて機種とシリアルナンバーが顔を見せる。

思った通り、見たことも聞いたこともない型だ。

「りんふあちやくん、おへやがありますよお〜」

遠くでエリーの声でした。

振り返ると、部屋の隅のドアの前で彼女が手を振っていた。

どうやら、作業員の休憩所か事務室のようだ。

「たんけんたんけん。

あはははは」

「ちよつと、エリー」

リンファの制止も聞かず、エリーはドアを開けて中に飛び込んだ。

ここがどんな施設なのか、危険なのか安全なのかすらもはつきりとはわからないというのに。

仕方なくリンファは彼女の後を追っていった。

その背を見送ってから、ヨシユアは床に目を遣る。

油を吸った埃が黒々と床を覆っている。

靴底にべとべとと張り付く感触が気色悪い。

その分だけ足形が残り、自分たちが歩いた道がはつきりと見て取れた。

ヨシユアは数歩前に出た。

その足下には一つの足形。

靴の大きさからしてリンファのものだろうが……問題なのはその隣にある奇妙な帯だった。

一メートル強の幅で、埃が帯状に拭い去られていた。

そして、数メートル離れて同じ帯がもう一本平行に走っている。

——これは、まさか。

ヨシユアは眉間にしわを寄せた。

神経が獣のように研ぎ澄まされていく。

ヨシユアはコートの中に手を差し入れ、拳銃を取り出した。

*

「エリイ？」

ドアの中は、やはり事務室のような場所になっていた。

デスクが二つと、その上に備え付けられた古くさい型のコンピューター。

簡素で古いがとりあえず必要な物はそろっている。

「エリイ、どっか？」

リンファはもう一度相棒の名を呼んだ。

返事は……ない。

辺りを見回してもどこにも人の姿はない。

ここにはいないのだろうか。

奥にもう一つドアがある。

どうやらそこからさらに奥に行ったようである。

迷わずリンファはドアをくぐった。

彼女が出ていったのを確認すると、エリイは隠れ場所から這い出た。

別に特別な隠れかたをしていたわけではない。

リンファが入ってきたドアのすぐ側で身をかがめていただけである。

それでも開いたドアの影になって、完璧に隠れおおせたようだ。

「ごめんね、リンファ」

エリイは落ち着いた調子で呟くと、デスクのコンピュータを起動した。

スイッチを押すとすぐさまハードディスクがキリキリと音を立てる。

古いが一応動くようである。

しかも電源も生きている。

指で眼鏡を直してからエリイはキーボードを叩き始めた。

その目はいつものエリイのものとは違う。

普段垂れ下がっている目尻はやや吊り上がり、瞳には冷たい光が浮かんでいる。

滅多に見せるものではないが、これがエリイの科学者としての顔である。

まるで精神分裂症のように、突然真剣になることがあるのだ。

コンピューターはエリイの操作に素早く応えていく。

思った通り古いのはみかけだけで中身は最新のものである。

エリイの表情が一層険しくなった。

ピッ。

小さな電子音。

画面にはパスワードの入力を求める文章が映し出された。

字数の指定すらないが、エリイの指は軽やかに踊る。

>Tesla Dudley

Your access was refused.

>Murakumo Millenium

Your access was refused.

エリイの手が止まった。

もう一つ、パスワードの心当たりはある。

しかしエリイはそれを入力するのをためらわざるを得なかった。

覚悟を決め、キーを叩く。

>Ellen Gabriela

Checking Password... OK, your access was
accepted.

エリイは背筋が凍るような思いだった。

タチの悪い学者ジョークだ。

しかも笑えない。

ともかくエリイは表示された一覧表に目を通した。

専門用語の羅列……学生時代に習ったが、半分忘れかけていた単語が脳裏をよぎる。

知識というものは不思議なもので、それだけを思い出すことはできないらしい。

必ずそれを身につけたときの思い出が一緒に蘇ってくる。

エリイはリストの中にある項目を見つけた。

それは彼女の思い出にはない項目だった。

ファイルを開く。

画面いっぱいに表示されるデータ。

文章とグラフ、そして実写映像やイメージCGが混ざり合い、論文形式になっている。びっしり書き込まれた文章を読む気はおきなかった。

適当に読み飛ばし、ページをめくる。

最後のページを見たとき、エリイは凍り付いた。

一枚の設計図……ナノメートル単位で刻まれた、極めて精密な図である。

——逃げなければ。

エリイは漠然と思った。

しかし次の瞬間、別のことにも気が付いた。

「逃げ場なんて、何処にあるの——」

「そう、逃げ場はない」

エリイは弾かれたよう振り返った。

一体いつの間に近付いてきたのか、彼女の背後には一つの人影があった。

「リ……！」

がっ！

人影は、エリイの口を左手で塞ぐと、もう片方の手で彼女の首を掴み、デスクに押しつけた。

エリイは淡い恐怖を感じながら、人影を凝視した。

少し彫りの深い北歐風の顔立ち。

黒髪と青い瞳が奇妙な美しさをも感じさせる。

男とも女ともつかない、まるで両性具有のような美しさだった。

「利用させてもらうぞ。お前の体をな」

そいつは、口の端を吊り上げて笑みを浮かべた。

まるで輝く氷のような、冷たい笑みだった。

つづく。

02 エアハルト

ぎいっ……

軋みながらドアが開いていく。

ヨシユアはその隙間から向こう側の様子をうかがった。

最初の部屋の隅に見つけたドアとシャッター……

おそらくは物資を搬入するための通路だろう。

鍵はかかかっていなかった。

向こうはやや狭い部屋になっているようだった。

それでもかなりの広さなのだが。

ヨシユアはドアを蹴り開けると、銃を構えながら中に飛び込んだ。

隙なく辺りを見回す。

動くものはない。

とりあえず安心していいようである。

この部屋は各部屋のジャンクションといったところか。

ターンテーブルが床の中央にあり、壁にはこの施設の案内図がかかっている。積み重ねられたいくつものコンテナや箱。

上を見上げると、壁には鉄製の足場が備え付けられていた。

ヨシユアは案内図に歩み寄り、手でその埃を払った。

最初に入った部屋の大きさを考えると……広い。

想像以上に広大な施設だ。

しかも、部屋に付けられた名前を見る限りでは、工場と言うよりは研究施設らしい。

それもA C……いや、大破壊当時にA Cは存在しなかったはずだから、M Tの開発研究を行う施設だろう。

——悪寒。

ヨシユアの神経が突然ざわめいた。

ふり返りざまに銃を構える。

ガタツ……

遠くに積まれていた箱が音を立てて崩れた。

その影から這い出す一つの影……猫である。

一匹の黒猫が、両目を不気味に光らせてヨシユアをにらみ付けていた。

「脅かすな……」

ヨシユアは銃を降ろした。

猫の気配を殺気と取り違えるとは、まだまだ自分も詰めが甘い。

ヨシユアは溜息をついて――

――猫!?

ダンッ!

頭上から降り注いだ銃弾が、コンクリートの床に食い込む。

ほんの一瞬前までヨシユアが立っていた位置である。

気付くのが少しでも遅れていれば、彼の命はなかっただろう。

ヨシユアは銃を頭上に向けた。

壁に付いた通路、その上で何かが蠢いた。

ゆっくりと立ち上がる。

人影だった。

ヨシユアは眉をひそめた。

男……だろうか。

妙に中性的な人間が通路からこちらを見下ろしていた。

黒い髪、青い瞳、彫りの深い顔立ち。

そいつは、畏怖にも近い感情をヨシユアに植え付けた。

「流石だなア……殺つたと思つたが」

声は少し低い。

男のようである。

ヨシユアは目を細めた。

いるはずがないのだ。

汚染された地上に、猫など。

もしいるとすれば、それは誰かが連れてきた、ということに他ならない。

油断させるための囿としては文句なしだろう。

さっきの黒猫が箱を蹴つて上の足場に飛び乗った。

爪とさびた鉄が触れ合つてがちがちと音を立てる。

やがて猫は、男の足元まで来て体をすり寄せた。

男の目が猫に向いた。

まるで感情がないかのような冷たい瞳である。

「ミーア」

男は猫を抱き上げた。

やはりこの男の飼い猫だったようである。

普通猫は抱かれるのを嫌がるものだが、こいつはよほど馴れているのか、暴れる素振りも見せない。

男は猫の顔を自分の目の位置まで持ち上げた。

「邪魔だ」

ブンッ！

突然、男が猫を投げ捨てた！

下にいるヨシユアに向かって。

予想外のことに驚き、拳銃を握ったヨシユアの手が一瞬止まる。

ダンッ！

男の拳銃が火を噴き、弾丸が猫を貫いた！

そのまま貫通した弾丸は、間一髪かわしたヨシユアの足下に突き刺さった。

男が拳銃を連射する。

ヨシユアは弾幕から逃れるようにしてコンテナの影に飛び込んだ。

「なんて奴だ、自分の猫を……」

思わず、ヨシユアの口からそんな言葉が吹き出した。

猫を撃ち抜いた瞬間見えた男の表情……笑っていた。

冷笑や微笑などではない。

本当に楽しそうな、玩具を得た子供のような笑いだった。今まで動物を飼っている者は何人も見てきた。

それぞれいろんな動物をいろんな方法で飼っていたが……自分の猫を嬉々として撃ち殺すような奴は初めてである。

「そーいやア、まだ名乗ってなかつたな」

コンテナの影になって見えないが、おそらく男は笑っているのだろう。さつきと同じ、狂喜に満ちた表情で。

「俺の名は……」

*

「エリイ、どいっ？」

リンファの声は、部屋の中にこだました。

反響音が減衰しながら響き渡る。

しかし、他には返事も微かな物音もない。

溜息をつきながらリンファは部屋を見回した。

多分この部屋は作業や運搬に使う重機のガレージだろう。

時代遅れのMTやらクレーンらしきものが、等しく埃をかぶっている。それも、油を吸い込んだ黒い埃である。

臭いもする。

はやくエリイを見つけ、こんな所からは退散したかった。

それにしても、大分奥まで来たはずだが、全く端にたどり着いた気配がない。

一体どれほど広い施設なのだろうか。

スペースが限られている地下都市ではとても考えられない造りである。

おまけに機材や重機が点在していて、かくれんぼには最適な空間かもしれない。きつと、見つける前に鬼が飽きてしまうだろうが……今の自分のように。

「エリイ？ ……つたく、どこまで行っちゃったのよ……」

愚痴りながらもリンファはMTの影を一つ一つ見て回った。

しかし、散々歩き回って見つけたのはドア一つだけである。

リンファは渋い顔をしてドアノブに手をかけた。

「よう、嬢ちゃん。

お暇かな？」

声は突然、後ろからかかった。

慌てて服の内側から拳銃を取りだし、背後に突きつける。

そこでは見たこともない人間がにやにやと笑いながらこつちを見つめていた。

妙にミスマッチな黒い髪と青い瞳……顔の彫りが深いのは北欧系の血だろうか。

アジア人のリンファにとってはヨーロッパ系の人間の顔はあまり区別が付かないが、ヨシユアとは少し違うタイプだということぐらいはわかる。

しかも、ヨシユアより断然美形である——性別がわからないほどに。

内心の動揺を抑え、リンファは軽口を返した。

「あいにくと、今取り込み中なの」

「そうかい、そりゃ残念」

そいつは肩をすくめてみせた。

声や態度からすると、どうやら男らしい。

「なら仕方ない。」

無理矢理付き合わせるしかないな。

……地獄の入口までのドライブにな」

リンファはもう少して吹き出すところだった。

全く、文芸センスのない奴である。

もつとましな文句がなかったものか。

などと考えている暇は、ないようである。

男が走る！

手には軍用ナイフ……

男はそれを、リンファの眉間めがけて突きだした。

寸前でかわしたものの、自慢の黒髪が数本切り落とされる。

リンファは青ざめた。

普通、ナイフで攻撃するときには腰に重心をおいて構え、最も大きな……つまりは相手の胴体を狙って突き刺すのがセオリーである。

そうでなければ、たとえ当たっても服を貫くことさえできないのである。

しかしこの男は、大きくナイフを振り回していながら、狙いが正確で力も乗っている。いや、そもそも相手に自分から襲いかかるのに、拳銃ではなくナイフを使ってくるという時点で、そいつが銃よりもナイフを使った方が強い、ということの証明なのである。

決して侮ってはかかれない。

男の攻撃をかわしざまに、リンファは肘打ちを繰り出した。

狙いは男の顎。

しかし男は避けもせず、左手を持ち上げた。

もう一本のナイフが、顎の前で煌めいた。

慌ててリンファは腕を止めた。

このまま攻撃していたら、あの刃が腕に食い込んでいただろう。仕方なくリンファは体勢を崩しながら男の胴を蹴った。

直接のダメージはないだろうが、反動で地面を転がり、距離を離す。リンファは顔をしかめた。

服が埃だらけである。

「いい腕してるじゃない……おかげで埃まみれよ」

「かわいい顔が台無しだな」

この期に及んで、まだ男はおどけて見せた。

どうも嫌いなタイプである。

気を取り直してリンファは低い声で言った。

「あんた、何者？」

「あんただって、聞いたことくらいあるだろ。」

俺の名は……」

男は口の端を吊り上げ、にやつと笑った。

「エアハルト」

う
う
う
う
う。

03 「ランカーACを確認しました」

ヨシユアはその場に凍り付いた。

「どオした？ 青ざめてンのか？」

「どうやら、俺の名を知っていたようだな」

コンテナ越しに男……エアハルトの声が聞こえる。

奴はこっちの驚きや恐怖を楽しんでいるようだった。

『多相のエアハルト』

知らないわけがない。

エアースト、ハスラーワン、ナポレオン……そして、ワームウッド。

その強さ故に伝説と化したレイヴンは多くいる。

しかし伝説であるが故に、またその寿命も短い。

高名なレイヴンは名をあげようとするレイヴン達の標的となり、やがては戦いに疲れ去っていくか、命を落とすかするのである。

そんな中で、今なお生きた伝説となっているレイヴンがいる。

その名は……『多相のエアハルト』。

未だかつて任務に失敗したことは一度たりともなく、過去のアーリーナ戦でも無敗。

マスターアーリーナに昇格——つまりは事実上の殿堂入りを果たす日も近い、と噂されている。

エアハルトの一番の特徴は、いくつものACを使い分けること。

現れるごとに機体が異なり、それと同時に性格も全く変わってしまうらしい。

まるで多重人格症か何かのように。

「エアハルト……一体僕たちに何の用だ」

「決まってるだろ。依頼だ。」

お前らを殺せ、つてな」

ヨシユアは心の中で舌打ちした。

さつきまで、彼の頭の中には三つの選択肢があった。

一つは、なんとか逃げ出すこと。

二つ目は交渉によって平和的に解決すること。

しかし、今のエアハルトの言葉でこの二つは消えた。

そう簡単に逃げさせてくれるわけがないし、交渉など問題外だ。

残る選択肢はただ一つ。

目の前にいるこの男をぶちのめすことである。

とにかく、リンファやエリイと合流しなければ話にならない。

ヨシユアは手近に転がっていた箱をひつつかんだ。

それをコンテナの右側に放り投げ、自分は逆方向に飛び出す。

どの程度役に立つかは疑問だが、とりあえずの目くらましである。

ドアに向かって一直線に走りながら、エアハルトがいるとおぼしき方向に銃を乱射する。

弾丸は鉄の柵に当たって弾かれ、エアハルトまでは届かず床に転がった。

エアハルトが身を伏せている間に、ヨシユアはドアを開けた。

半分転がるようにしてその向こうに駆け込む。

やたらとだだっ広い部屋……最初に三人が入ってきた部屋である。

*

「エアハルト?」

リンファは首を傾げた。

聞いたことがあるような、ないような。

普通レイヴンなら知っていて当然の名前だが、あまり他人のことに興味がないリンファは、たとえ聞いたことがあっても忘れてしまっていた。

「知らないのか……結構俺も有名だと思ってたんだがな。

まあ、いいさ。

あんた達を殺せつて依頼を受けた。

悪いが死んでもらうぜ」

げ。

リンファは顔をしかめた。

てつきり侵入者を排除しようとしているのだとばかり思っていたが……

どうやら自分たちを最初から狙っていたようである。

厄介なことになった。

とりあえずヨシユアやエリイと合流しないと危険だ。

……と、その時、リンファの脳裏にある考えが浮かんだ。

「つてことは……まさか！」

それを確かめる暇もなく、エアハルトが走る。

間合いを詰められると不利だ。

とりあえずリンファは後ろのドアを開け、その中に飛び込んだ。ここも重機の倉庫らしい。

とにかく全力疾走し、近くのMTの影に身を隠す。

奴が追って部屋に入ってきたところを狙撃するつもりだったがちやつ。

金属音がする。

そして微かな靴音。

テンポは遅い。

どうやら向こうも、警戒しながら探しているようである。

リンファは気配のする方にゆっくりと忍び寄り、銃を構えた。

おそらく、このMTの向こうに奴はいる。

——瞬間！

気配は、背後にいきなり現れた！

ふり返っている暇もない！

リンファは横に飛んで、背中の方から迫る銃弾をなんとかかわしきった。

慌てて別のMTの影に隠れ、神経を研ぎ澄ます。

気配は今や、完全に消え去っていた。

今さらながら、相手の腕前は凄まじい。

気合いを入れてかからないと、冗談ではなく命が危ない。

そういえばさっきの攻撃は銃だった。

ナイフの他にもちやんと銃も持っていたらしい。

備えはいいが、逆に何故最初から使わなかったのか、という疑問も頭をかすめた。

注意深くリンファは辺りを見回す。

すぐ近くに、ここに入ってきたときのドアがある。

あそこから道なりに戻ればペンユウを置いてある部屋まで戻れるはずである……

道に迷いさえしなければ。

そのドアにたどり着くにはMTの影から出なければならぬ。

少々……いや、かなり危険だ。

しかし、やるしかない！

リンファはMTの横から目だけを覗かせ、死角の様子を窺った。

とりあえず、動くものは何も見えない。

——やっぱ、怖いなあ……

さすがのリンファも一瞬怖じ気づくが、次の瞬間には表情を引き締めた。

そう。死など、とうの昔に覚悟したことなのだ。

覚悟を決め、リンファは駆けだした。

ドアに向かって一直線に走る。

ダンッ！

銃声が響く。

弾は僅かにリンファをかすめて飛び去った。

冷や冷やししながら爆音の響いた方に腕を伸ばし、適当に銃を乱射する。

遠目に、慌ててMTの影に隠れる男の姿が見えた。

瞳の色まではわからないが、あの黒髪や服装は間違いなくエアハルトである。

ともかく、相手が隠れているうちに逃げてしまいうにかぎる。

リンファはドアを開け、その中に飛び込んだ。

*

〔戦闘モード、起動〕

コンピュータの音がコックピットに響く。

長年ともに戦ってきた愛機『ワームウッド』の操縦席に身を埋め、ヨシユアは淡々と起動作業をこなしていった。

エアハルトもレイヴンだ。

ならば、おそらくACで出撃してくる。

本番はここから、である。

その時、彼の耳に聞き慣れた声が飛び込んできた。

『ヨシユア、聞こえる?』

リンファからの通信である。

ヨシユアはモニター越しに、ペンユウの方を見遣った。

赤い巨人の足下で、端末を手にして喋っている女が一人。

「早く起動しろ。非常事態だ」

『こつちもよ。』

エアハルトとかいう変な奴に襲われちゃって』

「……! お前もか?」

……まあいい、とりあえずペンユウを動かせ。

話はその後だ」

リンファは手に持っている端末のボタンを押した。

すぐさま、コックピットのドアが開き、ワイヤーでできた梯子が垂らされる。

彼女が持っている端末は、ACに乗るときやACのコンピューターを外部から起動す

るときに使うものである。

レイヴンの必需品の一つだ。

やがて、リンファから改めて通信が入った。

『お前も、つてどういうこと？』

「僕も襲われた。」

追ってこないと思ったら、そっちに行つてたんだな」

『ふうん……』

ところでさ、あいつ何者なわけ？

確かエアハルトとか名乗つてたけど』

一瞬、ヨシユアは絶句した。

まさかエアハルトの名を知らないようなレイヴンがいたとは。

もぐりにもほどがある。

「四つの人格を持つ一流レイヴンだ。

気を付けろ、現れるたびに違う機体を使うらしいから対策の立てようもない」

簡単に説明してからヨシユアはふと思ひ立った。

そういえば、エリイがない。

見つけられなかったのだろうか。

「ところでエリイは？」

『……見つかんなかった。』

もしかしたら、エアハルトに……』

どうやらこれは……一刻の猶予もないようである。

——と、その時。

ゴバアアッ！

部屋の天井が音を立てて崩れ去った！

そこから真っ白なACがブースターを噴かせながら降りてくる。

随分と、派手な登場である。

「敵機確認。」

ランカーAC 『アブソルート』

その声が、戦いの引き金となった。

つづく。

04 アブソルート

「つかまつちやいましたあ。

えへへ〜」

この工場の一番奥に、小さな部屋がある。

他と同じく壁や床はコンクリートで固められているが、比較的掃除は行き届き、最新型のパソコンがデスクに載っている。

工場の全機能を司る制御室である。

その部屋の中で、後ろ手に手錠をかけられたまま、エリイはへらへらと笑みを浮かべた。

床に頬ずりをしてその冷たい感触を楽しむ。

いつのまにか、彼女はいつもの『へなへなえりい』に戻っていた。

エアハルトはその様子を見下ろしながら、半分呆れたような表情を浮かべていた。

本物の多重人格、というのはこいつのようなのを言うのだろうか。

エアハルトの指がパソコンのキーボードを叩く。

画面に表示されるいくつかの光点。

工場のいたるところに取り付けられた監視装置の情報は、全てこのコンピューターに集められている。

侵入者の位置など、手に取るようにわかる。

「あの連中はあんたの相棒だそうだな」

エアハルトはエリイに目を遣った。

背筋の力だけで上体を起こし、エリイは真つ直ぐな視線をエアハルトに向ける。

「そーでえす。

りんふあちゃんはえりいのあいぼうでえす」

とろとろとした口調で、エリイは応えた。

エアハルトが頭を掻く。

どうも、こういうタイプは苦手だ。

会話のペースに、逆の意味でついていけない。

「なら、人質としては十分だな」

「勘違いしないで」

突然、エリイの口調と目つきが変わった。

「どうやら、また『真面目エリイ』になってしまったようである。

「リンファはともかく、ヨシユアはわたしを人質にとつたくらいで怖じ気づくような奴じゃないわ」

「リンファと……ヨシユア、か」

エアハルトはデスクの上にある端末を手に取った。

レイヴンが使う、ACに乗るためのものである。

口振りからすると、どうやら二人の名前も知らなかったようだ。

端末を持つのと逆の手でエリイの腕をひつつかみ、強引に立ち上がらせた。

「来い。」

人質になるかどうか、試してみようじゃないか」

*

「『アブソルート』!?!」

リンファはコンピューターの報告をオウムのように繰り返した。

モニターには、ペンユウ、ワームウッドとにらみ合う一機のACが映っている。

全身が真っ白な、逆間接タイプのACである。

右手にはレーザーライフル、そして大きなミサイルを両肩に背負っている。慌ててリンファはネストの登録情報に照会した。

『アブソルート』……確かに、エアハルトのACとして登録されている。『へへ……見つけたぜえ……』

通信……アブソルートからのものである。

「エリイはどこ?!」

『エリイ?』

ああ、あの女か。

俺を殺したらその後でゆっくりと探しな……

先にてめえらが死んでなければなッ!』

アブソルートが地を蹴った。

ブースターの補助を受けて空中に舞い上がる。

そのまま、地上へとレーザーライフルを乱射する。

ワームウッドとペンユウは正反対の方向へ地を滑った。

二機の間を光の槍が貫く。

ばらばらになれば、少なくとも二人同時に攻撃される心配はない。

「手加減はしないわよっ!」

ペンユウのマシンガンが弾丸を撒き散らす。

アブソルトはブースターを止め、自由落下を始めた。

その頭上を空しく弾丸が通り過ぎる。

がいんっ！

アブソルトが着地すると同時に、甲高い音がけたたましく鳴り響いた。

衝撃で、一瞬だけアブソルトの動きが止まった。

そこを狙って、すかさずワームウッドのレーザーキャノンが火を噴いた。

高エネルギーの光が束となってアブソルトに迫る。

タイムリング、狙い、共に完璧。避けられるような状況ではない！

ドグオアアアアッ！

キャノンの弾はアブソルトに着弾し、爆発を起こした。

風に吹き飛ばされ、その白い巨体が空中に舞い上がる。

……真つ直ぐペンユウのいる方向へ！

まさか、吹き飛ばされる方向を計算に入れていたというのか。

確かに、二対一という不利な条件を打破するためにはとにかく一体を片づける必要が

あるのだが……自ら体当たりを仕掛けるとは。

『リンファ、避けろ！』

——言われるまでもないっ！

ヨシユアの悲痛な叫びがリンファの耳に届いた。

彼も予想外だったのだろう。

完璧のはずの自分の攻撃が、逆にリンファを危険に追い込むことになるなど。

ペンユウのブースターが限界出力で炎を吹き出す。

しかし、いかに高出力ブースターといえども完全には避けきれず、ペンユウの左肩にアブソルートの背中がぶち当たった。

衝撃ではじき飛ばされ、床に転がるペンユウ。

一方のアブソルートは、あらかじめ準備していたらしく、ブースターを噴かして足から着地した。

ペンユウのコックピットの中でレッドランプが光った。

操縦桿を起こしてペンユウを立ち上がらせながら、被害状況を確認する。

当たったのが左肩で良かった。

もし右だったら、マシンガンを取り落としていたかもしれない。

ペンユウが上体を起こし、ついで膝立ちになった。

いまだ立ち上がっていないその際に、アブソルートの肩からミサイルが飛び出した。

合計六発の同時発射！

ガガガガッ！

すかさずワームウッドのガトリングガンがその全てを撃ち落とす。軽い爆風が埃を巻き上げる。

再び、ガトリングガンの弾丸が空を切り裂く。

埃を吹き飛ばしながらアブソルトに迫る！

アブソルトは慌ててブースターを噴かした。

しかし、避けきれない！

高速の弾丸がアブソルトの白い装甲板を削り、その衝撃で動きが一瞬とまる。

『終わりだっ！』

その隙を見逃すヨシユアではなかった。

肩のレーザーキャノンを構え、アブソルトに向かって連射する！

ゴガアアッ！

今度こそ——光の弾は、アブソルトの胸板をを狙い違わず撃ち抜いていた。

*

「リンファ、無事か？」

ワームウツドをペンユウのそばに寄せ、ヨシユアは通信を開いた。

それに応えるように、ペンユウがゆっくりと立ち上がる。

どうやらそれほどダメージはないようである。

『なんとかね……』

それより、エリイを探そう』

ペンユウがマシンガンを放ち、部屋の奥にあるシャッターを破壊した。

そのまま全身をきしませながら歩き始める。

……その時。

「敵機確認」

——!?

瞬間、ヨシユアとリンファは操縦桿をなぎ倒した。

二機が逃げた軌道を追って、数発の銃弾が飛来する。

二機は地を滑りながら180度方向転換し、適当に銃弾をばらまいた。

しかし、当然ながら手応えはない。

「ランカーAC 『アブソルート』」

「……なんだとっ!?!」

『どっどっ!?!』

さつき確かに……』

ヨシユアはモニターを確認した。

まず目に付いたのは、床に転がる白い逆間接ACの残骸。

そして——その側で、一体のACが仁王立ちしていた。

赤い中量二足AC。

手にライフルを持ち、肩には二連装のレーザーキャノンを背負っている。

一見してペンユウと似たタイプである。

呆然とするヨシユアの耳に、再度コンピューターの声が届いた。

「敵機急速接近中。

機数二。

ランカーAC『アブソルート』、ランカーAC『アブソルート』

あと二機!?

ヨシユアは後部のモニターに目を移した。

さつきペンユウが破壊した扉から入り込んでくる黒い戦車タイプのACが一機。

そして再び前に目を遣ると、そこでは外に通じる穴をくぐる青い四足ACの姿があった。

『アブソルートが……全部で四機……?』

「なるほどな……そういうことかよ」

ヨシユアの額には、冷や汗が玉となって輝いていた。

おかしいと思っていたのだ。

妙に同時性が強かったエアハルトの行動。

不可解にも二対一で戦いを挑んだ無謀さ。

「エアハルトは四つの人格を持つのではなく……元々四人だったんだ」

つづく。

05 開戦

電波を介してヨシユアの言葉を聞き、赤い二足ACに乗っているエアハルトは笑みを浮かべた。

彼の名はキールⅡエアハルト。

四つ子のエアハルト兄弟の長兄である。

その愛機の名はアブソルート・アインズ。

機動性よりも装甲と攻撃力を重視したタイプの中量二足ACだ。

戦車タイプのAC、アブソルート・フィールに乗っているのは、末弟のガイル。

そして、四脚ACのアブソルート・ドウライのパイロットは長女のシエリルである。

キールは通信を開き、敵に向かって言葉を投げかけた。

「やってくれるじゃねえか。」

まさか、アルベルトが殺されるとはな」

口ではそう言っているも、キールは次男アルベルトに対して同情など全くしていない

かった。

兄弟として共に生きてきた。

それは確かだった。

しかし、弟のサイコシ加減についていけなかったのもまた確かである。

キールはモニターの端に映っているアルベルトの愛機、アブソルート・ツヴァイに目をやった。

誰にも見せることはないが、その胸の内には黒々とした感情がわだかまっていた。

彼の愛猫ミリアを殺したのは、彼の実の弟なのだ。

「だが、それもここまではだ。

シエリル！」

キールが名を呼ぶと、四足ACアブソルート・ドウライが滑るように進み出た。

武器腕のレーザーキャノン、肩に背負った散弾砲とロケット砲……

なかなかの重武装である。

その武器腕からワイヤーが垂れ下がっている。

そしてワイヤーで縛られ、ぶら下がっているのは……

*

「エリイ！」

ペンユウのコックピットの中で、思わずリンファは叫び声をあげていた。へにやへにやした笑い、三つ編みにした赤毛。

間違いない、リンファ専属メカニックのエリイである。

一体何を考えているのか、自分で体をゆすり、振り子のような動きを楽しんでいる。

「エリイ、大丈夫!？」

ペンユウの外部スピーカーからリンファの声が響き渡る。

エリイは楽しそうに弾んだ声で応えた。

「つかまつちやつたあ。あははははは」

リンファはこめかみを押さえた。

「一体どこをどうすれば、捕まっつてぶら下げられた状態のまま笑っていられるのだろうか。」

『リンファとヨシユア、だったな』

声は電波に乗って届いた。

発信者は青い四足A.C、アブソルート・ドウライである。

声は低く澄んでいる。しかし、これは明らかに、女が声を押し殺しているときの低さ

だ。

『私たちが受けた依頼は、お前ら二人を始末することだ。』

大人しく機体を棄てて投降すれば、この女は殺さずにおいてやろう』

回りくどい言い方をしているが、要するにこういうことだ。

——逆らえば、人質を殺す。

使い古されたやり方ではあるが、リンファの動きを止めるには十分だった。

三年も相棒として世間を渡り歩いてきたエリイを見捨てられるほど、リンファは割り切れてはいなかった。

しかし、ヨシユアは違った。

『笑わせるな』

ヨシユアの声だ。公開周波数で会話しているので、実際の通信相手ではないリンファにも声は伝わってくる。

『そいつがどうなるうが、僕には何の関係もないな』

「ヨシユア！ エリイを見捨てる気なの!？」

『自分の命を危険にさらしてまで助ける義理はない』

「……っ！」

リンファは奥歯を噛みしめた。

そう、今まで忘れていたが、本質的にヨシユアは敵なのである。

ただ利害関係が一致するから協力しているだけだ。

もしかしたら、忘れたかったのかもしれない。

闇に覆われた世界の中で、人を疑うということ。

見遣ると、エリイも動きを止めていた。

遠くてよく見えないが、やはりリンファと同じように呆然としているのだろう。

『僕に——俺に喧嘩を売ったことを』

ヨシユアの声が、再び響き渡った。

『後悔させてやるっ！』

ばぎんっ！

その瞬間、エリイを縛り付けていたワイヤーが、音を立てて千切れ飛んだ！

エリイはアブソルート・ドウライの足に飛び移り、そのまま床まで滑り降りる。

『リンファちゃんっ！』

エリイの手には、通信用の端末とワイヤーを切るためのカッターが握られていた。

敵に捕まっている状態でどうやって手に入れたのだろうか。

何かと隠し技の多い人である。

そして、彼女の瞳はいつものエリイのものではなかった。

三年間一緒に暮らしてきたリンファでさえ片手で数えるほどしか見たことのない、科
学者としての表情である。

『遠慮はいらないわ！』

大暴れしちやいなさい！』

「……了解ッ！」

ようやくリンファは理解した。

ヨシユアはこれ wait していたのだ。

エリイがワイヤーを切ろうとしていることに気付いて時間稼ぎをしていたのである。

リンファは一瞬でもヨシユアに失望してしまったことを後悔した。

エリイさえ解放されればもう遠慮はいらない。

リンファは思いっきり操縦桿をなぎ倒した。

ブースターから炎が吹き出し、ペンユウの巨体が地を滑る！

『チイツ！』

回線を開きつばなしのアブソルート・ドウライから声が舞い込んでくる。

それに呼応するように、アブソルート三機が動き出した。

ドウライはペンユウの正面に滑り込み、散弾砲を構えた。

同時に車両型のフィールがペンユウの背後にライフルの狙いをさだめ、二足のアイ

ズはジャンプでペンユウの側面に回り込む。

その時、ワームウッドがペンユウの背後を守るように立ちはだかった。

『登録された機体名は……『アブソルート・アインズ』及び『アブソルート・フィール』だ』

背後のワームウッドの中で不敵な笑みを浮かべているヨシユアの姿が、リンファの脳裏にありありと浮かんだ。

『二人まとめて相手になるぜ』

*

エリイは半分転がるようにしてドウライの足下から逃げ出した。

ドウライが追ってくる様子はない。

それよりは目の前のペンユウに備える方がよほど大事だ。

走りながら、通信機と樹脂製のカタターを服のポケットにしまい込んだ。

隙を見てエアハルトの長女シエリルからすり盗ったものである。

肩越しにエリイはふり返った。

リンファの駆るペンユウがドウライと対峙している。

さらに遠くではワームウッドがAC二機と同時に戦闘を繰り広げている。

——負けないで……絶対に。

心の底で、エリイは祈っていた。

今負けてはならない。

奴に対抗できるのは、彼女の知る限りあの二人しかいないのだ。

エリイはここに来て最初に入ったドアに向かった。

ここにはあるはずだ。この場を切り抜けるための何かが。

つづく。

06 ワームウツドの流星

『ヨシユア……』

確か、伝説のレイヴン『ワームウツド』の息子だったな』

ワームウツドのコックピットに声が届いた。

二足ACのアブソルート・アインズからである。

ヨシユアは眉をひそめた。

どうやら相当こちらの背後関係を調べているようだ。

いや、他の連中が妙に計画性がない攻めをしていたところを見ると……

おそらく、このアインズに乗っている男がエアハルトのリーダーなのだろう。

そして、情報はほとんどこの男一人が握っているのだ。

『だがな、俺達二人を同時に相手するってのは、ちょっと自信過剰なんじゃねえのか？』

「うるさい………蠅だ」

ヨシユアは手元のスイッチを押した。

モニターに映る敵機の姿が拡大される。

アインズは中量二足AC。

武装は右手のアサルトライフルと両肩に背負ったレーザーキャノン。

新型の、カッター状のレーザー光を発射するタイプだ。

結構資金は豊富らしい。

対してフィールは戦車型の超重量AC。

頭の、真つ直ぐ天空へ向けて立った角が特徴的だ。

腕の武装はレーザータイプのスナイパーライフル。

肩には強力なグレネードランチャーと、変わり種の機雷投下機である。

内蔵ブースターで空中を浮遊し、周囲に物体が近付くと爆発する。

凶悪な兵器である。

ヨシユアは口の端を吊り上げると、操縦桿をねじ倒した。

ワームウッドがそれに呼応して四本の足を曲げ、地を蹴った。

巨体がフィールの頭上に舞い上がる。

それと同時に武器腕のガトリングガンが銃弾をばらまいた。

フィールは……避けない！

左腕を盾代わりにして弾丸を受け止め、かろうじてコアへの致命傷を防いだ。

ヨシユアは小さく舌打ちをした。

確かに機動性のない機体で弾速の速い兵器から身を守るには最適な方法なのだが、だからといって迷うことなく片腕を棄てるというのも並大抵な根性ではできないことである。

おまけに、アインズがレーザーキャノンの狙いを定めている。

空中のワームウッドへ向かって、光の刃が飛来する！

ヨシユアは操縦桿から手を放した。

すぐさまブースターから炎が消える。

推力を失ったワームウッドは、高速で落下を始めた。

その頭上を光の刃が通り過ぎた。

再びヨシユアは操縦桿を握り、手前に倒した。

ワームウッドがブースターを噴かし、アブソルート達と距離を取る。

そのとき、モニターの端に映ったフィールの姿が目についた。

肩のグレネードランチャーを構えている！

ヨシユアは慌ててワームウッドを地上に降ろし、レーザーキャノンの標準を合わせた。

ドシューッ！

低い音がして、グレネード弾が発射された！

あんなものの直撃を受けたらひとたまりもない！

ヨシユアの額に汗が浮かぶ。

正確に狙いをさだめ、トリガーを引いた。

ヴァシユツ！

レーザーキヤノンの光の弾丸が、真っ直ぐにグレネード弾に向かって放たれた。

狙い変わらず弾丸が衝突し、誘爆して炎を撒き散らす！

ヨシユアは内心胸をなで下ろした。

グレネードの弾丸はそれほど大きくない。

本当に撃ち落とせるかどうか不安だったのだ。

こいつは、早くかたをつけないと危ないようである。

ワームウッドはアインズのライフル乱射をかわしながら、フィールへと近付いていく。

フィールの機雷投下機が稼働した。

ワームウッドの進行方向に、数個の機雷がばらまかれた。

器用な操縦でそのすきまをすり抜け、フィールに正面から突っ込んでいく。

後ろから追ってきているアインズの攻撃が止まった。

この位置で攻撃して、もし機雷が誘爆でもしようものなら自分まで巻き込まれかねない。

ここまではヨシユアの計画通り。

ここからが勝負である。

目の前のファイルが、今度は腕のスナイパーライフルを構えた。

これも新型の、凶悪な破壊力を持った兵器である。

食らうわけにはいかない。

ヨシユアは真上に標準を合わせると、レーザーキャノンを発射した。

天井が音を立てて崩れ、瓦礫がワームウツドとファイルの間に降り注ぐ。

ファイルのライフル弾は瓦礫に飲み込まれ、ワームウツドは全くの無傷である。

おまけに視界も塞がれ、相手はこっちの姿が見えていないはず。

ヨシユアは操縦桿を捻った。

ワームウツドは180度方向転換し、さっき来た方向へ砂煙を切り裂いて戻って行く。

「飛んで火に入る……」

視界に動くものを認め、ヨシユアは叫んだ。

計画通り、機雷の隙間をようやくぐり抜けたアブソルート・アインズの姿がそこに

はあった。

一瞬アインズの動きが止まる。

まさか、追いかけていた相手が自分の方に戻ってくるなどとは思ってもよらなかったの
だろう。

「夏の虫つてやつだッ！」

ヨシユアは戸惑うアインズに銃弾を浴びせる……こともなく、その脇を高速で通り抜
けた。

そのままもう一度機雷の網をすりぬけ、最初の位置に舞い戻る。

そして、その背後に迫る一発のグレネード弾……ファイルがレーダーだけを頼りに発
射したものである。

弾丸はアインズの横を通り抜け、大爆発を起こした！

——機雷の網の中心で！

爆風は次々と機雷を誘爆させ、その炎がアインズを巻き込む！

高温の渦がアインズの装甲を融かしていく。

かろうじて機体は人の形を留めているが、おそらく中に乗っている人間は……

おまけにワームウッドはそのスピードを生かして逃げていたせいで、全く被害を受け
ていない。

「まずは一人！」

ヨシユアは叫びながら、爆風で舞い上がる埃の中へワームウッドを突っ込ませた。レーダーを頼りにガトリングガンを掃射する。

手応えはない。

巧く回避されたか、あるいは狙いが甘かったのか。

ともかく相手を視界に捕らえなければ当たるものも当たらない。

埃を突っ切つて、ワームウッドの青いボディが光の元へ飛び出した。

すぐ側には、グレネードを構えたフィールの姿。

視界にワームウッドが現れるのをじっと待っていたのだろうか、甘い！

グレネードは再装填に時間がかかる。

その隙にワームウッドのキャノンが火を噴いた。狙いはフィールの足下の地面！

ゴウアアアアアアツツ！

閃光を伴つて爆風が巻き起こる。

圧倒的圧力の風はフィールの足下をすくつた。

キヤタピラが少しだけ、床を離れて浮き上がる。

そこへ再びレーザーキャノンが炸裂した！

キヤタピラの腹を突き抜けて、光の弾丸はコアの内部を焼き尽くした。

フィールが轟音を立てて床に崩れ落ちた。

もはやパイロットは生きてはいまい。

「大口を叩いたのはそつちだったな」

ヨシユアはそう言うのと、満足げに唇の端を吊り上げた。

*

彼は、必死に走っていた。

誰も知らない地下道の奥深く。

隠しておいたものがそこにある。

依頼主に借りたものである。

他の兄弟達は、そのことは全く知らない。

なぜ依頼主が彼を選んだのか——理由はわからなかったが、それこそどうでもいいことだった。

アレは素晴らしい。

アレを見てみると……そしてアレを使うことを想像すると、背筋を言いようのない快感が突き抜けていった。

今までこんな感覚はなかった。

初めて女と身を重ねた時も、初めて人を殺したときも、これほどまでに恍惚とはしなかった。

やがて地下道は終点に達した。

そこに一枚のドアが付いている。

彼は横のパネルを操作して、ドアを開けた。

彼はその部屋へ足を踏み入れた。

そこでは二体の巨人が仁王立ちして彼を見下ろしていた。

どちらも黄燈色で全身を塗り固められている。

全体が太く、流線型で覆われているために、どことなく肥った男のようにも見えた。

そして片方の巨人には『H—1』、もう一方には『H—2』の記号が、それぞれ肩に彫り込まれている。

彼は、満足げに笑みを浮かべた。

ついにこれに乗れる。

きつと……いや絶対に、今まで以上の快感を与えてくれるだろう。

欲望。

彼の心は、ただそれだけが支配していた。

つづく。

07 『H—1』

ペンユウが奔る！

アブソルート・ドウライの真つ正面に突つ込みながら、マシンガンを掃射する。

狙いもいゝ加減で、当たるとは思つていなかったが、やっぱり当たらない。

逆に機動力を生かして左側に回り込まれた。

このままでは、恰好の的になるのがオチだ。

「なめるなッ！」

ペンユウのブースターがこれでもかと炎を噴き出す。

ドウライの散弾は、かろうじてペンユウの背後を通り抜けていった。

すぐさま方向転換し、マシンガンを掃射する。

しかしこれも、ドウライの装甲をかすめるだけに終わった。

そして、互いに銃口を向け合つて対峙する。

『いい腕をしているな』

「お陰様で」

ドウライのパイロット、シエリルの声は高くうわずっている。

戦闘に興奮して、殺していた地声が出ているのだろう。

ついこの間まではリンファも女の声を殺していたが、最近では普通に話すようにしている。

わざわざ自分が女であることを隠して侮られないようにするのも、なんだか馬鹿馬鹿しくなってしまうのだ。

「あんた、名前は？」

『……シエリルⅡエアハルト』

「一つ、聞いていい？」

シエリルの声は返ってこなかった。

しかし、有無を言わず攻撃をしたりはしないと見ると、興味はあるようである。

意を決して、リンファはかねてからの疑問を口にした。

「あたし達を殺すように依頼を受けたって言ったよね。

でも、あたし達は別の依頼でたまたまここを通りがかって、たまたまこの工場に雨宿りに来たのよ。

一体どうして待ち伏せなんかができたわけ？」

答えは……ない。

答える義理はない、ということか。

或いはこいつも知らないのかもしれない。

『教える必要は……ない』

しばらくの沈黙の後に、声が返ってきた。

やはり、口調からすると後者……つまり自分でもわかっていない、ということのようである。

リンファは舌打ち一つして、操縦桿を横に倒した。

ペンユウが地を蹴り、敵のキャノン砲弾を避ける。

ドウライは武器碗のレーザーキャノン、散弾砲、ロケット砲と重火器を力の限り組み込んだ重武装である。

正面からの撃ち合いでは圧倒的に不利。

となれば、機動力で圧倒するしかない！

リンファは右手で、コックピットの壁から突き出たレバーをねじ倒した。

以前にエリイが付けてくれたオリジナル機能、ダイレクトレスポンスモードである。

火器制御機能の操縦補助をなくし、リンファの指先の動きが無修正でペンユウの動作に反映される。

並のレイヴンでは満足に歩くことすらできなくなるが、巧く扱えば本来では不可能な動作も可能になる。

しかし、この状況では少々のリスクなど気にしてられない。

本気を出してかからなければ、死ぬのはこっちである。

ペンユウが肩のレーザーキャノンを構えた。

本来、ペンユウのような二足タイプのアCがキャノン砲を撃つには、安定性の問題上、片膝について構えなければならぬ。

しかしダイレクトレスポンスモードなら、立ったまま……あるいは空中でも撃てないことはない！

『馬鹿な!? 立ったままキャノンだと!?』

「なめるなって言ったでしょーが!」

エリイが改造したこのレーザーキャノンは、無理な改造が祟って五発も撃つとオーバーヒートしてしまう。

その五発の内にカタを付ける!

ペンユウが地を蹴った。

空中に飛び上がり、とりあえずキャノンを一発放つ!

ゴウアアアアツツ!!

光の砲弾は床に着弾し、辺りに無差別に爆風を撒き散らした。間一髪ドウライは床を滑って難を逃れる。

さすがに四足A.C、スピードにかけては他の及ぶところではない。

しかし、逆に安定性は乏しい。

ドウライを爆風が襲い、一瞬そのバランスが崩れる！

「終わりだっ！」

その隙を狙って、空中に浮いたまま再度キャノンを発射する。

しかし次の瞬間、ドウライのロケット砲も火を噴いた。砲弾は光の弾丸と衝突し、ドウライに届く前に誘爆する。

さすがにいい腕をしている。

伝説は伊達ではないようである。

だが、それでもリンファの方が一歩上手だった。

*

「な……!?!」

シエリルは我が目を疑った。

アブソルート・ドウライのモニターを凝視する。

右の端から左の端までもう一度、ゆっくりと目を皿のようにして確認した。
やはり……いない。

どこにも、さっきまで正面にいたはずのペンユウの姿がないのである。
慌ててレーダーを確認する。

しかし、それもレーザーキャノンの爆発によって生じた電磁波の影響で、一時的に使用不可能になっている。

「どっだっ!? どっだっいるっ!」

半分錯乱しながらシエリルは叫んだ。

ふと思いついて機体を回転させて見たが、自分の真後ろにもペンユウの赤いボディはない。

その時。

シエリルの耳に、女の声が届いた。

『ハイハイー!』

そして次の瞬間――

ドウライの青いコアは、真上から飛来したペンユウのレーザーブレードによって貫かれていた。

*

『リンファ、無事か?』

ヨシユアは本日二度目の言葉をリンファに投げかけた。

ペンユウもワームウツドも、機体にはほとんど傷はない。

圧勝とは言えないが、それでも比較的余裕のある勝利である。

——それにしても。

リンファは背筋が凍るような思いだった。

間違いなくエアハルトの腕前は一流である。

それを二対一であしらってしまおうとは……味方であるヨシユアに対して、リンファは

漠然と恐怖を感じずにはいられなかった。

「なんとかね……疲れたけど」

『お前にしては上出来だ……』

そういえば、エリイはどこだ?』

少し気になる言い草だが、とりあえずリンファは見逃すことにした。

それよりはエリイの無事を確認するのが先決である。

まさかさっきの戦闘に巻き込まれてはいないだろうが、なにせエリイのことである。
一抹の不安が残る。

……

リンファは眉をひそめた。

「ねえ、何か聞こえなかった？」

『……?』

……

「やっぱり！」

リンファの表情が曇った。

まるで地の底で野獣が唸っているかのようなこの音……

まさかこれは、リフトが上昇する音!?

『まだ何かあるってのか』

次第に音は大きくなっていく。

もうここまでくれば疑う余地はない。

何かが、この工場の地下からリフトで搬出されてきているのである。

おそらくはACかMTのような兵器が――

ウンツ。

低い駆動音が響き、丁度ペンユウとワームウッドが立っている辺りの床が真つ二つに割れ、その奥に闇が姿を見せた。

慌てて二機はその場を離れた。

二機はそれぞれ、武器を構えた。

リフト音はますます大きくなってくる。

もう敵は近い。

そして、そいつは姿を現した。

地下から上ってきたリフトの床が、穴をびったりと塞ぐ。

その上に仁王立ちになる、一体の巨大なロボット。

「敵機確認。機体情報無登録。詳細不明」

コンピュータは無機的な声を繰り返し発した。

当たり前だ。リニアもヨシユアも、あんなものは見たことがなかった。

赤黒い塗装で統一された、人間型二足のロボット。

サイズはACよりやや大きく、だいたい全長が10メートルといったところか。

コアパーツを中心として腕部や脚部などのパーツが接続されているところを見ると、

おそらくACなのだろう。

しかし、レイヴンズ・ネストの規格からは大きく外れている。

かといって、大企業の自社規格品でもない。

見たこともないタイプである。

外見はやや太く、肥った男のようにも見える。

装甲を重視した重装タイプといったところか。

しかし、その割には両手にも肩にも、何一つ兵器を搭載していないようだが。

そして、肩には「H-1」と番号が刻まれている。

『ふ……ふへへへ……』

突如、電波を介した声が二人の耳に届いた。

聞き覚えがある。

最初に戦ったエアハルトの次男、アルベルトである。

まさかあのぼろぼろになったACの中で、生きていたとは……

『どオだ……こいつが新世代のAC……「H-1」だ』

やはりACらしい。

しかし、武装もしていないACで一体何をする気なのだろうか？

リンファは眉をひそめた。

『そんじゃ早速で悪イが……死ね』

ばがんっ！

音を立てて、H-1の装甲がめくれ上がった！

全身に無数の穴が空き、その奥にとがったものがのぞく……

百近い数のミサイルである！

「なっ!?!」

『冗談じゃねえ!』

ヴァシユツ！

その全てが一気に発射される！

あんなものをまともに食らっては、それこそ燃えかす一つ残らない！

二機は慌てて後退しながら、構えていた武器を発射した。

リンファのレーザーキャノンの爆風がミサイルを吹き散らし、ヨシユアのガトリング

ガンがそれを撃ち落とす。

……が、次の瞬間には後続のミサイルが爆炎を切り裂いて飛来する！

キユゴガガガガガガッ！

無数のミサイルが二機の装甲に食い込んでいく。

かなりの量を打ち落とせたが、それでも数十発は間違いない食らっている。

爆炎が吹き荒れ、視界を遮る。

それが収まったとき姿を現したのは……全身ポロポロで、びくりとも動かないペンユ

ウとワームウツドの姿だった。

つづく。

08 誘導結界（デコイフィールド）

『ヨ……ヨシユア……あ』

リンファの声は無事を確認するためのものでも、作戦を練るためのものでもなかった。

ただ、圧倒的な恐怖と重圧から逃げようと、必死で助けを請う一人の少女の声だった。それを聞きながらヨシユアは薄れる意識を必死で呼び覚ました。

モニターで被害状況を確認する。

機関部がやられていて、もはや一步も動けないだろう。

おまけに全ての兵器が、接続を失って使い物にならなくなっている。

おそらくペンユウも似たような状況なのだろう。

「化け物め……」

ヨシユアは額に冷や汗を浮かべて毒づいた。

まさか、全身にミサイルを埋め込んでいるとは……発想と技術が尋常ではない。

敵は……H-1は、ゆっくりと歩みを進めた。

一歩一歩、自分の重みを確認するかのようには、動くことのできない二機に近付いていく。

『ヨシユア……ヨシユアあ……怖いよ……』

助けて……ねえ、助けてよ！』

「落ち着け！」

その言葉は自分に言い聞かせているようでもあった。

「俺が護つてやる！」

だから取り乱すな！」

その一瞬後で、ヨシユアは自分が口走ったことにはつとまった。

生まれてこのかた、他人を護るなんてことは考えたこともなかった。

なのにどうして、こんなことを言ってしまったのか。

多分、リンファをなだめるためのでまかせなんだろう。

彼はそんな風に自分を納得させた。

……終わりだな。

ヨシユアは漠然と感じた。

こんな風に、余計なことをあれこれ考えるのは、どうしようもない証拠だ。

もはや生き残る道は残されていない。

ヨシユアは手元のキーをいじり回した。

モニターに文字が表示される。自爆機能の安全装置が解除される。

おそらく、相手が至近距離まで近付いたところで自爆すれば、いくら相手の装甲が硬くても仕留められるだろう。

不思議と恐怖はなかった。

隣で動けなくなっているペンユウに目をやる。

距離は離れているから、自爆の影響は受けないだろう。

「リンファ」

ヨシユアは優しく声をかけた。

「声、聞かせてくれ」

しばらくの沈黙の後で、リンファの声がした。

『ねえ、死んだらどうなんだろう？』

寒いのかな？ 痛いのかな？』

リンファの声はさつきより落ち着いた調子だった。

ヨシユアのでまかせが効を奏したらしい。

「どうだろうと」

ヨシユアの額を汗が流れ落ちた。

「死んだ後だから平気だろうさ」

………

ヨシユアは、自爆スイッチにかけていた指を放した。

何か音が聞こえる。

発煙筒を焚いたときのような、しゅうしゅうという音が地面を伝わって耳に届いてくる。

H―1の動きが止まった。

回転して辺りの様子を確かめている。

奴にも聞こえているらしい。

音は次第に大きくなっていった。

「何だ……この音は？」

『！もしかして！』

リンファが叫ぶ。それと同時にヨシユアも気付いた。

ACに乗るときにいつも聞いていた音。

つまり……

『ブースター音！』

ゴバガアアアアアッ！

突如、床が弾けた！

何かが地下から飛び上がり、工場の床をぶち抜いて現れる！

それは床を破った勢いのまま空中に飛び上がり、やがてH―1から少し離れたところに着地した。

二足タイプの巨大ロボット。

H―1にそっくりなデザインだが、所々角張っている。

そして肩には……「H―2」の文字！

最悪だ。

ヨシユアは目を瞑った。

よりもよって、あんな化け物がもう一機でてくるとは。これではもう、自分たちが助かる見込みは……ない。

しかし、次に聞こえてきた声が二人を驚愕させた。

『やつほー！』

りんふあちゃん、だいじょおぶう？』

H―2から届いた脳天気な声……これは！

「エリイ!?!」

*

エリイは計器の状況を一つ一つ確認した。

普通のACとはまるで違う操作系統だが、わからないことはない。

それにしても驚くべき性能である。

レーダーもモニターもひたすら感度が良く、なんと数十メートル先の埃の一粒が見えるほどに拡大できる。

装甲も分厚そうだし、機動力も文句ない。

さすがは奴の作品……といったところか。

驚き半分、遊び心半分でいろいろといじくり回しながら、エリイはリンファ達に通信を送った。

「あー、ぺんゆうぼろぼろだあ。

なおさなきゃ〜」

『それよりエリイ！』

ンなもん何処で手に入れたのよ!?!』

『てめえ……地下に入りやがったな!』

突然アルベルトの声が乱入してきた。

確かに、このAC「H-2」は地下の隠しガレージから拝借したものである。

ガレージにはもう一機分空きがあったし、そもそもこいつが二号機だったので、おそらく一号機がそのあたりにいるだろうとタカをくくっていたが……

どうやら目の前のこいつがそれのようである。

それにしても、あのポロポロになったアブソルート・ツヴァイの中でよくも生きていたものである。

その生命力だけにはエリイは感心した。

『ブツ殺すー!』

罵声と同時に、H-1の装甲がめくれ上がった!

その奥から飛び出す無数のミサイルたち!

——まだ残ってたのか!?

『逃げて、エリイ! はやくっ!』

まるで蜘蛛の糸のように煙をたなびかせて、百近い数のミサイルがH-2に迫る! しかし——エリイは避けようともしない!?

ギュゴガガガガゴウンツ!

案の定、全てのミサイルがH-2に直撃する!

嵐の如く炎が吹き荒れ、爆炎を巻き上げる!

『そいつは俺のだ！』

返してもらうぜっ！』

いくらなんでもあれだけの攻撃を受けては……今頃機体がどうなっているか、想像に
難くない。

やがて煙は薄れ、散乱していった。

そして、その奥に巨大な人影が姿をあらわした！

無傷で佇む、H-2の姿！

「やだ」

よく見ると、ミサイルは一発も直撃していない。

すべてH-2のボディから逸れ、近くの床や壁に着弾している。

『誘導結界……！』
デコイフィールド

ヨシユアは惚けたように呟いた。

『誘導結界……』
デコイフィールド

おそらく、機体の周囲に強力な磁界か電界を発生させ、それでミサイルの軌道をそら
したのだろう。

と、言うのは簡単だが、実行するのはほとんど不可能に近いはずである——
そうでなければ、とうの昔にどこかの企業が実用化している。

「えへへへ、えりい、いつきま〜す!」

H―2が走る!

しかしH―2はH―1と同じく何の武装も施されていない。

やはり同じようにミサイルか何かが隠されているのだろうか?

H―2は驚異的なスピードで一氣に間合いをつめ、そして……

「えりいば〜んち!」

ゴッぱあっ!

『……………は?』

*

リンファの目が点になった。

つまり……H―2が、近付くや否やパンチをぶちかましたのである。それも素手で。

確かに、接近戦において格闘戦を得意とするMTは存在する。

しかし、これは威力の面ではるかにそれを超越していた。

貫いたのである。

分厚い装甲に護られたH――のコアを。
たったの一撃で。

『ぱーんち！　ぱーんち！　ぱーんち！』

ごしゅっ！　がひよっ！　ぐきよっ！

次々繰り出されるパンチに、H――の機体は見る間に解体されていったのだった。

つづく。

09 ムラクモ・ミレニアム

「邪魔するぜ」

ヨシユアはドアを開けるなり声を投げかけた。

薄暗い倉庫の中。

女の住処とは思えないほど汚れまくり、おまけに倉庫の半分近くは青いビニールシートを被せられた巨人——ペンユウの巨体で埋まっている。

ここは、地下都市アイザックシティのスラム街、通称『スクラップ地区』の一角。リンファとエリイが三年前から住処として使っている、古い倉庫である。

パソコンとにらめっこしていたエリイが顔を上げた。

おそらく夜を徹してACの修理をしていたのだろう。

目の下にはクマができている。

ヨシユアは少し罪の意識にかられた。

それというのも、ヨシユアの愛機ワームウッドも彼女の世話になっていたのである。倉庫の中には入らないので、今は修理しかけのまま外に放置してある。

「リンファは？」

エリイは倉庫の奥の方をあごで指した。

そこには薄汚れた布をシーツ代わりに引いて、寝息を立てているリンファの姿があった。

溜息をつき、歩み寄る。

一瞬蹴り飛ばそうかとも思ったが、後でどんな反撃をされるかわかったものではない。

素直にヨシユアはリンファの肩を揺すつた。

まだあどけなさの残る寝顔が歪み、大きなあくびがこぼれる。

細くリンファの目が開いた。

「あ……よしゆあ……」

「起きろよ。情報交換といこうぜ」

*

「んー、一応調べてみたわ。

オムニチャンス・インダストリーのこと」

まだ寝ぼけているのだろうか。

椅子代わりの木箱に腰掛けたまま、リンファは頭を揺らした。

机をはさんで向かい側に座ったヨシユアとエリイが心配そうに様子を見守る……もちろん、情報の信頼性について心配しているのである。

オムニシヤンス・インダストリー……

今回、リンファにレアメタル鉱山の制圧任務を依頼した企業である。

「えーと、企業として成立したのが三年前。

丁度あのころはクロームとムラクモ・ミレニウムが滅亡して混乱してたから、そのどさくさに紛れてシエアを掴んだみたい」

ムラクモ、の名を聞いてエリイの耳がぴくりと動いた。

リンファの話に出た企業は、どちらも数年前までアイザックシティを……いや、世界を牛耳っていた超巨大企業である。

世界を二分してほとんど戦争に近い抗争を繰り返していた。

一応クローム社が抗争には勝利したのだが、疲弊したクロームも結局は別の新興企業に滅ぼされてしまった。

「でも、特に怪しいところはないわ。

時々、妙に高性能な製品を発表して世間をさわがすぐらいで」

「しかし、今回の襲撃……誰かに仕組まれていたことは間違いない。

そして、その企業が一枚噛んでいるってことも
そう。

偶然依頼を受け、偶然雨が降り、偶然あの工場に逃げ込んだわけではないのだ。

このご時世、天気予報的中率は百%近いし、あの工場の近くを通るコースを設定しておけばまず間違いなく雨宿りをしようとするだろう。

仕組まれていたのだ。
全て。

「俺の方でも調べてみた。

とりあえずあの工場の再調査に行ったんだが……驚くなよ」

ヨシユアはコートの内ポケットから、一枚の写真を取り出した。
それをテーブルに投げる。

一体どこなのかはわからないが、荒野の真ん中に巨大なクレーターが空いている。

写真なので正確には大きさがわからないが、それでも半径が数kmくらいはあるだろう。

「なに、これ？」

「隕石でも落ちたの？」

「あの工場だ」

リンファは言葉を失った。

「昨日再調査に行ってきた……」

なくなっていたよ。なにもかも。

原因不明の爆発によって、周囲30 kmにわたってふきとんでいた」

今度こそ、全員が完全に沈黙した。

一体、どこをどうすればこんな爆発が起こるといえるのだろうか。

大破壊以前の戦略級兵器、核爆弾ならこういうことも可能だろうか……

エリイは険しい表情で立ち上がった。

そのまま、倉庫のドアをくぐって外に出ていく。

「どうしたんだ、あいつは？」

「さあ……あ、確かオムニチャンス社ができた三年前って、あたしとエリイが出会った頃

よね。

その前はどこかの企業にいたらしいけど」

企業……ヨシユアはぴくりと眉を動かした。

しかし、何事もなかったかのように立ち上がった。

「ともかく……気を付けろ。」

起こっているぞ、何かが」

リンファには、ヨシユアの言葉にただ頷くことしかできなかつた。

*

エリイは倉庫の外で、地下都市の天井を見上げた。

今はまだ、話すべきときではない。

しかしいつか……そう遠くない未来に、あの二人の力を借りなければならぬ時がやってくるのだ。

その時、彼女の後ろで音がした。

ヨシユアがドアを開けて出てきたのである。

エリイは明るく装って言葉を投げかけた。

「おかえりですかあ〜」

「ああ。」

だが、その前に聞きたいことがある」

ヨシユアは上からエリイを見下ろした。

エリイの額には冷や汗が浮かんでいる。

「H—1、H—2、三年前……」

ヨシユアの言葉は重く、鋭くエリイに突き刺さった。

「ムラクモ・ミレニアム」

気付いたのだ。

彼もまた。

背後の何かの存在に。

「何があった」

THE
END

最終話 真紅のジャム・セツシヨン

01 絶望の予兆

暗くて湿った空気に満たされた倉庫。

ゴミだか使える部品なんだかわからないような機械が見境なく散乱し、それを無理矢理端に寄せて道が作られている。

奥にはさしずめ砂漠の中のオアシスの如く開けたスペースがあり、そこにテーブルと椅子代わりの木箱が並べられている。

さらに、テーブルの上には一台のパソコン。

そこまですら普通の倉庫かジャンク屋と変わらない風景だろう。

しかし、空間の半分ほどを占める小山が、そうではないことを物語っていた。

青いビニールシートを被せられた巨大な人型ロボット。

山の正体はそれである。

微動だにせず仰向けに寝転がっている。

そんな倉庫の中、床に転がって呻いている女が二人。

一人は黒髪の、アジア系の女。

もう一人は長い赤毛を三つ編みにした北欧美人である。

二人とも、顔には生気がなく、やつれ細っている。

ぐぎゆるるるるるるる。

もう何度目だろうか。腹が鳴った。

「おなかへったよお……」

先に泣き言を言ったのは赤毛の女の方だった。

一方、アジア系の女は勝ち誇った顔でそれをいさめる……

まあ、一体何に勝ったのかはさっぱりわからないが。

「我慢するのよ、エリイ……」

これは神が与えたもうた試練よ」

「そんなこといつてえ〜！

りんふあちやんがあんなのかうからあ〜！」

そう。

某月某日、食費が尽きた。

リンファといえば、闇の世界に生きる傭兵『レイヴン』達の間では有名な存在である。

若く、美女で、この地下都市には珍しいアジア系、そして何より腕が一流となれば、有名になるのも当然である。

有名になれば勿論、企業からの依頼も増えるし、その待遇もぐつと良くなる。

要するに、食いつばぐれる心配は少なくなるわけである。

リンファも例外ではない。

つい先日までは20万コーム以上の蓄えがあり、2ヶ月ほどなら十分遊んで暮らせるはずだった。

しかし。

一週間前にリンファがした衝動買いのせいで、それが一気に底をついたのである。

「うっ……」

で、でも、あのパルス加速器装置、20万ポツキリだったのよ!?

普段なら25万は下らないのに!」

「でもお、それでおかねがなくなっちゃったらだめじゃないい〜」

まさしく、エリーの言うとおりである。

しかもリンファの愛機『ペンユウ』にはもうコアスロットが残っておらず、せつかく買ったパルス加速器を装備することもできないのである。

つまり……完璧な無駄。

ごぎゆるうおおうう。

またしても腹が鳴った。

二人は顔を見合わせると、盛大に溜息をついた。

もう言い争いをする元気もない。

何せ、食料が尽きてもう二日である。

「あたし、ピンカロアツプ食べたい……」

「えりいはえびふらい〜」

「チャオアムチョンソン……」

「ろぶすたー……」

「ロンハーパツチャンピン……」

「ファースト・フードでいいならここにあるんだがな」

突然かかった声に、二人は顔を上げて入口の方に目を遣った。

そこでは黒いコートを着た長身の男が、ハンバーガー・チェーンの紙袋を手にはぶら下げて立っていた。

見下したような笑みを浮かべてこちらを見下ろしている。

リンファアの知り合いのレイヴン、ヨシユアである。

*

「お、おい……もう少し落ち着いて食べるよ……」

ヨシユアが圧倒されるほどの食欲。

リンファとエリイは、わき目もふらずにひたすらハンバーガーにかぶりつき、ポテトフライを口に放り込み、コーラでそれを胃に流し込む。

空きつ腹でこういう食べ方をすると腹を壊しそうなものだが、どうやらそんなことは気にしていられないらしい。

呆れて溜息をつきながら、ヨシユアは自分のハンバーガーを口許に持つていった。

——冷たい視線。

気が付くと、リンファとエリイが物欲しそうな瞳でヨシユアの一挙一動を見つめていた。

「……わかったって……そんな目で見るな」

ヨシユアがテーブルに置いたハンバーガーは、数秒後にはリンファの胃袋の中へ消えていた。

それと同時にポテトフライもエリイが頬張った。

なんとという早業……よっぽど腹が減っていたのだろう。

「全く、もう少し可愛らしく強請れないもんかね」

「よしゆあくくん、えりいもつとたべたあ〜い！」

「あたしも〜！」

もう一度、ヨシユアは溜息をついた。

もう余計な話をするのに疲れたのか、コートの内ポケットから光磁気ディスクを取りだし、テーブルの上のパソコンに接続する。

すぐさま、画面に何かのデータが表示された。

「働かざるもの食うべからず、だ」

「つてことは、仕事？」

リンファはきらきらと目を輝かせた。

最近大きな抗争もなく平和だったおかげで、リンファの所にはさっぱり依頼が入って来なかったのである。

これで、どうやら食いつなぐアテはできたようだ。

「なにになにのおしごとですかあ〜？」

「え〜と……」

依頼主はカトー・ラテックス。

依頼内容は要人護衛か」

カトー・ラテックス……

その名の通り、有機高分子化学の分野ではそれなりに名の通った企業である。企業としての規模は中の上といった程度。

それでも、絶縁装甲や軽量パーツには欠かせない高分子を得意としているだけに、社会への影響力は大きい。

確か、大破壊以前から続く息の長い企業だったはずだ。

今時珍しく社長も世襲で、現在は五代目のテルミチカトーがその位に付いている。

「ネストで公式募集されてた依頼だ。

もう契約はしてあるんだが、依頼主がまだ腕の立つレイヴンを探してる。

金に糸目は付けないんだとさ」

「ふーん。

で、いつなの？ その仕事」

「ヨシユアは無言で画面を指さした。

そのためのデータディスク、というわけである。

画面には実行日時と作戦内容、そして周辺のマップデータが表示されていた。

明日20時丁度より、テルミチカトー専用車両を地上幹線道路8号線地下都市『ヴォルカニクス』と地下都市『アイザック・シテイ』区間で護衛せよ。

尚、報酬は7万コーム、前金として半額を支払うものとする。
格別の条件だ。

リンファは口の端を吊り上げ、満面の笑みを浮かべた。

「OK。受けるわ、この仕事。」

エリイ、ペンユウの準備は？」

「さんじかんでできるよ〜」

「決まったな。」

それじゃあ、行くか」

ヨシユアは一人で立ち上がった。

リンファ達は呆然と彼の顔を見上げている。

まだ出撃するには早すぎるし、特に他の用事もないのだが。

「どこ行くの？」

「それだけじゃ足りないだろ？」

「奢るよ」

*

ピツ。

暗く狭い部屋の中、電子音が小さく鳴った。

部屋で一人だけコンピューターに向かっていた男は、横にあるディスプレイに目を遣った。

パソコンの画面には、とある企業の内部情報が事細かに記されている。

その一つに、この企業と契約したレイヴンの情報があった。

四人ほど名前が挙がっている。

彼に対抗するために雇ったに違いない。

浅はかで愚かなことだ。

しかし、その中に二つの名を認めるとき、彼は目を見開いた。

——そうか。やはり、邪魔をするか。

もしかしたら偶然かもしれない。

相手もレイヴン。たまたま、この企業の依頼を受けただけかもしれない。

もしそうだとすれば幸運だ。

恰好のデモンストレーションの機会である。

彼は通信を開いた。

『ご利用ですか』

相手の男は表情一つ揺るがさず、事務的な口調で応えた。黒いスーツが硬く冷たい雰囲気醸し出している。

「明日の作戦部隊を変更する。」

『カットラス』を倍に増やせ。

それと……『ドレッドノート』を投入する」

通信相手の男の眉がびくりと動いた。

『……カットラス12機とドレッドノート……』

少々大がかりすぎると存じますが』

「構わん。言ったとおり準備しろ」

『了解しました』

通信はそれで終わった。

相手の男の心配ももつともである。

たかだかAC四機相手に、この戦力は異常とも言える。

しかし、彼は確信していた。

これでも足りないくらいだ、と。

そう。あくまでこれはデモンストレーション。

派手に本番を盛り上げなければならないのだ。

——始めようじゃないか。狂気と殺戮の宴を——

つづく。

02 ふいうち

地下都市にも夜は訪れる。

淡く煌めく街灯、建物の中から零れてくる灯り、通り過ぎていく車のヘッドライト。いくつもの光が交錯し、夜を彩っていく。

リンファ達は、レストランから夜の地下都市へと出た。

さっきの料理の後味と、美しい夜景、そして忍び寄る冷気。

リンファは遠くを見つめた。

いい気分だった。

ヨシユアに連れられて来たこのレストラン……

最高級というわけではないが、それなりに評判が良く、同時に値段も張る店である。

確かに、味は大したものだった。

大通りへ通じる小道を歩く。

エリイが小さく身震いをした。

ジャケットの裏側に手を入れ、ごそごそと探る。

「あく、わすれものしちやつた。」

ちよつとまつてて〜」

エリイは慌ててきびすを返すと、またレストランに入つていった。

ヨシユアの前だからつて別に隠すことはないだろうに……

リンファはエリイの後ろ姿を見て、微笑みを浮かべた。

しばらくじつと地下都市の天井を眺めていたが、やがてリンファは口を開いた。

「何たくらんでんの」

ヨシユアはコートの内ポケットから煙草を取り出すと、それに火を付けた。

口から吐き出された紫煙が、街灯の光を受けて輝く。

「何のことかな」

リンファはヨシユアの目の前まで近付いた。

しばらく見つけ合つたあと、彼の口から煙草をつまみ取る。

「何も企んでなくて、あんたが奢つたりするわけないでしょ」

投げ捨てられた煙草が無為に煙をたなびかせた。

ヨシユアの表情は動かなかつた。

「僕をどんな目で見てたんだよ」

肩をすくめると、リンファは後ろに振り返った。
小さな背中がヨシユアの目の前で小さくゆれる。

「さては、あたしに惚れたか？」

「ああ」

……………

思わずリンファは沈黙した。

冗談……のはずだ。

自分の言葉も、ヨシユアの言葉も。

「嘘……」

「さあな」

頭が真つ白になった。

何？　これは何？

何を言ってるの？

わからない？

いや、わかる。わかるけど……

じゃあ、だとしたら、これは何？

わからない……

無意味な言葉が次々と浮かんで消え、頭の中を埋め尽くしていく。

こんな変な気分は初めてだった。

熱い。体が熱い。

どうしよう、きつと自分の顔は耳まで真っ赤になっているに違いない。

そのとき、ヨシユアの顔があることに気付いた。

そう、今まではそこにヨシユアがいることすら忘れてしまっていたのだ。

何も見えなかった目が、何も聞こえなかった耳が、少しずつ感覚を取り戻していく。

ヨシユアの顔が妙に大きく見えた。

しかし次の瞬間には塵のように小さくなった。

ようやく取り戻した感覚は、激しく歪んでいた。

一体どうしろというのだ。どう答えるというのだ。この言葉に。

呆然としているのか、或いは恍惚としているのか、自分自身でも分からなかったが、その硬直をうち破ったのは、用を済まして戻ってきたエリイだった。

「えへへ、おまたせえ。」

はれ？ どしたのりんふあちゃん」

その時リンファのできたのは、適当に笑いを返してごまかすことだけだった。

*

『話が違うんじゃないのか』

電波に乗って聞こえてきたのは、ヨシユアの声だった。

ここは地上幹線道路8号線の、地下都市『ヴォルカニクス』ゲート。

ここから、道路はしばらく川沿いを走り、六時間ほどで地下都市アイザック・シテイに到着する。

途中では森のど真ん中を通っている部分もあり、襲撃には非常に適した道路である。

しかも、時間は夜。

輸送車に乗っているのは社長だそうだが、どうにも杜撰な移動計画である。

しかしまあ、レイヴンは与えられた仕事をこなすだけだ。

難しい任務だが、その分報酬も破格。

その点には、ヨシユアもリンファも異存はなかった。

それより気になるのは、ここにリンファ達以外のACが二体、護衛に参加しているということである。

ペンユウのコックピットに座って、リンファは外を見遣った。

隣にはヨシユアのAC『ワームウッド』が、青いボディを輝かせて立っている。

前には護衛する輸送車、及び通信を補助するためのアンテナ車が並ぶ。問題はさらにその前方である。

見知らぬACが二体、一行を先導している。

一体は逆間接タイプ、もう一体は標準的な二足タイプである。

コンピューターの情報に照合したところ、水色で塗装された逆間接ACは『ティー・ブレイク』、どす黒い二足ACは『プロペラント』という名前らしい。

聞いたことのない名だ。

『別に、護衛が君たち二人だけだと言った覚えはない。

いいじゃないか、味方は多い方が』

「どうだかね……」

アンテナ車に乗っている、カトー・ラテックスの男の言葉に、リンファはひとりごちた。

もちろん、通信機はオフにしてある。

無用ないぎごきは御免である。

『ふん、こんな連中、役に立つかどうか分かったもんじゃありませんぜ。

オレ達に任せてくれりゃいいのに、ヤマザキさんも人が悪い』

むつかあああああつ！

プロペラントのパイロットの言葉に、リンファは髪を逆立てた。

よくいるのだ、自分の実力も省みずに大口を叩く奴が。

何も言わないところを見ると、ヨシユアも相当とさかに来ていているようである。

あいつは腹が立つと無口になる習性がある。

『安心してください、ヤマザキさん。』

後ろの二人が足を引つ張つても、私たちがちゃんと護つてみせますよ』

またまたむかあああああつ！

今度はティー・ブレイクのパイロットである。

二人揃つて似たタイプらしい。

しかも、さつきからヤマザキヤマザキとやけに馴れ馴れしい所を見ると、知り合いのツテで雇われたようだ。

全く、コネに頼る奴の科白でもない。

しかし、こんな所で仲間割れ（仲間だとはこれっぽっちも思っていないが）していても仕方ない。

とにかく依頼をこなすことが先決である。

……ガ……ザアツ……

その時、通信にノイズが混ざった。

電波障害だろうか。訝しがりながら通信機を調整する。

『もくしもくし、きつこえますかあ〜』

「エリイ?」

聞こえてきたのは意外にもエリイの声だった。

アイザック・シテイの住処で留守番しているはずなのだが。

「どうしたの、エリイ。今どこ?」

『おうちだよお。』

あのね、そのちかくにアンテナしやがあつたから、はつきんぐしてわりこんだのおげ。

全く、一体何をしているのやら。

依頼主の通信系統にハッキングするとは、下手をすると契約抹消どころかその場で撃ち殺されかねない。

『丁度いい。今回はエリイにナビを頼むか』

どうやら、ヨシユアの方にも通信は回っていたようである。

まあ、バレさえしなければ問題はないわけだが。

「そうね。じゃあ、お願い」

『あいあ〜い、りよ〜か〜い』

声が途切れるのと同時に大量のデータがペンユウのコンピューターになだれ込む。

付近の詳細な地形図が表示され、さらに襲撃に適したポイントとそこへ到着する時刻がラインアップされる。

その数たるや、軽く三十を越える。

さすがはエリイ……僅かな時間だというのに、驚くべき情報量である。

これなら今回は楽な仕事になりそうだ。

丁度、おあつらえ向きにアンテナ車から声がかかった。

『よし、こちらの準備は完了した。出発するぞ』

「了解」

つづく。

03 勝負

ヤマザキとかいう男の号令の元、一行は前進を始めた。

ゲートをくぐり、夜空の見える地上へと進み出る。

広々とした幹線道路。

それと並行に河が走り、闇の向こうへ消えている。

上を見上げれば、スモッグでくすんで星一つ見えない夜空。

地下都市で暮らす人間はあまり見る機会のない風景である。

とはいえ、レイヴンとして仕事をしているリンファ達は、外に出る機会も多いのだが。

ゲートをでて、ほんの十メートルほど進んだその時！

「う……うわああ?！」

ゴガアアアツ!!

派手な音と閃光をばらまき、逆間接タイプのAC……ティー・ブレイクが爆発を起こした。

水色の機体がバラバラに弾け飛ぶ。

その直後、隣で浮き足立っていたプロペラントも爆発した。

その一瞬前に見えた光の筋……おそらく、レーザーライフルの一撃を食らったのだらう。

——全く、口ほどにもない。

『なんだっ!? 何が起こったんだ!?!』

「敵よ!」

分かり切ったことを聞くな。

内中毒づきながらリンファはレーダーを確認した。

しかし……そこには何の反応もない。

しかし、ちらちらと闇の中に見え隠れするブースターの炎。

これはもしかすると……

「ステルス機能!?!」

『てつきかくに〜ん!』

エリイの脳天気な声が届く。

おそらく、モニターで確認したのでだろう。

『……!?! これは!』

リンファは弾かれたように顔を上げた。

エリイの声が変わっている。

科学者としてのエリイの声である。

『MT「カッツトラス」！

気を付けて！

隠密行動用のステルス機能搭載二足歩行MTよ！

機数12！』

随分とたいそうな襲撃部隊である。

並のACならさっきのように一撃で破壊できるほどのMTが12機。

どう考えても多すぎる。

しかし——やるしかない！

『一人、ノルマ6機か』

伝わってきたヨシユアの声は、妙に楽しそうだった。

おそらく、後で報酬を上乗せさせることでも考えているのだろう。

丁度リンファも考えていたことである。

『賭けるか？ 一機三千だ』

「五千で受けて立つ！」

そして、リンファは操縦桿を握った。

*

口火を切ったのはペンユウのマシガンだった。

レーザーにも映らない、ロックオンもできない敵を、目視だけで正確に撃ち抜く。一撃でカッターラスは爆発、炎上した。

隠密機だけあって装甲は薄いらしい。

しかし、その分手に持っているレーザーライフルは強力。

他に武装はないものの、非常に厄介なステルス機能まで持っている。

おまけに数が多いときた。

これは、輸送車を気にして戦う余裕はないようである。

「ゲートの中に隠れて！」

『了解』

すぐさま輸送機は後退する。

そこを狙っていたカッターラス一機を、ワームウッドのガトリングガンが撃ち抜く。

これで、残りはあと10機。

背後に迫る殺気！

リンファは有無を言わず操縦桿を捻り倒した。

横に飛びすぎるペンユウ。

そのすぐ横を光の矢が突き抜けていった。

方向転換しつつマシンガンを乱射。

弾丸はカットトラスの足を捕らえた。

膝立ちになったカットトラスに、止めの一撃が食い込んだ。

その時、敵の動きが変わった。

散発的な攻撃は無駄と悟ったか、あるいはこちらの実力に気付いたのか。

ともかく、残るカットトラスのうち五機がワームウッドに、四機がペンユウに一斉に飛びかかる！

——甘いッ！

ワームウッドが地を蹴り、空中に飛び上がる。

そして、真下でうろうろしているカットトラスたちに向かって、ガトリングガンを乱射する！

なまじまとまっているせいで、カットトラス達は回避ができない！

弾丸は二機のカットトラスを貫いた。これで残りはあと八機！

そのままの勢いで、ワームウッドは河の中に着地した。そう深い河ではない。十分活動はできる。

一方、ペンユウは……回避すらない。

その場に留まり、飛びかかってくる四体のカッタラスをにらみ付ける。

「鈍い鈍い」

ヴァンツ！

虫の羽音のような音を立て、左手の甲からレーザーブレードが飛び出す。

それを掲げると、目の高さで振るった。

ギヤウツ！

四筋の光条が、ブレードにはじき散らされた！

レーザーの束は散乱し、無害なただの光になってペンユウを照らし出した。

確かに、ブレードのレーザーによって発生する電界を利用すれば、ライフルのレーザーを弾くことは可能なのだが……

あくまで理論上の話であり、実際にそんなことをする奴はいない——リンファを除いて。

そのまま、驚きで動きを止めたカッタラスに斬りかかる。

これであと七機。

さらに百八十度向きを変え、ペンユウはレーザーキャノンを構えた。

まとまっている三機を正面に捕らえ、トリガーを引く。

ギュゴアアアアアアアッ！

着弾点で巨大な爆発が起こった。

カットラス達を紅蓮の炎が包み込む。

これでノルマは達成、である。

あとはワームウッドの方に向かった連中を片付けて、小遣い稼ぎといこう。

……と、その時。

ヴァシユッ！

光の矢が、ペンユウの右腕を貫いた。

撃つたのは、爆炎の中で蠢くカットラスの一機だった。

どうやら、他の二機が盾となって被害を免れたらしい。

「くたばれ、死に損ないッ！」

キャノンの第二射が、かろうじて生き残ったカットラスに止めをさした。

その頃、ワームウッドは河の中を水しぶきを上げながら走っていた。

時々飛んでくる光の矢は、ことごとく水によつて散乱され、空中に散り飛んでいく。

そして、ついに待っていた時がやってきた。

残りの四機のカットラスが、ワームウッドを追って水に飛び込んでくる。遠くで巻き起こる水しぶき。

これなら、たとえリーダーに映らなろうと位置が手に取るようにわかる！
ヨシユアはトリガーの横のスイッチを押した。

ガトリングガンにありったけの弾丸が込められる。

本来、無駄撃ちを避けるために付いている機能である。

必要な分ずつ弾を込めることができるのだ。

FCSが全力稼働する。

画面の微かな水しぶきを頼りに、相手の位置を割り出し、ロックした。

ガガガガガッ！

カットラス一機が爆発を起こした。

残りが怯んでいる内に、次々と弾丸を撃ち込んでいく。

しかも、相手の反撃は全て水に弾かれ、消えていく。

敵が全滅するのにさしたる時間はかからなかった。

「引き分け、か。賭は無効だな」

*

敵部隊を全滅させたリンファに、エリーの脳天気な声がかげられた。

『おつかれさまですう』

「右手を撃ち抜かれたわ。」

使えないことはないけど、反応速度が落ちてる。

あとで修理お願い」

『す……素晴らしい……』

乱入してきた通信は、アンテナ車からのものだった。

あの、ヤマザキとかいう男である。

『あの戦力をたったの二人で跳ね返すとは。

予想外の働きだった。

このことは後々、社長にも伝えておこう』

ヤマザキの言葉に、ヨシユアは眉をひそめた。

少し気になる言い回しがあったのである。

『伝えておく？』

どういふことだ、お宅の社長はその輸送車に乗ってるんじゃないのか？』

『そ、それは……』

ヤマザキが口を濁らせた、その瞬間！

ガシユツ。

奇妙な音。

「所属不明機接近中。

未登録MT。機数一」

リンファは再び操縦桿を握った。

凄まじい圧力。

額から冷や汗が噴き出してくる。

彼女は、自分の脇の下がじっとりと濡れているのを感じた。

自分が畏怖にも近い感情に支配されていることが手に取るようにわかった。

ガシユツ。

ヨシユアもまた奇妙な緊張感に包まれていた。

自分の周りだけ重力が大きくなったかのように、体が何者かによつて押さえつけられている。

彼は知っていた。これが、圧倒的な何かに対するとき人が抱く感情なのだ。

ガシユツ。

近い。

今度の音はすぐ近くで起こっている。

その時、不意に視界が暗くなった。

一瞬、モニターの故障かとも思ったが、これは違う。

何かによつて遮られているのだ。月明かりやゲートから漏れる光が。

——ヨシユアの脳裏をかすめる悪寒。

『避けろッ！』

つづく。

04 ミッション：巨大兵器撃破

ヴァンツ！

もはや音とも呼べない。

たとえようのない空気の震えが、ついさつきまでペンユウとワームウツドのいた空間を突き抜ける。

同時に闇を切り裂く、巨大な光の束。

まさか、レーザーブレード!?

しかし、それにしては巨大すぎる。

まるで樹齡が何百年にもなる大木のような大きさである。

ペンユウは光の束が飛来した方向を見上げた。

月明かりを背景にして、そのシルエツトが浮かび上がる。

『これは……！』

エリイの悲痛な呻きが聞こえてきた。

『オムニシャンス・インダストリー製、強襲用超大型八足MT「ドレッドノート」！』
『MTだど!』

冗談はよせ、あんな馬鹿でかいMTがいてたまるか!』

外見から判断すると、ドレッドノートの身長は軽くACの三倍。

さらに全長も40メートル近くある。

見た目には四足タイプのACを巨大にしたような感じだが、その足は八本。

そして、メインユニットには機銃やら大砲やらミサイルポッドやらがこれ見よがしにつきまわっている。

まさに、巨大な蜘蛛。

「来るっ!」

ゴバアウツ!

ドレッドノートの大砲が火を噴き、グレネード弾を発射する。

地面に着弾し、巻き起こる大爆発。

間一髪ペンユウ達は難を逃れたが、その時ドレッドノートが一本の足を高らかに掲げた!
た!

ギユゴウツ!

またしても響き渡る轟音!

振り上げられた足の先から、巨木のような光の束が生まれ出る！

超大出力レーザーブレード！

おそらく全ての足にあれが備え付けられているに違いない。

こういう巨大兵器にとって、一番おそろしいのはACやMTにへばり付かれることだ。

それを防ぐために全方位攻撃できるレーザーブレードを装備しているのだ。

そして、機体の移動は残りの足にまかせればいい。

ともかく、あんなものを食らったら一撃で蒸発してしまう！

ペンユウのブースターが全力で炎を噴き出す。

その足下をレーザーブレードがかすめ、通り過ぎていった。

そのまま上空へ飛び上がり、真下に向かってマシンガンを乱射する。

キキュインツ！

「効かない!?!」

弾丸は確かに命中した。

しかし、ドレッドノートの装甲に弾かれ、あらぬ方向へと撒き散らされる。

なんとという装甲……

あれでは、グレネードをぶち込んでもほとんど平気なのではないだろうか。

呆然とするリンファの目に、発射されるミサイルの姿が映った。

地面に対して垂直に打ち出され、真っ直ぐペンユウの方に向かってくる！

ガガガガガッ！

横手から飛来した弾丸が、ミサイルを全て撃ち落とした。

絶妙なタイミングでのヨシユアのサポートである。

『足の付け根を狙え！』

『この手の兵器の弱点だ！』

「了解っ！」

さすがに、四足ACを極めたヨシユアである。

いくらドレッドノートが巨大と言っても、基本的な構造自体は四足ACや四足MTと変わらないはず。

自分の弱点は、自分が一番よく知っている、ということである。

言葉通り、ワームウツドのレーザーキャノンが一本の足の付け根を貫く。

関節部分は装甲が薄くて当然。

あっけなく、足は本体から千切れて地面に転がった。

それだけでも振動と砂煙が巻き起こる。

さすがの巨大さである。

この調子なら、勝てる。

リンファがそう思った次の瞬間！

ドレッドノートが、残り七本の足のうち三本を一斉に振り上げた！

ヴァヂユオオツ！

振動が耳ではなく直接脳にまで響き渡る！

ドレッドノートの三本の足から、同時にレーザーブレードが発生した！

「うっそおおおおおっ！」

『化け物めッ！』

おそらく、機体を支えるには八本の足のうち四本を地に付けていれば十分なのだろう。

そして残りの四本は攻撃に使えるというわけである。

……などと、冷静に分析している場合ではない。

四方八方から迫り来るブレードをかるうじてかわすペンユウとワームウッド。

しかも、その隙間からは機銃やミサイルも飛んでくる。

これではいつか当たってしまう！

ペンユウは頭上から振り下ろされたブレードを、横に飛んでかわした。

しかし足は途中で向きを変え、ペンユウの逃げた軌跡を追ってくる！

——これは!?

マシンガンを足に向けて撃つ。

ダメージはないだろうが、衝撃で足の動きが一瞬止まる。

その間に、ペンユウはその場を離れて難を逃れた。

これは、もしかしたらいけるかもしれない!

思い立ったが吉日、リンファは通信を開いて叫んだ。

「ヨシユア! 合図したら死ぬ気で攻撃して!」

『……了解』

この作戦には危険が伴う。

しかし、決まればカタがつく!

……と。その時、ペンユウがバランスを崩した。

倒れはしないものの、一瞬動きが鈍る。

そこを見逃すはずもない。

すかさずドレッドノートのブレードが横手からペンユウを襲った。

慌ててブースターをふかし、逃げまどうペンユウ。

しかし足はその後を執拗に追い続ける。

——今だ!

ペンユウが地を蹴って飛び上がった。

しかし、レーザーブレードもその後を追う！

「必殺！ リンファキイイイイイック！」

グアッシュ！

なんとペンユウは、下から追ってきたドレッドノートの足を蹴り飛ばした！

足は軌道をずらされ、あらぬ方向に曲がっていく。

その方向にあるのは……ドレッドノートの足、二本！

ギュゴウアアアッ！

もうもうと立ちこめる金属の焼ける臭い。

ドレッドノートは、自分の足を自分のレーザーブレードで灼き斬っていた。

それも二本。

当然バランスを崩し、巨体が地に崩れ落ちる。

リンファが叫んだのはその後だった。

「今よ、ヨシユア！」

叫びに応えるようにワームウッドはありったけのキャノンの弾丸を発射した。

爆発に継ぐ爆発。

紅蓮の炎が、巨大なドレッドノートのボディを灼き尽くしていく！

そして……煙が収まったあとの残っていたのは、完全に動かなくなったドレッドノート
の残骸だけだった。

*

『ひ、非常事態です！』

通信相手の男は慌てた様子でまくしたてた。

『立った今入った連絡で……』

陽動部隊のカットラス及びドレッドノート……

ぜ、全滅です』

なんだ、そんなことか。

彼は全く落ち着き払ったものだった。

そんなこと、部隊編成をしたときからわかりきっていたことだ。

しかしまあ、常識の世界で生きている人間には驚くべきことなのだろう。

「問題はない。メインはこちらだ。

……予定通り行こう」

『は……了解……しまし』

相手の男が全て言い終える前に彼は通信を閉じた。
うるさいのだ、いちいち。

これから素晴らしいショーが始まるというのに。

騒ぎ立てるのはマナー違反、である。

これはいくつかスイッチを操作した。

起動する。彼の乗る、このACが。

そう、彼が座っているのはコックピットのシートだった。

周りにはレバーやらスイッチやらモニターやらが所狭しと並んでいる。

この機体の名称は、彼が付けた。

素晴らしい名前だと自負している。

聖書にもある。ヨハネによる福音書、第一章、1—3節。

《初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。》

この言は初めに神と共にあった。

すべてのものは、これによってできた。

できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった》

別に神や聖書を信じているわけではない。

しかし、この言葉には奇妙な説得力があった。

万物の本質は言葉である……

それは言葉を持つ唯一の生物である人間を、優位に立たせようとする考えでもある。しかしある意味ではこれは真実だ。

付けられた以上、名前はすでに記号の域を脱してしまうのだ。

名前が、それ自体になってしまふのである。

だから彼もこの機体に名前をつけた。

頭を捻って、普段あまり使わない言葉を吟味した。

そして付けた名前がこれだ。

五十年間、人類が地下で暮らすはめになった元凶。

人が背負う、史上最悪の重荷。

彼の理想を実現する機体としては、もっとも適した名前。

即ち、

H—P 『大破壊——ホロコースト』。

つづく。

05 大破壊

『やれやれ……とんでもない化け物だ』

『なんか、よくぞ生き残ったって感じ』

リンファ達は口々に愚痴をこぼした。

エリイもほっと胸をなで下ろした。

一時はどうなることかと思ったが、さすがはあの二人である。

自宅のコンピュータに向かってエリイは話しかけた。

「おつかれさまでしたあ〜」

『急にいつものエリイに戻らないでよ……なんか疲れる』

しかし、エリイは一抹の不安を感じていた。

今回襲ってきた二種類のMTは、どちらもオムニチャンス・インダストリーのもの。
ならば奴がでてきてもおかしくないのだが……

……と、その時。

『デコイ部隊、聞こえるか!』

これは、アンテナ車に入った通信である。

エリイがハッキングしているせいで、ヨシユアやリンファにも声が伝わっていく。それにしても、デコイ部隊とは……まさか？

そんなリンファ達の心中など知る由もなく、あのヤマザキとかいう男が応える。

『聞こえている。どうした?』

『こちら本社! 大変だ、敵がこちらを襲撃している!』

『何?! 囷作戦がばれたのか?』

はやく、社長を避難させるんだ!』

なるほど。

ということとは、この輸送車自体がダミーだったということである。

おそらく、本社の社長宛に襲撃の予告状でも届いたのだろう。

襲撃者から逃れるために社長が移動する、という情報をわざと相手に流す。

そしてレイヴンをやって囷に襲いかかった敵を撃破する、という算段である。

もちろん本物の社長は本社で隠れている、というわけだ。

これならたとえ迎撃に失敗してもレイヴンが死ぬだけで済む。

しかし、それがばれていたということは……

敵は、こちらの計画を知っていながらわざわざ引つかかった、ということになる。何故そんなことをしたのか、誰にも見当も付かなかった。

『それが、社長がおかしいんだ。』

さつきから、奴が来た、とか言つて頭をかかえてるだけで動こうともしない……』

——奴!?

エリイの脳裏を嫌な予感がかすめた。

『ともかく、敵の映像を送れ!』

いますぐこつちのレイヴンを連れて救援に向かう!』

『了解!』

そして送られてきた映像に、三人は言葉を失った。

*

「社長、ここは危険です! 社長!」

カトー・ラテックス社長、テルミチⅡカトーは、椅子に埋まったまま頭を抱えていた。部下達の声など全く聞こえては来ない。

ただ、三年前のことが頭をよぎっていくだけだった。

「わたしは……わたしは悪くない……」

違う……違うんだあ……」

部下は訝しげに眉をひそめた。

一体どうしたというのだ。

普段は聡明で落ち着いたこの社長が、まるで怯えた羊のような目をしている。

「敵襲だ！ ビル正面に赤いACが一機！」

別の男が社長室に駆け込んできた。

その報告を聞いて、社長が弾かれたように顔をあげる。

後ろを振り返り、窓にへばり付いた。

窓からは表の通りの様子がよく見える。

街の中心部、大通りに面した一角。

文句なしの一等地に、この本社ビルは建っている。

道の向こう側に、赤いわだかまりが見えた。

明らかに周囲の闇とは異質な空間。

わだかまりはやがてはつきりとした形を得て、人の形をとった。

AC。

それも、普通のACとは違う。

見たこともないタイプのAC。

その肩には、見覚えのあるエンブレムが張り付いていた。

「ひっ……ひああああああああああつ!!」

*

「あのAC!」

『似てる……あの工場にいたACに』

リンファとヨシユアはそれぞれ叫び声を上げた。

そう。

送られてきた映像に映っている赤いACは、かつて工場で遭遇した謎のACとうり二つだった。

赤黒く塗装された、重量感のあるボディ。

現行のどの規格にも当てはまらない特異な構造。

しかし、違う点が一つある。

肩に、大きな筒を一本背負っていることだ。

ただの筒ではない。付け根の部分には円形のユニットが付属している。

おそらく、円形加速器で加速した砲弾を高速射出する、レールガンと呼ばれる兵器だろう。

『見ているな、エリイ。』

……そしてその相棒、タオ・リンファ道嶺華とヨシユア_{||}オースティン』

聞いたことのない声が聞こえてくる。

通信機を通じて、おそらくは、あのACから送られてきた声が。

男の声である。

『やっぱり……やっぱりあなたなのね』

エリイは半分呆然としながら呟いた。

リンファの眉が歪む。

この男と知り合いなのだろうか。

『止めて……今なら戻れる。』

戻ろう、あの頃に。

二人で……二人で一緒に暮らそう』

しばし、相手の男は沈黙した。

しかし雰囲気は、考え込んでいるという風ではない。

エリイの言葉に苦悩しているのではないのだ。

『シヨアの始まりだ』

『止めて……お願いだから……』

『よく見ておくがいい。』

タオリンファ、そしてヨシユアオーステイン。

私が今、人の力というものを示してやろう！』

『テスト!!』

通信は一方的に閉じられた。

男の声はもう聞こえてこない。

沈黙が、辺りを支配した。

それをうち破ったのはヨシユアの声だった。

『あのAC……動いている!』

送られてくる映像の中のACが、地面に片膝を付いた。

肩のレールガンを左手で支えて……発射の準備をしている!

その時、エリイの脳裏をどす黒い予感が駆け抜けた。

『リンファちゃん、逃げて! はやく!!』

そして次の瞬間——

ギュゴグガアアッ!

閃光と爆音が、全てを飲み込んだ――

*

倉庫の中には、ただただ沈黙だけが満ち溢れていた。

普段からこの、リンファの住処はうるさい場所ではない。

しかし、今日の静寂はいつもとはわけが違った。

何処までも深く。

何処までも暗く。

耳に入ってくるのなら、地獄の呪詛でもまだました。

普通ならそう思う。

だが、ここにいる誰も、そんなことは考えなかった。

静寂が破られる時。

それは、おそらく最悪の事態を耳にする時なのだ。

それでもヨシユアは、勇気を振り絞って言葉を捻りだした。

「説明してくれ」

それだけで、彼の意志を伝えるには十分だった。

エリイはじつとうなだれていたが、やがて重たそうに頭を持ち上げた。そしてへらへらとした笑いを浮かべる。

「エリイ、わかんない……」

なんてわけには、いかないか」

エリイは自嘲気味に目を細めた。

「何から——説明すればいいかな」

「あの爆発のことからだ」

無難なところだ。

誰もがそう思った。

「反粒子、って知ってる?」

普通の粒子と全く同じ性質をもちながら、逆の電荷を持っている粒子……

それを反粒子と呼ぶの。

たとえば、電子に対する陽電子、陽子に対する反陽子とかね。

そして、反粒子によって構築された物質は、反物質と呼ばれる」

学のないヨシユアには、彼女の言っていることがよくわからなかった。

しかし、とりあえずそういうものなんだと納得するふりをした。

「反物質は、物質と出会うと互いに消滅する。」

その瞬間、 γ 線とともに、莫大なエネルギーを放出するの。

そのエネルギー量たるや、1kgの反物質が消滅しただけで、周囲30kmを焼き尽くし、その中心部の温度が10の39乗度を超えるほどのものよ」

弾かれたようにヨシユアの顔が上がった。

原理はよくわからなかったが、エリイの言いたいことはなんとなくわかる。

「まさか、それが……」

「そう。あの爆発は、反物質が物質と出会うことによつて生じたものよ。

つまり、反物質爆弾とでも呼ぶべき兵器ね。

おそらく、この間の工場施設もこれで破壊されたに違いないわ」

ヨシユアは言葉を失った。

しかし、ここで呆然とするわけにはいかない。

まだまだ、聞きたいことは山ほどある。

「それじゃあ、あのAC……いや、あれに乗っていた男は？」

「……テストライダードリー。」

わたしの、昔の彼」

エリイは懐かしそうな瞳で遠くを見つめた。

つづく。

06 ラスト・ミッション

「初めて会ったのは、大学に入ってすぐのころだった。

わたしと同じ、機械工学を専攻してて……

いわゆるライバルってやつね。

でもそれだけじゃ終わらなかった。

そのうち、お互いが気になるようになって……

つきあい始めたのは三年目。

楽しかった。

彼、ロマンチストでね。

いつも言ってた。今は世界中で争いばかりが起こっている闇の時代だ。

でも、いつか人々がみんな笑って暮らせる時がやってくる。

その時人がより幸せになるために、自分は研究をしてるんだ、って」

今まで誰にも語ったことのない過去を話すとき、エリイはまるで小さな少女のよう

だった。

草原の真ん中で、そよ風に吹かれて揺れる一輪の花。

周りの人間にそんなイメージを抱かせた。

「大学を卒業して、博士号とって……」

わたしたちは二人とも、ムラクモ・ミレニアム社に入社した。

大学自体がムラクモ資本だったから、卒業生はほとんどそちに流れるのよね。

そして、わたしはACやMTの開発研究、テスラは反物質の研究に携わるようになった。

でも、それから一ヶ月もしないある日……

ムラクモ・ミレニアムは、敵対するクローム社の猛攻を受けて滅亡した」

三年前に起きた有名な事件である。

世界を二分する大企業同士の抗争に、決着が付いたのだ。

当時世界を震撼させた大ニュースである。

「わたしたちは、そのとき離ればなれになって……そして、二度と会うことはなかった。

お互いに居場所がわからなかったの。

でもこの間の事件で、オムニシヤンス・インダストリーの名前が出てきて……

まさかと思って調べている内に、彼の名前が出てきたのよ。

彼は、ムラクモの滅亡後、新興のオムニション社に入社して再び研究を始めたの。でも、ムラクモというバックボーンを失った彼が研究を続けるためには、資金が必要だった。

——つまり、兵器の開発を強制されたのよ」

彼女の言葉に、密かな怒りの色が含まれていることに、ヨシユアは気付いた。

「わかる？」

理想家の彼が……

誰よりも平和に憧れていた彼が、自分の生み出した技術を兵器に転用しなければならなくなつた時の気持ち……

彼はそこから狂ってしまった。

常識を外れた強力な兵器を造りだし、だんだんと影響力を強めて……

彼はとうとう、会社を乗っ取ってしまった。

そして、自分の目的を達成するための最終兵器を造り始めたのよ。

それがあのAC——HIP『ホロコースト』

ヨシユアは恐怖に近い感情を抱いていた。

あの巨大MTも悪魔のごとき破壊力を持つ反物質爆弾とかいうものも、たった一人の人間が生み出したものだったのだ。

「目的？」

エリイは目を閉じた。

言わねばならない。

この二人には、知ってもわわなければならぬ。

「復讐。」

自分が兵器開発をする羽目に陥った元凶に対する、復讐よ。

その手始めが、紛争当時にムラクモを裏切つてクロームに与したカトー・ラテックスだった。

そして今やテスラの矛先は、全ての旧クローム系企業と……

そしてレイヴンに向けられている」

かつてムラクモが滅びた原因になったのは、クロームではなくたつた一人のレイヴンだった、という噂がある。

そのレイヴンは圧倒的な強さを持ち、ムラクモの事業をことごとく邪魔していったという。

もつとも、そのレイヴンはクローム社が滅びる因でもあつたらしいが。

「全ての旧クローム……おまけにレイヴンだと？」

そんなもの、全員殺そうと思つたら——」

人類を皆殺しにするしかない。

ヨシユアは最後まで言い切ることができなかった。

ようやく分かったのだ。

エリイがいつになく真剣になっている理由も、テスラがあんな破壊力のある兵器を造った理由も。

エリイも、もはや説明の必要はないと感じたのだろう。

それつきり、口をつぐんだ。

沈黙がまたしても辺りを満たした。

しかし、今度の静寂は長くは続かなかった。

リンファが口を開いた。

今まで、一言も話さずにうずくまっていたリンファが、言葉を紡ぎだした。

「だから……何?」

彼女の唇は震えていた。

エリイは悲しげにうつむかざるを得なかった。

「何なのよ!」

あたしたちにどうしろっていうの!?

あのACを倒せって?

冗談じゃないわ!

地下都市ひとつ、一撃で全滅させるような化け物、一体どうやって倒せつて言うのよ!?」

そう、地下都市ヴォルカニクスは、ホロコーストの放った一発の反物質レールガンによつて、完全壊滅していた。

もちろん、自分の機体が巻き込まれても耐えられるように威力は控えてあるのだろうが……

それでも、カトー・ラテックス本社ビルは蒸発。

そして、地下都市という閉鎖空間内ではらまかれた熱は、ヴォルカニクスに住まう百二十万人を一瞬で灼き殺したのだ。

その後、ホロコーストは何処かへ姿を消した。

しかしそう遠くないうちに再び姿を現すはずである。

おそらくは、旧クローム企業とレイヴンが世界一多く、ヴォルカニクスから一番近い、このアイザックシティに。

「リンファ、お願い……」

「嫌よ……死にたくない……」

「あたしは死にたくないのよ!」

もう、エリイは何も言えなかった。

諦めと困惑の色が同時に彼女の顔に浮かぶ。

その時、ヨシユアは不意に立ち上がった。

エリイの肩に手を置き、その耳元で小さく呟く。

「しばらく、二人だけにしてくれないか——」

*

ヨシユアはうづくまっているリンファに歩み寄った。

そして彼女と背中合わせにして、床に座り込む。

「シエリーって女を憶えてるか？」

忘れるはずもない。

かつてリンファも関わったある事件で、狂った殺人鬼に惨殺されてしまった女性である。

ヨシユアの知り合いらしい。

「綺麗な目をしていた。

見ていると、何もかも見透かされているような気分になった。

そうだな……あれは、畏怖と呼ぶのがふさわしい感情だった」

リンファは何も応えず、聞いていないふりをした。

一体こいつは何を言っているのか。

昔の女の自慢をする気なのだろうか。

「三年前のある日、別れ話をもちかけられた。

いきなりのことだった。

俺は驚くあまり、理由を聞くのもわすれてしまった。

俺は今でも後悔してる。

どうしてあの時、本当のことを言わなかったのか……

あいつに、自分の気持ちを伝えなかったのか」

「何が言いたいのか」

たまらずにリンファは聞き返してしまった。

これ以上、黙ってヨシユアの昔話を聞くことが堪えられなかった。

「メッセージさ。俺からの」

ヨシユアは徐に立ち上がった。

「お前はここにいろ。」

なに、心配ない。奴は俺が片付ける」

事も無げにヨシユアは言い捨てた。

その口調には一片の曇りも迷いもなかった。

そして、次の彼の言葉は何処までも深く、何処までも優しかった。

「愛しているよ、リンファ」

*

ヨシユアは後ろ手にドアを閉めた。

地下都市の中とはいえ、空調設備は行き届いていない。

倉庫の外に出ると、夜の冷たい空気が肌を付いた。

ポリシーである黒いロングコートの内側から、彼は煙草の箱を取り出した。

一本取って口にくわえ、もう一度ポケットを探る。

そのとき、目の前にライターが差し出された。

一瞬面食らうが、その火に煙草の先端を近づけ、火を付ける。

ヨシユアの口から紫煙が漏れた。

「もう、いいの？」

「ああ」

火を差し出したエリイの顔には、笑顔が浮かんでいた。

しかしその頬はひきつり、無理に笑っていることは誰の目にも明らかだった。

「行つて……くれるの」

ヨシユアは上を見上げた。

しかし見えるのは、もちろん天井だけである。

もしここが地上なら、星は無理でも月の一つも見えただろうが。

「ありがとう——」

「勘違いするな。」

あんたのために行くわけじゃない」

そうだ。

ヨシユアも理解していた。

テスラを倒すということ、それはエリイの愛する男を殺すということなのである。

それを理解しているからこそ、彼は行く気になつたのだ。

きつと、頼んでいるエリイの方がやりきれないに違いない。

エリイは意地悪く言った。

「リンファのためなら死ねるのね」

ヨシユアはそれを鼻で笑った。

「さあな。ただ……」

目が、変わった。

そこに浮かんでいるのは、決意でも怒りでもない、しかしどんな感情よりも真剣な感情だった。

「飢えてるのさ。俺の中の悪魔がな」

つづく。

07 男の戦い

〔所属不明機確認〕

コンピューターがヨシユアに告げた。

リーダーでは、赤い光点がゆっくりと移動していた。

おそらく、奴に間違いない。

ヨシユアはワームウッドの操縦桿を握った。

真つ直ぐに、奴に向かうコースを取る。

奇襲など仕掛ける気は毛頭なかった。

どんな奇襲を仕掛けたところで、おそらく無駄だろう。

正面から戦って倒すことができなければ、どんな戦法をとつても勝つのは不可能だ。

そんな気がした。

それにしても、奴がこのコースで来てくれてよかった。

確かにここはヴォルカニクスからアイザック・シティに向かう最短コースなのだが、

別の発見されにくいコースで来る可能性もあったのだ。

もしすれ違いにでもなろうものなら、それこそ笑い話にもならない。

やがて、モニターの端に赤い影が映り始めた。

すぐに映像が拡大される。

赤黒く、すこし太めのボデイルイン。

肩に背負ったレールガン。

間違いない。倒すべき相手、H—P 『ホロコースト』である。

『やはり来たか』

不意に、通信が入った。

ホロコーストに乗っている男、テスラの声である。

『君は、ヨシユアⅡオースティンだな。』

タオⅡリンファはいないのかね?』

「あんな小娘をアテにするほど落ちぶれちゃいねえよ」

ヨシユアはいくつかスイッチを操作した。

ガトリングガン、レーザーキャノン、各部駆動系……

全てが限界近い出力で稼働を始める。

「早速で悪いが……始めようか!」

*

リンファはうなだれたまま、床の一点を見つめていた。そして、今起こっていることを理解しようとしていた。テスラ。

反物質。

エリーの言葉。

そして、ヨシユアの言葉。

全身が熱くなった。

あの時と同じだ。

夜の通りで、ヨシユアの言葉を聞いたときと。

なんなんだろう、この感覚は。

苦しい。

でも、なぜか気分が高揚している。

舞い上がってしまったって、じっとしていられない。

気が付くと、リンファの口から溜息が漏れていた。

瞬間、リンファの心の中に一人の男の顔が浮かんだ。

金髪で、冷たい目をしていて、人を見下したような薄笑いを浮かべている。憎たらしいあの男。

それは、ヨシユアの顔だった。

リンファは頭を振った。

一瞬間の映像が揺らいだ。

しかし次の瞬間には、前よりはつきりとヨシユアの顔が像を結んだ。

否定しなかった。

でも、心を満たしているある一つの言葉を、リンファはどうしても忘れ去ることがで

きなかった。

逢いたい。

ヨシユアに——逢いたい。

どうして？

どうしてこんなことを考えるの？

この熱さも、この高揚感も……みんな、ヨシユアのせいなの？

痛い。

苦しい。

助けて。

誰か、助けて！

——ヨシユア。

まただ。

またあの顔が浮かぶ。

忘れろと、自分自身に言い聞かせる。

しかし、彼の顔は決して消えることはなかった。

ヨシユアは、今何を考えているんだろう。

ヨシユアは、あの時何を考えていたんだろう。

その時リンファは気付いた。

分からないのは、ヨシユアの気持ちではなかった。

そう。分からないのは自分の気持ちだ。

あたしは今、何を考えているんだろう。

そうだ。

一体今まで何を考えていたんだ！

死んでしまう。

このままでは、一人で行かせてはいけない！

「エリイ！」

リンファは力の限り叫んだ。

次の瞬間、一体いつの間に入ってきていたのか、ペンユウの影からエリイが顔を出した。

「じゅんびできてます！」

えへへへへへ

エリイは信じていたのだ。

きつと、リンファならいつもの自分を取り戻すことができる、と。

*

「オオオオオオッ！」

ヨシユアの咆吼が響き渡る。

それに呼応するように、彼の相棒ワームウッドが地を滑った。

ガトリングガンが、ホロコーストを狙って弾丸をばらまく。

『そんなもの！』

ホロコーストが左手を掲げた。

一瞬、その手のひらが輝いたように見えた。

そして次の瞬間、ガトリングガンの弾丸が全て軌道を反らされ、明後日の方向へねじ曲がる！

——デコイフィールド！

かつてホロコーストの試作型、H—2が持っていた機能である。発生した強力な磁界によって、弾丸が反らされてしまうのだ。

しかもこれは、小型化して左手にその機能を付けたようである。どうやら、実弾兵器は無駄のようである。

『絶対的な差というものを、見せてやろう！』

左手を下ろし、ホロコーストは今度は右手を掲げた。

左手に付いていたのがH—2の機能だということは……まさか、右手は!?
バガンツ！

右腕の装甲板がめくれ上がった！

その奥から、いくつものものがのぞく……

ミサイルである。

その数は、おそらく30は下らない！

——H—1の持っていた機能だ！

これも右腕だけに簡略化されているが、それでも恐ろしい数!

しかし、ヨシユアはほんの少しも慌ててはいなかった。

「差を見せる? それは……」

ヨシユアは操縦桿を握りしめた。

汗が額に滲んでいるのがわかる。

落ち着け。

ヨシユアは自分に言い聞かせた。

自信なんて少しもない。

しかし、かつてこのワームウッドに乗っていた親父なら、そしてリンファなら、この程度のことにはやってのける!

「こういうことを言うんだッ!」

ミサイルが一齐に発射される!

そしてワームウッドは、糸を引いて飛来するミサイルの隙間を、縫うようにしてぐぐり抜ける!

まさに神懸かり的な操縦!

これで、一気に間合いを詰めた!

ワームウッドの肩のキャノンが火を噴いた。

光の弾丸がホロコースト目がけて一直線に突き進む！

おそらく、これならデコイフィールドの影響も受けないはずだ！

ゴグガアアアッ！

弾丸はホロコーストのコアに命中した。

もうもうと巻き起こる砂煙。

しかしそれが収まったとき映ったのは……

傷一つ付いていないホロコーストの姿だった。

とんでもない装甲！

いくら重装のACやMTでも、このキャノンを食らえば全くの無傷とはいかない。

何をとつても、信じられない性能である。

ホロコーストが左腕を振るう。

この体勢は、おそらくパンチを放つつもりだ。

これもH-2と同じ機能である。

慌ててワームウッドは後退するが、ホロコーストの拳は予想以上のスピードを持っていた。

かわしきれずに、重い一撃が頭部をかすめる。

バギンッ！

鈍い音を立てて、ワームウツドの頭部に付いている角が折れとんだ。

幸いにも、これはただの飾り。

実害はない。

しかし問題は別の所にある。

ホロコーストがこれほどの格闘能力を持っているということとは、接近するのも危険だ。

『無駄だ！』

私のホロコーストは最強なのだ！』

「確かにそうかもしれない。

……だがな、俺は退くわけにはいかない！」

ワームウツドのガトリングガンが火を噴いた。

連続で幾つもの弾丸が放出される。

ホロコーストは慌てることもなく左手を掲げた。

その手のひらが一瞬光る。

すぐさまデコイフィールドが発生し、金属製の銃弾をあらゆる方向に吹き飛ばす。

「俺はもう二度と、あんな後悔はしたくないんだッ！」

脳裏をかすめるシェリーの姿。

ヨシユアは奥歯を食いしばった。
愛する女を失う哀しみ。

女一人護りきれなかつた自分の無力に憤るときの苦しみ。
もう何も、失いたくはなかつた。

——そのためなら、命をなげうってもかまわない！

つづく。

08 女の戦い

『後悔することなど何も無い。』

後悔する必要もない。

なぜなら、私が後悔する暇すらも与えないからだッ！』

デコイフィールドを維持したままホロコーストは右手を掲げた。

その装甲板がめくれ上がる。

再度その内側にのぞく無数のミサイル！

——今だ！

ゴガアアアッ！

ホロコーストの左の手のひらが爆発した！

ガトリングガンの弾丸を食らったのである。

『な………！ 何故、貫かれたのだ!?!』

ガトリングガンの弾がデコイフィールドを貫いた理由はただ一つ。

手のひらから発生する磁界に対して、弾丸が並行に飛来したからである。

磁界によって受ける力と弾丸の速度が一直線上にあれば、たとえ威力が殺がれても貫くことができるのである。

勿論、言うのは簡単だが、実行するには針の穴を通すほどの正確さが要求される。

しかも、ホロコーストが少しでも腕を動かせば失敗してしまふ。

だからこそ、相手が右腕を動かすまで待ったのだ。

テスラがミサイル発射に気を取られている内に、攻撃するために。

ともかく、これでデコイフィールドは封じた！

『くっ……だが、まあいい！』

これで終わりだっ！』

ホロコーストの右手からミサイルが発射された。

ミサイルの引く白煙が、蜘蛛の巣のように四方八方からワームウッドを包み込む！

ワームウッドはガトリングガンでミサイルを撃ち落としながら必死に回避する。

しかし、ついにかわしきれずに数発が右腕に命中した！

瞬間、コックピットに灯るレッドランプ。

けたたましい警告音を聞きながら、ヨシユアは舌打ちをした。

放っておけば、爆発する危険がある。

バシユッ！

ワームウッドの右腕がコアから切り離され、地面に転がった。

ダメージは小さくないが、まだ戦える！

しかし次の瞬間、目に飛び込んできた光景にヨシユアは驚愕した。

ホロコーストが、片膝を付いてレールガンを構えている！

おそらく反物質レールガンを発射するには長い準備時間が必要なのだろう。

そのため、接近戦では使いづらい兵器なのだ。

それを敢えて準備しているということは、多少のリスクは覚悟で早く決着をつけるつもり、ということだ。

「させるかっー！」

ワームウッドは全速力で前進しながらレーザーキャノンを連射した。

相手は止まっているのだ。

外れるはずもなく、キャノンの弾丸はホロコーストのコアに命中する。

しかし、いくら攻撃を食らっても全くホロコーストは揺るがない！

常識を外れた装甲のおかげで、攻撃を食らいながら発射準備を進めていく！

こうなったら、至近距離でありつただけの弾をぶち込むしかない。

ワームウッドは猛スピードでホロコーストに迫る。

そして、ホロコーストの目の前まで近付いた、その時！
ゴガアアツ！！

ホロコーストの繰り出すパンチが、ワームウッドを捕らえていた。

*

——急げ！

ブースターをこれでもかと嘖かして、ペンユウは荒野を突き進んでいた。
ペンユウのリーダーの性能はかなり高い。

遠距離まで完璧に索敵できる。

そして、そのリーダーには、二つの赤い光点が記されていた。

おそらく、ワームウッドとホロコースト。

もう戦闘は始まっているのだろう。

しかし距離がかなりある。

全力で進んでも、あと五分はかかる。

——お願い……無事でいて。

リンファは今まで、神を信じる人間を馬鹿にしてきた。

神など存在しない。

仮に存在していたとしても、人間を都合良く助けてはくれない。そう思っていた。

しかし今。

リンファは神に祈っていた。

ただひたすら、ヨシユアの無事を祈っていた。

そして、一刻も早くヨシユアの元へたどり着くことを願っていた。

あと三分。

ジエネレーターが悲鳴を上げている。

ブースターを連続使用しすぎたようである。

十秒ほど、ブースターを使わずに歩かなければならない。

こんなことなら、ブースターなしで高速移動できる四足タイプにしておくんだった。

リンファは今さらながら後悔した。

あと一分。

そのとき、モニターに光が映った。

あれはおそらく、ワームウッドの放つレーザーキャノンだ。

よかった、少なくともまだ無事らしい。

そして彼らは、目の前のこの丘の向こうにいる。
そして。

ついにたどり着いたリンファの瞳に映ったのは、ホロコーストの拳の直撃を受ける
ワームウツドの姿だった。

*

ワームウツドの青いボディが宙を舞う。

コアと脚部のつなぎ目に命中した拳は、ワームウツドの各部をバラバラに引き裂いて
いた。

青いコアが地面に落ち、なんだか跳ねながら転がった。

なんてことだ。

あの中には、ヨシユアが乗っているのに！

リンファは我が目を疑った。

荒涼たる大地。

そこに転がる、無惨な姿のワームウツド。

そして、肩のレールガンを構えた姿勢のまま、ワームウツドを拳で殴り飛ばしたホロ

コースト。

リンファは俯き、奥歯を噛んだ。

『遅かったな、タオ||リンファ』

テスラの声が聞こえてきた。

息づかいが荒い。

どれほど激しい戦闘だったのかがよくわかる。

『恐ろしい男だった……普通のACCで、このホロコーストに傷を負わせた。』

一人で来てくれて助かったよ』

次の瞬間、リンファはたまらず吼えた。

獣の如く、悪魔の如く。

吼えて、リンファは手の内にある操縦桿をなぎ倒した。

ペンユウも、彼女の怒りに応えるが如く、駆け抜けた。

『今さら何をしようともう遅い！』

準備は既に完了したッ！』

レールガンが火を噴く。

死を招く砲弾が発射された。

滅びを撒く悪魔が、その牙をむいた。

そして、ペンユウの左手に光が灯った。

*

「聞いて、リンファ」

ヨシユアを追って出撃する直前、エリイはリンファに告げた。

「テスラは、かつて反物質を安定化させる研究を行っていたの。

でも、結局は無理だった。

現在の科学では……たとえテスラほどの天才の力をもってしても、物質と出会った瞬間に消滅してしまう反物質を安定化させることは不可能だったのよ」

リンファにはよく意味がわからなかった。

しかし、心のどこかで少しひっかかるものがあった。

疑問を抱いたのである。

「じゃあ、爆弾なんて造れないじゃない」

エリイは頷いた。

伝えたかったことをリンファが理解してくれたことに満足しているのである。

「そう。」

だから、あのレールガンの弾丸は反物質を練り固めた造った、なんてものじゃないのよ。

つまり……」

エリイは眼鏡を直した。

ここからが本題、と言わんばかりに口調を強める。

「弾丸それ自体が、小型の反物質生成装置なのよ。

生成した反物質は、即座に周囲の物質と打ち消しあい、エネルギーをばらまく」

どっちでもいいんじゃないか、とリンファは思った。

そんな仕組みを知ったところで、大した差はない。

しかしそうではなかった。

これは重要なことだったのだ。

「だから、レールガンに対抗する手段が一つだけあるわ——」

つづく。

09 女レイヴンの日常は、血と硝煙と愛に満ち

——馬鹿な。

信じられなかった。

テストには、どうしても事実を信じることができなかった。

——砲弾を、斬り裂いた……だと？

そう。

ペンユウの振るったレーザーブレードは、一分の狂いもなく撃ち出された反物質生成装置を真つ二つに斬り裂いていた。

対抗する手段とは、つまり——

砲弾が反物質を生成する前に、砲弾自体を破壊することだったのだ。

まだ、テストは信じられなかった。

もし、レーザーガンの角度が数度ずれていたら？

もし、レーザーブレードがあと十五cmずれていたら？

小さな砲弾は、間違いなく周囲三十kmを焼き尽くしていただろう。

ペンユウのブレードがホロコーストのコアに食い込んだ。

先の戦闘で、ヨシユアがひたすら狙い続けていた、コアの中心のある一点に。

無敵のはずのホロコーストの装甲が、破られた。

わからなかった。

テスラには、わからなかった。

自分が何故負けたのか。

——偶然？

いや、違うな。

ようやく、テスラははつきりと理解した。

彼は、負けたのだ。

偶然にでも、運命にでもなく。

ヨシユア||オースティン。

タオ||リンファ。

そして、エレン||ガブリエラ。

あの三人に。彼は、全力で戦い——そして、負けたのだ。

テスラの脳裏に、過去の光景が浮かんだ。

大学の入学式。

そこで出会った一人の女性。

エレン、と彼女は名乗った。

そして次に、エリイと呼んで欲しい、と言った。

エリイは天才だった。

テスラもまた、天才だった。

二人は互いに競い合った。

またある時は協力し合った。

最高の相棒だと、互いに思っていた。

やがて、二人は惹かれ合った。

二人は強くなった。

今までよりも、ずっと強くなった。

—— 楽しかったな。

テスラはそう思った。

あの頃は毎日が新鮮で、よく笑っていたような気がする。

そして、側にはいつもエリイがいた。

—— ああ、そうか。

やっと彼は全てを理解した。

——私は、死ぬのか。

彼の心は、自分でも不思議なくらい安らいでいた。

目を閉じると、心の中で彼は囁いた。

——さよなら、愛しのエリイ。

*

近くの丘の上から、エリイは下の光景を見つめていた。

ブレードに貫かれ、ぴくりとも動かなくなったホロコースト。

その姿はまるでテスラそのものようだった。

頬を冷たいものが伝わっていった。

目を閉じ、昔を思い出す。

きっと彼は、初めて会ったのは入学式の時だと思っっているだろう。

でも、そうではないのだ。

入学試験の時。

エリイの乗っていた列車が悪戯半分のハッカーにハッキングを受け、乗っ取られてし

まった。

そしてそのハッカーをたつたの3秒で灼き殺し、列車の機能を回復させたのは同じ受験生であるテスラだった。

エリイがハッカーとしての腕も身につけたのは、この影響だ。

無事入学を決めたある日、エリイの友人がAC同士の戦闘に巻き込まれ、重傷を負った。

その時も、ただおろおろするだけのエリイを尻目に、友人に応急処置を施したのはテスラだった。

彼がいなければその友人は死んでいただろう。

エリイが医学を学びはじめたのは、この後だった。

そうだ。

今思えば、エリイはずっとテスラと一緒にだった。

何をするにも、いつもその瞳の先にはテスラの背中があった。

——楽しかったな。

エリイはそう思った。

そして、愛する男に最後の言葉を投げかけた。

「さよなら、テスラ。」

「運が良ければ、天国でまた逢えるわ——」

*

終わった。

コアをブレードで貫かれたホロコーストは、今や完全に機能停止していた。おそらく、パイロットも生きてはいないだろう。

リンファは肩で息を付いた。

一瞬の安堵の後に、閃光のように不安が蘇る。

慌ててリンファはペンユウを動かした。

ゴミのように地面に転がるワームウッドのコアに駆け寄り、膝立ちになる。すぐさまリンファはペンユウから飛び降りた。

コックピットのハッチは、リンファの手の届く位置にあった。

コアと脚部がバラバラになったおかげである。

スイッチを操作し、ハッチをこじ開ける。

中は凄惨たる様子だった。

内壁がいたるところで破れ、その破片にべつとりと血が付いている。

どす黒く、粘りけのある血。

そしてこの、鼻を突く異臭。

ヨシユアは脇腹を押さえ、シートに横たわっていた。

転がった時に頭を打ったのだろう。

額からも血が流れている。

そしてコートの内側、ちょうど手で押さええている辺りには――

間違いない。

傷は、内臓にまで届いている。

一刻も早くちやんとした手当をしなければ……

リンファは手をヨシユアの体の下に差し込み、力を込めた。

さすがに重い。

しかし、持ち上がらないほどではなかった。

なんとか狭いコックピットから引きずり出す。

「う……」

ヨシユアが小さく呻いた。

慌ててリンファは地面に座り込み、自分の膝を枕代わりにしてヨシユアを寝かせる。

「ヨシユア！」

リンファが呼ぶと、ヨシユアは薄く目を開いた。
意識はまだある。

懐から通信機を取りだし、リンファはスイッチを押した。
その時、ヨシユアの手がリンファの動きを制した。

「いい……間に……あわない」

リンファは息を飲んだ。

「やめてよ……そんなこと言わないでよ！」

ヨシユアの顔に、驚きの色が浮かんだ。

「あたし……やっとなわかつたの……」

ヨシユアの気持ち、あたしの気持ち、全部わかつたの！

だから……だから……！」

ヨシユアはか細く微笑みを浮かべた。

そして、静かに両目を閉じた。

リンファは手に力を加えると、ヨシユアの体を抱きしめた。

——冷たい。

雫が落ちる。

ヨシユアの頬が露に濡れた。

「暗い空から、一筋の雨が舞い落ちた。

雨は次第に強さを増し、大地を潤していく。

冷たい雨が、二人の体を優しく包み込む。

今、一つの物語が幕を閉じた。

エピローグ

That's not the end. See you someday, somewhat!

ふうつ。

ロビーのソファにゆつたりと腰を落ち着け、エリイは溜息をついた。

ここはアイザックシテイで最も大きな病院のロビーである。

病気だか怪我だか知らないが、数え切れないほどの人々が、入れ替わり立ち替わり、ひっきりなしに会計を済ませたり薬を受け取ったりしている。

中央にある大きなモニターには、ヒーリング・ミュージックに合わせて世界中の森林や渓谷、山頂からの眺めなどが垂れ流しになっている。

さつきまでそれに見とれていた子供が、薬を持った母親に手を引かれて立ち去っていった。

エリイは手の内にあるココアの缶を口に持っていった。甘く、熱い感覚が喉を通り抜けていく。

憂鬱な気分だった。

多分、もう自分は一生男を愛することはできないだろう。

でも、それでもいいと思った。

一人ではないのだ。

きつと、彼はずつと心の中にいて、見守ってくれるはずだ。

もう一口、エリイはココアを口に含んだ。

「エリイさん、ですネ？」

背後から声がかかった。

男の声である。

どこかで聞いたことがあるような気もするが、思い出せなかった。

エリイはソファに座ったまま振り向いた。

そこには、眼鏡をかけてネズミ色のスーツを着込んだ男が、薄笑いを浮かべて立っていた。

手には黒いアタッシュケースを持っている。

一見すると企業戦士のようにも見えるが、彼は違う。

「あなた……コバヤシさん？」

「憶えていらつしやいましたか。

光栄です」

彼の名は、シロウコバヤシ。

かつて、ある事件の時にわかかった、アリーナ管理委員の男である。

その名の通り、レイヴン達はその腕を競う闘技場、バトルアリーナの管理運営をして
いるのだが、一体何の用だというのか。

「お隣、よろしいですかね？」

エリイは無言で頷いた。

コバヤシはにっこりと微笑むと、スーツの裾を気にしながらソファに腰掛けた。

アタツシケースを膝の上に置き、留め金に指をかける。

「実は、あなたの相棒の方にお話がありましたね」

「また、アリーナのお誘い？」

「……御免なさい、あの娘は今、落ち込んでるから……」

コバヤシはまた、微笑んだ。

何もかも分かっている。そんな感じの微笑みだった。

エリイは少し戸惑った。

アリーナに出ろ、というわけではないのだろうか。

「ええ、お話は伺ってます。」

落ち着かれた時にでよろしいですから、伝言をお願いできませんか？」

「……どうぞ」

エリイが答えると、コバヤシは満足げに笑ってから留め金を指で弾いた。

ぱちんと小さな音がして、黒くて頑丈な箱が口を開けた。

中からいくつかの書類を取り出しつつ、コバヤシは眼鏡を直した。

「実は、先日開かれたマスターアリーナ選考会議……」

「そこである決定がなされてますね」

*

リンファは、椅子に座って窓の外を眺めていた。

壁は白く塗り固められ、飾り気のない室内には最低限必要なものが取りそろえられている。

どうして病室というものはこうも殺風景なのだろうか。

リンファは思った。

これでは、余計に患者が落ち着かないことはないだろうか。

しかし、窓の外は一層殺風景だった。

これが地上なら木々や草花が目を楽しませてくれただろうが、見えるのは病棟に面した道路と、そこを行き交う人々、そしてたまに突進してくる救急車だけである。

リンファは目を移した。

この病室に一つだけあるベッド。

そこには、一人の男が仰向けに寝そべっていた。

金髪とそれなりに端正な顔立ち。

いつものコートはさすがに着ていない。

今は病院から支給された、真っ白な服に身を包んでいる。

ヨシユアⅡオースティン。

今日でもう、あの戦いから一週間になる。

駆けつけたエリーの処置のお陰で何とか一命をとりとめたものの、ヨシユアはこの一週間、ひたすら目を閉じて眠り続けている。

——男が眠り姫になってどうする。

リンファは心の中で冗談を飛ばしてみた。

しかしそれでも、心の隙間は埋まらなかった。

ぼっかりと穴が空いている。

その穴に不安が入り込んでくる。

ヨシユアはもう、目を覚まさないのではないか。

医者は大丈夫だと言っていた。

でもそれは、自分を傷つけないための嘘なのではないか。

穴を埋めようとリンファは必死にあがいた。

でも、どんなに藻掻いても、結局は無駄に終わるのだ。

最後に行き着く結論はいつも一つだ。

ヨシユアに、逢いたい。

言ってしまうばそれだけだった。

何度目だろうか、リンファはまた溜息をついた。

その時だ。

ヨシユアの目が、うつすらと開いた。

「ヨシユアー！」

思わず椅子を蹴り、リンファは立ち上がった。

ベッドの側に駆け寄り、ヨシユアの顔を凝視する。

彼の頭が少し動き、その視線がリンファのそれと合った。

「リン……ファ……？」

呻くように、ヨシユアは呟いた。

遠い目で天井を見つめる。

しばらくそうしていると、次第に意識がはつきりとしてきた。

一つ一つ、想い出が蘇ってくる。

「俺は……また、生き残つちまったのか——」

リンファは無然としてヨシユアの顔を見つめた。

シーツの中に手を差し入れ、ヨシユアの手を握る。

ヨシユアの手は冷たかった。

「違うよ、それ」

ヨシユアの頭が動いた。

リンファの一片の曇りもない瞳を見た時、彼は自分の体が槍に貫かれたかのような衝撃を感じた。

「あたし、やっとわかったの。

あなたの気持ちも、あたしの気持ちも——

あたし、あなたの側にいたい。

あなたに、側にいて欲しい。

だから……」

リンファの瞳に涙が浮かんだ。

彼女の涙を見るのは、これが初めてだった。

奇麗だと思った。

不思議なことに、他には何も感じなかった。

ただ、その涙の美しさに感動し、見とれていた。

「だからずっと、あたしの側にいて——」

ヨシユアは目を閉じた。

涙が頬を伝う。

涙は白いシーツに斑点を創った。

それは、何よりも大きく、何よりも重い斑点だった。

リンファは立ち上がった。

そして、自分の唇をそつと彼のものと触れ合わせた。

That's not the end. See you someday, somewhere!

第6話 砂漠のグレイ・ロツク

01 悪夢

——どうしてなの、ヨシユア

気が付くと、彼は闇の中にいた。

一体ここはどこだ。

わからなかった。

しかし、それを考える気力もなかった。

まるで自分の心が闇に吸い込まれていくようだった。

もう何も、彼の中にはなかった。

ただ、何処から発せられているのかもわからない声を聞き、空虚な空間を眺めているだけだ。

——ねえ、ヨシユア。答えて

それでも一つはつきりしていたのは、自分の名前が誰かに呼ばれているということだった。

どこかで聴き覚えのある声だ。

でも、それが誰の声だったのかは一向に思い出せなかった。

——どうして殺したの？

悪寒が全身を駆けめぐった。

体中の汗腺という汗腺から汗が噴き出し、彼の皮膚の上にもう一枚の膜を作るかのようだった。

恐怖している。

自分は恐怖している。

彼は感じた。

口を開きたい。

大声で叫びたい。

やめろ、と一言叫んでここから逃げ出したい。

しかし口は開かなかった。

大声は出なかった。

やめろ、とは言えなかった。

突然、闇が晴れ渡った。

まるで雲の切れ間から曙光が覗くように、闇の向こうに何か明るいものが見えた。

彼はそつちに流れていった。

もうここは嫌だ。

光に当たりたい。

そう思った。

しかし闇が完全に消え去ったとき、彼の目に飛び込んできたのは闇色の光だった。

*

荒野に巻き起こる砂埃。

彼は思わず目を細め、顔を腕で覆い隠した。

自然の風ではない、何かによって起こされた熱風が彼のコートをはためかせる。

風に乗って流れてきたにおいが、彼の鼻をついた。

彼は遠くを見つめた。

一匹の巨大な蜘蛛。

それを取り囲む三人の巨人。

違う。あれは蜘蛛ではない。

彼は知っている。

あれは、彼の相棒だ。

そして巨人達は、敵。

まぎれもなく敵。

殺さなければ、こつちが殺されてしまう、敵。

彼はこの風景に見覚えがあつた。

「父さん！」

彼は思わず叫んでいた。

青い蜘蛛に向かつて。

その中にいる、一人の男に向かつて。

蜘蛛は動き出した。

蜘蛛が腕を振るうと、巨人の一人が崩れ落ちた。

また熱風が起こり、血のにおいが濃くなった。

「だめだ！ 闘っちゃだめだ！」

彼は精一杯叫んだ。

喉が潰れて一生話せなくなつたつてかまうものか。

今止めなければ、彼は後悔を背負うことになるのだ。

これから先、ずっと。

それは話せなくなるよりずっと辛いことだった。
そのときだった。

熱風が彼の頬を凧いだ。彼の後ろから。

彼は振り返った。

その直ぐ後ろに、巨人が立っていた。

鉄でできた巨人。

見覚えがある。

この中にいるのは、それは——彼自身だ。

巨人は、思いつきり地を蹴って走り出した。

*

次の瞬間、彼は地面に膝をついていた。

周りには、崩れ去った巨人達と、胸板を貫かれた蜘蛛。

そして彼の手に付いているべつとりとした液体。

血。

彼は視線をおろした。

彼の目の前に横たわっているもの。

さつきまでこれは人だった。

でも今は違う。違う。違う。違う。

父親。

彼の絶叫が闇の中にこだました。

*

ヨシユアははっと目を見開くと、跳ねるように上体を起こした。

朦朧として自分が何処にいるのかわからない。

しかしそれも一瞬のことだった。

白いシート。

見慣れた壁。

窓の外に見えるいつもの風景。

ここは自分の家だ。

やっと思い出した。

ヨシユアは自分の体がじつとりと汗ばんでいるのを感じた。

心臓も激しく動悸を打っている。

体が火照って、まるで火の中にいるようだ。

「大丈夫？」

横から声がした。

そつちに目をやると、一人の女性が心配そうな目でこつちを見つめていた。

黒髪と黒い瞳。見覚えがある。

「……リンファ……？」

惚けたようにヨシユアは彼女の名を呼んだ。

顔にかかる金髪を手で払いのけ、しばし考える。

一方のリンファはというと、まだ寝ぼけているのかとでも言わんばかりの顔だ。

ここに来て、ようやく彼は自分も隣の女性も一糸まとわぬ姿であることに気付いた。

そうか。

やつと何もかも思い出した。

自分と彼女とが、同じベッドに横たわっていた理由も、なにもかも。

「大丈夫？」

ヨシユアが落ち着いたのを感じたのか、リンファはもう一度問いかけた。

ヨシユアは大きく息を吸い込んで、大きく吐いた。

そして小さく唸った。

「ああ」

体が重い。

ヨシユアはベッドに横たわった。

もう一眠りしたかった。

「なんでもないんだ」

そう。彼は心の中でもう一度繰り返した。

これは、なんでもないことなんだ。

*

太陽は、容赦なくじりじりと照りつけていた。

地面は完全にひからびて、古い花瓶のようにひび割れている。

もう何ヶ月も雨が降っていないのだろう。

メキシコ砂漠。

ここ30年の間に新しく生まれた砂漠である。

できた当初は世界規模のニュースになったものだ。

なにせ、ここの近辺にあった地下都市が破棄を余儀なくされたほどなのである。

なんでも、地質の変化が原因で、落盤事故が頻発したらしい。

また、砂漠といっても砂ばかり、というわけではない。

そもそも、世界の砂漠の9割は、岩や小石に覆われた「岩石砂漠」、「礫砂漠」なのである。

ここは、見渡す限り砂ばかりの「砂砂漠」と、「礫砂漠」の中間といったところか。いくつか岩山もそびえ立っている。

「カンバービッチ君」

砂漠の真ん中にそびえ立つ、そこそこ大きな岩山。

その影に隠れて、一人の男が双眼鏡をのぞき込んでいた。

砂漠というのは不思議なもので、日向は地獄のような暑さなのに、一步日陰に踏み込むとこんどは少々肌寒いのである。

こんなことなら上着を持ってきておくんだつたと、彼は今更ながら後悔した。

「カンバービッチ君！ 聞こえないのか？」

「聞こえてますよ」

男は振り返るところか、微動だにせずに答えた。

何もかもわかっているのだ。

後ろにいる、アラブ系の男との付き合いは短くない。

どうせ、いらついで八つ当たりの相手を探しているに違いないのだ。

「まだ見つからないのかね!？」

そうら、見たことか。

もはやまともに取り合う気も起きなかつたが、やはり無視するのも後が怖い。

仕方なく、彼はぶつきらぼうに言い捨てた。

「本当に来るんですかね」

「カアンバアビツチくうん、私を信用したまえ」

信用できたら苦労しない。

だいたい、なんなんだその「カンバービツチ」なんていうあだ名は。

勝手につけておいて、いやがると怒り出す。

自分勝手にもほどがある。

彼は、そう心の中で毒づいた。

彼……カンバービツチも、典型的な日系人なのである。

この、言いたいことがはつきり言えない性格が遺伝なのだとしたら……

彼は、間違いなく祖先を恨むだろう。

もちろん、心の中で。

「それより、ちゃんと見張っててくれよ」

「見逃しやしませんよ。」

この砂漠のど真ん中で、真つ赤なACなんて」

双眼鏡の向こうに見える風景は、黄色い砂と灰色の岩に覆われた不毛の大地のみ。

もしもこの中に真つ赤な、全高8メートルにも及ぶ巨大な人影が現れたりしたら……

結果は、考えるのまばかばかしいくらいに分かり切っている。

双眼鏡などなくとも、見逃すはずがない。

カンバービッチはため息を付いた。

いくら我慢強い彼とはいえ、3時間も何の変化もない砂漠を見張り続けていたら、苛

つくのも無理はない。

そろそろ、頃合いか。

彼は、後ろにいるアラブ系の男に進言するタイミングを、ずつとうかがっていた。

もちろん、諦めて帰還しようという進言である。

あの男はわがままな上に癩癩持ちで、巧くなだめるのも一苦労なのである。

「あの、僕あ思うんですけ……ど……ど……」

言いかけて、カンバービッチは凍り付いた。

一度双眼鏡をおろして、肉眼で確認する。

そして再び双眼鏡を覗き込むと、声を裏返して叫んだ。

「き……来たっ！」

その声に反応して、アラブ系の男がカンバービッチに駆け寄った。彼の双眼鏡をひったくると、砂漠の向こうを見やる。

そこには、砂塵を巻き上げて疾走する真紅の巨人……ACが一体。

「そうら見ろ！ 私の言ったとおりではないか！」

アラブ系の男は双眼鏡を投げ捨てると、きびすを返して走り出した。

「出撃だ、急ぎたまえカンバービッチ君！」

「り、了解！」

慌ててカンバービッチは彼の後を追いかけた。

しかしふと足を止めると、後ろを振り返った。

そして、双眼鏡を拾い上げて丁寧に砂を落とし、懐にしまい込んだ。

つづく。

02 ミラージュ・ザ・サンドストーカー

「あとのどのくらい?」

『んつとお、あと15分だとーちやくなのお』

リンファは気が遠くなった。

自慢の黒髪が、汗で額に張り付いて気持ち悪い。

シャツはもう完全に湿ってしまっている。

唇に乾きを感じて、リンファはスポーツドリンクの缶に口を付けた。

今リンファがいるのは、巨大汎用ロボット、『AC』のコックピットの中である。

『ペニュー』というのが彼女の愛機に付けられた名前だ。

何度かのバージョニアップを経て、今は『ペニュー侃』を名乗っている。

ペニューウの武装は、右手に持ったマシンガンと左手の甲に装着されたレーザーブレード発生装置。

そして、左肩に背負っているのは新しく購入したミサイルである。

そのペンユウがひた走っているのは、北アメリカ大陸の南部に位置する、メキシコ砂漠のど真ん中である。

外気温は約40度。

これからもっと上がるだろう。

陽炎に揺らめく真紅の巨人は、端から見れば美しくも見えるだろうが、中に乗っているものはそんなことはいってられない。

一応ACにもエアコンは付いているが、それほど性能が良くない。

何分巨大ロボットである。

機体の排熱が精一杯で、あまりコックピット内まで手が回らないのだ。

そんなわけで、今コックピット内の気温は34度をマークしていた。

「暑く……」

ついに口に出してしまった。

今まで、ずっと我慢していたのである。

どこかで「暑いと言うと余計に暑く感じる」とかいう話を聞いたことがある。

普段のリンファなら鼻で笑うだろうが、人は苦しいときには何にでもすがりたくなるものである。

『にやははく、ヨシユアくんもみちづれにすればよかつたのにね』

「仕事とプライベートは別。

そんなこと言っていないで、ちゃんとナビしてよ」

通信相手は、リンファの専属メカニックのエリイである。

この間までいろいろと事件があつてしばらく落ち込んでいたのだが、ようやく元気を取り戻したらしい。

本業はメカニックだが、ハッカーでもあり、医学の心得もあり、様々な局面でリンファをサポートしてくれている。

今回はナビゲーター役である。

向かう先は地下都市『サンタニカ』跡。

メキシコ砂漠の形成によって破棄を余儀なくされた地下都市の内の一つである。

そこが最近、テログループの活動拠点になっているらしい。

そのテログループの殲滅が、今回の依頼内容である。

危険な仕事。

危険を買う仕事。

それが、リンファの生業である。

闇の世界を疾走する傭兵、『レイヴン』。

リンファはそのレイヴンの一人だった。

『あ、レーダーにはんのう〜』

突然、エリイが声を上げた。

リンファも自分の目でレーダーを確かめる。

なるほど、こちらに向かって近づいてくる光点が二つ。

速度はそこそこ。

砂漠をこのスピードで動き回れるものとなると、種類は限られてくる。

『AC急速接近中。機数2』

コンピュータが報告する。

やはりACか。

テロリストがACを使うことは少ない。

おそらく、テロリストが用心棒として雇ったレイヴンだろう。

『識別信号確認。AC『ステインク』、及びマスターアリーナ所属AC『サンドストー

カー』』

その声を聞くなり、リンファは青ざめて操縦桿をひねり倒した。

ペンユウが近くにあった巨大な岩の影に滑り込む。

マスターアリーナ所属。

その一言で、相手のレヴェルがはつきりとわかる。

間違っても、手加減などできるような相手ではない。

アリーナと言うのはレイヴン達が賞金をかけて闘う、いわば闘技場のような存在である。

その試合は資産家達の賭の対象となるのだ。

そしてそのアリーナにもいくつもの種類がある。

マスターアリーナもその中の一つである。

別格。

そう表現するのがふさわしい。

並のレイヴンでは、まばたき一つする間に葬り去られてしまう。

そんなレヴェルの猛者たちが、世界一を巡って争っている。

そういう世界である。

とはいえ、実際に試合が行われることはほとんどない。

自分の力に恐れを抱く……冗談でも嘘でもなく、自分に恐怖する人間がほとんどなのだ。

それほどまでに大きな力を持つのが、マスターアリーナ所属のレイヴンなのである。操縦桿を握る手をぬらすのは、冷や汗か、それとも暑さで吹き出した汗か。

いずれにせよ、手が滑ってしまいそうである。

リンファはシャツの裾に手のひらをこすりつけた。

シャツも汗でびしょぬれになっていることに気付いたのは、その後だった。

「エリイ、サポートお願い！」

『りよ〜か〜い！』

*

飛び散る砂粒。

それを全身で受け止めながら、ひたすら前進する二つの巨体。

一つは砂漠用の迷彩色で身を包んだ中量級二足A C、もう一つはかびの生えた青銅のような、一見して気色悪い色合いの重量級二足A Cである。

「わかっているね、カンバービッチくん！」

砂漠迷彩のA C、サンドストーカーのコックピットに、男はいた。

会話の相手は隣の重量A C、ステインクに乗っているカンバービッチ君である。

通信はさつきから開きっぱなしになっていた。

『こつでもどつどつぞー！』

通信機を通して聞こえる、カンバービッチの軽快な声。

さつきまでの重苦しい雰囲気はどこへやら。

男は満面の笑みを浮かべると、普通の通信とは少し違うスイッチを押した。

外部スピーカーの出力ボタンである。

突然、二機の動きがぴたりと止まった。

男は胸一杯に息を吸い込むと、マイクデバイスに向かって声を張り上げた。

『わああたしはあつ！』

マスターアリーナ所属レイヴン、ミラージュ！

そしてこれはわたしの愛機サンドストーカーであるつ！』

ついさつきまで沈黙が支配していた砂漠に、突如巻き起こる大音声。

しかし、地面に受け止められたのか空に飛んでいったのか、岩陰に隠れているリン

フアにはそれほどの音はとどかなかった。

むしろ、普通の通信の方がよく聞こえる。

どうやら派手さを狙った演出のようだが、失敗におわったようである。

『そこに隠れているのは、マスターアリーナ所属レイヴン、タオリンフアだな！』

かあくれてないで出てこい！

そしてわたしと勝負しろオツ！！』

*

輝く金髪に、鴉のような漆黒のロング・コート。

そして悪魔でも睨み付けているかのような、冷たい光を放つ瞳。

どうにも、このスラム街には不釣り合いな風体である。

しかし周囲を徘徊する浮浪者達も慣れたものだ。

もつとも、彼らのアイドルを奪い取った嫌な奴、という意味でだが。

ヨシユアという名のレイヴンである。

レイヴンとしての腕前は一流。

以前に一度リンファと戦い、ほぼ互角の勝負を繰り広げた。

今は、と言われると、実際にやってみなければわからない、としか答えようがないだろう。

彼は今、古臭い倉庫の前にいた。

「邪魔するぜ」

ヨシユアはそういうと、倉庫のドアを蹴り開けた。

あまり行儀が良いとは言えないが、そうしないと開かないのだから仕方がない。

そんなノウハウを身につけるほどこの倉庫に通っているのか。彼はふと、そう考えた。

この倉庫自体、薄汚れたスラムの奥にある。

しかし、倉庫の中はさらに輪をかけて汚れていた。

どこからか拾ってきたのであろうスクラップの山。

インスタント食品の空箱。

タチの悪い、一ヶ月前のゴシップ誌。

最近はその中に、女性向けファッション雑誌が紛れ込むようになった。

昔はそんなもの、全く縁遠い存在だったのに、である。

そのゴミの山を断ち切って、一本の道が延びている。

その姿は大破壊以前の映画にある、聖人が海を割って道を作るシーンによく似ていた。

ヨシユアは道の奥に目をやった。

いつもは二人の女性がそこにいるのだが、今日は一人だけだ。

彼女は長い赤毛で大きな三つ編みを一つ作り、濃いピンクのジャケットと薄いピンクのスカートに身を包んでいる。

高い鼻にかけた小さな丸眼鏡。

顔立ちは北欧系で、見とれるほどに美しい。

ヨシユアの見知った顔だ。リンファの専属メカニック、エリイである。

「あー、よしゆあくんだあ」

「……一人か？」

「あのね、りんふあちゃんはおしごとなの。

ねね、りんふあちゃん。よしゆあくんだおー」

エリイがパソコンの画面に向かって話しかけた。

通信の相手はリンファか。

足下のゴミを踏みつけないように気を付けながら歩み寄ると、ヨシユアはひよいと画面を覗き込んだ。

いくつかのウィンドウが、そこに表示されている。

どこかの精密な地形図。

現在の時刻。

燃料の残量。

AC「ペンユウ」の状態。

それから、外気温なんてものもある。

それらの中心に、もっとも大きく開けたウィンドウがある。

汗だくで、お世辞にもきれいな表情とは言い難い。リンファの顔だった。

『何よ。今忙しいの』

「今すぐ帰ってこい。危険だ」

モニターの向こうにあるリンファの顔がますます歪んだ。

眉を寄せ、目を細めてこつちを睨んでいる。

「マスターランカーがお前を狙ってる。」

命が惜しいならすぐに逃げろ」

リンファは小さく舌打ちをした。

マイクの感度があまりよくないせいか、音は伝わってこなかったが。

彼女の右手が動き、モニター全体を覆った。

『手遅れよ……』

ぶっつ。

次の瞬間、映像はリンファの側から断ち切られていた。

つづく。

03 リンファアの秘策

言うのが遅い。

リンファは大きなため息をついた。

いちいち家まで来ずに、電話か何かで連絡すればいいものを。

そうしたら、こんな面倒なことにならずにすんだのに。

待てよ。

そのとき、彼女はふとあることに思い当たった。

そういえば、さつきからずっとエリイと交信していたから……そうか。

回線がビジーだったのか。

リンファは怒って通信を切ってしまったことを後悔した。

『どうした、怖じ気づいたのか？』

外部スピーカーカーではなく、公共周波数で伝わってくる声。

あのミラーージュとかいう男、どうやら自分の失敗に気付いたらしい。

仕方なくリンファは通信機の周波数を合わせて、口を開いた。

「2対1は不公平なんじゃないの?」

『安心したまえ。』

カンバービッチ君はジャツジだ。手は下さない』

そんなもの、信用できるか。

リンファは心の中で呟いた。

だいたい、待ち伏せしてたのならこつちが仕事なことくらい知ってるだろう。

全く他人の迷惑を顧みなくせに、他人には自分を信用しろという。

リンファの一番嫌いなタイプの人である。

どうやら戦う以外に道はないようだが、それにしてもはやく依頼をこなさねば……

——待てよ。

リンファは口の端を吊り上げた。

奴を適当にあしらひ、なおかつ依頼も完璧にこなす方法がある。

覚悟を決めると、リンファは叫んだ。

「OK。勝負よ、ミラージュ!」

*

岩陰から躍り出る赤い影。

ペンユウは目一杯ブースターを吹かし、一気にサンドストーカーとの間合いを詰める

！

「ようやくその気になったか！」

彫りの深い顔の奥で瞳を爛々と輝かせ、ミラージユは操縦桿を持つ手に力を込めた。快適なレスポンスで横に飛ぶサンドストーカー。

その直ぐ横を、ペンユウのレーザーブレードが通り過ぎた。勢い余ってたたらを踏むペンユウ。

絶好のチャンス。

サンドストーカーは右手のプラズマライフルを構え、その背に狙いを定めた。

キュウンッ！

小型犬の悲鳴のような、甲高い音が響き渡る。

高エネルギーのレーザー光が、空気を灼いてプラズマ化させる。

生まれた光の矢、プラズマの矢は、必死に体勢を立て直しているペンユウの背中に、容赦なく襲いかかった！

——その時！

バオウツ！

ペンユウのブースターが火を噴き、地面の砂を巻き上げた！

レーザー光は砂粒に阻まれ、一気に減衰して無害なただの光と化す！

——戦い慣れている！

ミラージユも、こんな方法でレーザーをかわすなど今まで聞いたこともなかった。

そもそもが砂のある場所、つまり砂漠でしか通用しない戦法である。

今思いついたのか前から考えていたのか、いずれにせよさすがは彼と同じマスターランカー。

ンカー。

少なくとも、名前負けだけはしていないようである。

ペンユウはそのままの勢いで空中に飛び出し、体勢を立て直した。

身をひねりながら右手のマシガンを乱射する。

ろくに目視もしていないはずだが、無数の弾丸はサンドストーカーのいる方向に正確

に飛来する！

あわてて横に飛ぶサンドストーカー。

なんとか弾は避けきったが、ただの回避で終わらせるわけにはいかない！

サンドストーカーの左肩に備え付けられたユニットが動く。

いくつか正方形のふたがついた、箱のようなものである。

そのふたの内四つが一斉に口を開く。

そして、四発のミサイルが天空へ向かって射出された！

VLS (Vertical Launch System) ……つまりは、垂直に打ち上げ、その後降下してくるタイプのミサイルである。

動作範囲の問題上、どうしても上方に弱くなってしまうACにとって、非常に脅威的な兵器だ。

ペンユウは地面に降り立つと、慌ててバックステップした。

ミサイルは装甲板をかすめながら地面に命中し、砂塵を巻き上げる。

しまった。

ミラージユは少し後悔をした。

これでは相手の姿が見えないではないか。

と、その時だった。

『ミラージユさんっ！』

突然聞こえてきた声は、カンバービッチのものだった。

舌打ち一つして、ミラージユも負けじと怒鳴り返す。

「なんだね!! 邪魔をしないでくれ!」

『あいつ、逃げていきますよ!』

何？

ミラージユはレーダーに目を遣った。

離れたところで動かない光点。

これはカンバービッチの「ステインク」だ。

前方に移っているノイズは巻き上げられた砂。

そして、その向こう側で、高速で離れていく赤い光の点は……

「くっ、逃げるとは卑怯な!?!」

レイヴン同士の戦いで卑怯も何もあつたものではないような気もするが、ともかくミラージユは操縦桿を押し倒した。

サンドストーカーのブースターがこれでもかど火を吐きだし、その巨体を前に押し出す。

猛スピードで砂煙の中を突っ切ると、背を向けて走り去っていくペンユウのあとを追いかける。

その後ろに、一步遅れてステインクが続く。

重量級だけあつてステインクはスピードでは劣る。

ついていくどころか、少しずつ距離は開く一方である。

「ええい、逃げるな！ 戦え！」

悔し紛れに通信を送ってみるが、当然ながら答えはない。ペンユウの後ろ姿は少しずつ小さくなっていく……

ミラージユは歯軋りをした。

不快な音が狭いコックピットに響き渡る。

スピードでは、向こうの方が頭一つ上のようである。

やがて、その姿は完全に地平線の向こうに消えていった。

「くっ……臆病者め！」

今更何を言おうと、負け惜しみにしかならない。

ミラージユの拳がコックピットの壁に叩き付けられる。

ともすればAC自身が揺れそうなほど激しく。

『ミラージユさん、まだいけますー！』

カンバービッチの声が電波を介して伝わってきた。

なにがいけるというのか。

もう相手は完全に逃げ去ってしまったではないか。

せつかく何時間も待ち伏せしていたというのに……

『奴のレーダー反応はいきなり消えました。』

きつと、どこか電波の届かないところに……』

そうか！

ミラージュの瞳が輝きを取り戻した。

電波が届かない所……おそらく地下。

この辺りで地下にあるものと言えば……

——地下都市「サンタニカ」。

*

地下へのゲートは、すぐ近くにあった。

ちようどペンユウの反応が消えたあたりである。

間違いない。

あの女は、この都市に隠れているのだ。

広い地下都市の中を探するのは少し手間だが、廃都市なら不可能ではないだろう。

「あらかじめいっておくがね、カンバービツチくん」

ミラージュはもう一度、念を押した。

「どんな状況になろうと、手出しは無用だからね」

『わかっていますよ。』

さあ、はやく行きましょう。

また逃げられますよ』

彼がせかす理由は、ただ早く帰りたいということだけなのだが、ミラージユはそれを激励と受け取った。

勢いよく鼻から息を吐き出し、操縦桿に手を当てる。

二機は並んでゲートに踏み込んだ。

中にあるのは地下へと降りるエレベーターと鉄道が敷かれたスロープ。

もちろんエレベーターは大型トレーラーでも運べるサイズのものだが、どうやら電源が死んでいるらしい。

仕方なく二機はスロープの方へ進んだ。

時代が進んでも、鉄道の重要性はかわらない。

どんなに飛行機械やMT・ACが発達しても、特定区間で大量の物資を運ぶには鉄道が最適なのである。

もちろん技術的な進歩もある。

今では鉄道列車に人間が乗ることは少ない。

独立した発電装置とプログラムによって、自動走行するタイプが主流である。

長い長いスロープを抜けて、二機は地下都市の跡へとたどり着いた。

なるほど、噂に聞いたとおり、あちこちで天井が崩れ落ち、土砂や岩によつて無数のビルが押しつぶされている。

地震もあつたのか、根本でおれているビルもある。

確かに人が暮らせる状況ではない。

『でも、なんであいつ地下都市の正確な位置を知つてたんでしようねえ』

「ふむ。おそらく、以前に任務で来たことがあるのだろう」

今がその任務最中だ、などとは露とも知らず、ミラージユは無責任に言い放つた。

そう。

この二人は、リンファが任務でやってくるを知つて待ち伏せていたわけではないのだ。

ネットワーク上で流れていた噂……

「新しくマスターランカーになった女がメキシコ砂漠に現れるらしい」というただの噂を頼りに、何時間も待つていたのである。

びびっ。

その時、リーダーが小さく音を立てた。

表示される赤い点。

位置は、前方百メートルほどの所にあるビルの影。

レーダーから判断すると、ビルの影から出るコースで移動している！
「そこだっ！」

ちやうど敵が現れる瞬間を狙って、サンドストーカーのレーザーライフルが火を噴いた。

地下の暗闇を切り裂いて、突き進む光の矢。

ライフルの弾丸は、狙い変わらず敵を打ち抜いた！

飛び散る青い破片。

勝利を確信し、ミラージユはほくそ笑んだ。

……青い破片？

『な……何やってんですか！ あれは……』

カンバービッチの悲鳴にも近い声は、そこでとぎれた。

彼が説明をするまえに、AC備え付けのコンピュータが警告音を発したのである。

「敵機確認。アスガルド社製、MT『ミッドガルズオルム』。

機数……」

コンピュータの声は、そこで一瞬途切れた。

まさか、コンピュータが報告するのをためらったとでもいうのか？

それとも、その声を聞いている二人の錯覚だろうか？

04 対決！ リンファ VS ミラージュ

「あー、つうしんかいふく〜」

脳天気なエリイの声が倉庫の中に響き渡る。

ヨシユアは平静を装ってパソコンの画面に目を遣る。

表示されたリンファの顔に、さっきまでの汗はなかった。

表情もいつもの意地悪い笑みに戻っている。

どうやら無事だったようだ。

ヨシユアはほっと胸をなで下ろした。

もちろん、表にはださないが、内心では結構心配していたのである。

『やつほー……あ、ヨシユア。まだいたの？』

——前言撤回。心配して損した。

「だいじょぶですかあ〜？」

『完璧よ。』

いまごろあの馬鹿、テロリストとドンパチやってんじゃないの?」

二人は言葉を失った。

このリンファは、よりもよってマスターランカーを、自分が戦うはずだったテロリストにぶつけたのである。

まあ確かに自分を狙うレイヴンも追い払えるし、テログループも壊滅できるわけだが

……

無茶苦茶なことは言うまでもない。

『んじゃ、あたしはもう少し隠れて、もしあいつがテロリストに負けるようだったら残りを片づけるわ』

「あ〜い。はやくかえってきてえ〜。

ばんごはんはねえ、えりいとくせいえびふらいだから〜」

エリーの言葉を聞いた途端にリンファの顔が青ざめる。

『え、エリー! まさか料理する……!』

ブチッ。つー、つー、つー。

無理矢理通信を切ったのは、今度はエリーの方だった。

へらへらとした笑顔を決して崩すことなく、残ったデータを処理していく。

「なんだか……慌てていたみたいだが……」

「きにしない、きにしない」

エリイは突然立ち上がり、大きくのびをした。

柔らかい吐息がその唇から漏れる。

そよ風のような小さな音がヨシユアの耳にも届く。

やがてエリイは腕をおろすと、あくびのせいでこぼれた涙を指でぬぐい去った。

その姿は、無邪気な少女のようにも、艶めかしい女性のようにも見える。

だが違う。

彼女はそんなものではなく、性別を越えた、いわば一つの芸術作品のような魅力を周りの者に感じさせた。

「えりいはおかいものについてきまゝす。

おるすばんよろしくね」

自分に言っているのだろうか。

ヨシユアは一瞬考えたが、他に人がいるはずもない。

彼は苦笑すると、ただ一言、ああ、とだけ答えを返した。

*

爆発音が、途絶えた。

ペンユウが身を潜めていたのは、サンタニカ跡のはずれの方にある、崩れたビルの影である。

テロリスト達が使っているあたりからはかなり離れているので、戦闘に巻き込まれる心配はない。

おまけに地下だけあって、あのうだるような暑さもない。

まさに絶好の隠れ場所である。

しかし爆発音が途切れたとあっては、出ていけないわけにはいかないだろう。

とりあえずテロリストが壊滅したかどうかだけでも確認しておかないと、胸を張って報酬を受け取れない。

リンファは、座席の後ろにある荷物用のポケットに、さつきまで着ていたシャツと使い終わったタオル、そして飲み干したスポーツドリンクの缶を投げ入れた。

今着ているのは、どうせ汗をかくだろうとふんで用意しておいた着替えである。

洒落つけもなにもないただの白いシャツだが、汗がしたり落ちるようなものよりは遙かにましだ。

操縦桿に手をかけると、リンファはペンユウを動かした。

と、その時。

ピピッ。

「AC確認。機数2」

——あいつらか!

リンファの瞳に真剣な光がともる。

リーダーをみやると、そこには右手の方から近づいてくる二つの光点が記されていた。

まっすぐこちらに向かって見ると、見つかった可能性が高い。

『お前か!』

そこにいるのはお前だな!』

お前お前と、気安い奴だ。

リンファは慥然としながらも通信を返した。

その間にも、マシンガンを構えることは忘れない。

「やるじゃない。あの数を蹴散らすなんて。

さすがはマスターランカーってところ?」

さすがは、にアクセントをおいて、嫌みつたらしくリンファは吐き捨てた。

もちろんこれも計画のうちである。

相手は相当腹が立っているに違いない。

そこを煽っているのである。

『おのれえええつ、卑怯なまねをつ!』

勝負だ! 今度は絶対に逃がすものか!

カンバービッチ君、ジャツジだ!』

ペンユウは右に向きを変えた。

真つ正面から近づいてくるサンドストーカーと、脇から回り込んで両者の中間あたりに陣取るステインク。

どうやら連中は、リンファの行動がただテロリストと戦わせるためだけのものだったと思っっているらしい。

だが、甘い。リンファは相手の武装を考慮に入れた上で、地下都市の中を戦場に選んだのだ。

サンドストーカーのメイン火器は、右腕に構えたレーザーライフル。

威力は高いが、代わりに装弾数が少ない兵器だ。

砂漠ではかわしにくかったレーザーも、遮蔽が数多く存在するここなら、回避は難しくない。

回避できるということは、無駄弾が生まれやすい。

根本的に装弾数が少ないのだから、相手は慎重に行動せざるを得まい。

本来の自分を抑制しながら戦っている人間に勝つのは、それほど大変なことではない。

これがレイヴンの戦い方。

周囲の状況、持っている兵器、そして相手の感情すらも利用する。

これこそが、レイヴンの真の戦い方なのだ。

少なくともリンファはそう理解していた。

「今度は逃げも隠れもしない。」

このあたしに喧嘩売ったらどうなるか、教えてあげるわ」

『いい心がけだな。』

……行くぞっ!』

サンドストーカーがライフルを構える!

リンファは操縦桿をひねった。

ペンユウがすぐさま横に飛び、迫り来る光線を……

迫り来る光線……

迫り来る……

……来ない。

カチッ。カチッ。

サウンドストーカーの指は、さつきから何度も引き金を引いている。

しかし、出てくるのは空しい金属音ばかり。

これはもしかすると……

『しまったああああっ?!

弾が切れたああああっ!!』

やっぱり……

リンファは肺の中のためにため込んでいた息を吐き出した。

気を張りつめた分だけ損したような気分である。

確かに、テロリストたちと戦わせたのには相手を消耗させる目的もあったのだが、ま

さかここまで見事にはまってくれるとは……

『仕方がない、こうなったらミサイルで……』

ガパンツ。

音を立てて肩のミサイルポッドが口を開く。

しかし、そこからは何も出てこようとはしない。

静寂だけが、空しく過ぎ去っていった。

『……か、カンバービッチ君!

追加弾倉はないのかね?!』

『無茶言わないで下さい！』

『そんなの持ってきてませんよ！』

『じゃあ君の武器を貸してくれ！』

『後で返すから！』

『僕の武器もとづくに弾切れです！』

『そんな……では一体……』

リンファは、二人のやりとりをにやにやしながらただ聞いていた。

別に今の内に攻撃してもいいのだが……

見ていた方がおもしろそうである。

やがて、通信機が黙りこくった。

しばしの間、流れる沈黙。

無言で向かい合うペンユウとサンドストーカー。

そして、その時はついにやってきた。

『カンバービッチ君、戦略的後退だっ！』

『もう止めましょうよ……そういう風に見栄張るの……』

言い放つて方向転換し、全速力で遠ざかっていく二機。

もはや追う気力もリンファには残っていなかった。

あとに取り残されたペンユウは、いつまでも、ただ呆然とそこに立ちつくしていた。
つづく。

05 汗の匂い

がらがらがらつ。

けたたましい音を立てて、薄暗い倉庫のシャッターが開いていく。

寝転がっていたヨシユアは目を開けると、上半身を起こした。

開いたシャッターの向こうから、台車に乗った赤いACが入ってくる。

その横には、台車のスイッチを操作しながら歩いて入ってくる女性の姿がある。

リンファの帰還である。

リンファとエリイが住処にしているこの倉庫、そこそこ広いが、もちろんACが立って入ってこれるほどではない。

したがって、ペンユウをしまうときには、このようにリモコン式の台車を使って寝かせた状態に入れるのである。

作業をしているリンファの目が、一瞬ヨシユアの方を向いた。

しかし視線はすぐに、台車の方に戻る。

ヨシユアはゆっくりと立ち上がった。

ペンユウを完全に奥にしまい込んで、リンファはシャツターを閉めた。

「どうしたの？ エリイは？」

「買い物、だとき」

あえて冷静を装って言うリンファも、これにはさすがに顔をしかめた。

どうしてエリイが料理をするのがいけないのか、ヨシユアはつきりとは知らなかったが、だいたい想像はつく。

「災難だったな」

「間拔けなレイヴンで助かったけどね……」

言いながら、リンファは倉庫の奥へと進んだ。

できるだけヨシユアと目を合わさないように、うつむきながら。

やがてヨシユアの1メートル前まで来たとき、リンファは不意に足を止めた。

「どうした？」

それは、何気ない一言だったのだろう。彼にとっては。

しかしリンファにとっては、その言葉は――

次の瞬間、リンファはヨシユアの胸に自分の顔を埋めていた。

不思議な暖かさが伝わってくる。

リンファの両腕が彼の背中の方に回った。

暖かさをもっと感じようと、リンファは両腕にぐつと力を込めた。

「ごめん。ちよつとだけ——」

何も、ヨシユアは答えなかった。

ただ右腕を持ち上げ、リンファの髪を撫でただけだった。

ゆつたりと、時間がたゆたった。

過ぎるでもなく、戻るでもなく、刻という概念自体が、存在していないかのようだった。

そう感じさせるのに十分なほど、暖かかった。

リンファは鼻をひくつかせた。

何かの臭いが鼻腔をくすぐる……

……この臭い！

リンファはまるでヨシユアを突き飛ばすかのように、彼の胸から飛び退いた。

顔を真っ赤にして、人差し指で耳の後ろを掻く。

「あ、あの……あたし……」

最初面食らったような表情をしていたヨシユアだったが、やがて口元を緩めた。

珍しい、本当に珍しい微笑みを見せて、ヨシユアは歩き出した。

リンファの横を通り過ぎて、倉庫の出口へと向かう。

「俺は用事を済ませてくる」

リンファは背中を向けたまま語るヨシユアの方に目をやった。

「その間に、自分の用事を済ませるんだな」

*

「えびえびたくさんごまあぶらあ☆

たまごとばんこと、しろいこな」

買い集めてきたエビフライの材料で即席の歌を作り、エリイは口ずさんだ。
軽快な足取りで住処の倉庫へ向かう。

たしかに右手には、歌の通りの品々がつまった袋を持っているのだが……

白い粉とは、本当に小麦粉だろうか……

ともかく、倉庫はもう目と鼻の先である。

そろそろリンファも帰ってきていておかしくない。

買い物ついでに遊び回っていたせいで、ゆうに数時間は経っているのである。

倉庫の周りは、相変わらずスクラップの山に囲まれていた。

その中から立ち上る一筋の煙。

火事……にしては様子がおかしい。

エリイはとてとと走り寄ると、煙のたなびいているあたりを覗き込んだ。

「よしゆあくんだあ。どしたの？」

寝転がつて煙草を吸っていたヨシユアは、それをつまみ取ると、横のスクラップに火を擦りつけた。

「世も末だ」

ヨシユアの声にはため息が混じっていた。

「シャワー浴びてないのを気にするんだぜ。あのリンファアが」

その一言を聞くと、エリイはけたけたと笑い出した。

荷物も地面に置いて、腹を抱える。

たまらずこぼれた涙を、あわててエリイは拭った。

「昔のリンファちゃんの方が好きだった？」

一瞬、ヨシユアの動きが止まった。

返答に困ったから……ではない。

エリイの口調が、いつもと変わっていたからである。

エリイがごくまれに見せる、真面目な表情。

今までのことを総合すると、この真面目な科学者としての顔が、真の姿のようなのだが……

どうしていつもはへらへらしているのか、ヨシユアには伺い知れない所だった。

「……いや。ただ……」

ヨシユアは立ち上がった。

「俺が変えたのか、と思うとな」

今度はエリイは笑わなかった。

いたわるような眼差しで、ヨシユアの目を見つめるだけだった。

「案外、細かいこと気にするのね」

ヨシユアは目を見開いた。

「でも、大丈夫。」

好きな男のせいで変わるんだったら、きつと大歓迎よ。女つてやつは」

「……そういうものか」

「少なくとも、わたしはね」

言うのと、エリイは買い物袋を拾い上げて歩き出した。

もちろん、向かう先は住処である倉庫の入り口である。

ドアノブに手をかけると、エリイは気が付いたように振り返った。

「食べていく？ エリイ特製エビフライ」

*

右腕がない。

彼が、最初に感じたのはそれだった。

残った左腕で、顔にかかる金髪を掻き上げる。

額に浮かんだ汗が手のひらにこびりついて、ぬるぬると気色悪かった。

次に彼は目を開いた。

ぼんやりとその瞳に映ったのは、鉄骨がむき出しになった天井だった。

見覚えがない。自分の家の天井ではない。

天井？

彼は気付いた。自分は寝転がっているのだ。

自分はちょうど今、目覚めたところなのだ。

彼の脳はようやく右腕の居場所を理解した。

右腕はなくなっただいなし。

体の下に敷いていたせいで、しびれてしまっているのだ。

彼は左腕を床につき、渾身の力を込めた。彼の上半体がゆっくりと持ち上がっていく。

左腕の支えがいらなくなるのに、たいして時間はかからなかった。がつん。

その直後に、鈍い音が耳に届いた。

彼は音のした方に、何気なく目を遣った。

床にぶつけた側頭部をかかえ、顔をしかめている一人の女が床に転がっている。

「リンファ……何やってんだ」

ヨシユアはわけがわからず、寝ぼけた口調で問いかけた。

そもそも、どうしてリンファが隣にいたんだ？

それにここはどこだ？

ふと自分の体を見ると、彼はいつもの服装からコートを脱いだだけの姿だった。

どうしてこんな格好で眠っていたんだ？

「いきなり……おきないですよ……」

リンファも、舌が上手く回っていない。

寝ぼけているのはお互い様のようなのである。

しかし、リンファが起きあがる頃にはヨシユアの意識もはつきりとしてきていた。

彼女が頭を打った理由もだいたい想像がつく。

リンファは、自分の右肩を枕代わりにして眠っていたのだ。

「おい……どこだよ、ここは」

「あたしの家よ。そういや、二階に来たことなかったんだっけ？」

そうか。

リンファの倉庫が二階建てになっていて、上を生活スペースとして使っているのは知っていたが、実際に上がり込むのはこれがはじめてである。

……待てよ。

冷静に考えている場合ではない。

なんでこんなところで寝ていたんだ？

まだ納得がいかない表情のヨシユアに、リンファは大きなあくびをしてから説明した。

「覚えてないの？ 気絶しちゃったのよ。エリーの料理食べて」

「……なんだって？」

思わずヨシユアは聞き返した。

たしか、気絶、といったように聞こえたのだが。

「だから止めた方がいいって言ったのに。」

あたしの言うこと聞かないから」

ようやく、状況が理解できてきた。

しかし全く記憶がない。

一体、エリイが作ったのはどんな料理だったというのか――

脳が記憶を拒否するような味？ まさかな。

彼は自分のばかげた空想に苦笑しながら、膝立ちになり、そのまま立ち上がった。

「感謝してよね。看病してあげたんだから」

「そいつはどうも」

ヨシユアは肩をすくめた。

お前はただ、横で寝ていただけじゃないか。

心の中で悪態をつきながら、彼は辺りを見回した。

視界に映るのは、部屋の隅にたたみもせず放つてある黒いコート。

まあ、リンファ相手に贅沢を言ってもしかたがない。

階下から、脳天気な声が聞こえてきたのはちやうどヨシユアが自分のコートを拾い上げた時だった。

「りんふあちゃん、あさごはんはぱんにする？ ごはんにする？」

瞬間、二人の顔は釣り針が引つかかった魚のように引きつったのだった。

つづく。

06 ミラージュ、一世一代の大勝負

「ミラージュさん……ほんとにやるんですか？」

珍しく不服の声をあげたのは、他でもないカンバービッチだった。

答えるのはもちろん、物陰に隠れ、周囲の様子をうかがっているアラブ系の男……

ミラージュである。

「当然だ。」

このまま諦めるわけにはいかんよ、カンバービッチ君」

カンバービッチはため息をついた。

これでも、ミラージュ本人は隠れているつもりなのだ。

周囲の建物の窓から、浮浪者達がこつちを見つめ続けていることに、気付いていないのは彼だけだろう。

そう。ここはアイザックシティのはずれ。

K-3 居住区、通称「スクラップ地区」である。

そして彼らがさつきからちらちら覗いているのは、紛れもなくリンファとエリイが住処にしている倉庫だった。

「よし……行くぞ、カンバービッチくん！」

「……ガキじゃないんだから……普通に言えばいいのに……」

「何か言ったかね？」

「いーえ、なんにも」

カンバービッチは肩をすくめた。

もはや忠告する気も起きなかった。

ともかく、ミラージユは倉庫に向かって走り出した。

その後を嫌々ながら追いかけるカンバービッチ。

倉庫のドアの目の前までたどり着くと、ミラージユは一瞬ためらってから、ドアノブに手をかけ、回した。

そしてそのままゆっくりとドアを押す……

……

……開かない。

*

「やだやだやだああああああ！」

えりいもごはんつくるううううう！」

エリイは腕を振り回し、泣き叫び、近くのを蹴り飛ばしながら暴れ回った。

しかし、ヨシユアに首根っこを引つ掴まれているせいで、少しも前に出ることができない。

「ああ！ もういいから大人しくしてろ！」

ヨシユアは腕に力を込めると、エリイを椅子に押しつけた。

さすがに腕力では彼には勝てず、仕方なく椅子に付くエリイ。

しかし、河豚のように頬を膨らませているところを見ると、まだ不満なようである。

「ところで……」

エリイが暴れ出さないように見張りながら、ヨシユアも椅子についた。

頬杖をつき、奥でなにやら忙しそうに動き回っているリンファを見やる。

実際に使っているところを見るのはこれが初めてだが、そこにあるのは簡単なシンクと、調理台、そしてバーナーである。

「お前は、大丈夫なんだろうな？」

「しっつれいね……」

こう見えても、昔は厨人志望だったんだから」

耳慣れない言葉がヨシユアの耳をついた。

リンファが身につけたエプロンは、あまり似合っていないかった。

「チューレン？」

「コックのことよ」

リンファが料理人志望だったなんて、今まで聞いたこともない。

どうせ口からでまかせか——良くても「子供の時の、将来の夢」程度のもんだろう。

ただ、別にリンファの料理を食べたいとは思わないが、ここまで自信ありげなら、多

少の興味も湧いてくる。

「あ、塩ふるのわすれてた」

……本当に大丈夫なんだろうか。

もしかしたら、この中でまともに料理ができるのはヨシユアただ一人なのかもしれない。

もつとも、だからといって自分の手料理をわざわざつくってやるような気は、さらさらなかったが。

——と、そのときだった。

ガンツ!

音はいきなり、入り口の方から響いてきた。

全員の目がそつちへ向く。

どうやら、外からドアを押しているらしい。

しかし、何度押しても開く気配はない。

当然である。

最近蝶番が痛んできたのか、蹴り飛ばさなければ開かないのだから。

音が止んだ。

諦めたのか?

いや、違う。

一瞬の後に、大きな音とともにドアが開いた。

同時につんのめって飛び込んでくる男。

アジア系の顔つきである。

ヨシユアやエリイには全く見分けがつかないが、リンファにはわかる。

アレは日系アジア人の顔だ。

どうやらドアに体当たりを仕掛けたらしい日系人を押しつけて、もう一人の男が倉庫に足を踏み入れた。

アジアと、ヨーロッパと、アフリカに住む人間の特徴を全て併せ持った風貌。彫りの深い、典型的なアラブ顔である。

「見事な体当たりだったよ、カンバービッチ君」

「はあ……そりやどうも」

日系人の男はあからさまに不快な表情を見せながら答えた。

しかし、当然そいつが他人の顔色などに気を配るはずもない。

「ちよつと、あんたたち誰!？」

いきなりな侵入者に、リンファは精一杯乱暴に声をかけた。

ただ、エプロン姿で手には御玉杓子を持っているので、あまり凄味はなかったが。

黙って様子をうかがってはいるものの、ヨシユアの右手も既にコートの中に差し入れられていた。

指先に触れる固い感触は、もちろん拳銃である。

「顔を合わせるのは初めてだな。ならば改めて名乗ろう！」

わあたしは、マスターランカー、ミラージユだっ！」

そして彼は助手のカンバービッチ君！」

「……………」

エリイ以外の二人はまともに浮き足だった。

ヨシユアなど、既に銃を取り出してミラージュに突きつけている。

しかしミラージュは、こちらを馬鹿にしたような笑みを浮かべると、銃を無視してすたすたと歩み寄った。

「止まれ」

ヨシユアの低い声が響き渡る。

まるでその声は、闇夜で蠢く凶獣の唸りのように、殺意と敵意に満ちていた。

今にも噛み付かんとせんばかりに。

「まあ、そうかりかりするのは止めたまえ。

今日は宣戦布告をしにきたただけだ。危害を加える気はない」

銃を降ろす気は、ヨシユアには全くなかった。

敵の主張を鵜呑みにするほど甘くはない。

それはリンファも同じことだ。

彼女の手には、いつのまにか愛用している銃が握られていた。

「懲りない奴ね。まだ戦る気なの？」

「その通りだ。正式なアリーナ戦で決着を付ける」

アリーナ戦。

ヨシユアの眉がぴくりと動いた。

どこかで聞いたような状況である。

しかし以前と違うのは、対戦を申し込んでいるのがミラージュであるということ、そして挑戦されているのがリンファだということである。

つまり、二人の勝負は滅多に行われないマスターアリーナでの勝負になるということだ。

ただ、ミラージュにとつて問題なのは、リンファがアリーナ嫌いということである。「悪いけど、あたしはアリーナなんて興味ないの」

「知っているとも。」

だから、タダとは言わない。

君が勝利したら、わたしとカンバービッチ君の全財産を持つていくといい」

「なっ………なんで僕まで!？」

「たあだあしっ!」

不満の声を上げたカンバービッチを完全に無視して、ミラージュは声を張り上げた。そんなに大声を出さなくても聞こえるのに。

こういう意味のない自己主張をする男は、リンファは大ッ嫌いだった。

「わたしが勝つたら………」

勝つたら、わたし……わたし、わたしの………」

なぜかいきなり言葉につまるミラージュ。

リンファとヨシユアが訝しげな顔をする。

そしてカンバービッチは頭を掻いて、重い重いため息を吐き出した。

ふうつという音が、離れたリンファの耳にまで届く。

「わたしの、嫁になれッ!!」

……

……

……は？

冷たくい空気が辺りをまんべんなく満たしていった。

リンファもヨシユアもカンバービッチも、そして言った本人のミラージュまでもが、一瞬にしてその場に凍り付く。

だから言ったのに。

カンバービッチは硬直したままであれこれと考えを巡らせた。

冷静に考えてみれば、ミラージュがしているのは「好きな娘に意地悪をしてしまう」という、少年期特有の不可解な行動そのままなのである。

……いや、少年ですらない。

最近のガキは、もつとませている。

全員の硬直を最初に破ったのは、不意に響いた笑い声だった。低くどつしりとした笑い。

ヨシユアである。

リンファは自分の目と耳を疑った。

ヨシユアが声を上げて笑うところなど、今まで見たことがない。

顔を手で覆い、ひとしきり笑ってから、ヨシユアは徐に口を開いた。

「……面白い」

そのままヨシユアは足を踏み出した。

ミラーージュの目の前まで進み、睨み合う。

ミラーージュもかなり身長があるが、ヨシユアはそれよりもさらに飛び出している。

「その勝負、俺が受けて立つ」

「なんだと？」

ヨシユアの瞳が冷たい光を放つ。

リンファは知っている。

この輝き。

それは、彼が人を殺すときの輝きと、全く同じものであると。

「見せてやるよ。格の違いってやつをな」

つづく。

07 マスターアリーナ、開戦

『じゅ〜んびかんりよ〜!』

脳気なエリイの声がコックピットに響き渡る。

ペンユウの、ではない。

コックピットに座っているのは金髪の、鋭い目つきの男……ヨシユア。そしてこの機体は、彼の愛機「ワームウッド」である。

ワームウッドの輝くボディは、まるで四本足の青い蜘蛛のようである。

武装は、武器と腕部パーツが一体化したタイプのガトリングガン。

肩にリーダーとレーザーキャノンを背負っている。

最高レベルの機動力と、強大な火力を兼ね備えた機体である。

しかし扱いが難しく、誰にでも乗りこなせるといものではない。

「了解。起動する」

ヨシユアはいくつかスイッチを操作した。

ジエネレーターが低いうなりをあげる。

正面モニター、リーダー、各種データ表示。

駆動系も火器管制も問題ない。

あとは戦闘用の操作形態に切り替えれば、いつでも出撃可能である。

モニターに外の様子が映った。

どこか、倉庫のような場所。

ただし、リンファの住処などとは較べ物にならないほど整っている。

弾薬や整備にしようする機材、燃料といったものもある。

そして端の方には、上へと通じるリフト。

アリーナ会場の、参加者控え室である。

ただ、名前と違って控えるのは参加者だけではない。

その愛機のガレージも兼ねているのである。

参加者達は、ここで直前まで機体の整備点検に心血を注ぐのだ。

ヨシユアは、リンファとエリイが離れたところにいるのを確認してから、少しだけ機体を動かした。

いつもよりレスポンスがいい。

あまりにも反応が良すぎて、慣れるまで扱いが難しそうである。

一度慣れてしまえば、素早い対応が可能になるだろうが。

ヨシユアは通信をもう一度開いた。

「おい、エリイ」

『あいあゝい』

エリイが手に持った通信機を、口元に当てる。

「何か細工したな？」

『ばれた〜！ あのね、れすぽんすがおそかったから4ばいそくにしたよ〜』

四倍だと？

ヨシユアは自分の耳を疑わざるを得なかった。

ワームウッドは、もともと最高レベルのレスポンスに設定してある。

初心者なら、それでもとても乗りこなせないほどのものだ。

確かに多少の不満を感じていたことは確かだが、まさか現行の最高性能の四倍などというレスポンスが可能だとは。

『でもね〜、それりんふあちゃんとおなじくらいだよ〜』

『なんだ、それなら別に大したことないじゃない』

「……常識外れな奴らだ」

ヨシユアはそのまま、ワームウッドをリフトまで動かした。

多少不慣れな面もあるが、まあ戦っている内になんとかなるだろう。その時だった。

外部からの通信が、いきなり割り込んできた。

モニター一杯に表示される顔。ミラーージュである。

『ふふふ、怖じ気づいて』
ぶちっ。

やかましい。

ヨシユアは無理矢理通信を絶ちきった。

いちいち敵の月並みな台詞を聞いてやるほど、彼はヒマではない。

試合開始まで、あと5分。

そろそろリフトが動き始めるころだった。

ヨシユアはふと、横に目をやった。

ガレージの端の方で、ぶんぶんと手を振るエリイ。

そしてその横で、不機嫌そうに佇むリンファ。

しかし、彼は知っている。不機嫌なわけではない。

リンファはきつと、彼が自分のために戦っていると思っただろう。

それが、照れくさくてしかたがないのだ。

少しだけ、ヨシユアは笑みを浮かべた。

まだまだ子供だ。こんな下らないところで、自分が命をはるとでも思っているのか。そう。彼は別に、リンファの身代わりに戦うわけではない。

ただ、あの連中の全財産が欲しいだけなのだ。

リフトが動き始めた。

向かう先は、旧アメリカ大陸F地区。

すなわち、メキシコ砂漠である。

*

ドシュツ!

リフトが地上に到達した瞬間、ヨシユアはレーザーも見ずにレーザーキャノンを放つた。

光の砲弾が、近くにあつた岩山を切り崩す。

深い意味はない。ただののろしである。

巻き起こる砂埃を突っ切って、飛び出してくる砂漠迷彩の二足AC、サンドストーカー。

地面の砂礫を撒き散らしながら、右腕のライフルを乱射する。

しかしワームウッドのスピードをもってすれば、適当に放たれたライフルをかわすことなど造作もない。

光線は空気を灼いて過ぎ去った。

ワームウッドがサンドストーカーの右手に回り込む。

それを追って回転するサンドストーカー。

さらに放たれる三発の弾丸も、ワームウッドのスピードに惑わされてあらぬ方向へ飛び去っていく。

『どうした!?! 逃げるだけか!?!』

ミラージュの濁声がいくつかの光線とともに飛来する。

まったく、やかましい奴だ。

ヨシユアは心の中で悪態をつきながら、操縦桿を軽くひねった。ワームウッドが大きく地を滑り、全てのレーザーをかわしきる。

やはりか。

ヨシユアは一人で納得した。

レーザーの攻撃が止んだ。

かわりに、サンドストーカーがミサイルを放つ。

天空へと上っていく四発のミサイル。

高みまで上り詰めてから、四つのミサイルはワームウッドめがけて降り注いだ。

さらにそこへ迫る二つのレーザーライフルの光！

……丁度いい。

ヨシユアは口の端に笑みを浮かべた。

こつちも、ようやく慣れてきたところだ。

彼の手の動きが変わった。

まるで複雑な幾何学模様を描くかのように、ヨシユアの右腕が激しく波打った！

彼の相棒が、その動きに反応して大地を奔る。

空中からの四発のミサイルと前から来る二本のレーザーのわずかな隙間を、ワーム

ウッドは縫うようにして駆け抜けた！

その姿は、まさに舞を舞う青い蜘蛛！

『ば……馬鹿な!』

ミラージュが声を上げる。

無理もない。あれだけの攻撃を、一撃も食らわずに切り抜けるなど、常識では考えられないはずがないのだ。

そのままワームウッドが加速する。

呆然と佇むサンドストーカーに、猛スピードで走り寄る。

慌ててサンドストーカーはライフルを放った。

しかしそれもあっさりとかわされ、仕方なくブースターを吹かせて後退する。

岩陰に潜り込み、即席の盾を作り出す。

——甘いんだよッ！

ワームウッドが地を蹴った。

大きく空中へ飛び上がり、ブースターの力で岩を飛び越える。

そこは丁度、サンドストーカーの真上！

ガトリングガンが無数の弾丸をばらまく！

とてもかわせる状況ではない！

しかし次の瞬間、サンドストーカーは空中へ飛び上がった！

弾丸の何発かは命中するが、ひるむことなく左腕に光をとまず。

これは……レーザーブレード！

ヨシユアは慌てて操縦桿から手を放した。

途端に機体が自由落下を始める。

光の刃をすんでのところでぐり抜け、ワームウッドはサンドストーカーとすれ違っ

た。

——勝った！

ミラージユは確信した。

これでワームウッドの上をとったのだ。

あとは、落下の勢いを利用して斬りつけければ、全てが終わる。

そのはずだ。

ミラージユが操縦桿をひねると、サンドストーカーの巨体が空中で反転した。

地面へ向かって落ちていくワームウッド……

『なっ!?!』

ミラージユは思わず叫んでいた。

いない。

今自分とすれちがって、下に落ちていったはずのワームウッドがいない！

「何をそんなに驚いている?」

ががっ!

衝撃は、いきなり背後からサンドストーカーを襲った!

連続して装甲板に食い込んでいく弾丸……ガトリングガンである。

そう。いつのまにか、ワームウッドはサンドストーカーのさらに上へと飛び上がって

いた!

ヨシユアは笑っていた。

奴にはわからなかっただろう。

ワームウツドは、近くの岩山へと着地し、再度飛び上がったのだ。

空中で反転して下を向こうとするサンドストーカーの、背中側をくぐり抜けて。

無数の弾丸がサンドストーカーを地面に叩き付けた。

それを踏みつけるように、ワームウツドが大地に降り立つ。

丁度、獲物をとらえた毒蜘蛛のように。

「降伏するか？」

レーザーキャノンの砲身をサンドストーカーの方に向けながら、ヨシユアは呟いた。

声は聞こえていないはずである。

『……断る』

いい度胸だ。

最後の最後でヨシユアは敵を誉める気になった。

そして、指を引き金にかけると、ミラージユに最後の言葉を投げかけた。

「じゃあな」

*

「おめでと。これで臨時収入ね」

ワームウッドから降りたヨシユアに、最初に声をかけたのはリンファだった。エリイは、用事があるとかでどこかへ行ってしまった。

そんなもの、あるはずもない。

全く、彼女の意図は鈍感なリンファにも手に取るようにわかる。

いや、むしろわかりやすく振る舞ってくれているのかもしれない。

「飲みにも行くか？」

リンファは悪戯っぽく微笑み、しなを作って見せた。

それを見ると、ヨシユアの口から自然と笑みが零れた。

いい表情だ。

いつものリンファ。男を平気で利用する、狡猾な傭兵、リンファ。

ようやく戻ってきたのだ。一連のドタバタで、なくしかけていたものが。

「奢ってくれる？」

さて、どうしようか。

ヨシユアは少し迷った。

少し考えた後、彼はさも当然のように言い放った。

「馬鹿言え。割り勘だよ」

T
H
E

E
N
D.

第7話 ムーンライト・セレナーデ

01 追う者

男は、慌てて車に飛び乗った。

何の変哲もない、藍色の車である。

安物というわけではないが、この地下駐車場のなかには妙に安っぽく見える。

それもそのはずである。周囲にあるのは、一台が100万コーム近い超高級車ばかりなのだ。

彼が20万コーム一括払いで買ったこの愛車が、安く見えるのも無理はない。

だが今は、そんなことはそれこそどうでも良かった。

車は値段ではない。

走ればいい。走らなければならないのだ。

男は乱暴にアクセルを踏んだ。

危うく車がエンストを起こしかける。

黒い煙を吐き出して、車は動き始めた。

スピードの出しすぎだ。

駐車場の中だというのに、スピードメーターは高速道路並の数値をはじき出している。

もし事故でも起こしたら？

男には、そんな細かいことを気にしている余裕がなかった。
死ぬ。

走らなければならぬ。

走らなければ、死んでしまう。

殺されてしまう。男は必死だった。

そして恨んだ。

上司と、会社と、この世界と、50年前に起きた大戦争と、そして彼自身を。

彼をこんな目に遭わせた、全てのことを恨んでいた。

車はあつという間に駐車場を突っ切って、外へと飛び出した。

外は暗い。当然である。

ここは地下に建設された都市なのだから。

しかも今は、「夜」の時間帯だ。

人々に擬似の暦を与え、時間感覚を麻痺させないために作られた「夜」である。

地下都市の天井に備え付けられた電灯は、ほとんどがその明かりを消していた。闇に覆われた道路に、車は乗った。

この道路は都市の中で最も主要な道路である。いわば幹線道路というやつだ。道なりに進めば、地下都市の外へ出ることもできる。

汚染され、人が住めなくなった地上へである。

しかし、背に腹は代えられない。

彼の居場所、外にしか残っていないなかった。

どこか別の地下都市まで逃げて、ひっそりと隠れ住むしかないのである。

車の遙か後方で、重い金属音が響いた。

——来た！

男は、自分の足に全体重を乗せた。

ありったけの力で、アクセルを踏みつける。

車は一層速さを増した。

しかし、後ろの金属音はどんどん大きくなっていく。

近づいているのだ。

彼を追ってきているのである。

彼を、殺すために。

バックミラーに、小さな光が映った。

男は目を見開くと、ハンドルを左に切る。

ガキユンツ！

いつ聞いても嫌な音だ。

何かが、ついさつきまで車がいた辺りのアスファルトを削り取った。

ちくしょう、まさか都市の中で発砲するとは！

彼は唇を噛んだ。

警察——「ガード」が来る前に片を付けるってことか！

彼はそのまま、交差点を左へ曲がった。

信号などこの際無視である。

どうせ、他に車などいはいしない。

この道の先にも、地上への出口はある。

道の両側には、高層ビル群が建ち並んでいる。

どれもこれも、名の知られた大企業のものばかりである。

窓の灯りもちらほら見える。

残業に勤しむ、仕事熱心なサラリーマンたち。

ご苦労なことだ。

男も、ついさつきまでは彼らの仲間だった。

仕事の分野は違えども、自分の所属する会社の利益のため、必死に働いていたのだ。それが今はどうだ。

彼はいらなくなつたのだ。

男は思った。最悪のリストラだ。

その時だった。

突然、前方のビルの影から巨人が一人、姿を現した！

いや、それは巨人ではない。

戦闘用の巨大ロボット。

ACと呼ばれる汎用兵器である。

紫色の機体が、車のヘッドライトを受けて照り輝く。

その手に持ったハンドガンは、紛れもなく彼の方を向いていた！

——回り込まれた！

男はアクセルから足を放すと、一瞬だけブレーキをかけ、すぐさまアクセルに足を戻した。

その間にハンドルは左に目一杯切られている。

後輪がけたたましい音を立てて地を滑り、車は180度回転した。

そのままアクセルを踏みつけ、全速力でACから逃げる。
ガシユツ。

紫色のACが、一步足を踏み出した。

そしてもう一步。

そのたびに低い音が響き渡る。

音の間隔は、少しずつ狭くなっていった。

音そのものも、少しずつ大きくなっていった。

近づいている。男は後ろを振り返る気も、バックミラーを確認する気も起こらなかった。

怖い。怖い。助けてくれ、死にたくない！

男の全身から冷たい汗が噴き出した。

音が大きくなっていく。

男の息づかいが荒くなった。

音が大きくなっていく。

男の口から叫び声が飛び出した。

銃声が響く！

男はハンドルを右へ左へと忙しく操作した。

車もそれにつられて道路を蛇行運転する。

後ろから飛んできた数発の弾丸は、全てアスファルトをえぐるだけに終わった。
男は知っている。

どんな動きをする目標が、一番狙いにくいかを。

それは皮肉にも、彼が今まで手こずってきた動きに他ならなかった。

しかしそれでも、弾丸は執拗に車を狙い続けた。

男は気付いていた。

だんだんと、狙いが正確になってきている。

自分の動きに、相手が慣れてきている。

さすがにいい腕をしていやがる。

男は奥歯をかみしめた。

バシユツ！

突然、車が大きく傾いた！

後ろの方でギャリギャリと嫌な音がする。

弾丸がタイヤをかすめたのだ！

男は必死にハンドルを操作した。

しかし車は全く言うことを聞こうとはしなかった。

そのままの勢いで、車は道ばたの街路樹に突っ込んだ。

反動で男は頭をしたたかに打ち付けた。

しかしぼうつとしてゐる暇はない。

アクセルを踏む。

反応は……ない。

完全にダメだ。

男はなんとか歪まずに保っていた助手席のドアを蹴り開けると、外へ飛び出した。

しかし、もはや全ては手遅れだった。

男を待ちかまえていたのは、ほんの一メートル先にある、ACの銃口だった。

男は紫のACを見上げた。

巨大なロボットは身動き一つせず、そこに佇んでいた。

男はゆっくりとその場に尻餅をついた。

その時、彼の中で何かが途切れた。

男は突然けたけたと笑い出すと、やがて大声で騒ぎ立てた。

「レイヴンだな……お前はレイヴンだろう!？」

ACは微動だにしなかった。

「俺も昔はそうだった……ネストはもう抜けちゃったがな。」

わかるだろ？

企業からオファーがかかったのさ。

俺はその話に飛びついた。

当たり前だよな!?

企業のエージェントになるんだ。

明日の飯もどうなるかわからねえようなならず者じゃねえ!

普通の暮らしができる。

人並みに暮らせるって、そう思ってたんだよ!」

A Cは微動だにしなかった。

「だが俺はいらなくなった。

お前がいるからだッ!

噂は聞いている。

アリーナの2位なんだってな?

さぞかしい腕してるんだろうよ!

気を付けろ、レイヴン。

奴らはお前を狙ってる。

俺の代わりに今度はお前を食い物にするつもりなんだッ!

02 声を奪われた少女

がちやつ。

金属音が小さく響いた。

外から誰かが鍵を開けたのだ。

さつきからずつとパソコンと向き合っていた少女は、弾かれたかのように椅子から立ち上がった。

右手にある本棚。

左手にあるシステムラック。

どれも彼女の趣味である。

飾り気はない。

しかし、手入れは病的なままでに行き届いている。

塵も埃も小さな汚れに至るまでも、この部屋のどこにも残ってはいなかった。

それを改めて確認すると、彼女は満足した。

待てよ。

彼女の、一つに纏めた長い金髪が揺らいだ。

一房だけ混ざった黒髪が頬を撫でる。

うつむいた彼女の目に映ったのは、自分が着ているタートルネックのセーターと、藍色のデニムパンツだけだった。

もしかしたら、鍵を開けたのは彼ではないかもしれない。

彼女の心に、急に不安が押し寄せた。

なんとなく苦しさを覚え、胸を両手で押さえる。

そのまま彼女は元の椅子に座り込んだ。

ドアが開く。

彼女は目を閉じた。

見たくない。

見るのが怖い。

そう思った。

しかし次の瞬間、全ては吹き飛んだ。

「ただいま、アヤメ」

彼女は……アヤメは、はっと目を開けた。

白が最初に目に入った。

次に銀が目に入った。

ぼやける焦点を合わせると、ドアを開けて狭い部屋に入ってくる一人の男がそこにいた。

アジア系の顔つき。

見ようによって美しくも醜くもある銀色の髪。

全身を包む真っ白なロングコート。

アヤメは立ち上がり、彼に駆け寄った。

アヤメは渾身の力を込めて、彼の腕にしがみついた。

何も言わず、ただ彼の胸に顔を埋める。

確かに言葉はない。

しかし、これで十分だった。

これがアヤメの意志表現であることを、彼も知っているのだから。

彼は残された方の腕で、アヤメの髪を撫でた。

そしてもう一度、やさしく語りかけた。

「ただいま」

それと、ほぼ同時だった。

彼の後ろにあるドアから、もう一人の男が顔を出したのは。

「ツカサ君、帰ってきたんで……おや」

アヤメはその声に驚き、慌てて彼の腕から離れた。

その代わりに彼の影に隠れる。

ツカサと呼ばれた男は振り返ると、無粋な男に向かって忌々しげに吐き捨てた。

「何の用だ、コバヤシ」

「いや、失敬。お邪魔でしたかな」

コバヤシは微笑みを返すと、家の主の許しも得ずにくずかかと部屋に入り込んだ。もちろん二人ともいい顔はしないが、あえて追い出すということもない。

彼が敵ではないことを知っているからである。

ネズミ色のあまりセンスの良くないスーツに身を包んだ真面目そうな男。

コバヤシの外見には、その程度の特徴しかなかった。

知らない者がみれば、どこぞの企業戦士かと思うだろう。

彼の地味さが、あえて作られた物であることを知る人間は、ほとんどいない。

「何の用だ」

「まあ、そう邪険になさらずに。

見てください、これを」

コバヤシはブリーフケースの中から一冊の雑誌を取り出した。他愛もない、どこにでもあるゴシップ誌である。

「キヤメロット」といえば、業界では一、二のシェアを誇る有名雑誌だ。もつとも、普段なら到底彼らの興味を引く物ではない。

しかし今回だけは例外だった。

表紙には、一番大きな字でこう穿たれていたのだ。

「新人レイヴン宝条司、驚異の快進撃！

キヤメロットだけの密着レポート！

……ふふふ、なかなか刺激的な見出しじゃないですか」

「アリーナ管理委員会じゃあそんな雑誌が流行ってるのか」

「ああ、いえ。これはあくまで個人的な趣味でして」

コバヤシは雑誌を差し出した。

しかし、男が……司が受け取ろうとしないのを見ると、残念そうにそれを元のブリーフケースへと収めた。

その間に司はきびすを返すと、さつき入ってきたばかりのドアに手をかけた。

「司くん」

司の足が止まった。

「アリーナの1位は強敵ですよ。

あなたが思っている以上に」

司は肩越しに振り返り、コバヤシに冷たい視線を投げかけた。

そこに含まれるのは侮蔑か嘲笑か、あるいはもつと複雑な感情なのか。彼がふと横に目を遣ると、アヤメが心配そうな瞳で彼を見つめていた。

「大丈夫だ、アヤメ。俺は負けない」

アヤメの頭をそつと撫でると、司は微笑んで見せた。

しかし彼女の表情は変わらなかった。

うつむいて、ただじつとしてるだけである。

「ACを片づけてくるよ。すぐに戻るから」

彼の声は優しかった。

しかし、不十分だった。

アヤメの心の隙間を埋めるには。

司が出ていったあと、残された二人はしばらく無言で立ちつくしていた。

静寂が支配する時間。

それをうち破ったのは、コバヤシの方だった。

「アヤメさん。どうやら」

コバヤシは眼鏡のずれを直した。

「あなたの気持ちも、私と同じのようですね」

*

ピピッ。

暗い廃工場の中に、響き渡る電子音。

司は手元の液晶盤を確認した。

どうやら、燃料は全て抜き取れたようである。

彼の愛機からパイプを抜き取り、燃料タンクの蓋を閉じる。

彼の手入れは適切で、正確だった。

あとは、機体全体に埃よけのビニールシートを被せれば終わりである。

司は脇に畳んでおいてあるシートに歩み寄った。

そういえば。

彼の脳裏に過去の光景が浮かんだ。

忌まわしい過去。

忘れたい過去。

捨て去ってしまいたい過去。

でも捨てられない過去。

親父も昔、同じことをしていた。

宝条司。

彼の父親は機械工だった。

それほど腕がいいというわけではない。

かといって勤勉で努力家、というわけでもない。

言ってみれば二流だった。

母親はその助手をしていた。

二人がどうやって出会ったのか、彼は知らない。

もう調べようもないし、別段知りたいとも思わない。

どうせ、ろくでもないことなだろうから。

ただ、人から多少のことを聞いたことはある。

彼の両親はかつて、不良グループの一員だったらしい。

不良グループなんていうと可愛らしく聞こえるが、中身は下手なテロリストよりタチ

が悪い。

窃盗、恐喝を手始めに、強盗、強姦、果ては殺人に至るまで……悪名は止まることを

知らない。

司の銀色の髪も両親が常用していた麻薬の影響だと、医者から聞かされた。

彼は両親を恨んだ。

奴らさえまともな人間であれば。

ガードの厄介になるような人間でなければ。

彼が孤児院に送りつけられることもなかったのだ。

あの地獄のような孤児院に。

そう……司は生きながらにして地獄を見た。そう思った。

収容されている孤児から、生傷が絶えることはなかった。

孤児院を管理している連中——「先生」と呼ばれていたが——の乱暴に、少しでも刃向かおうものなら、柱に縛り付けてしまうのである。

餓死するまで。

年頃の少女達はほとんどが「先生」の玩具にされていたし、少年達は悲鳴を上げるサンドバッグにされた。

そこで彼は、一人の少女と出会った。

金髪で、虚ろな目をした少女。

歳は彼より2つほど下だった。

そして奇妙だったのは、一言もしゃべろうとしないことだった。

彼も噂は聞いていた。

なんでも、両親を目の前で惨殺されたショックで、失語症になったらしい。

そのあまりの異様さに、誰一人として彼女の友人になろうという者はいなかった。

「先生」たちも、彼女にだけは手を出そうとはしなかった。

彼女は孤独だった。

でも司だけは知っていた。

彼女がただでさえ少ない自分の食事を残し、それを柱に縛り付けられ、明日にも飢え死にするかもしれないという子供に与えていたことを。

そしてその子供が死んだとき、ただ一人物陰に隠れて密かに涙を流していたことを。

司はそれを見て思った。

自分が彼女を守ろう。

彼女が他の何かを守るように、自分は彼女を守ろうと。

それがアヤメである。

そして三年前。

彼はついに行動に出た。

丁度大企業同士の抗争が激化していた頃である。

彼は混乱に乗じて、アヤメとともに孤児院を脱走した。

廃棄されていたロボット……MTを自ら修理し、傭兵の真似事をして生計を立てた。ACを買えるほど金が貯まって、正式に傭兵組織「レイヴズネスト」に登録されたのは、つい一年前のことである。

レイヴズネストに登録された傭兵は、「レイヴン」と呼ばれる。

そのレイヴン達が自分の腕前を競い合う闘技場が存在する。

バトルアリーナである。

アリーナを管理しているのはレイヴズネストと、第三者のアリーナ管理委員会と呼ばれる組織だ。

アリーナ管理委員の中でも比較的有力な位置にいるコバヤシに、実力を認められたのは幸運だった。

司はアリーナという手軽な金儲けの手段を手に入れたのである。

生活はぐんと楽になった。

住処にしている廃工場に、アヤメがくつろげるスペースを作ってやることもできた。

そうだ。

彼は信じている。

幸せな生活をしていれば……幸せを感じ続けていれば、アヤメはきつと良くなる。

きつとシヨックから立ち直ることができる。

そう信じていた。

嫌な過去を振り払うかのように、司は頭を振った。

そのまま床においてあるシートに手を伸ばす。

その時、なにかが視界の端で蠢いた。

顔を上げ、そつちに目を向ける。

それは灰色のスーツに身を包んだ、コバヤシの姿だった。

「では、わたしはそろそろ失礼します」

司は変な顔をした。

彼は本当に、あの下らないゴシップ誌を見せに來ただけだったのか。

だとすれば、アリーナ管理委員というのは、さうとう暇な職業のようである。

「そうそう、あなたに依頼が來ていたみたいですよ。

受けてみてはどうです？

まだ次のアリーナ戦までには間がありますし」

司が肩をすくめると、コバヤシは少し微笑んだ。

そしてそのまま後ろを向くと、固い靴音を響かせながら廃工場を去っていった。

つづく。

03 “絶対”

「アヤメ」

ACの片づけを終えて部屋に戻るなり、司は彼女の名を呼んだ。

アヤメはいつも通りパソコンの前の椅子に腰掛け、キーボードを一心不乱に叩いていた。

しかし司の存在に気付くと、慌てて振り返り、手を伸ばした。

腕を掴めるところまで来い、という合図である。

なぜかはわからないが、アヤメは言葉を使う代わりに相手の腕にしがみつこうとする癖がある。

一見すると意味がないように見える行動だが、不思議と気持ちが伝わってくるのである。

彼女の望み通り、司は直ぐそばまで歩み寄った。

すぐさまその腕をアヤメがつかみ取る。

「依頼が来てるのか？」

アヤメはうつむいた。

彼女の感情が、腕を通して司に流れてくる。

わかつていた。

いつもこうなのだ。

押しつぶされそうな不安。

アヤメからは、いつもそんな気持ち伝わってくるのだ。

「大丈夫だ。俺は負けない。ちゃんと帰ってくる。」

今までだってそうだっただろ？」

納得したようにはとても見えなかったが、少なくとも理解はしたようである。

アヤメは片方だけ腕を放し、それでキーボードを操作した。

レイヴンにしか持ち得ない、特殊なメールアドレス。そこには一通の依頼文が転がり

込んでいた。

司はアヤメの体を抱くようにしながら画面を覗き込んだ。

依頼主は、彼のスポンサー企業。

アリーナに出席するレイヴンは、大抵企業をスポンサーに付けている。

賞金とは別に弾薬費、燃料費、修理費などをスポンサーが負担してくれるのである。

もちろん、レイヴンが活躍すれば企業にとつては大きな宣伝になるし、同時に頼りになる準エージェントも手にはいる、というわけだ。

依頼内容は、ごくありふれたものである。

敵対企業の武装勢力がある地点に地下基地を建設しているの、それを妨害、破壊するというもの。

武装勢力を撃墜すれば、その分特別報酬が加算される。

基本報酬も悪くない。

それほど難しい仕事ではない。

アヤメを安心させようと、司は精一杯に微笑んで見せた。

「明日、もう一度行つて来るよ。

……そんな顔するなよ。

お前を残していなくなったりはしない。絶対に」

表情を曇らせたままのアヤメの頬を、司はそつと撫でた。

彼女の手が、司の手の上に重ねられる。

伝わってくる柔らかな温もり。

刺すような冷たい感情。

不安。

司は少し悲しくなって、目を閉じた。

*

どうしてこんなことになってしまったのだろう。

男は引き金を引いた。

手にした大きな銃らしきものから、爆発にも近い風——空気の弾丸が飛び出す。

目の前にいる男は、一瞬にして吹き飛び、壁に叩き付けられた。

そのまま地面に落ち、ぴくりとも動かなくなる。

ガストライフル。

その名の通り、空気に大きな圧力をかけて、発射する兵器である。

威力の弱い物は暴動鎮圧に使用される程度だが、リミッターさえはずせばこの通りだ。

大きさの割に軽く、エネルギーパックだけで弾丸も必要ない。

便利ではあるが、発射時の轟音と頻発する暴発事故が悩みの種である。

もつとも、事故の方は正しい取り扱いさえすれば全く問題ないのだが。

男は辺りを見回した。

オフィスビルの通路とおぼしき光景。

ただ、至る所に血が飛び散り、いくつもの死体が転がっているところが、普通のビルとは異なっていた。

鼻を突く硝煙の臭い。

動く物は自分以外になにもない。

もう敵は周囲には残っていないらしい。

男は後ろを振り返り、手で合図を送った。

彼のすぐ後ろにあつたドアから、二人の女性が姿を現した。

一人はおそらく20代後半か、30代の。

もう一人は、片手で歳を数えられるくらいなの。

彼が愛する二人の女性。妻と娘だった。

「逃げよう」

彼は出し抜けに、妻に言った。

彼女は少し驚き、戸惑った。

恐る恐る口を開く。

「一体どこへ……」

「わからない。

でも、何処へ行つたつてここより危険なことはないさ」
娘の前に、彼はかがみ込んだ。

熊のぬいぐるみをしつかりと抱いて、不安げな瞳でこつちを見つめる娘。
彼は微笑んだ。

それはいつも、アニメを見てはしやぐ娘に投げかけていた笑みだった。

「パパ……」

「大丈夫だよ。」

パパとママががなんとかするから」

娘は熊のぬいぐるみを投げ捨てた。

自由になった両手で、父親の腕にしがみつく。

彼女の癖だった。

父は微笑みを絶やさず、娘の頭を優しく撫でた。

彼女の表情は変わらなかった。

少しだけ、父の瞳に悲しげな色が浮かんだ。

「そんな顔をしないで。」

アヤメを残して、いなくなったりするもんか。絶対だ」

父は立ち上がった。

懐から小さな黒い物を取り出し、彼の妻に手渡す。

プラスチック製で、重みはほとんどない。

彼女は自分の手に目を遣った。

奇妙な形の、拳銃だろうか。

前に一度見たことがある。

磁気ニードラー。

金属製の針を、磁力で加速して射出する兵器だ。

反動はほとんどなく、銃器の扱いに慣れていない者でも比較的扱いやすい。

「僕が道を開く。」

君は、それでアヤメを護ってくれ」

母は少し、不安を顔に浮かべた。

でも……やるしかないのだ。

自分が生き残る為に、夫が生き残る為に、そして何より、娘が生き残るために。

母は決意した。

ニードラーを右手にしつかりと持ち、残った手で娘の手を引く。

そして彼女はうなずいた。

「行こう。時間がないもの」

「北棟にしよう。」

あつちはまだ手が回ってないだろうし、車もある」

三人は、慎重に走り出した。

北棟へ行くには、右の通路からが一番早い。

無機質の床と靴底がふれあい、甲高い音が響く。

やがて三人はT字路にさしかかった。

右へ曲がれば、北棟へゲートは目前である。

さつきから追っ手は誰一人いない。

やはり、こちらにはまだ手が回っていないのだろう。

三人から安堵の笑みが零れた。

父は、逃げ延びられそうだという安堵。

母は、銃を使わずに済んだという安堵。

そして娘は、どうやらもう走らずに済みそうだという安堵である。

一行を先導していた父親が、まず最初に角を曲がった。

そしてそのまま凍り付く。

彼は鬼のような形相で振り向くと、二人の女性に向かってありったけの声で叫んだ。

「来るなっ!!」

ドシュッ!

鈍い音。彼の右足から血と肉片が飛び散った。

痛みに一瞬の叫びを上げながらも、必死に右足を引きずって、角のこちら側へ逃げている。

「こちらW22。生存者を発見した。」

男が一人。ガストライフル所持。他にもいるようだ」

『了解。至急応援に向かう』

知らない男の声が、曲がり角の向こうの方から聞こえてくる。

なんてことだ。

もう、ここも安全ではなかったのだ。

父は、両目に涙を一杯にためている娘を抱きかかえた。

しゃべるわけにはいかない。

声を出せば、追っ手にばれてしまう。

彼らに娘がいるということが。

本当は、最後に言葉をかけたかった。

横に目をやった。

妻もまた、決意に満ちた表情で彼女の娘を見つめていた。

声はださない。

彼女もわかつているのだ。

そうだろう。彼女は自分より頭がいいのだから……

父は自分の妻とうなずきあうと、足下にあるエアダクトを慎重に開いた。そしてその中に自分の娘を入れた。

「……………」

娘はかすかに、うなり声をあげた。

今にも泣き出しそうだ。

彼は慌てることもなく両手の人差し指で、口の前にバツを作った。

しゃべってはいけない。

父の真剣な瞳に、彼女の涙が止まった。

彼は微笑み、右足の痛みをこらえて立ち上がった。

今度は、入れ替わりに母親が娘の前に顔を見せた。

そつと娘の頬を撫でると、反対側の頬に軽くキスをする。

別れの挨拶は、それだけだった。

母はエアダクトの蓋を閉じた。

蓋は格子状になっていて、外からでは滅多なことでは見つからないだろう。

母も、立ち上がった。

娘には、もはや何も見ることはできなかつた。

聞こえてくるのは音だけ。

彼女はそいつぶらな瞳を閉じた。

カッ、カッ、カッ……

カチチャッ。

「……この職員だな？」

カッッ。カッッ。

「僕たちは忘れないぞ。この裏切りを」

ガチチャッ。

「そういうことは、社長に言ってくれ」

サッ。

カサッ。

「わたしたちは、いつも一緒にいるわ」

「愛しているよ、アヤメ」

カチッ。

どばあっ!!

……
……

カツカツカツカツカツ。

「……こりゃ酷い……聞こえるか？」

こちら西口通路……まるでジャムだよ……ああ、男と女。

夫婦か恋人だろ。手を繋いだままだ……ん？」

カツ、カツ。

「……いや……妙な血痕が……」

これは……通風口か。

まさか……」

ガチツ、ガチツ。

ガチャン。

シュ……ゴトツ。

光が戻った。

アヤメは震えていた。

両手で耳を塞いで。

小さな瞳を必死に見開いて。

恐怖に歯をがちがちと鳴らして。

アヤメはただ、震えていた。

何も、何もしやべらずに。

だって、そうじゃないか。

しやべっちやダメだって、パパが――

――パパが――

つづく。

04 森林の戦い

『目標地点到達まで後30秒。

A C 投下のカウントダウンを開始します』

無人輸送機のコンピューターが報告する。

いよいよだ。

司は操縦桿に手をかけた。

外の様子は見えないが、今いる場所は広大な針葉樹林の上空である。

この森に、ターゲットとなる地下基地が建設されているらしい。

宵闇に紛れて進入し、破壊する。

それが任務だ。

しかし森というのも不思議な存在である。

この汚染された地上では、水は全て強烈な酸性雨として降り注ぐ。

普通の樹ならとても生息できる状況ではないのだ。

しかし、森は存在している。
適応してしまっただのである。

少々の酸性雨では、びくともしないような抵抗力を、森は手に入れたのだ。
大破壊からたったの53年だが、そんな短い期間でも生物は進化できるのだ。

『10秒』

司の全身を、緊張という名の電流が駆け回った。

今まで何度も死地に赴いてきたが、この緊張感を忘れることは一度たりともなかった。

それはまだ自分が未熟ということなのか？

それとも、忘れてしまった人間の方が狂人なのか。

『……3・2・1・投下』

がぱんっ。

足下の床が、音を立てて開いた。

爽快感とも恐怖とも思える奇妙な感覚が司を襲う。

自由落下特有の感覚。

彼の愛機『ミーティアライト』は、その名の通り流星のごとく眼下の森へと落下していく。

ある程度落ちてから、司はブースターの起動スイッチを押した。ACの背面に備え付けられたブースターが火を噴き、落下の勢いを殺す。ドズツ！

重苦しい音と砂煙を立てて、ミーティアライトは大地へと降り立った。紫色のボディが月の光を浴びて燦然と輝く。

狼の目が、戦いを予感してぎらぎらと光を放った。

*

「来たぞー！ 情報通りだー！」

地下基地の一角、いくつもの機動兵器が立ち並ぶ格納庫へと、男が一人駆け込んだ。既に格納庫の中で作業をしていた人々が、一斉に彼の方へ振り返る。

その中の一人が口の端を吊り上げる。

風体からすると、この一団のリーダーらしい。

「馬鹿な奴だぜ。」

待ち伏せされているとも知らずに……

相手はアリーナの2位らしいが、大したことはねえ！

なんとってこっちはマスターランカーが付いてるんだからな!

気合い入れろよ、落とした奴は特別ボーナスだ!」

一同から鬨の聲が上がる。

そろって自分の愛機に乗り込む男達。

中には、どうせボーナスが入っても周りからたかられるだけだと高をくくった、冷めた連中もいたが。

異様な熱気に包まれる格納庫の隅に、派手な真紅の塗装のACが一機、佇んでいた。人間型2足の、ごく一般的な機体構成である。

その傍らには、壁に背を預け、周囲の様子をつまらなそうに眺めている女。

彼女は肺にため込んでいた息を吐き出すと、おもむろに自分の愛機のコックピットへ向かった。

*

上空から落ちるときに見た光景を、司は思い起こした。

ここですぐ北に、木の生える間隔が妙に広い場所がある。

どうしてそんな場所が存在するのか……

もつとも高い可能性は、重機が活動しやすいように、何者かが樹を間引いたということだ。

おそらくは、ターゲットの武装集団が。

司は操縦桿を動かした。

狭い木々の間を、ミーティアライトは器用にくぐり抜ける。

何も撃ち合っただけがレイヴンの仕事ではない。

巨大な兵器であるACを、いかに見つかからないように移動させるか。

それもレイヴンにとっては重要な技能である。

やがて視界が開けた。

やはり、樹の間引かれた跡がある。

司は外部カメラで地面の様子を拡大した。

巨大な足跡、車輪の痕跡。

熊や鹿でないのは確かだ。

全長7、8メートルにもなるかという熊がいるのなら、それこそ例のゴシップ誌が飛びついてくるだろう。

ここから先は、何が起きてもおかしくない。

司はもう一度機体の確認をした。

右手のハンドガン、肩に背負った爆雷投射機。

左手の甲に備え付けられたレーザーブレード。

各部駆動系。

ジェネレーター出力。

どこにも問題はない。

よし。

司は気合いを入れ直した。

慎重に、ミーティアライトは歩みを進めた。

地面の足跡を伝い、まばらな木々に隠れながら地下基地への入り口を探す。

そう広いスペースがあるわけではない。

探すことそのものはそれほど難しくないだろうが――

背筋を駆け抜ける悪寒！

司は乱暴に操縦桿をなぎ倒した。

ミーティアライトの巨体が振り向きもせず横に飛ぶ。

ついさつきまでミーティアライトがいた地点で巻き起こる爆発！

スピードを殺さないように移動しながら回転する。

背後には、一機のヘリコプター。

さっきの爆発は奴が放ったミサイルだろう。

「敵機確認。」

カルナック・オプトエレクトロニクス・システムズ製、戦闘ヘリ『ボロー』、機数3。

及びMT『ハルバード』、機数4。

戦闘リグ『ハチエット』、機数3」

たいそうな部隊編成である。

司は顔をしかめた。

見つかった、というよりは待ち伏せされていたという感がある。

もしや情報が漏れていたのか……

まあいい。

どうせ破壊しなければならぬのだ。

早いか遅いか、それだけである。

空を飛んでいるのは中型のヘリコプター。

ミサイルは一機に2つつつ装備されている。

機関砲も付いている。

そして、まるで大砲に足が生えたかのような形のMT。

地面すれすれを高速でホバー移動する特異な戦闘機、「戦闘リグ」は、これまた大砲と

エンジン以外はコックピットしかないような作りである。

カルナツクといえ、オプトエレクトロニクスの分野ではそれなりのシェアをもつ企業。

元はパソコン用のモニターが主な製品だったが、最近では光学兵器で有名だ。ということは、あの大砲は強力な光学兵器である可能性が高い。

……ならば、敵の取る戦法は……

ミーティアライトが地を蹴った。

そのままブースターを吹かして空中に飛び上がる。

鋭い音を立てながら、足下を過ぎ去っていく光線。

レーザーが大気を電離させ、プラズマ化させる為に生じる輝きである。

それを見るが早い、司はもう一度操縦桿をひねった。

空中で進路を変え、ミーティアライトは水平移動を始める。

また、その背をかすめるレーザー光。

やはりそうか。

複数で手分けして、徐々にこちらを追い込んでいくつもりなのである。

レーザーの貫通性と弾速を考て、こちらが防戦一方になると踏んだわけだ。

……だが、甘い！

ミーティアライトのブースターが、全力で火を噴き出した！

目指す先は、地上のMT一機！

完全に衝突するコースだ！

MTは慌てて後ろに下がる。

それが司のもくろみ通りであるともしらずに。

MTの目前に降り立ったミーティアライトは、レーザーブレードでMTから大砲を切り離した！

衝撃で地面に倒れ込むMT。

ミーティアライトが振り向く。

敵は誰一人としてレーザーを放とうとはしない。

当然である。

貫通性のあるレーザーをこの状態で撃てば、仲間も巻き込むことになるのである。いつまでも戸惑っていることはないだろうが、司にとっては一瞬で十分だった。

ダンッ！

ハンドガンの弾丸が手近にいた戦闘リグに食い込んだ。

ダメージはそれほどでもないが、衝撃で一瞬動きが止まる。

そして次の瞬間には、リグは光の刃によって真つ二つにされていた。

これで2機！

そこを狙って飛来するミサイル！

どうやら、最初にふっきれたのはヘリのパイロットのようである。

だが、甘い。

二機のヘリがホバリングしながらミサイルと機関砲を乱射している。

ミーティアライトは前にステップしてヘリの真下に潜り込んだ。

地を蹴り、空中へ飛び上がる。

そして……不意に肩の爆雷を放った！

この兵器は、本来放射状に爆雷を撒き散らすためのものである。

しかし今回は違った。

斜方に撃ち出された爆雷は、落下を始める前にヘリに命中した。

巻き起こる爆発。

まとまっていた2機が2機とも、煙を吹き出しながら大地へ落ちていく。

4機！

そのまま大地に着地して、ミーティアライトはブースターで地を滑った。

例の光線が周囲の樹をなぎ倒しながら迫ってくる。

わずかにコアにかすが、リフレック塗料に弾かれ、何処かへと消えていった。

それを皮切りにMTと戦闘リグが一斉にレーザー砲を構える。
ミーティアライトの周囲は360度、全て囲まれている。

つづく。

05 アイリス

……馬鹿な奴らだ。

司は一人、ほくそ笑んだ。

操縦桿を握る手を止める。

もちろん彼の愛機も動きを止め、森の中で静止した。

司の額に汗が浮かんだ。

タイミングを間違えれば、それは自分の死を意味する。

キュイイイインツ！

金属を掻きむしったような不快な高音。

全部で6本の光線が、一点に収束した！

丁度、ついさつきまでミーティアライトが立ちつくしていた地点に。

おそらくパイロット達は、自分の目を疑っただろう。

紫色の巨人は、空中に飛び上がってレーザーをかわしていたのだ。

レーザーは、当然だが光である。その速度は光速に等しい。

それを避けるためには、もちろん目標も光速で移動しなければならぬのだ。発射された後で回避する為には。

つまり、ミーンアライトは発射の直前に、既に回避行動を始めていたのである。

言うのは簡単だが、少しでもタイミングが早いと照準が機体の動きをとらえてしま

う。

それでは何の意味もないのである。

いつ発射されるとも知れない敵の攻撃のタイミングを、正確に知ることは……

事実上、不可能。

「勘が当たったな」

司の言葉と、全く同時だった。

外れたレーザーに貫かれて、敵のMT3機と戦闘リグ1機が爆炎を吹き出したのは。

ミーンアライトはそのまま上昇する。

目の前にはヘリが一機。

慌てて機関砲を撃ってくるが、それも司の勢いを殺すことはできなかつた。

左腕がきらめき、光の刃がヘリを断ち切る。

へりは空中で爆発し、辺りに光と残骸を撒き散らした。

これで、9機。

司はモニターで真下に目を遣った。

明らかに動きが鈍くなったリグが1機。

レーザーの発射には膨大なエネルギーが必要である。

おそらく、さっきの攻撃でチャージして置いた電力を使い切ったのだろう。

もはや、第二射はない。

ガシユッ！

ミーティアライトのハンドガンが火を噴いた。

真上からの弾丸が、リグを地面に押しつける。

もう一発。

当たり所が悪かったのだろうか。

リグは噴煙を吹き始めた。

そして

ザンツ！

真下に向かって突き出されたレーザーブレードが、その機体を貫いていた。

特異な高速戦闘機は、完全に動かなくなった。

勝った。

司は惚けたような顔で遠くを見つめた。

また、勝った。

自分は強い。

そう思う。

これだけの戦力を相手取って自分は傷一つ負っていない。

これなら。

自分なら。

アリーナのトップにだろうと、負けるわけがない。

司は勝者になるのだ。

そうすれば、きつと生活はもっと楽になる。

アヤメを、喜ばせることができるのだ。

司は頭を振った。

今はまだ、ミツシヨンの途中だ。

任務なんて、彼にとつては遊びのようなものだったが……

それでも、油断は禁物だ。

何があるか、わからないのだから。

*

びっ。

小さな電子音。

アヤメはパソコンの画面に目を遣った。

第一波は、彼に全滅させられたらしい。

もつともこれは、あくまでオードブルでしかない。

メインディッシュはずつと先である。

ただ、その前にやることがある。

ネットワークへと接続し、適当なポイントにアクセスする。

数度の移動を繰り返して、画面に表示される小さなウィンドウ。

向こうのホストは、IDとパスワードの入力を求めている。

慌てず騒がず、アヤメはあるソフトを実行した。

彼女のオリジナルソフトだが……一般には、「ディクシヨナリ」と呼ばれる種類のソフトである。

とりあえず、IDの欄に文字を入力する。

「Iris」

そして、ここからが「デイクシヨナリ」の本領発揮である。低い音が響く。

CPUの加速器が、高速で回転しはじめたのだ。

きりきりと、心地よいリズムがしばらく伝わってくる。

やがて、電子音とともに、画面に文字が表示された。

「OK, your access was accepted.」
よし。

とりあえず、アカウントは手に入ったようである。

すぐさまアヤメはもう一つのソフトを動かした。

これは、「スカウト」というタイプのものだ。

数秒で、「スカウト」が結果を報告する。

結果は……「アラーム」及び「トラッカー」と連動した「ウオッチドッグ」……

それと、「リジエネレート」が単独で常駐しているようである。

しかし「ウオッチドッグ」の方は、「スカウト」に連動させた「アイスピック」で既に破壊済みだ。

今頃、必死で「リジエネレート」が修復しているだろう。

それは、少しまずい。

アヤメはさらに「メルト」というソフトを動かした。

目標は、もちろん「リジエネレイト」。

全ての修復を終える前には、「リジエネレイト」は完全にとけてしまっているだろう。これで、一通り準備は終わりである。

堂々とデータセクションにアクセスし、そのデータに目を通す。

目的の物は、すぐに見つかった。

護衛として雇ったレイヴンの記録である。

すぐさまアヤメはプログラムを動かした。「デリート」である。

彼女の「デリート」は特別製である。

「サーチ」と連動していて、関連するデータを自動的に全て破壊してくれる。

楽なものだ。

この企業のデータから、ある一人のレイヴンに関係する部分が消え去った。

これであの赤いACに乗るレイヴンは、この企業とは何の関係もない、ということになった。

あとは。

アヤメはアクセスをカットした。

レイヴンズネストのデータも処理しなければならない。
まあ、あちらはもつと楽だ。

昔は異常にガードが固かったが、三年前に一度消滅して、再び結成されたネストはポロポロである。

一応名前だけは以前のネットワークから受け継いでいるが、以前とは違って重い上にハッキングのし放題。

おかげで企業は重要な依頼をネストに流さなくなつた。
それはそうだ。

敵企業を襲撃する、なんて情報が公衆の目に晒されたら、それこそ何の意味もない。
今度は、レイヴンズ・ネストとつながりの強いアクセスポイントに接続する。

ネストへの門には、データロックがかけてられている。

専用のデータキーがなければ入ることはできないのだ。

しかしこんなもの、アヤメの手に掛ければ子供だましのようなものだった。
走らせるプログラムは、「マスターキー」。

データキーとは、時々刻々と一定のプログラムに沿って変化するパスワードのことだ。

正規のユーザーは、それに対応したパスワードを出力する、鍵となるプログラムを渡

され、それによって内部へアクセスすることができるのである。

「マスターキー」とは、そのパスワード設定プログラムを解析し、独自にキープログラムを作りだすプログラムのことである。

難解な「データキー」にはさすがに対応できないが……今回は心配する必要すらもなかったようだ。

あつさりど、レイヴン専用ネットワーク、通称「ナーヴ」へと侵入できた。

本来なら、ここで「スカウト」なりなんなりを使って周囲を調査し、保安プログラム……俗にICEと呼ばれる物を発見、消去するのだが……

ここではそれすらも必要ない。

簡単な「デイスガイズ」のプログラムを走らせ、まるで自分がスーパーユーザーであるかのように振る舞う。

思った通り、「ウォッチドッグ」も「アラーム」も反応しない。

なんとも不用心なネットワーク警備である。

もう少しくらい力を入れても罰は当たらないと思うのだが。ともかく、目的の物を消去しなくてはならない。

膨大なレイヴンのデータの中から、一人のレイヴンの物を探し出す。

簡単なことだった。

彼女は有名人だから……しかし今回は全部消去してしまうわけにはいかない。出撃記録のうち、一番新しい物……今日、出撃したという記録を消去する。

これで彼女は、今日は家でのんびりしていたことになった。さて。

アヤメにできるのはここまでである。

少なくとも、ハッカー「アイリス」としてできることはもうない。

あとは、コバヤシの方が上手くやってくれれば……

アヤメは接続を切ると、しばらくパソコンの画面を眺めていた。

いつも見慣れたトップウインドウ。

なんということはない。ただの青緑色をした画面だ。

しかし今は、なんだかそこに司の顔が浮かんでくるようだった。

アヤメは瞬きをした。

司の顔は消えた。

嫌な感じだ。

謝ったら、彼は許してくれるだろうか。

謝る？ どうやって？

電源を切る。

これ以上画面を見ていたくなかった。
なんだかとても眠たかった。

でも、眠りたくないような気がした。

だって、今ここには司がいない。

護つてくれる人がいない。

司がいると、安心できる。

司が頭を撫でてくれると、嬉しくなる。

司がいないと、不安になる。

司が仕事に行くと、悲しくなる。

それは司が好きだから？

司は、好き。

一人だと生きていけないけど、二人なら生きていける。

一人だと怖いけど、二人だと楽しい。

でも、司じゃなきや嫌。

だって司はきらきらしてる。

司がきらきらするから、自分もきらきらする。

でもときどき司はきらきらじゃなくなる。

司はきらきらになる。

きらきらな司は、なんだか怖い……

眠ろう。

アヤメはそう思った。

大丈夫。司は、きつときらきらで帰ってくる。

アヤメは何もない空中を、腕でつかもうとした。

何もつかめなかった。

司が帰ってきたら、司のきらきらがつかめるんだ。

アヤメは幸せになった。司はどこにいたって、アヤメを護ってくれる。

だって司はきらきらしてるんだから。

つづく。

06 トラップ

(すぐに、歓迎が始まるな)

司はモニター越しに、通路の奥を見つめた。

見つけた地下への入り口に入って、まだ数分である。

ここまでいくつかの分かれ道があったものの、建設途中だったり電源が落ちていたりして、実質、道はこれ一本である。

敵も馬鹿ではない。

上の部隊が全滅したことくらい気付いているだろう。

戦闘は避けられないだろうが、無駄な戦闘は御免だった。

今回は強力な時限式爆弾を持ってきている。

これを深層部に仕掛けて、基地ごと連中を生き埋めにしてやるつもりだ。

暗い通路を、さらにミーティアライトは進んだ。

やがて分かれ道に出る。

十字路で、右は建設途中で行き止まり、左はエレベーター。

正面の道はダウンスロープになっている。

何分照明が乏しいので、遠くまでは見渡せないが。

さて、どっちに行つたものか。

エレベーターの方は、位置から言つてガレージに通じている可能性が高い。

外に出撃する場合、一番早く出られる方法が必要だからである。

スロープはおそらく、通常の車両が中まで入り込むためのものだろう。

多くの車両が動くなら、エレベーターよりスロープの方が都合がいい。

それなら……進む先はエレベーターだ。

襲撃部隊がいたということは、少なくとも防衛システムは完成しているということである。

ならば人間がいるのはこつちだ。

人がいない場所で爆弾を破裂させても、単に工事を遅らせることにしかならない。

いや、下手をすると工事の手伝いになってしまうかもしれない。

司は愛機をエレベーターの前に進ませると、腕の制御を戦闘モードからマニピレーターモードに切り替える。

戦闘時には引き金を引くとか、ブレードを振るとかいう行動をあらかじめプログラム

しておいて、それをボタン一つで発動させるのだが、このモードは違う。

両側にある特殊なレバーで、指の一本一本に至るまで細かく操作することができるのだ。

もちろん、エレベーターのボタンを押すのである。

エレベーターがうなりを上げ始めた。

すぐに戦闘モードに戻し、警戒する。

エレベーターが到着した瞬間に劣化ウラン弾——いや、ここの連中ならレーザーか——がお出迎え、という可能性もあるのだ。

扉が開く。

光線が飛んでくる様子は……ない。

妙な話だ。

ここまで静かだと逆に気味が悪い。

おそらくは——この下に戦力を一点集中させているのだろう。

丁度いい。司は不適な笑みを浮かべた。

探し出して潰す手間が省けるといふものだ。

迷うことなくミューティアライトはエレベーターへと足を踏み入れた。

マニピレーターを巧みに操作し、下向きの三角形が描かれたボタンを押す。

巻き上げ機のエンジン音だろう。

再び、低いうなりが辺りを満たした。
がくんっ。

鈍い衝撃が、いきなり司を襲った。

すうつと、体中から血の気が失せていくのがわかる。

ついさつきも経験したばかりだ。

この奇妙な感覚。

まさか、これは。

——自由落下！

*

『作業完了です！』

部下の声が、電波を介して彼に届く。

彼は自分のMTのコックピットで、口の端を吊り上げた。

彼の名はシユルツェ||ミュラー。

カルナツク社が極秘に組織した武装集団『ドラング』のリーダーである。

現在はこの地下基地の建設を任されている。

シユルツエは操縦桿の調子を確認した。

どうせ使うことはないだろうが、念のためである。

それにしても、今日の襲撃はシユルツエにとつては丁度いい刺激だった。

彼の本業はテロリストである。

それも、何の政治信念もない……要するに、ただ破壊に魅せられた者がその欲求を満たすためだけの、最低の集団に所属していたのだ。

最高に心地よい空間だった。

そこでは生きることと殺すことが等価だった。

そこでの戦果を買われて企業にスカウトされたが、それからは退屈な毎日の繰り返しだ。

殺すことも、壊すこともない。

あるのは創ることである。

基地。組織。

未来の破壊を思うとそれもなかなか刺激的だが、時間がかかりすぎていけない。

このままでは、手当たり次第に暴れてしまいそうだった。

だから、丁度良かったのだ。

しかも相手はアリーナ2位のレイヴン。

レイヴンと言え、テロリストにとっては天敵……いや、宿命のライバルである。殺しがいるというものだ。

とはいえ、シウルツェは自ら手を下すタイプの破壊狂ではなかった。

むしろ罠と謀略に喜びを見いだすタイプなのである。

今回もそう。

奴はまず間違いなくエレベーターに乗る。

そして乗った直後に、あらかじめ待機していた部下がワイヤーケーブルを断ち切るのだ。

十数秒のスカイダイビング。

数百メートル落下して、ACはぐちゃぐちゃだ。

中のレイヴンの血が、狭いコックピットの中に真紅の芸術作品を描き出すのだ！

シウルツェは目を見開いた。

広大な空間……彼と彼の部下が乗るMT十数機が待機するガレージである。

その壁に、エレベーターの出口がある。

鉛色の飾り気のないシャッター。

その向こうで轟音が響いた。

確認するまでもない。

エレベーターが墜落したのだ。

ぐちゃぐちゃだ。真っ赤だ。

そうだ、きつとレイヴンは千切れて、捻れて、すりつぶされて、きつとブルーベリーのジャムみたいになってるんだ。

最高だ！ やった！

「よし、中を確認するぞ。

シャッターを開けるのを手伝え」

少なくともシウルツエの声から内面の狂気をはかり知ることが不可能だった。

狂気はプライベート。これは仕事だ。

とはいえ、完全に狂気を隠すことは、彼にもできない。

周囲の者がそれに気付かないだけだ。

他の誰でもない自分自身で死体を確認しようとする態度。

仕事熱心なわけではない。

シウルツエと他の部下二人が乗る汎用二足MT『グレイヴ』が、エレベーターのドアへと近づいた。

作業に役立つレーザーブレードを装備しているのは、この三機のグレイヴだけであ

る。

他の取り巻きが乗っているハルバードという名のMTは完全な戦闘用で、こういう作業には向かない。

三機の内之二機は青の塗装。

もう一機は白の塗装である。

白いMTが隊長機、つまりはシユルツエのものだ。

白いグレイヴはエレベーターの正面へ、残りの二機は両脇へ分かれる。

まず、シユルツエの機体がドアの中心部にレーザーブレードで切り込みを入れた。

上から下へと、ゆっくり慎重に。

下手に刺激して、切り取ったシャッター部分がこつちに倒れ込んできても面白くない。

完全に切り離してから、シユルツエは通信を送った。

「やれ」

ボシユッ！

響く低い爆音。

横之二機がセットした炸薬に火がついたのである。

衝撃で切り取られたシャッターが倒れ込む。

がらがらと派手な音を立てて、金属の板が白いグレイヴの足下に倒れ込んだ。

その向こうには、見るも無惨に潰れた、エレベーターのゴンドラ部分。

もちろんドアも完全に使い物にならないが、それほど大きな問題はない。

潰れたゴンドラの上からレーザーブレードで小さく穴を開けるだけで、内部の確認く
らいはできる。

シウルツエは操縦桿を奥へ倒した。

それに素早く反応したグレイヴが、潰れたゴンドラをよじ登る。

その上に乗るまでに、それほど時間はかからなかった。

さあて。

あとは、ここにブレードで穴を開け、中で潰れているトマトの姿を確認するだけだ。
シウルツエは眉をひそめた。

彼はまだ何もしていないのに、そこには大きな穴が一つ、開いている。

——と、その時。

ザンツ!!

シウルツエの意識は、突然闇の中に消え去っていった。

つづく。

07 慢心

その場の誰もが我が目を疑った。

無理もないだろう。

いきなり上空から降ってきた紫色のACが、白いグレイヴを一刀両断にしたのだから

！

そう……司とミーティアライトは、既にゴンドラの外へと逃げ出していたのだ。

ワイヤーを切られた。

そう感じた次の瞬間、天井をレーザーブレードで破り、外へと飛び出したのである。

そのまま突き出た資材の上にうまくバランスをとって飛び乗り、真下に敵が現れるのを待ち続けていたのだ。

そして今、彼の前にいるのは……驚きで動きを止めた、十数機のMT部隊。

言い換えれば……格好の標的たちだ。

紫色の流星が、血を求めて走った。

*

『レ……レイヴン！ 聞こえるかッ!?』

焦った男の声。

止めてくれ、そんな大声で話すのは。

スピーカーがおかしくなったらどうしてくれる。

弁償してくれるのか？

無理だろう。どうせ死ぬんだから。

彼女は何も答えなかった。

向こうの男はかまわずにまくし立てる。

『応答しろっ……くそっ、俺達じゃ手に負えない！

頼む、救援を……うっ、うわあああッ!?』

ざあっ……

通信機が吐き出す音は、ノイズだけとなった。

やれやれ。

全く、元気のいい坊やである。

もうこれで、MTだの何だのを30機近く葬っていることになる。

しかも傷一つ負ってはいない……こっちの面々が頼りないこともあるが、それ以上に坊やの実力のたまものだった。

……とはいえ、まだまだ。

彼女はいくつかボタンを操作した。

狭い部屋——コックピットに、ほのかな灯りがいくつか点る。

低い駆動音。計器類が放つ電子音。

起動する。彼女の乗る、真紅の巨人——ACが。

本番、行こうか。

彼女の黒い髪が揺れた。

なかなか、楽しい仕事になりそうだ。

*

ゴトンッ。

爆発すらも起こらない。

ミーティアライトの振るう光の刃に切り離された、MTの上半身が地に落ちる。

これが最後の一機だった。

司はまずリーダーを確認した。

そしてモニターで周囲を見渡す。

耳を澄まし、外部の音に神経を研ぎ澄ます。

……ない。何も無い。

動くもの、つまり敵はもう存在しなかった。

あるのはただ、さっきまで敵だったもの……累々と床に転がるMTの残骸のみである。

どうやら、ここの戦力はこれで終わりらしい。

もつとスマートに終わらせるつもりだったが、いつの間にか自分で全滅させてしまっていた。

まあ、いいだろう。

あとはこの爆弾を中枢部にセットして、地下基地を完全に壊滅させれば任務完了だ。

中枢への道を探して、ミーティアライトは歩き出した。

探すこと数分。

全く、このガレージは広すぎる。

探し当てた道はたったの一つ。

おそらく、そこから中枢部へと行けるはずだ。

その時、内蔵コンピュータが警告音をかき鳴らした。

「AC急速接近中」

「!?!」

司は慌ててレーダーに目をやった。

確かに、凄まじいスピードで近づいてくる光点が一つ。

どうやら、この通路の奥からのようだ。

なるほど、最後の砦にレイヴンを雇っていたのか。

用心深いことだ。

だが……丁度いい。

雑魚の相手ばかりで退屈していたところだ。

同業者なら、アリーナ戦のいい練習相手になる。

そんな司の甘い考えを、次のコンピュータ・ヴォイスが消し去った。

「識別信号確認。」

マスターアリーナ所属AC『ペンユウ侃』

「マスターランカーだどっ!?!」

思わず司の声が裏返る。

まさか、よりにもよってマスターランカーなんてものを雇っているとは……

司はアリーナの2位。

それは確かだ。

だが、ただ「アリーナ」とだけ言うと、参加に制限がない「ノーマルアリーナ」を指す。

ノーマルアリーナには、予選を勝ち抜いた者なら誰でも参加することができるのである。

他にも脚部のタイプによって制限を受けるアリーナ、ランキングを付けずにその都度ゲストを招待してエキシビジョン・マッチを行うアリーナなど、様々なアリーナが存在するのだ。

その中で、最もレヴェルの高いアリーナがある。

それが「マスターアリーナ」である。

これには、いくら強いレイヴンでも無許可で参加することはできない。

アリーナでの戦績だけでなく、こなした任務の質と量、その知名度などが考慮に入れられ、管理委員会で名実ともにトップクラスのレイヴンであると認められて初めて参加することができるのだ。

つまり、他とは一線を画した強さの持ち主たちなのである。

司の最終目標もそこにある。

誰にも負けない強さ……どんな敵からでもアヤメを守れる強さ。

自分なら、それを手に入れることができる。司はそう考えていた。

彼の唇の端が、にいつとつり上がる。

全く、運がいい。

マスターランカー『真紅の華』の噂は、彼も聞いている。

一度挑戦してみたいと思っていたところだ。

勝つ自信は、十分にあった。

ミーティアライトは後ろにステップし、敵のAC……ペンユウがやってくるのを待った。

正面から、正々堂々と勝たなければ意味がない。

やがて通路の奥から、赤い悪魔が近づいてきた。

中量級の2足AC。右腕にマシンガン、肩にミサイルを装備している。

ごく一般的な機体構成。

司は通信機のスイッチを入れた。

「マスターランカー、か」

相手は何も答えない。

ただ立ちつくし、こちらを睨み付けていた。
威圧感。

なるほど。これが貫禄というやつか。

司は額に汗が流れていくのを感じた。

「どれほどのものか……試させてもらおうぞ！」

*

ミーティアライトが、ハンドガンを連射しながら右に飛ぶ。

しかしこれは牽制の一撃。

これが当たるほど甘くはない。

予想通り、ペンユウは横に飛んで軽々と回避する。

お返し、とばかりに飛んでくるマシンガンの弾丸。

司は足下のペダルを踏みつけた。

ブースターがこれでもかと火を噴き出し、ミーティアライトの巨体を空中へ飛び上が

らせる。

足下を空しく過ぎ去っていく無数の弾丸。

回避は問題ない。

だが、これだけでは終わらせない。

そのままペンユウの真上まで飛び上がり、直下のペンユウに向かってハンドガンをうち下ろす！

ダッ！

弾丸が真紅の装甲板をとらえた。

ダメージそのものは少ないが、見た目より大きな衝撃がペンユウを襲う！

司はほくそ笑んだ。

ブースターを止め、自由落下する。

その勢いを利用してレーザーブレードを振り下ろした。

空中からハンドガンを命中させて相手を地面に押しつけ、その隙に落下しながらのブレードをたたき込む。

司の常套戦術である。

これこそが、彼が連戦連勝する最大の理由なのである。

今まで、この斬撃から逃れられた敵はいない。

司は勝利を確信した。

……その次の瞬間！

ギイイイイイイインツ!!

激しい空気の震えが耳をつんざく!

二機の間には巨大な衝撃が走った。

そして地に足をつけていないミーティアライトは、大きくはじき飛ばされ、床に叩き付けられる!

「……がッ……!」

背中をしたたかに打ち付け、司は一瞬呼吸ができなくなつた。

なんとか空気を肺に入れ、機体を立ち上がらせる。

額の汗がさつきより増えていた。

わからなかつた。一体、何が起こつたのだ?

答えは簡単なことだつた。

ペンユウが、レーザーブレードで切り返したのだ。

光の刃同士がぶつかり合い、エネルギーを撒き散らしてはじけ飛んだのである。

レーザーで、そんなことが可能なのか。

不可能ではない。

レーザーが目に見えるのは、その熱量によつて空気がプラズマ化され、そのプラズマが光を反射するからである。

なら、そのプラズマがレーザー光そのものを乱反射さるとどうなるのか……指向性を失ったレーザーは単なる光となり、持っていたエネルギーを周囲に無秩序にばらまくのだ。

最も、ペンユウのパイロットの方もそんな理屈を知っていたわけではないだろう。

ただ、これまでの経験から、レーザーブレード同士で弾き合わせることが可能だと知っていただけだ。

そして司には、そんな経験はまだなかった。

つづく。

08 最後の手段

「くそッ！」

罵りながら司は操縦桿を倒した。

ミーティアライトが全速力で走る。

ハンドガンを連射し、わざと避けさせて相手を追い込んでいく。

ペンユウの機動性は、中量級であるにもかかわらず、軽量・機動性重視のミーティアライトと大差ないレベルにある。

しかも防御力の面では、下手な重量級よりは余程頑丈にできているらしい。

しかし、追いつめてブレードを叩き込めば、いくら奴でも耐えきることにはできないはず！

散発的なペンユウの反撃を難なくかわし、ミーティアライトはついに敵を壁際に追いつめた。

この好機を逃す手はない！

紫色の巨人がブースターを噴かす！

一気に間合いを詰め、光の刃ですくい上げるような一撃を放った！

ペンユウの左腕が動く。

イイイイイイイインツ！！

まだだ！

今度はなんとか踏みとどまる。

司はようやく理解した。

まぶしいのをこらえてモニターを凝視する。

光の刃と光の刃が、周囲に目映い輝きを撒き散らしながら、互いを喰い合っていた。

なるほど。

レーザーブレードで鏝迫り合いができるなどは夢にも思わなかったが、現実起こっているのだ。

種さえわかれば話は早い。

ミーティアライトは一瞬、ブレードを引き戻した。

すぐさま衝撃が収まる。

そして、間髪入れずに上から叩き降ろすようにブレードを振るう！

必殺の一撃。

そのはずだった。

少なくとも、司はそう確信していた。

ペンユウが、何気なく頭上にレーザーブレードを掲げるまでは。

また、刃と刃がぶつかり合い、衝撃が波のように二機を襲う。

司は驚きを隠せなかった。

まるで、こつちの行動が全て筒抜けになっっているようではないか。

こんな速度で反応できるような敵は今までいなかった。

なぜだ？

なぜ読まれる？

なぜ自分の行動は全て無駄に終わるのだ!?

そのとき、ミーティアライトにかつてない衝撃が走った。

響き渡る爆発音。

慌ててモニターを確認する。

ない。

ハンドガンがなくなっている。

ペンユウのマシガン……その零距离射撃によって、ミーティアライトのハンドガンは撃ち落とされていた。

まずい！

司の背筋を冷たいものが流れていった。

すぐさま飛びすさり、再び間合いを取る。

ハンドガンは完璧に破壊されていた。

おそらく、本格的な修復をしないかぎり使い物にならないだろう。

司は舌打ちをした。

なんてことだ……まさか、彼が最後の手段を使う羽目になろうとは。

マスターランカーを甘く見ていた報いだろうか。

まあ、いい。どうせ勝つのは自分だ。

司はおもむろに通信を送った。

「やってくれるじゃないか」

その間に、少し複雑な操作をする。

なにせ改造パーツである。

上手く動くだろうか……

それは、司自身のメカニックとしての腕前にかかっていた。

「だが、俺は負けない！」

ミーティアライトが走る！

ハンドガンを失い、残る兵器はレーザーブレードと背中の爆雷のみ。

だが爆雷の方は、相手の機動力を考えると当たりはしないだろう。

実質、この光の剣だけが頼りだった。

ペンユウが挨拶代わりにマシンガンを放つ。

しかしそんなもの、ミーティアライトの機動力をもってすれば回避はたやすい。

間合いを詰めると、またしても左手のレーザーブレードで斬りつける！

4度目！

光が互いをはじき飛ばし、周囲に不快な音と閃光とエネルギーを撒き散らす。

このまま左手の刃を振るっても、さっきのように防御されるだろう。

ならば！

斬りつける！

右腕に装備した、もう一本の光の刃で！

さすがにこれは予想していなかったのか、ペンユウは慌てて後退した。

その胸板を刃がかすめる。

どうやら少し踏み込みが甘かったらしい。

これこそ、司の奥の手の中の奥の手……

かつて、中世の日本にいた戦士達は、両手に刀を持つことを「二刀流」と呼んだそう

である。

それにあやかかって、というわけではないが、レーザーブレードでの戦闘を得意とする司にとって、これこそが最強の装備だった。

右手の武器を破壊された時のための非常手段。

すなわち、右腕用ブレードユニットである。

もちろん改造パーツなので、動作に多少の不安があるのだが。

ミーティアライトとペンユウは静かに対峙した。

予想外の兵器相手に、下手に攻撃を仕掛けるのは危険だ、ということだろうか。

もちろん司の方は、次の一撃でとどめを刺す気でいた。

痺れを切らし、ミーティアライトが走る。

もはやマシンガンは無駄と悟ったか、ペンユウは牽制も仕掛けてはこない。

その分回避に専念するのだろう。

そしてまずは右の刃。

ペンユウは今までと同じく、レーザーブレードによって受け止める。

これでいい。

今度は踏み込みも完璧。

そして今、ペンユウの脇腹はがら空きである。

そこに左のブレードを叩き込めば、全てが終わる！

司は狂気に取り憑かれた者の瞳で、モニターを凝視した。

勝っ！

俺は勝つんだ！

その目がそう語っていた。

勝てる。

マスターランカーに。

最強のレイヴンの一人に、勝てる。

そうだ。最強だ！

俺は誰よりも強い！

誰にも負けないんだッ！

ブレードを、振るった。

そして光は虚空を切り裂いた。

「……………え？」

彼がいぶかしがるよりも早く…………

ガギイイイイイインツ！！

いまだかつて味わったことのないほどの衝撃が司を襲う！

体が大きく震え、体中をコツクピットの内壁にぶつけた。
痛み。

それよりさきに、司は心の中で叫んだ。

何故だ!?

ペンユウはどこに行った!?

ごとん。

彼の問いに答えたのは、重い音だった。

ようやく揺れが収まる。

司はモニターで、音のした方を見やった。

地面に転がっている、細いもの。

紫の輝きが目飛び込んでくる。

どこかで見覚えがある。

——ミータイアライトの右腕。

「な……」

ペンユウは、ミータイアライトの真後ろに回り込んでいた。

左のブレードが襲いかかる瞬間、ブースターを噴かし、レーザーブレードの交わる点を支点として、宙返りしながらミータイアライトの頭上を飛び越えたのだ。

ペンユウが一步足を踏み出す。

司の目に無惨なMTの姿が映った。

ペンユウが一步足を踏み出す。

助けて。

ペンユウが一步足を踏み出す。

死にたくないよ。

ペンユウが一步足を踏み出す。

助けてよ……助けてよアヤメツ！

司の足が、小さなスイッチに触れた。

本人は気付いていない。通信機のスイッチが入ったことに。

「やめろ……来るな！

こつち来んなよ！

嫌だ……死にたくねえよ……暗い……怖いよ……助けて……誰か、誰か助けてよ！」

ペンユウが一步足を踏み出す。

「くるな……くるなくなるなくなるなくなるなああああああああつ!!」

つづく。

09 真相

動きが、止まった。

司は目を見開いた。

既に涙で一杯になっていた瞳で、その光景を凝視していた。

ペンユウが、きびすを返したのだ。

一步。また一步。

赤い巨人は遠ざかっていく。

姿が見えなくなつて、やがて音も聞こえなくなつて、そのうち司はわからなくなつた。

何もわからなかつた。

わかることはたつた一つだけだつた。

それは、あの赤いACがここにはもういないということだけだつた。

行つてしまった。とどめを刺さずに。

司はしばらく呆然としていた。

それは一瞬のことだったのか。

それとも永劫のごとく永い時間だったのか。

今更確かめる術は残されていない。

やがて、司は自分で自分を抱きしめた。

熱い。

体が熱かった。

生きている。

生き残った。

やつとわかった。

そんな気がした。

生き残ること。それがどういことなのか。

護ること。

それが本当はどういことなのか。

やつと、わかった。

*

司は後ろ手にドアを閉めた。

その表情はいつになく沈んでいる。

我が家に、アヤメの待つ住処に帰ってきたのに。

アヤメは彼の様子がおかしいのをすぐに察知した。

パソコンの前の椅子から立ち上がり、心配そうに司を見つめている。

司はうつむいて、目を合わせようとはしなかった。

そのまま奥に進んで、二階へ上がる階段を上ろうとした。

その腕を、アヤメがつかんだ。

気持ち伝わってきた。

アヤメの心が伝わってきた。

司には、それが耐えられなかった。

何も言うまい。

そう思っていた。

でも言わずにいられなかった。

司は振り返り、暗く荒んだ瞳でアヤメを見つめた。

「お前がやったのか」

司はアヤメの胸ぐらをひつつかんだ。

そのまま乱暴にアヤメを押し、壁に叩き付ける。
苦しうにアヤメが呻いた。

しかし彼女は抵抗しようとはしなかった。

抵抗できる立場ではないことは、彼女が一番良く知っていたのだ。

「お前がやったんだな!？」

あれは全部お前なんだな!？」

敵に情報を流したのも!

マスターランカーをけしかけたのも!!」

——そう——

全てアヤメ……別名ハツカー『アイリス』の仕業だった。

そもそも、今回の依頼自体が偽物……アヤメの手によって作られたものである。

そもそも、同じ企業から立て続けに依頼が来た時点でおかしかったのだ。

そしてさつき調べると……依頼主は、そんな依頼は知らないという。

嘘をついているようには思えなかった。

そんなことをすれば、司と依頼主の関係は完全に絶たれる。

それは向こうにとつても都合が悪いはずだ。

ならば。彼の知る限り、大企業やネストのデータまで簡単に改竄できるような腕のい

いハッカーは、一人しかない。

「なんでだよ……答えろよ、アヤメッ！」

司はアヤメをつかんだ腕を振り回した。

アヤメは目を閉じた。

そしてじつと耐えた。

悪いのはわかっていた。

でも、彼女がしなければならなかった。

わかってくれる。

司はきつとわかってくれる。

アヤメはそう信じていた。

やがて疲れたのか、やりきれなくなったのか……

司はうつむくと、アヤメから手を放した。

背を向け、元のように階段に向かって歩き出した。

無駄なのだ。今更アヤメに何をしたら……もはや戻ってはこない。

ずたずたに引き裂かれた、彼のちっぽけなプライドは。

司の足が、階段の最初の一段にかかった。

「……ッ……カ……サ……」

司は顔を上げた。

声は背中からかかった。

振り返る？

怖かった。後ろを見るのが怖かった。

それを見た瞬間、それを確認した瞬間、自分が不要になるような気がした。

自分はどこにもいない、死者になるような気がした。

それでも、振り返らないわけにはいかなかった。

そして彼は見た。

ゆっくりと開く。

アヤメの口が、喉が、舌が、少しずつ、一つずつ、言葉を紡ぐのを。

「ツカ……サ……」

聞こえた。

はつきりと。

アヤメがしゃべったのだ。

司はアヤメを抱きしめた。

自然と両目から涙がこぼれてきた。

よりいっそう、司は腕に力を込めた。

涙は止まらなかった。

「ごめん……ごめん、アヤメ……」

かすれる声で、司はかろうじて言葉を紡ぎだした。

今度は自分が話せなくなりそうだった。

でもそれでもいいのかもしれない。そんな気がした。

「ありがとう……わかったから……」

……俺、ちゃんと全部わかったから……」

アヤメは嬉しそうに司の言葉を聞いていた。

そしてその胸に顔をうずめ、小さく呟いた。

司の言葉を真似して、「ごめん」と。そして「ありがとう」と。

月光が、二人を包み込んで優しくきらめいた。

T H E E N D .

第8話 エボニー・コンツェルト

01 観光地下都市、コートデパール

「ぐおおおっ！」

むさ苦しい男の悲鳴が、狭いコックピットにこだました。

不健康そうな赤い光を放つランプ。

耳障りな高音をかき鳴らすブザー。

見たくもない文字を延々と表示し続けるモニター。

その全てが、絶望的な状況を彩り豊かに演出していた。

少々、演出が過剰だが。

男は操縦桿を手前に引いた。

無反応。

もう一度。

カチツという音だけが空しく響く。

なんてことだ。彼の乗っているロボットは、もはや完全に機能停止してしまっていた。

戦闘のためだけに生み出されたロボット、A C。

しかしこうなってしまうえば、それもただの鉄屑である。
ガシユンツ。

低い音が闇を切り裂く。

モニターの向こうに、シルエットが映った。

人のようだった。

しかしそれはとてつもなく大きい。

巨人？

いや、違う。

あれもA C。

何かを壊したり、誰かを殺したり。

そんなことしかできない金属の塊。

その黒い姿は、男に『鬼』というものを連想させた。

「嘘だろ……どうして……」

彼にはただ、呆けたように眩くことしかできなかつた。

信じられないのも無理はない。

あんな奴と事を構えることになろうとは、夢にも思わなかったのだから。畜生。

助平心が命取りだった。

あの女め。恨んでやるぞ。

これで死んだら、お前に取り憑いて、呪い殺してやるからな。畜生。

男はもう一度思った。

どうして、どうしてこんな奴が。

そしてモニターに見入った。

闇の中に佇む、漆黒の鬼。

「弧雷の……ロレンス——」

*

ゴオ……オオオ……

ジェットエンジンがあげる轟音は、頑丈な外壁に遮られて心地よい子守歌と化す。

『全ての旅路は、ここに集まる』というキャッチフレーズで有名なエクスシード航空。

そのエクスシード航空が誇る大型旅客機「エクセル369」は、その1016の座席を全てリゾートへ向かう人々で埋め尽くしていた。

ある窓際の三連席には、個性的な若い男女が腰掛けていた。

一人は、アジア人の女。

艶やかなショートカットの黒髪に、挑発的な輝きを放つ黒い瞳。

道を歩けば大抵の男が目を留めるほどの美女である。

そして二人目は、北欧系の女。

長い髪を三つ編み一つにまとめ、へらへらとした笑顔を絶やすことがない。

高い鼻にかけた小さな眼鏡が、ときおりずり落ちそうになる。

それを直す右腕の動き。

そのたったの一挙動にすらも、周囲の視線が集まる。

恐ろしいまでの美女である。

最後の一人は、一際異彩を放っていた。

黒いストラックスと、ごく淡い青紫色のシャツ。

ネクタイは締めずに、上から二つほどボタンを開け放っている。

丁度肩に届くくらいの長さの金髪。

身長はかなり高い。おそらく190前後だろう。

とはいえ、見た目にはそれほどおかしい所はない。

アイマスクをつけて眠りについた、ごく普通の男性である。

ただ、一カ所だけ異常な点があった。

殺気。

そう表現するものもいるだろう。

まるで獲物を狩る肉食獣のような鋭い気配を、その男は全身から放っていた。

眠っているにもかかわらず。

だからこそ……彼が一番通路側の席で護るように眠っているからこそ、周囲の男達は

奥の女性二人を口説けないのである。

門の前で眠る虎におびえる泥棒のように。

『当機エクセル369は、地下都市「コートデパール」上空へ到達いたしました。

これより降下体勢に入ります。

速やかにご着席の後、座席ベルトをお締め下さい。

なお、これより先のお煙草はご遠慮願います』

事務的なコンピューター・ヴォイスが響く。

座席の前にある小さなモニターに、「NO SMOKING」の文字が映し出される。

さつきの台詞が、今度はフランス語で繰り返された。

そしてドイツ語。イタリア語。広東語。

最後に日本語で読み上げられて、ようやく機内は静かになった。

「よしゆあくくん、もうすぐつきますよお〜」

中央に座っている北欧系の女性が、妙な粘りけのある声で隣の男を揺すつた。

ヨシユアと呼ばれたその男は、大きくあくびをしてからアイマスクを外す。

瞳が外気に触れる。

冷たい感覚を楽しみながら、ヨシユアは青い瞳を開いた。

ヨシユアは右側……窓のある側に目を遣った。

すぐ隣の席には、あいかわらずの笑みを浮かべる北欧系の女。

その向こう、窓際の席に座っているのはアジア人の女である。

彼女はまるで子供のように、窓の外の風景に目を輝かせていた。

「そんなに楽しいかよ、この風景が」

アジア人の女はこつちに顔を向けた。

ふと気付いて、座席のベルトを自分の腰にまわす。

その仕草の一つ一つが、普段の彼女からは想像もつかないほど浮かれたものである。

「せっかくならまで来たんだから、楽しまない」と

「いゝことゆくね、りんふあちや〜ん！」

よろし、えりいもいっぱいあそぶのだから！」

アジア系の女——リンファ。北歐系の女——エリイ。

ヨシユアは、この二人に半ば引きずられる形でこんな所まで来てしまった。あまり、人混みは好きじゃないんだがな。

ヨシユアはため息をつくど、シートに体を投げ出した。

ぼーん。

小さな音が鳴って、目の前のモニターに文字が表示された。

「危険ですので座席ベルトをお締め下さい」

彼の眉がびくびくと痙攣した。

モニターに人差し指を突きつける。

「いちいちうるさいんだよ」

*

光が照りつける。

目映い日差し。

リンファは偏光ガラス越しであるにもかかわらず、目を細めなければならなかった。今エクセル369が飛んでいるのは、地下都市「コートデパール」の内部である。

地下都市の空港には大きく分けて二種類がある。

一つは、地上に空港を建設し、地下へのエレベーターで結ぶタイプ。

二つ目は、ここのように地下に直接空港を建設するタイプである。

この場合は、地下都市の天井に大穴を開け、そこを通って航空機が地下へ降りることになる。

騒音公害だの排気だの、問題はいろいろあるが、大量の荷物を一度に搬入できることは大きな魅力だった。

一度荷物を降ろしてエレベーターに運ぶのは、非常に大きな手間なのである。

「すつごゝいー」

リンファは無邪気に歓声をあげた。

とはいえ機内では同じような声がいたるところであがっているのです、それほど目立ちはないが。

無理もない。

地下都市の中だというのに、地上よりも強い日差しが差し込んでいますのである。

そしてその光を浴びて、きらきらと輝く波。

そう、地下に海があるのだ。

ここ地下都市「コートデパール」は、圧倒的光量の照明と、人工的に生み出された海が自慢の、一大観光スポットなのだ。

エクセル369のエンジン音は、ほとんど聞こえなくなっていた。

エンジンの出力を落としたのだ。

ゆつくりと機体は降下していく。

リンファの目に、砂浜の光景が映った。

水着を着た無数の若者たちが、海に飛び込み、潜り、泳ぎ、それぞれの休暇を満喫していた。

もちろん、ナンパに精を出す男も少なくない。

リンファの顔は自然とほころんだ。

なにしろ、海水浴なんてものは初めてなのだ。

普通の地下都市に「海」なんてものがあはずもなく、地上の海は汚染が酷くてとても泳げたものではない。

コートデパール様々だ。

こんな所でもなければ、一生海水浴なんてすることはなかっただろう。

「楽しみだね、ヨシユア」

ヨシユアの顔は、ちつとも楽しそうではなかった。
「そうかよ」

つづく。

02 うろんな依頼人

空港には、南国の雰囲気がかれでもかど漂っていた。

もつとも、南国という概念自体、今や現実には存在しないもの。

赤やオレンジで塗装された壁。

いたるところに飾ってある亜熱帯の植物。

土産物屋を埋め尽くす、奇妙な木の彫刻、豆菓子、派手なキーホルダー。

これらは全部、人々の勝手なイメージを形にしただけの、幻である。

三人は。パスポートを見せて、チエックゲートを通過した。

向こう側で待ちかまえる数人の女性。

小麦色に焼けた肌を心ばかりの布と花で覆い、見たこともない変なダンスを踊っている。

その内の一人がヨシユアに歩み寄り、その頬にキスをした。

赤い花で作った輪を彼の首にかける。

驚いた様子のヨシユアのつま先を、リンファのかかどが押しつぶした。それから、三人はホテルへの道を歩いた。

すぐ先に見えているのに、タクシーを呼ぶのもばからしい。

車道と同じ幅の歩道は、両脇を椰子の並木で囲まれ、海岸沿いをずっと走っていた。リンファが、少し頬を赤らめながらヨシユアの腕にからみつく。

仕方がないのでエリイは二人の少し後について……

わらわらと集まってきたナンパ男から逃げるのに苦労した。

途中、ヨシユアは何度か後ろを振り返った。

そのたびにリンファが、どうしたの、と声をかけたが、彼の答えはいつも、なんでもない、の一言だった。

そして、十分ほど歩いた頃には、三人の止まるホテルはもう目の前まで近づいていた。

*

「じゃあ、荷物置いて着替えたらここに集合、ね」

豪華なホテルのロビーで、リンファは自分の指を床へ向けた。

大理石の床は綺麗に磨き上げられ、輝くようだった。

「着替える？」

ヨシユアは不審がって声を上げた。

そんな彼を待っていたのは、リンファのじつとりとした視線だけだった。

ここへ来て、今更何を言ってるんだ。そういう目だ。

「泳ぐの。海で」

「……悪いが、俺はパスだ」

自分の荷物を、ヨシユアは右手で拾い上げた。

残った手で部屋のカードキーを弄ぶ。

防水加工が完璧に施された、特殊なカード。

しかも、旅行中だけはクレジットカード代わりに使えるという、非常に便利なものがある。

大破壊以前に、マレー半島にあった小さな国で発明されたシステムらしい。

これ一枚で何をするにも事足りる。

「え〜？ よしゆあくんはおよがないのお〜？」

「何よ、せつかくここまで来たのに」

一斉に彼を襲うブーイング。

しかし慌てることもなく、ヨシユアはエレベーターに向かって歩き出した。

金髪が揺れる。

「暑いのは苦手なんでね」

*

ベッドが一つと、テーブルが一つ。

椅子は二つある。

冷蔵庫にはミネラルウォーターからスコッチ・ウイスキーまで、各種飲み物が取りそろえてある。

あまり使うことはないだろうが、リキッドクリスタル・テレビもある。

ホテルの部屋としては、まあ妥当なコーディネートだろう。

大きな窓の向こうには、青い海と白い砂浜が姿を見せていた。

今頃、リンファたちはあそこへ向かっていることだろう。

ヨシユアはそれを眺めながら、ベッドに横たわって暇を食っていた。

不意に、ヨシユア起きあがった。

ベッドの上の鞆から何かを取り出す。

黒くて重たいものようである。

それを右手に持ち、彼は部屋のドアへと向かった。

オートロックのおかげで、ドアの鍵はかかっている。

ノブに手をかける。

バンッ！

いきなりドアを押し開けると、ヨシユアはその向こうにいた人間に銃を突きつけた。

左手でそいつをひつつかみ、部屋の中に引きずり込む。

そして、すぐさまドアをしめた。

さっき靴から取り出したのは、拳銃だった。

そして今その銃は、部屋の前にいた知らない女に向けられている――

ん？ 女？

ヨシユアは改めて、そいつの姿を確認した。

金髪の、華奢な女である。

身長はリンファよりずっと低い。

ヨーロッパ系であることは間違いなさそうだ。

しかし、やはり見たことがない。

ヨシユアは腕を通じて小刻みな震えが伝わってくるのを感じた。

「空港から、俺を追っていたな」

ヨシユアは低い声で言った。

女は何も答えず、ただ震えているだけだった。

ひよっとしたら狙われているのかとも思ったが、どうやら違うらしい。

ヨシユアは乱暴に女を押して、部屋の奥の椅子に座らせた。

自分はベッドに腰掛ける。

もちろん、銃はいつでも撃てるように構えたままだ。

「何の用だ」

「あ……あの……」

女は、おびえた様子で少しずつ言葉を紡ぎだした。

甲高い、透き通った声だ。

「えっと……ワームウッドさん……ですよね？」

女の口をついて出た意外な名前に、ヨシユアはまともに浮き足だった。

ワームウッドとは、ヨシユアの傭兵——レイヴンとしての名前である。

レイヴン「ワームウッド」と「ヨシユア」が同一人物であるということを知っている

人間は……

今となつては、リンファとエリイくらいしかいない。

ヨシユアの狼狽に気付いたのだろう。

女は、少し落ち着きを取り戻した様子で口を開いた。

「えつとお……あたし、ジーナって言いますう。」

んつとお、実はネットでえ、『ワームウッド』さんと『真紅の華』さんがここに来るつて……」

「……どうして俺がそうだとわかった」

いくらネットで情報が流れていたとはいえ、顔まで知られているわけではない。

普通に考えたら、わかるはずはないのである。

「あの……イメージ通りだったからあ」

思わずヨシユアは銃を取り落とした。

「あたしい、ワームウッドさんのファンなんですう！」

それでえ、やっぱりワームウッドさんっていつたら、格好良くてえ、賢くつてえ、逞しくつてえ！

もう理想の男性なんですう！

えつと、それであんまりイメージ通りだったからあ、もうこの人で間違いないや！
つて思つたんですう！

あ、隣にいた人、真紅の華さんですよねえ！

あの人イメージびつたりですう！

とつても綺麗でえ、もう憧れちゃいますう！」
頭が痛い。

ヨシユアはさつきまで銃を握っていた右手で、自分の額を押さえた。

このジーナとかいう女のテンポには、どうにもついていけない。

こういうトロトロした口調で話されると、こっちまで調子を狂わされそうだ。

エリイはまだ許容範囲内だが、こいつはそんなものを遥かに超越していた。

「あー、もういいもういい」

沈痛な面もちで、ヨシユアは誰にともなく言った。

一方のジーナは、まだ話し足りないのか、不満そうな顔だが。

調子を戻そう。

ヨシユアは大きく息を吸い込み、ゆっくりと吐き出した。

よし、なんとか落ち着いた。

「それで？ 一体何の用だ」

「あ、えつと、実は依頼したいことがあるんですう」

依頼、か。

どうやら目的だけはまともらしい。

バカンスの最中に仕事というのもせわしないが、どうせ暇をもてあますのは間違いな

いのだ。

わざわざ遠出をしてはしやぎ回るよりも、いつも通りの生活をする方がずっと疲れがたまらなくていい。

ヨシユアはそういうタイプなのである。

「あの……引き受けていただけます？」

えっと、休暇中に悪いんですけ……ど……」

「内容次第だ。」

もつとも、AC無しでできる範囲内で、だがな」

今回は完璧に観光旅行のもりだったので、ACなどももちろん持つてきていない。

大がかりな破壊活動は当然不可能である。

このジーナとかいう女も、それはわかっているはずだが。

ジーナは無言でうなずくと、おもむろに口を開いた。

「実は、あたしの護衛をして欲しいんです。」

最近変な人が周りをうろついで……

仕事の邪魔をするんです。」

この間なんて、目の前に銃弾が撃ち込まれて……すつごく怖かったんです。」

だから、その人達をやっつけちゃって下さい！」

「それは、殺せという意味か」

こともなげに言い放つヨシユアに、ジーナはぶんぶんと頭を振った。

「こ、殺しちゃだめですよお！」

てきとーに痛めつけて、もうあたしにつきまとわなないようにしてくるだけでいいんですう！」

なるほど。いかにも素人らしい依頼だ。

殺してはいけない、というのは足枷以外の何者でもないが、相手はただのストーカーのようなだし……

AC無しでもなんとかならないことはないだろう。

あとは報酬さえ良ければ文句はないのだが……

と。ヨシユアの耳がぴくついた。

何か、かすかな音がする。

これは……ヘリのローターが空気を叩く音か？

だんだんと音は大きくなってくる。

ヘリが近づいているのだ。

妙な話だ。

一際騒音公害に敏感なこの観光都市で、ヘリが堂々と空中散歩とは……

やはり、おかしい。

音が大きすぎる。

これではまるで、すぐ近くをへりが飛んでいるような――

ヨシユアは、ジーナの腕をつかんだ。

ドガガガガガッ!!

つづく。

03 波間の美女

突然の爆音！

外から飛来する鉛の塊は、強化ガラスの窓を突き破り、部屋の中で暴れ回る！

調度品もテレビも冷蔵庫も、部屋の中にあるものは全て、一瞬にして粉々に砕け散る。窓の外の戦闘へりは、ようやくガトリングガンの連射を止めた。

「無茶しやがる……！」

ヨシユアは、バスルームのタイルに手をついてゆっくりと体を起こした。

異変を感じ取った瞬間、ジーナを連れてバスルームへと飛び込んだのである。

地面に伏せたヨシユアの下には、真っ赤な顔のジーナ。

彼に押し倒される形になっていたため、ジーナにはガラスの破片一つ当たってはいいい。

「逃げるぞ」

ヨシユアは立ち上がり、まだ赤い顔で呆けているジーナの手を取った。

同じ間合いで、幾度となく繰り返す波の音。

鼻を衝く、不思議な塩の香り。

海。

スポーティなデザインのビキニ。

そもそもリンファは水着なんてもの自体、着るのは初めてである。

なんだかスカスカして気持ち悪いが、背筋を走っていく震えはそのせいではないだろう。

リンファの目が輝く。

その顔は、たとえたとすれば玩具を得た子供のそれである。

今まで殺伐とした傭兵の世界で生きてきて、同じ年頃の他の女の子達がするような遊びとは全く無縁だった。

所詮はガキの遊び、と馬鹿にしていたのも事実だった。

しかし実際にこうしていると……たまには、何の気兼ねもせずに遊びまわるのも悪くないと思えてくる。

「うきやあああああ！」

隣に立っていたエリイが、突然甲高い叫び声をあげた。

砂を蹴って走る。

フリルの付いた白いワンピースの水着は、彼女のイメージにぴったりと合っていた。眼鏡をはずし、髪をほどいたその姿は、リンファですら久しぶりに見る。

エリイの足が波打ち際に触れる。

冷たさにだろうか。

少し驚いたそぶりを見せてから、エリイは波間に飛び込んだ。

飛び込んだといっても、膝くらいまでしか深さのない辺りだ。

ばしやんと音を立てて、水しぶきが上がる。

それを頭からかぶって、エリイはへたりこんだ。

腰から下は水に浸かっている。

頭を振る。

髪から、塩水の粒がいくつも飛び出した。

水をかけられた犬みたいだった。

「おもしろ〜い〜！」

りんふあちゃん！ おいでおいでえ〜！」

リンファは微笑むと、海へ向かって駆けだした。

ためらいもせず、エリイよりも豪快に海に飛び込む。

さつきより大きなしぶきが上がった。

エリイの顔にそれがかかりそうになって、彼女は慌てて腕で防御した。でも、無駄だ。

最初の攻撃が失敗に終わった事に気付くと、リンファはすぐさま腕を振り上げた。巻き上げられた水が、エリイの顔を直撃する。

第二射は、まんまと命中したようである。

「うゝ、やったなあ〜！」

それから、二人の壮絶な戦いが始まった。

冷たい水が飛び散り、体を濡らす。

時折それは口の中にも入っていった。

塩辛い。

慌ててそれを吐き出していると、その隙を狙ってさらに執拗な攻撃が襲ってくる。

リンファもエリイも、全く泳ぐことはできない。

それでも、泳げない者は泳げないなりに楽しむ方法があった。

リンファの足の裏を、何かがくすぐる。

ひやつ、と声を上げ、リンファは水に浸かった自分の足を見つめた。

その側に、なにやら煌めくものがある。それは小魚だった。

リンファは呆然と、その魚を眺めていた。

すぐに魚は逃げ出す。

ものすごい速さだ。

地上のどんな生き物も、あれほどの俊敏さでは動けないだろう。

驚きだった。

まさか、人工の海に魚まで放しているとは。

二人は顔を見合わせて、そして今度は魚を追いかけるのに躍起になった。

もつとも、泳げない二人に捕まえられるわけはなかったのだが。

少し暴れ回ると、急に喉が乾いてきた。

さつき塩水を飲んだせいだろうか。

リンファはエリイを誘って、陸へ上がった。

風邪を引かないように上着を羽織り、海際のコテージへ向かう。

海岸には、白い木製の小屋がいくつも建っていた。

喫茶店のようなものである。

小屋の中に入ってもいいが、オープンテラスのパラソルの下、というのも風情があつ

ていい。

二人はそつちを選んだ。

すぐさま近づいてきた薄着の女性に、聞いたこともない南国産フルーツのジュースを

注文する。

一分も待たせずにジュースは運ばれてきた。

ストローに口を付ける。

広がっていく、甘い感触。

悪くない。

リンファもエリイも、ご多分に漏れず甘い物には弱い。

もしヨシユアだったら、こんなものは蟻の飲み物だ、と一蹴しそうだが。

そうだ、ヨシユア。

ふと思いついて、リンファはジュースから口を離れた。

「ヨシユアも来れば良かったのにね」

「んん、でもおろ、よしゆあくんがうみではしゃいでたらう、なんかやだう」

それもそうか。

確かに、楽しそうにしているヨシユアの姿など想像も付かないし、見たいとも思わな

い。

……と。

リンファははっと顔を上げた。

遠くから大きな音が聞こえてくる。

空の上からだ。

何度も聞いたことがある。

ヘリのプロペラが、空気を切り裂く音である。

そんな馬鹿な。ただでさえ騒音にうるさくて、無音の電気自動車以外使用が禁止されているようなこの都市で、あんな爆音を立てるなんて。

下手をするとガードが飛んで来かねない。

周囲の客もいぶかしがって、一斉に空を見上げている。

リンファもパラソルの隙間から上を覗いた。

まぶしい擬似太陽。

そこに浮かぶ黒いシルエツト。

逆光になってよく見えないが、ヘリコプターであることには間違いなさそうだ。

ヘリは、海際にそびえ立つビルの周辺をホバリングしはじめた。

あれは……リンファ達が泊まっているホテルである。

「およろしく？ あれはなんでしょね〜」

「何かのイベントかな……」

リンファが呟いた、次の瞬間。

ゴガガガガガッ!!

ヘリのガトリングガンが火を噴いた！

無数に散らばる狂気の弾丸。

それらは全て、ホテルのある一室を打ち抜いていた。

誰からともなくあがる悲鳴。

それはやがて怒号となつて、浮かれた時間と空間を一気に引き裂いた。

さすがにこういうことには慣れている。

リンファは多少驚きこそすれ、少しも慌ててはいない。

しかしそれも、エリイが口を開くまでのことだった。

「リ……リンファちゃん！」

口調がしつかりしている。

リンファはエリイの顔を覗き込んだ。

瞳に浮かぶ輝きが、さつきまでとは明らかに違う。

普段のおっとりとした表情からは想像もつかない、険しい顔である。

科学者としてのエリイの顔……

リンファはそれを、一瞬で見取った。

「あの部屋！ ヨシユアくんの部屋よ！」

「……なッ!？」

思わず驚愕の声を上げ、リンファは再度ホテルを見上げた。
ホテルの、上から5番目の階。

向かって右側から数えて三番目の窓。
間違いない。

あれは1017号室……

ヨシユアがいるはずの部屋！

次の瞬間、リンファはもう走り出していた。

つづく。

04 脱出

いくつかの靴音が響き渡る。

先頭を切つて階段を駆け下りているのはヨシユアだ。

ジーナがその後ろに続く。

しかし靴音は二つだけではない。

下から上つてくる音。

階下で、拳銃を構えた男が待ちかまえていた。

銃口はヨシユアに向いている。

——邪魔だッ！

タイミングを計らつて、ヨシユアは身をかがめた。

その頭上を銃弾が通り過ぎる。

そして瞬き一つする間には、ヨシユアは男の懐に飛び込んでいた。

左腕のエルボー。

体勢を崩した男の足に、一発銃弾を撃ち込む。

男は小さく呻くと、為す術もなく床に転がった。

すぐさまヨシユアの足が、男の拳銃を蹴り飛ばす。

まるで滝を流れ落ちる水の如く、ヨシユアの動きは俊敏で無駄がなく、美しかった。神がもたらした最も残酷な刑。

天より飛来する聖なる流星。

大地を汚染し、人々を緩慢な苦しみの内に滅ぼす狂気の災厄……

ワームウッドという名は、彼にこそ相応しい。

ヨシユアは上を見上げた。

さっきの攻防に驚いて、立ちつくすジーナがそこにいる。

戦い慣れていない奴は、これだから困る。

ヨシユアは仕方なく声をかけた。

「急げ。呆けている暇はない」

「は……はいっ！」

ようやくジーナは正気を取り戻した。

慌てて階段を駆け下りてくる。

もう一階のロビーは目の前だ。

これまで倒した襲撃者は二人。

おそらくエレベーターから攻めてくる奴や見張りもいるだろうが、それでも大した数ではない。

ごく小規模なテロリスト、といったところだろうか。

やがて二人はロビーへとたどり着いた。

そこは既に、阿鼻叫喚のさまだった。

人々は当てもなく逃げまどい、ホテルの従業員が必死にそれをなだめている。

中には平然と事態を見守っている者もいたが、そういう連中は例外なくSP付きだ。だが、この状況は都合がいい。

こころも混乱しては見張りにも見つかりにくい。

「身を屈めろ。」

人混みに紛れて逃げるぞ」

「わかりましたあ」

二人は人々の間を、弾丸のように駆け抜けた。

思った通り、誰一人として彼らに目を向ける者はいない……

いや、前方に男が一人。

こつちを見るなり、あわてて懐に手を入れた。

——遅い。

少しもスピードを緩めることなく、ヨシユアは拳銃の引き金を引いた。

狙いは、男が取り出したばかりの小さな拳銃。

固い音が響き、銃はどこかへ跳ね飛ばされた。

男は、思わず手のひらを押さえた。

ヨシユアに対してこんな隙を見せた時点でもはや手遅れだ。

身をひねりながら放った跳び蹴りは、一寸違わず男のみぞおちに食い込んだ。

白目を向いて倒れる男。

それを踏みつけながらヨシユアはホテルの外へと飛び出し……

がつんつ。

鈍い音。

頭がくらくらする。

どうやら、前から来た誰かと正面衝突してしまつたらしい。

ふらつきながらヨシユアは前を確認した。

彼と同じように頭を押さえてうずくまっているのは……

黒髪で、水着の上から上着を羽織つただけという姿の女性……

「リンファア？」

「あ……ヨシユア！ 無事だった……」

リンファが言いかけた、その時だった。

ヨシユアの後をついてきたジーナが、リンファの目に留まったのは。

「ワームウツドさん！ 大丈夫ですかあ!？」

びくびくつ。

リンファの眉が揺れた。

固く握った拳を震わせ、ドスの利いた声で問いかける。

「誰……？ その女……？」

その迫力たるや、あのヨシユアが思わず後ずさったほどである。

こんな鬼気迫る表情のリンファは久しぶりに見る……

なんて、冷静に分析している場合ではなさそうである。

色々と誤解を招いてしまったようだし……

……と。

ガキュキュキュキュンツ!!

空中のヘリが放ったガトリングガンの弾丸が、ついさつきまでリンファのいた辺りの

地面を削り取る!

もしヨシユアが彼女を押し倒すのが一瞬遅ければ、間違いなく周囲は鮮血で染められ

ていただろう。

——切れてやがる！

ヨシユアは内心舌打ちをした。

やることに見境がない。

白昼堂々、戦闘ヘリを導入しての襲撃。

高級ホテル内に戦闘員を送り込むことも無茶だが、周囲の人間を巻き込むことも全く厭わないのも、大概は大問題である。

ヨシユアは自分に押し倒されて、頬を赤らめているリンファに目を遣った。

なんだかついさつきも同じ事を誰かにしたような気がするが、この際それはよしとしよう。

「話は後だ。逃げるぞー！」

「了解ッ……」

二人が立ち上がるのとほぼ同時だった。

ホテルの前の道に、一台の真っ赤なオープンカーが現れたのは。

運転席の窓が開く。中から顔を出したのはよく見知った顔だった。

「みんなー！」

オープンカーのハンドルを握ったまま、エリイは腹の底から声を張り上げた。

その額には汗が浮かんでいる。

しかも口振りからすると、真面目な方のエリイのようである。

「乗って！ 早く！」

*

行楽に来ていた、とある企業のボンボン息子。

自分の車がなくなったことに気付いて彼が悲鳴を上げるのは、それから数十分後のことだった。

*

ガキユウンツ！

ガトリングガンの弾丸が、またしても道路を削り取る。

エリイが蛇行運転していなければ、ああなっていたのはオープンカーだっただろう。

それにしても、ヘリは執拗に追ってくる。いくらなんでもこれではいつか撃ち抜かれてしまう。

助手席に座っていたヨシユアは、振り向きざまに銃弾を放った。

しかし……この揺れの中では、当たる方が奇跡というものだ。

弾丸はヘリをかすめることすらなく飛び去っていった。

「へたくそっ！ 貸して！」

トランク・スペースに体を押し込んでいたリンファが、もぎ取るように彼の拳銃を取り上げる。

そのまま体を反転させ、両手で握った銃を頭上のヘリに向けてしつかりと構えた。

その間にも、二、三度ガトリングガンが車をかすめていく。

パウンス！

貧弱な銃声が響き渡った。

そして次の瞬間！

がごんっ！

ヘリの回転翼が、いきなり本体からもぎ取られた！

揚力を失ったヘリは、もちろん墜落し、何度か地面を転がって動かなくなる。

一方の翼は、近くに立っていた木を巻き込んで、盛大な砂埃を巻き上げた。

リンファの銃弾が、撃ち抜いたのだ。

回転翼の接続部分を。

「どっつ〜」

呆気にとられた表情のヨシユアに、リンファは言った。
得意げな顔が、今は憎たらしくもありがたくもあつた。

「銃はこうやって撃つのよ」

*

「今日は休業……」

「なんだ、ジーナかい」

ダウンタウンの一番端に、小さな古いバーがある。

もう日も落ちたというのに、ドアには「CLOSED」の看板がかかっている。

ジーナはそのドアを迷わず押し開けた。

そして中でカウンター席についていた男の第一声が、これである。

「後ろのお客さん方は？」

「あたしのお、護衛をしてくれる人たちですう」

後ろの、というの言うまでもなくリンファ達のことである。

リンファとエリイは、いつまでも水着のままにいるわけにもいかず、その辺りのブ

ティックで適当に見繕った服を身に纏っている。

男は多少いぶかしがりながらも、カウンターに手を突いて立ち上がった。

「何か、飲むかい？」

「よろしくう、マスター」

ジーナがテーブル席につくと、リンファとエリイはその正面に腰掛けた。

ひねくれ者のヨシユアは、一人カウンターへ向かう。

そしてバーのマスターに注文を付けた。

「スコッチだ」

「あたしも、それ」

「えりいはキュラソーがいいにやあ〜」

マスターは苦笑すると、それぞれの注文の品を探して、棚をかちやかちやとやりはじ

めた。

その様子を眺めながら、ヨシユアが独り言のように呟く。

「……あんだ、何者だ？」

マスターのこと……ではない。

もちろんそれは、ジーナにかけられた問いである。

「ただの民間人相手に、あそこまで手の込んだ襲撃はしないぜ。普通はな」

つづく。

05 弧雷のロレンス

「うーんと……多分あれば、いつもあたしの邪魔をしてる人とは別口ですう」

マスターはまずヨシユアの前にスコッチ・ウイスキーのグラスを置くと、トレイに載せた残りの分をテーブルまで運んでいった。

柑橘類の甘酸っぱい香りが広がる。

エリイが必死に手を伸ばすので、彼は最初にエリイのキュラソーを差し出した。

「別口？」

リンファも、依頼の内容は聞いている。

ジーナの仕事の邪魔をする奴ではないということは、一体……？

問いに答えたのはジーナではなく店のマスターだった。

「やばいことになってるぜ。」

まあ、いつもの事だがな。

アルクの絡みだ。ここにも襲って来やがった」

リンファの前にスコッチを、そしてジーナの前にオレンジジュースを置く。事も無げに言い放ったその背に、ヨシユアの低い声がかかる。

「……あんたも？」

「ああ。追いつ返してやったがな。

ま、その時に酒の瓶をほとんど割られちまって、今日は休業ってわけさ。

……つくづく、よく恨みを買う奴だよ、アルクは」

「ちよつと待ってよ」

口を挟んだのはリンファだった。

眉をゆがめ、不審を顔一杯に浮かべている。

「恨みつつあって、ちよつとやそつこのものじゃないわよ？」

「一体何なの、そのアルクって奴は」

「それは……」

「あーっ!!」

いきなりジーナが立ち上がり、マスターの口を塞いだ。

顔を真っ赤にして、額から冷や汗を吹き出している。

大した慌てぶりである。

マスターはゆっくりと、その手を引き剥がした。

微笑み、静かにジーナを諭す。

「黙ってても、いつかはわかることだぜ？」

「う……」

泣きそうになりながらも、ジーナは口を閉じた。

マスターはそのままカウンターの内側に入り、彼専用の小さなパイプ椅子に腰を下ろした。

棚から適当に酒瓶を取り出し、それをなみなみとグラスに注ぐ。

「あんたたち、レイヴンだろ。」

だったら名前くらいは知ってるはずだ。

ロレンス・ド・アルク——『弧雷のロレンス』。

ジーナの兄貴さ」

*

闇。

コートデパールは根っからの観光都市である。

それは何も昼間の海や太陽に限ったことではない。

擬似太陽は少しずつ赤く染まっていき、やがて夜が訪れる。

そう、闇に包まれた夜の街は、シックな大人の空間なのだ。

もの悲しいピアノ曲が似合う酒場もあれば、弾けるようなリズムが聞こえてくるジャズ・バーもある。

非公式だが、地下のカジノに足を運ぶ者も少なくない。

ただ、彼らはそんな夜の遊びに興じる連中とは、明らかに気色が違っていた。

足音を潜め、素早くある建物に近づいていく。

バーのようだが、ドアには「CLOSED」の札がぶら下がっている。

そいつらは、手に何かを持っているようだった。

黒い、大きな、何かを。

一人が手で合図する。

もう一人が、頷いて応える。

その手がドアノブに伸びて……

ガチャツ。

ドアは、内側から開いた。

「今晚は、皆々様」

「なッ……！」

ガシャンッ!

有無を言わせず、リンファは手に持っていた酒瓶を覆面の男に叩き付けた。

頭を殴打され、男は一撃で昏倒する。

そして呆気にとられているもう一人の男の腕をつかみ、リンファは一気に力を込めた。

男の体が軽々と宙に舞い、床に叩き付けられる。

打ち所が悪かったのか、男はそれだけで沈黙した。

甘いのだ。

足音を殺しているつもりだろうが、外の不穏な気配は店の中まで伝わってくる。

逆にリンファはドアの前で待ち伏せ、襲撃者に奇襲を仕掛けたのである。

「ヨシユア、裏は?」

「5人だ。表から車に乗った方が早い」

バーの裏口から様子をうかがっていたヨシユアが、リンファの元に駆け寄った。

その後ろにエリイ、ジーナ、そして店のマスターも続く。

足音を忍ばせながら、順番に店の外へ駆けだしていく……

いや、一人だけ。

マスターだけが、店を出ようとはしなかった。

「何をしている」

マスターは首を横に振った。ヨシユアの顔が少しだけ歪む。彼の瞳に浮かぶ、決意の色を感じ取ったのだ。

「俺は、ここに残るよ。」

これ以上店を荒らされたくない」

ほんの少しの間、沈黙が流れた。

ヨシユアの目が冷たく輝く。

マスターは耐えかねて瞳を閉じる。

言葉は無意味だ。

ヨシユアが何を言おうと、彼の決意は決して揺るがない。

それは、間違いのないことだった。

他の三人は既にオープン・カーに乗り込んでいた。

リンファが手招きをする。

早く来い。

そう言っているのだ。

ヨシユアはマスターを放って走り出した。

そのまま車体に手を突き、宙を舞って車に飛び込む。

「あのお、マスターはあ？」

「別ルートで逃げるとき」

嘘である。

だが今は、嘘の一つもつかなければ誰も納得しないだろう。

それはリンファもエリイもジーナも、そしてヨシユア自身も。

問いつめられれば、本当のことを話さないという自信はなかった。

しかし幸運にも——或いは故意にかもしれないが——深く追求しようとする者はいなかった。

ヴオウンツ！

爆音を立てて、オープン・カーのエンジンがかかる。

全く、所有者の馬鹿さ加減には呆れて言葉も出ない。

どうして、無音の電気自動車をわざわざ轟音が出るように改造しなければならないのだ。

形だけでも格好良く見せて女を引っかけたいのだろうが……

これで騙されるような馬鹿な女など、ヨシユアはまっぴら御免である。

聞こえてくる足音。

連中も、このエンジン音には気付いたらしい。

裏口に回っていた5人が、細い路地を通り抜けて現れる。
三流どもめ。

リンファは車のハンドルを握って、心の中で罵った。

ついてこれるものなら、ついてきてみる。

リンファは、アクセルを思いっきり踏みつけた。

*

「弧雷のロレンス——だと……」

マスターの言葉を聞いて、ヨシユアは目を見開いた。

驚愕？

いや、違う。

そんな生やさしいものではない。

畏れ。

それこそが、彼の中にある感情だった。

リンファも同じように息を飲んでいった。

いくら業界に疎い業界人たるリンファでも、この名を知らないということとはなかった

ようである。

弧雷のロレンス。

現役最強の名を欲しいままにしているレイヴンである。

マスターアリーナ、と呼ばれるものがある。

レイヴン達が鎬を削る「闘技場」、バトルアリーナの中でも、名実共に最強クラスのレイヴンのみが参戦を許されるトップランクのアリーナ。

それがマスターアリーナである。

かく言うリンファやヨシユアもこのマスターアリーナに所属しているのだが……

そこには、一つの伝説があった。

漆黒の鬼を思わせるACを駆る男。勝つたびにポイントが加算され、その大小によって順位が決められるマスターアリーナにおいて、その男は今だ無敗。

他に大差を付けて文句無し的一位に居座っている。

その強さは圧倒的。

雷光のように現れ、瞬き一つする間には勝負がついているという。

……マスターアリーナ所属のレイヴンを相手にして、である。

彼の強さを稲妻に喩え、ある者がこう呼んだ。

ロレンス・ド・アルク。

弧雷のロレンス、と。

かつてオルレアンの街を救った聖女ジャンヌと同じ二つ名。

誰もその名を疑うことはなかった。天から堕ちる弧状の雷光。

一目見ただけで、人々の目にはその姿が焼き付けられるという。

「信じてない……って顔じゃないな、それは」

店のマスターはリンファの表情をまじまじと見つめた。

ようやく彼女も落ち着きを取り戻した頃である。

「嘘にしちゃ、現実味がなさすぎる」

「……違いねえ」

しかしそれなら、納得もいく。

最強、という名がどれほど重い物か。

名声を求める馬鹿ども。

単に腕試しをしただけの馬鹿ども。

そして、そこから生じる逆恨み。

狙われる理由は、それこそ掃いて捨てるほどある。

肉親や、ただの知り合いにとっても。

びくり。

ヨシユアの耳が動いた。

かすかな気配が、店を取り囲んでいた。

つづく。

06 本当の依頼

「げっ！」

汚らしい叫び声をあげながら、リンファはハンドルを切った。

オーブンカーの進路を阻むように空からふってくる巨大な機械……

一見すると巨人。

だがその正体は、戦闘用の二足歩行MTである。

いつかは来るだろうとは思っていたが、ついに来たか。

そもそも、戦闘ヘリなんて物騒な物を持ち出した時点で、MTが襲ってくることは予想済みである。

しかし……

ACさえあればそれほど恐ろしい相手ではないが、今こちらにある武器は拳銃一丁だけである。

トチユチユチユチンッ！

妙に軽い音を立てて、MTの機銃が舗装を削り取った。

リンファの無茶苦茶な操縦によって蛇行する車には、ただ一つの弾丸も当たらない。そのまま車はMTの横をくぐり抜け、一目散に逃げ出した。

「せめてACがあれば……」

「あるよお」

ヨシユアの独り言にとろけた口調で応えるのは、もちろんエリイである。

意外な答えにヨシユアは硬直する。

ACがあるって……まさかとは思うが……

「あのね、くるときのひこうきにのせてたの。」

いまくうこうにあるよ、ぺんゆうもわーむうつどもく」

『そういうことは早く言えッ!!』

ものの見事に、リンファとヨシユアの台詞がかち合った。

叫ぶ間にもリンファの手は行動を起こしている。

ハンドルを左に思い切りきると、車はドリフトしながら十字路を曲がった。

空港への最短コース。

全力で飛ばせば、ものの十分もかからない距離である。

「あああああつ！

ヨシユアさんリンファさんっ！

MTが追いかけてきますう！」

「しつこい男はモテないぞっ！」

ガキユキュンッ！

またもや弾丸が地面に穴を穿つ。

もちろんリンファの操縦をもつてすれば回避など容易い……

が、さつきより多少狙いが正確になっているようである。

敵も馬鹿ではない。

こちらの動きに、少しずつ慣れてきたのだ。

いくら回避技術が優れていようとも、攻撃してこない相手ならそのうちパターンが読めてくる。

普段は、そうなる前に撃墜されるだけの話である。

「逃げ切れるか？」

「んなこと聞くなッ！」

それはそうだ。

そんなこと、逃げている側にわかるはずがない。

我ながら馬鹿な問いをしたものだ、ヨシユアは少し反省した。

そして、三度銃弾が飛来する。

今度は本当に目と鼻の先に着弾する。

これはいいよまづい。

こうなったら、駄目で元々だ。

ヨシユアは慎重に拳銃を構えた。

相手は人間型の2足MT。

装甲もそれなりに厚そうである。

しかし関節部分に上手く銃弾が命中すれば、足を止めることくらいはできるかもしれない。

たとえそれが針の穴を通すような作業だとしても、試す価値はある。

ヨシユアは、引き金を引いた。

ガゴンッ！

途端に足を失い、崩れ落ちるMT。

「……本当に当たりやがった……」

「やればできるじゃない」

一番驚いているのは、撃ったヨシユア本人である。

*

「見えたっ！」

思わずリンファの口から叫び声が漏れる。

エリイの案内によると、リンファ達のACが保管されているのは滑走路の向こうに見える倉庫らしい。

迷わず車は公道を離れ、広い滑走路に入り込んだ。

そのまま真っ直ぐ進めば目的の倉庫だが……

ゴガウンツ！

夜の地下都市に響き渡る轟音！

爆風が車の動きを止める。

衝撃でリンファは頭をしたたかに打ち付けた。

額をさする……

流血もなさそうだし、怪我の方は大したことはない。

しかし、今の爆発は。

リンファは目を凝らした。

舗装がはがれた滑走路の向こう側に、いくつもの影がある。

やがてそれらははつきりとした形を取った。

MTである。

思い思いの武装をした戦闘用MTが……10機ほど。

行く手を阻むように陣取っている！

「なんて戦力だ……戦争じゃねえんだぞ?!」

「どういう恨みの買いかたしてんのよ、あんたの兄貴は!?!」

「あうう〜! ごめんなさいい〜!」

ジーナを責めても始まらない。

とにかく敵をまかないことにはACに乗り込むことができない。

リンファはアクセルを踏みつけた。

空気が抜けるような、間抜けな音が響く。

もう一度。

結果は同じ。

リンファは舌打ちをした。

なんてことだ、車が爆発の衝撃で駄目になってしまった。

『どうやらこれで終わりだな、ロレンスの妹さんよ!』

声はMTの中の一機が発した物である。

外部スピーカーをガンガンに効かせながら、MTは少しずつ近づいてくる。

『俺たちやロレンスに恨みがあるんだ……』

みんな、仲間だの部下だのをロレンスに殺された奴ばかりさ。

もちろん、ロレンスの野郎をぶち殺してやりてえ。

でも俺達ごときがかなうわけがねえ。

だから、お前を殺す。

これが俺達の復讐だッ！』

たわけたことを。

そんなもの、ただの八つ当たりに過ぎない。

まあ、その違いが解らないからこそその二流三流なのだろうが。

『恨むなよ。』

恨むんだったらロレンスの妹に生まれてきた自分を……』

——瞬間！

ずぶっ。

MTのボディは、上から降ってきた何かによって、真つ二つに切り裂かれていた。

爆発が起きない。ジェネレーターが無傷で残っている証拠である。

「兄様！」

「何ッ!？」

全員が目を見張った。

そこには、巨大な黒い巨人が立ちつくしていた。

細身の全身像。

砲身の長いライフル。

背中に背負った特殊なミサイル。

それは、一種異様な雰囲気を全身から放っていた。

漆黒の鬼。

噂に聞いたとおりの姿である。

弧雷のロレンスが駆るAC……『アビス』。

アビスが奔る。

今だ戸惑っているMTに向かって。

攻撃する暇すら与えない。

ブレードの一撃で、MTのボディは両断される。

「りんふあちゃ〜ん、いまのうち〜」

エリイの言葉に、リンファは頷いた。

*

「戦闘モード起動」

無機質なコンピューター・ヴォイスが響く。

シートの具合を確かめながら、リンファは二つ三つのボタンを押した。

愛機『ペncyウ』のコックピットの中。

まさか、バカンスに來た先で乗ることになるとは思いもよらなかつたが。

ようやく計器類が稼働し始めた。

外部モニター、通信機、そしてレーダー……

「!？」

リンファは息を飲んだ。

レーダーには、赤い光点で反応が記されている。

たった、一つだけ。

慌ててリンファは操縦桿を倒した。

ペncyウが保管されていた倉庫から、ゆっくりと歩み出る。

外の風景が目飛び込んできた。

無数の残骸。

まず目に付いたのはそれだった。

累々と横たわる、無惨な姿のMT。

あるものは真つ二つに切り裂かれ、またあるものは胴に風穴を開けられ……
動いているものなど、いようはずもない。

その中心に、一匹の鬼が佇んでいた。

こちらに背中を向けていた鬼が、ゆっくりと振り返る。

ぞくりっ。

リンファは、冷たいものが背筋を駆け抜けていくのを感じた。

恐怖と呼ぶべきか、或いは畏怖と呼ぶべきか……

ともかく漆黒のACは、奇妙な重力にも似た威圧感を放っていた。

目を離すことが……できない……

やがて、リーダーの光点は二つに増えた。

ヨシユアの駆る『ワームウッド』が、さっきの倉庫から姿を現す。

そしてペンユウの隣に列んだ。

「手伝う暇も無かったみたいね」

通信を開いてリンファは語りかけた。

無視されるかとも思ったが、意外にも返事が返ってくる。

『……君たちは、ジーナに雇われたんだらう？』

真紅の華……そしてワームウッド』

男性としてはやや高めのもの、澄んだ声である。

イメージとはギャップがあるが、それでもこの威圧感は消えない。むしろ逆に恐ろしいほどである。

ロレンスの声は、あたかも死者を弔う葬送曲のように聞こえた。

「ヨシユアさんっ！ リンファアさんっ！」

ジーナが叫ぶ。

いつの間にか、彼女とエリイはペンユウの足下までやってきていた。

いや、やってきた、と言うには語弊があるようだ。

エリイは必死に、ジーナをペンユウから引き離そうとしている。

それもそのはず……もし戦闘が始まったら、あんな位置に居ては踏みつぶされかねない。

「やっつけて！」

あの人を……兄様をやっつけて下さいっ！」

「はあ？」

つづく。

07 最強レイヴンの家庭の事情

意外な言葉に、リンファの顔が歪む。

やつつけろ、って言ったって……

リンファは前のアビスと、足下のジーナを交互に見つめた。

どちらも動かない。

ただ、ジーナの瞳は冗談を言っているような色ではなかった。

『ジーナ！』

もう、レイヴンになろうだなんていう馬鹿な考えは捨てるんだ！』

……………レイヴン？

一同の目が点になった。

「嫌ですう！

ジーナは、絶対レイヴンになりますう！

兄様みたいな強いレイヴンになるんですう！」

『ジーナがレイヴンになったりしたら、お兄ちゃんは心配で夜も眠れないじゃないか！』
「それならお昼寝すればいいんですわあ！」

なんて言われたってジーナは諦めません！
『どうしてお兄ちゃんの言うことが聞けないんだ！』

毎日一緒にお風呂に入っていたあの頃のジーナはどこへ行ったんだ!？」

「ジーナは、もうハイスクールの頃のジーナとは違うんですう!!」

延々と続く二人の口論を、リンファは痙攣しながら聞いていた。
「だいたい……ハイスクール？」

それは問題があるんじゃないのか……

しかし、今更何を言ったって二人の世界である。

不毛な戦いを止める手段は、リンファにはない。

『……馬鹿馬鹿しい……つき合ってられるか』

ヨシユアの声が電波を介して伝わってくる。

同時にワームウッドが180度向きを変えた。

どうやら、元の倉庫にACを戻すつもりらしい。

気持ちは、わからないでもない。

実際リンファも、彼の後に続こうと操縦桿を軽く倒した。

と、口論が止んだ。

ジーナが慌てた様子でワームウッドの前に立ちはだかる。

両腕を大きく広げ、行く手を遮っているつもりなのだろうか……

「ヨシユアさん！ お願ひします、兄様を……！」

『いい加減にしろッ！』

びくりっ。

ジーナの体が小さく震えた。

それほどの大音声。

外部スピーカー越しにはいえ、如何に大声で叫んでいるか。リンファですら、一瞬

驚いてしまったほどだ。

『レイヴンになりたいんだらう。だったら何故俺達に頼る？』

自分の力で肉親一人説得できないような奴が、戦場に出たところで真っ先に死ぬのが

精々だ！』

ジーナは何も応えなかった。

何も応えられなかった。

その肩が震えている。

遠目にもはつきりと判った。

彼女が、涙を必死で堪えているのが。

リンファはため息を付いた。

どうやら、今回の任務は失敗のようである。

『貴様ツ……!』

『あ?』

突然、ロレンスの口調が変わった。

声の高さは相変わらずだが、そこに込められた感情は全く違う。

怒り。

恐ろしいまでの怒りが、空気の震えという形を取って撒き散らされた。

『よくも……よくもジーナを泣かせたなツ!!』

さて、こちら。

リンファは思わず、頭をコントロールパネルにぶつけた。

そのまま肩をひくひくと震わる……

もうここまで来たら、笑う以外にどうしろというのだ。

『許さんツ!』

『お……おいつ! ちょっと待……!』

有無を言わせずアビスが走る……

速い！

さすがは軽量二足タイプ、といったところか。

直線上を真っ直ぐ走るだけなら、ヨシユアのワームウッドを越えているかもしれない。

もつとも、総合的な機動性ではワームウッドに分があるのだが。

アビスの肩に装着されたミサイルが火を噴いた。

同時に二発、左右から挟み込むようにワームウッドに迫る！

——まずい！

これは笑い事ではなさそうだ。

ただ単に回避するだけなら、ヨシユアの実力をもつてすれば容易いことだ。

しかし今、ワームウッドの足下にはジーナとエリイがいる！

『畜生、トチ狂いやがって！』

自分の妹を殺す気かッ！』

やはりワームウッドは動かない。

ガトリングガンの掃射一発は撃ち落としたが、もう一方は……

ガガガガッ！

視界の外から飛来した無数の弾丸が、ミサイルの片方を撃ち落とした。

これは……ペンユウの装備したマシンガン！

「ロレンス！ あんたどうかしてるわ！」

『……なるほど……確かに、そうかも知れない』

戻った。

ロレンスの声は、元の冷たく恐ろしい、しかし理性に溢れたものへと戻っていた。

どうやらさつきは、怒りのあまり一瞬我を忘れてしまっただけらしい。

もつとも、理性を失う理由が「妹を泣かせた」というだけのことであるのは問題だが。

『ジーナ。しばらく離れていなさい』

ジーナは顔を上げた。

頬を伝っていた涙を手のひらでぬぐい去る。

『レイヴンというものがどういう仕事なのか、教えてやろう』

*

ゴウツ！

アビスの背後から、灼熱の炎がほとばしる。

ブースターの出力そのものはペンユウより劣るが、機体が軽量な分だけ負荷が小さく

済む。

ACとしては、理想的なコンディションである。

真っ直ぐペンユウに迫ってくるコース。

ジーナが離れるまでは、ワームウッドには手を出さないということか。

——ええい、このシスコンめ！

心の中で悪態をつきながら、リンファは操縦桿を思いっきりなぎ倒した。

ブースターの力で地面を滑り、アビスの側面に回り込む。

奴の装備しているレーザーライフルは、威力が高い代わりに極端に扱いづらいものだ。

大きすぎる出力が災いして、発射するたび銃身を冷却しなければならぬし、たとえば冷却を続けたとしても10発も撃てばオーバーヒートを起こしてしまう。

ならば、狙いはそこだ。

回避に専念して、長期戦にもつれ込ませる。

ロレンスの方も、自分の機体の弱点は心得ているらしい。

ライフルを撃とうとはせず、肩のミサイルを発射する。

例の左右から挟み込むデュアルミサイルだが……

たった二発のミサイルなど、リンファにとっては子供だましにも等しい！

「相手をなめてかかりすぎよ、ミスター・チャンプ！」
ガガッ！

たったの二発だけ、リンファはマシンガンの弾丸をばらまいた。
二発で十分。

ミサイルそれぞれに一発ずつ徹甲弾が食い込み、中空で爆発を引き起こす。
弾の無駄遣いは御免である。

しかし、次の瞬間！

『そうかな？』

丁度良い位だと思ったが』

「……ッ!？」

ミサイルに気を取られている隙に、アビスはペンユウの懐に飛び込んでいた。
想像以上に素早い。

近づかれたことに、全く気付かないとは。

そして、アビスの左腕が輝く。

リンファは慌ててスイツチを押した。

ペンユウの腕からも光の刃が生み出される。

二つの光は、互いに交わり、騒音と光と衝撃を撒き散らして弾け飛んだ。

ペンユウの足が地面を蹴る。

衝撃を逆を利用して、アビスとの間合いを離れた。

『成程、いい動きだな。』

斬り結びばかりに凝り固まる連中はよく見るが、なかなかそこまでは動けない』

「訂正よ。ミスター・テューター！」

ペンユウのマシガンから、小さな弾丸が弾け飛ぶ。

セオリーに則った、左から右への掃射。

アビスが宙へ舞い上がる。

弾丸がその足下を過ぎ去ると同時に、ライフルの銃口がペンユウをとらえた。

ガクンッ！

突如空中で方向を変え、アビスの巨体が地面へ落ちる。

その頭上をかすめるプラズマの砲弾。

これは、ワームウッドの肩に装備されたレーザーキャノンである。

『お姫様は蚊帳の外だ！』

ワームウッドが地を滑りながらガトリングガンで乱射する。

しかし、奇襲でもなければ当たりもしない。

軽い弧を描きながら飛んでいった弾丸は、空港のビーコン塔らしきものを砕くにとど

まった。

『……やっちゃまった』

「器物破損、1ペナね」

二発のミサイル。

アビスの肩からそれが飛び出す。

狙いはペンユウ。

大地を蹴り、ブースターの助けを借りて飛び上がる。

ミサイルが滑走路のコンクリートに穴を穿った。

リンファの指が踊る。

黒い鬼をサイトにとらえ、ロックしていく。

……と、ロックが二つになったところで、アビスが横へ飛び退いた。

このままでは、フルロックの前にサイトからはずれずれる！

ガガガッ！

ガトリングガンの弾丸がアビスの行く手を阻む。

ロックは……乱されていない。

さすがはヨシユア、完璧なフォローである。

よくミサイルを複数ロックオンしていることに気付いたものだ。

『それが貯まると何かあるのか？』

「請求書って素敵なプレゼントよ！」

つづく。

08 圧倒

トリガーを引く！

肩のミサイルポッドから垂直に打ち上げられる四発のミサイル。

ヒュルヒュルと音を立て、まるで蜘蛛の糸のように黒鬼を絡め取る！

慌てるそぶりも見せず、アビスは真後ろへ飛んだ。

そして再び足が地面につくなり、今度は直角に向きを変え、左へ逃げる。

ミサイルはその軌道を追うようにして大地を抉った。

ただの一発も当たりはしない。

『Excellent』

ロレンスの声は、だんだんと上擦ってきていた。

興奮しているのだ。

久しく無かった、戦いの緊張感に。

忘れかけていたこの素敵な感覚を思い出させてくれる……

体がむずむずする。

そうだ、自分は失礼なことをしているのだ。

とても、とても。

『素晴らしい攻撃だ。随分と息が合っているな』

『なんだかんだ言つて、付き合いが長いからなア』

「腐れ縁だけどね」

大地に降り立ったペンユウは、ワームウッドと少し距離を置いて並んだ。

黒鬼は動かない。

じつと、こちらを見つめている。

ふつつつとわき上がる、何かの感情が伝わってきた。

いや、見えると言った方がいいかもしれない。

まるで大気の質が変わったかのように、アビスの周囲には陽炎が立ち上っていた。

『すまなかつた、真紅の華。』

やはり私は、君達を甘く見ていたようだ』

ぞくり。

突然の悪寒がリンファの背を襲った。

何だ、この感覚は。

こんなに距離が離れているのに、相手は武器を構えてすらいらないのに、まるで喉元に牙を突きつけられたようではないか。

そう、あと一押しすれば喉笛をかつ斬られる。

そんな張りつめた空気だ。

自然と冷や汗が玉を作った。

『戦おう。全力を以て』

「消えたっ!？」

ない!

つい今まで、目の前でしつかりと存在していたアビスの姿が、今や何処にもない!

ほんの一瞬、瞬きよりも短い一瞬のうちに、黒鬼は何処かへと消え失せていた!

『後ろだ、リンフア!』

早かったのは、叫びか腕か。

ペンユウは横へ飛んだ。

後ろを確認する暇など、有ろうはずもない。

光が装甲板をかすめて過ぎる。

背後からの、いつのまにか背後に回り込んだアビスからの射撃である!

「この野郎ッ！」

ペンユウが振り向こうとした、次の瞬間。

ヴァシュツッ!!

ペンユウの右腕は、間接部を貫いたレーザーによって斬り落とされていた。正面に回り込んだ、アビスのレーザーライフルである。

*

なんてことだ。

ヨシユアは爪を噛んだ。

彼の癖だ。

しかし、普段は滅多に見せることのない癖。

一瞬だった。

一瞬で、ペンユウは右腕ごとマシンガンをもぎ取られた。

まだミサイルが残っているとはいえ、あんな機体で活動するのは自殺行為に近い。

重量や電力供給のバランスが崩れるのがどれほど危険なことか。

知らないレイヴンはいないだろう。

案の定、バランスを失ってペンユウの巨体が倒れ込む。ガラガラと、不快な音が響き渡った。

そして、アビスが振り向く。

ワームウッドの方に。

ゆつくりと、緩慢な動きで。

汗が噴き出す。

なんてことだ。ヨシユアはもう一度思った。

圧倒的じゃないか。

これが、これが全力を出した弧雷だということのか。

『知っているか。』

兵は神速を尊ぶ、という』

落ち着き払ったロレンスの声が聞こえてくる。

冷静になっている。

さつきまで、あんなに興奮していたというのに。

これが最強の風格か……

ただ自分の感情に流されるのではない。

必要ときには、機械のような冷酷さを一瞬で取り戻すことができる。

光の矢が足下を通り過ぎていくのがわかる。

『……気付いたか』

「俺は、リンファよりは目がいいんでね！」

アビスは、何もワープだの何だのという漫画じみた技を使っていたわけではない。ただ単純に、こちらの頭上を飛び越えて後ろに回っていただけなのである。

しかし、その飛び越え方が尋常ではない。

機体の向きは変えずに上昇し、相手の頭上を飛び越えたらブースターをカットして自然落下する、というのが普通である。

それをアビスは、上昇と下降の両方にブースターをフル活用していたのだ。

つまり、こちらを正面にとらえたまま、半円を描くように飛んだのだ。

そのまま進めば、もちろん頭から着地するはめになる。

だから着地の一瞬前に、機体を横に回転させて上下を反転させたのである。

そんな無茶な動きをした時の、パイロットにかかる慣性力がどれほどのものか。常人なら一回で失神してしまうだろう。

だから、ヨシユアは上空へ飛び上がったのだ。

これなら上から回り込まれることはなくなる。

『ならば、共に舞うか！』

この澱んだ空を！」

ヴァンツ！

アビスがブースターを噴かして飛び上がる！

ワームウッドを飛び越え、更に上空へと。

「空中戦かよー！」

真上から降ってくる二発のミサイル。

ワームウッドの巨体ぐるりと回転した。

真上を正面にとらえ、ガトリングガンを掃射する。

一つ。二つ。

巻き起こる爆発。

アビスはそれをかわすと、真上にブースターを噴かして一気に下降した。

重力も手伝って、恐ろしいまでのスピードで迫ってくる。

左腕の煌めき。

レーザーブレード！

ワームウッドの貧弱なブースターが懸命に火を噴いた。

光の刃を寸前でかわす。

しかし、アビスの勢いは止まらない。

必死に機体を回転させ、落下スピードは押さえ込んだが、既にワームウッドの下まで落ちてしまっていた。

「じつとしていろッ!!」

ガゴンッ!

ワームウッドが、アビスに上から組み付いた!

そのままブースターを噴かす。上に向かって。

二機は絡まりながら猛スピードで落下していく!

——おまけだっ!

ヨシユアはトリガーを引いた。

ガトリングガンの弾丸が、ライフルごとアビスの右腕を吹き飛ばした!

あとはこのまま落ちていけば……

アビスのボディがクツシヨンになって、運が良ければ生き残れるだろうよ!

「おおおおおっ!!」

『ぬううううっ!!』

アビスの声。

驚愕。

冷や汗。

ヨシユアは目を見張った。

*

轟音と砂煙を巻き上げ、二機は墜落した。

ヨシユア！

リンファは心の中で叫んだ。

最後の一瞬で、ワームウッドとアピスの上下が逆転した。
ロレンスの巧みな機体操作によって。

クツシヨンにされたのは……ワームウッドの方だ。

『う……』

雑音が混じりながらも、通信が入った。

ヨシユアのうめき。

よかった、生きている。

しかし次の瞬間、リンファは我が目を疑った。

砂煙が収まる。

立ち上がる黒い影。

右腕がない。漆黒の鬼。アビス。

そしてその足下に転がる、青い蜘蛛。

四本の足のうち、二本を失った……ワームウッド。

破れた。

あの、ヨシユアが。

「く……」

リンファはいくつものレバーを必死に動かした。

ペンユウに残された左腕を支えにして、なんとか立ち上がらせる。

バランスが崩れているせいだ。

機体がふらふらしてしかたがない。

でも……でも、こうするしか！

「この野郎オオオオオオ!!」

ペンユウが走る。

アビスに向かって。

つづく。

09 勝利の苦味

ヨシユアはまず自分の傷を確認した。

幸いにも、頭をぶつけた程度で済んだようだ。

もし最後の瞬間、上を取られたと気付いた瞬間にブースターで速度を殺していなければ、そして折れ飛んだ二本の足がアブソーバーになっていなければ、今自分は息をしていないかもしれない。

『この野郎オオオオオ!!』

これは!?

ヨシユアの耳にリンファの叫びが届いた。

モニターの機能はまだ生き残っている。

映像が映る。

走ってくる、ペンユウ。

左腕からはレーザーブレードが伸びている。

まさか。

この状態で、アビスに攻撃するつもりか!!

「止めろ、リンファア！」

止まらない。

このままでは……

ヨシユアは決意した。

そして、指をトリガーにかけた。

*

ゴガアアアアアツ!

レーザーキャノンの弾丸が、足を吹き飛ばした。

ペンユウの、足を。

完全に支えを失い、再びペンユウは倒れ込んだ。

リンファは唇を噛んだ。

わかっている。

ヨシユアがどうして、自分に攻撃したのか。

そんなことはわかっている。

だから怒りなんて浮かんでは来ない。

ただ自分の中にある感情、それは――

『もういい……やめろ……』

ヨシユアの声は優しかった。

そして苦しそうだった。

自分と一緒にだ。ヨシユアも、きつと自分と同じ気持ちだ。

それは嬉しくもあり、そして悲しくもあった。

『俺達の――負けだ』

*

ロレンスとジーナは、手を伸ばせば届くくらいの距離で向かい合った。

互いに互いの瞳を見つめ合う。

横で見ているリンファもヨシユアもエリイも、二人の心を推し量ることはできなかつた。

ぱしっ。

小さな音。リンファは息を飲んだ。

ジーナが自分の頬を押さえる。

兄によつて撲たれた頬を。

「痛いだろう。悔しいだろう」

ロレンスの声は、いつもの高く澄んだものに戻っていた。

さつきまでの鬼のような低音は、ここからは一欠片も伺い知れなかった。

「負けるということとは、その気持ちを味わうということだ。」

勝つということは、その気持ちを誰かに与えるということだ。

それがわかつているのなら」

ロレンスは踵を返して歩き出した。

彼の愛機、アビスに向かつて。

その背に浮かんでいるのは、罪悪か。

「好きにするといふ」

*

「いらつしやい……ああ、あんたか」

ダウンタウンにあるちっぽけなバーのマスターは、入り口の鐘をならした男に目を遣った。

短い金髪と、華奢な体。

まったく、妹とよく似ている。

ロレンスその人だった。

「いつもの」

「あいよ」

冷蔵庫から瓶を引っ張り出してくると、中に入っていたオレンジ色の液体をグラスに注ぐ。

酒ではない。

ただのオレンジジュースである。

兄妹そろって酒を飲まないのだから、マスターにとってみればなんとも儲けの少ない常連である。

「ジーナ、泣いてたぜ」

「……そうか」

ロレンスはグラスの中身を一気に飲み干した。

ことんと小さな音がして、カウンターにグラスが触れる。

マスターはその隣に、もう一つ空のグラスを置いた。
顔を上げ、マスターの顔をのぞきこむ。

「たまには、どうだい？ カンパリのいいのが入ってるぜ」
苦笑が漏れる。

「ああ……もらうよ」

*

今日も、太陽が照りつける。

ホテルのロビーは今日もにぎわっている。

一週間の休暇も、今日で最後だ。

帰る前に泳ぎしようと、今日も今日とてリンファ達は水着に着替えていた。

リンファと、エリイ。

そして何故かジーナの姿もある。

相変わらずのヨシユアは、ただの見送りである。

「リンファ姉さまあ……あたし、姉さまがいなくて寂しいですう」

「いつからあたしはあんたの姉になった……」

ジーナは、姉と呼んで慕うリンファの腕に、しっかりとしがみついていた。

前から少し思っていたのだが……リンファは、男より女に好かれるタイプなのではないだろうか。

そのリンファが、部屋へ帰ろうとするヨシユアの背に声をかけた。

「ねえ、ほんとに泳がなくていいの？」

せつかくここまで来たつてのに」

「そうだお〜！ もつたいないぞお〜！」

ヨシユアは振り返った。

飛行機の中で機械を指さしたのと同じように、リンファの鼻先に人差し指をつきつける。

そして、忌々しげに吐き捨てた。

「赤くなるんだよ。日焼けすると」

T H E
E N D .

第9話 ブルーグラス・メモリーズ

01 『坊や』

人類を地下都市へと追いやった大戦争、「大破壊」から53年。

世界は大きな変貌を遂げた。

極度の汚染で人が住めなくなった地上。

失われたシステム、国家。

台頭する巨大企業。

収まることを知らない紛争。

激化するテロ。

人種、性別、民族、各種取り混ぜた差別。

需要があるからこそ誕生した供給、戦闘兵器A Cを駆る傭兵「レイヴン」。

だが、世界がどう変わろうとも人には変わらぬ真実がある。

それは、生と死。

ゆりかごから墓穴まで、とはよく言ったものだが、生まれた人間がいずれ死んでいくというこの真実は、決して変わることはない。

世界最大の複合地下都市「アイザック・シティ」の外れに、一つのリフトがある。

地下都市のさらに地下へと降りていくリフトである。

下にあるのは墓地。

無数の墓標が立ち並ぶ、湿った気色悪い空間だ。

墓地はいくつもの層に分かれていた。

地位の高いもの——それはこの世界においては金を多く持っているものとイコールだが——ほど、高い層に葬られる。

少しでも、地上に近く。

死してもなお、生に憧れる。

人の浅はかな考えが産んだ、階層構造である。

その一番上の層。

一際豪華な墓標が軒を連ねる第一層を、一人の男が歩いていった。

飾り気のないグレーのスーツを身に纏った壮年の男。

白い色が混ざり始めた金髪と、澱んだ青の瞳。

そして手には、花束が一つ。

百合の花だった。

やがて男はある墓標の前にたどり着いた。

その墓標は、第一層にあつて然るべきそれとは、一線を画したデザインをしていた。質素である。

これなら一般人のものと大差ない。

木に似た質感ではあるが、決して朽ちることのない合成素材で作られた、簡単な十字架。

それが一つだけ、広い敷地にぽつんと立っている。

男は花束を十字架に供えた。

なんていう墓標だ。

彼もそう思う。

だが、生前にいつも親友が言っていたのだ。

もし自分が死んだら、こういう風に埋めてくれと。

周囲の者はもちろん反論した。

でも彼は、親友の意志をかなえてやりたかったのだ。

「オブリッチ」

親友の名。

まるで、墓にかかれた銘を棒読みしているかのような響きだ。

「死ぬのが早すぎたんじゃないのか」

親友にして上司にして社長であった男。

彼は親友の秘書だった。

懐刀として畏れられていたのだ。

長老どもや専務の馬鹿共がちよっかいをだしてきた時も、二人でなんとか乗り越えた。

会社もちゃんと纏めてきたつもりだ。

しかしそれが……こんなことになるとは。

ストレス性の脳梗塞。

お笑い種だ。

ひたすら、不和を取り除くことばかりに気を使ってきたお前が、その死によつて最大の不和を呼び覚ましてしまった。

跡を継いだ保守派のモールは頼りないし、革新派のハティューやファも動向が怪しい。

株主の長老どもも最近活気づき始めた。

俺は、どうすればいい。

せつかくここまで育ててきたネーベル・テヒニケンを、こんなことで潰してしまつていいのか。

「お会いできて光栄ですわ、ハール・ノーカー」

声は、突然に後ろから聞こえてきた。

男は、ノーカーと呼ばれた男は振り返つた。

いつの間にか、女が一人立っていた。

鮮やかな、長い金髪。

研ぎ澄まされた刃のごとく冷たい輝きを放つ青い瞳。

整つた顔立ち。

女としては、背も高い方だろうか。

黒いロングコートが目を引き。

細身の美女ではあつたが、どこか恐ろしさにも似た雰囲気を放っていた。

女の手には、花束が握られていた。

百合の花束。

彼が今しがたしたように、女も墓にそれを供えた。

彼の親友が生前好きだった、そして何度も似合わないぞとからかつた、あの百合の花

である。

「君は？」

女は立ち上がった。

墓標を見つめる瞳がすうつと細くなる。

ノーカーは背筋に悪寒を感じた。

この女は、天使か、はたまた悪魔か。

ガブリエルのようにも見えだし、リリスのようにも見えた。

「NT第三技術開発研究部部长、アシヤンタナステイ」

コートが揺れる。

女は振り返ると、ノーカーに向かって微笑んだ。

「我が社を治めるに相応しい女ですわ」

*

冷たい空気が心地よい。

男は後ろ手に喫茶店のドアを閉めた。

からん、と乾いた鐘の音がする。

黒いロングコート、金髪、冷たい輝きを放つ青い瞳。

1. 9 m を超える身長と、少し長めの手足。

荒んだ空気を放つその男は、おおよそ紅茶店には似つかわしくない風体をしていた。だが、この店に来る連中はこんなものだ。

なんでもここのマスターは元AC乗りだったらしい。

そのせいか、紅茶店カラサキは闇の世界で生きる傭兵、レイヴンのたまり場になってしまっていた。

彼も……ヨシユアも、そんなレイヴンの一人。

もつとも、この店に来たのはこれが初めてだったが。

ヨシユアは多少不機嫌そうな顔つきで、夜の街を歩き出した。

ついさつき、店のマスターに笑われたのである。

彼がダージリンの「ストレート」、を頼んだのがいけなかったらしい。

普通はストレートで出すものなんだそうだ。

仕方がないじゃないか。

ただ紅茶とだけ言うと、砂糖だのミルクだのを力一杯ぶち込むような連中と、一年近くもつき合っているのだから。

これだから、女は。

ヨシユアは思いながら自己嫌悪に陥った。

どうしてああも、甘い物ばかり食べていられるのか。
こつり。こつり。

闇に響いていく彼の靴音。

耳がぴくりと動いた。

右腕をコートの中に差し入れる。

前の方の、バーとドラッグストアの間にある細い道。

裏路地へ通じる道だ。

ヨシユアはそこに入り込んだ。

足下の汚物を飛び越え、粗大ゴミの隙間をくぐり抜け、酔って眠った浮浪者を踏みつけないように気をつけながら、裏路地を進んでいく。

やがて彼はスラムの一角にたどり着いた。

朽ちかけたビルに挟まれた、細い路地。

幅は1mほどしかないだろう。

この辺りまで来れば、少々騒いでも大丈夫なはずだ。

ヨシユアは立ち止まると、コートをはためかせて振り向いた。

「パーティのお誘いかい、坊や」

ゆらり。

そいつは、まるで陽炎か何かのように、闇の中から現れた。

随分とくたびれた灰色のコートで身を包んでいる。

ボタンを全て留めて、フードも目深にかぶり……

表情はおろか、性別すらも伺い知ることはできなかつた。

ただ、背が妙に低いことは目に付いた。

今日日、小学生でももう少し立派な体格をしているだろう。

『坊や』は、もう一度ゆらりと揺れた。

走る。

速い。

おそらく、ヨシユアが本気で走ってもあれほどの速度は出ないだろう。

かなり鍛え上げられているのかもしれない。

ヨシユアは素早く銃を構えると、二発の弾丸を撃ちだした。

『坊や』が身を屈め、高い一発をかわす。

そして地を蹴って宙に舞い、低い二発目をかわした。

なんて跳躍力だ、ヨシユアの身長より高く飛び上がっている！

『坊や』はそのまま横手の壁を蹴り、上からヨシユアに迫った。

煌めく白刃。ナイフ。

身をひねって、ヨシユアはそれを避けた。

『坊や』は猫のように身軽に着地するなり、返す刃を繰り出す。

今度は横に飛び、これをかわす。

コートの裾が少しだけ裂けた。

畜生、なんてことをしやがる。

ヨシユアは『坊や』の右腕をつかみ取った。

ナイフを落としてしまえば、恐れることはない。

「ツ!？」

ヨシユアは慌てて手を離し、小さく呻いた。

奴の腕をつかんだ左手に、真紅の血がにじんでいる。

仕方なく彼は『坊や』に蹴りを入れて倒すと、後ろに飛んで間合いをとった。

左の手のひらに、大きな切り傷がある。

なんなんだ、あいつは。

ヨシユアはさつき、はつきりと見た。

今まではコートの下で見えなかったが……

奴のナイフは、右手に持たれているわけではない。

手首から生えているのだ。銀色に輝く刃が。

「……ガキにはすぎた玩具だな」

彼の口調からは、さつきまでの余裕は感じられなくなっていた。肩で息をするほどではないが、額には玉の汗が浮かんでいる。ゆらりと、また陽炎が立つ。

『坊や』が立ち上がった。

つづく。

02 来襲

ヨシユアは踵を返すと、一目散に走り出した。

どうやら狭い空間では不利らしい。

この通りを抜ければ、もう少し広い路地に出るはずだ。

心配なのは、自分のスラムに対する浅い知識だけだった。

この先が袋小路なんかになっていないことを、ヨシユアは必死に祈り、走った。もちろんそれを黙って見逃すほど『坊や』も甘くはない。

地を蹴り、軽快な靴音を響かせ、恐ろしいまでの速度でぐんぐん迫ってくる。

銃口だけを後ろに向け、ヨシユアは数回引き金を引いた。

靴音は消えない。

当たるはずもない。

狙って撃つても当たらないのだから。

しかし、彼の目の前にはもつと広い路地が姿を現し始めていた。

たんつ、と小さな音がして、それっきり靴音は聞こえなくなった。恐る恐る後ろの様子を伺う。

『坊や』は、空中に飛び上がり、さつきと同じように壁を蹴ろうとしている。ヨシユアは慌てて身を屈めた。

刃が頭の上を飛び越えていく。

『坊や』はそのままの勢いで広い路地に飛び出すと、獣のように四つん這いで着地した。銃弾が三発。

『坊や』が地面を転がり、その全てを避ける。

ようやくヨシユアも狭く苦しいビルの隙間から抜け出した。

スラムの一角。

自動車がすれ違える程度の広さはある。

『坊や』が、飛んだ。

四本の手足全てで地面を蹴って。

右腕のナイフは、ヨシユアの喉笛ただ一点を狙っている。

畜生、これじゃあ本当に獣じゃないか。

意味のない愚痴を自分自身にこぼしながら、ヨシユアは上半身をひねった。

白刃が頬を浅くかすめる。

赤い液体が軽く飛び散る。

ヨシユアの蹴りが『坊や』を地面に叩き付けた。

そして右手に力を込める。

無防備な『坊や』に向かって、容赦なく飛んでいく弾丸。

ヨシユアは我が目を疑った。

『坊や』の、ナイフが生えていない方の腕……

鋼鉄によって造られた左腕によって、弾丸は受け止められていた。

馬鹿な、腕に金属を埋め込んでいる……

いや、腕を金属で造っているだど？

これではまるで……

——強化人間……？ まさか、これが!?

考える暇すらも、『坊や』は与えてくれなかった。

倒れた状態から背筋の力だけで飛び上がり、右手を振るう。

ヨシユアは上体をそらした。

一突き目が鼻先をかすめる。

もう一度。

この位置でかわすのは無理だ。

そう判断して、後ろに飛びすぎる。

今度は刃先が左腕を少し抉った。

トリガーを引きながら、もう一步間合いを広げる。

弾丸は例によって左手に受け止められた。

距離は4メートル少々。

右にはビルの壁。

左は開けた道。

丁度二人の真ん中あたりに、ビルとビルの中の細い隙間がある。

この状況で、次はどう動く。

ヨシユアの脳が、考え得るシチュエーション全てを想定した演習を始めた。

奴の突きは、上か、下か、右か、左か。

飛んでくるか、地を這うように来るか。

それともどこかに飛び道具を隠し持っているのか。

そしてそれにどう対応すればいいのか。

避けるか。撃つか。蹴るか、殴るか。

それとも一目散に逃げ出すか。

『坊や』が走り、ヨシユアが身構える。

……と。

いきなり、予想だにできなかった因子が現れた。

右手の、ビルとビルの隙間から。

何気なく歩み出てくる一人の女。

まずい。

ヨシユアに向けられるはずだった刃が、その女に向いた。

永遠にも等しい一瞬。どうする。

撃てば女に当たる。

女をかばえば自分が刺される。

女を見捨てれば、使い捨ての盾になる。

ヨシユアが決断するよりも早く――

だんっ!!

『坊や』は、女に腕を掴まれ、投げ飛ばされていた。

「……あらあ?」

女の間が抜けた声が聞こえる。

地面に叩き付けられた『坊や』は、もはやぴくりとも動かない。

打ち所が悪かったのだろうか。

緊張の糸が切れ飛び、ヨシユアは肺にため込んでいた息を一気に吐き出した。深呼吸。気分を落ち着かせる。

「どうしたんだい、シャオシユエ。騒がしいねえ……おや」
男の声。

『坊や』を投げ飛ばした女の後ろから、もう一人の男が姿を現した。

その視線は、『坊や』に釘付けになっている。

しゅうしゅうという音。

不快な臭い。

ヨシユアも気づき、『坊や』に目を遣った。

そこにはあつたのはただ一つ。

ぼこぼこ泡を吹きながら、緑色の粘液へと変貌していく『坊や』の死骸だけだった。

*

「いやあ、到着するなり凄いいものに出くわしちゃったねえ、シャオシユエ」
「さすがは都会ねえ、いろんな人がいるわあ」

耐え難い臭いを放つ『坊や』のなれの果てから離れ、ヨシユアはなんとか呼吸を整え

た。

普段ACの操縦ばかりしているせいか、こういう肉体労働からはすっかり疎遠になっていた。

息が切れてしようがない。

「……なんで付いてくるんだ」

ヨシユアはぶつきらぼうに問いかけた。

『坊や』を投げ飛ばした女と、その夫らしき男に向かって、である。

改めてその風体をまじまじと見つめる。

変わった格好だ。

男の方は、黒い僧衣を纏っている。

首からは、銀色の十字架をぶら下げている。

野暮つたい黒縁の丸眼鏡。

糸のように細い垂れ目。

キリスト教の……それもカトリックの神父であることは間違いなさそうだ。

しかし、あの黒髪や黒い瞳はアジア人の証。

少なくともヨシユアは、アジア人の神父というのは初めて見た。

そして女の方。髪の色はやや茶色がかった黒。

瞳は漆黒だ。

なんの変哲もない、主婦その一といった感じのワンピースを身につけている。こちらでもアジア系のようなのである。

相当な美人だが、どこかで見えたことがあるように思うのは気のせいだろうか。

二人に共通していたことは、いつ何時も、決して微笑みを絶やさないということだった。

「ええと、あなたはレイヴンの方とお見受けしましたが」

「……確かに」

まあ、見れば判るだろう。

いくら治安の悪い世の中とはいえ、堅気の人間がそうそう襲われたりはしない。とりわけ、先のようなわけのわからない相手には。

「わたし、ハイフォンと申します。

恥ずかしながら。東のホウシアン・シティで神の教えを説いております。

そして、こっちは妻のシャオシュエ」

「初めまして。主婦一号でええす」

ヨシユアの額を、一筋の汗が流れた。

あんまりにもこの二人の笑顔が目について、逆に恐ろしいくらいだった。

別に作り笑いというわけではないだろうが。

「実はわたしたち、家出した娘を捜してはるばるアイザックまでやってきたのですよ。ですが何分地理に明るくないもので……

どう捜していいやら見当も付かない有様で。

どうでしょう、レイヴンさん。

「お礼はいたしますから、娘を捜すのを手伝っていただけませんか？」
なるほど。

まあ、人捜しは探偵か興信所の仕事であつて、レイヴンの仕事ではないような気もするが、大した問題ではない。

ようは金さえもらえれば何でもいいのである。

「報酬次第だ」

「おお！ ありがとうございます！」

お礼は、そちらの言い値で結構ですよ。

あなたに神の祝福がありますように」

ハイフォンとか言う神父は、ヨシユアの目の前で十字を切った。

これは勘弁して欲しいものだ。

しきりにこういうことをされると……父親を思い出す。

そんなヨシユアの心中を知ってか知らずか、ハイフォンは懐から一枚の写真を取り出した。

恭しく差し出し、こちらに見せる。

「これが、わたしたちの娘です」

写真を受け取り、視線を送る。

ヨシユアの動きが止まった。

そこには、見慣れたアジア人の女が、これでもかというくらいジト目で写って……いや、無理矢理梓の中に収められていた。

つづく。

03 望まぬ再会

「長老どもとは話をつけてきた」

相手がソファに着くなり、男は言い放った。

少し小柄の、人相が悪い男。

ネーベル・テヒニケン専務、ハティーク。

いや、専務という呼び名はもはや相応しくないかもしれない。

すぐに……あと三日もすれば、この会社の全権限は彼のものとなるのだから。

対しているのは、はげ上がり、でつぷりと太った中年の男だった。

こちらと同じく、ネーベル・テヒニケン専務、ファールコード。

手にした葉巻を口にくわえ、鼻から白煙を吹き出す。

肉に埋もれかかっている目が、ぎらりと獣の輝きを見せた。

「まさか、譲歩などしなかっただろうね」

「愚問だな。」

あの連中がどれほど欲の皮が突っ張っているか、知らないわけではあるまい」

「何を譲った」

「株を半分だ」

「半分だと！」

フアは葉巻を口から外すと、乱暴に灰皿に擦りつけた。

前に身をかがませ、より一層瞳のを光らせる。

しかしそれに怯える風でもなく、ハテューユは優しく諭すように語りかける。

「考えてもみろ。」

長老組は儲かると思っている間は絶対に株を手放さない。

確かに採決権の半分は連中が持つことになるが、逆に言うと君の資産の50%はいつ何時でも安定しているんだ」

——お前がどじを踏まない限りはな。

ハテューユは心の中で付け足した。

「独立の話は間違いないんだろうな」

中年が——自分も人のことを言えた義理ではないが——落ち着いたのを見て、ハテューユは胸を撫で下ろした。深く追求されなくてよかった。

まさか、こつちの条件を良くする代償にお前の資産を売った、などとは口が裂けても

言えない。

「それは、完璧だ。」

IT関連とネットワークホストを独立させ、新会社を設立する。

表向きはNTからの分裂だが、実質NTとは裏提携の形を取る。

権限は今までと全く変わらない」

「ゲーム系も欲しい」

「無茶を言うな、あれは家電の分野だ」

「お前は古いんだ。儂より若いくせにな。」

今や、ゲームのないネットワークはただの子供の玩具に過ぎん。

ふむ、逆説だな、これは」

ハティユーの頭の中で、いくつもの数字が浮かんでは消えた。

アミューズメントを手放したとしたら……

損失はあるにはあるが、兵器というジョーカーさえあれば問題はないだろう。

ハティユーはこう判断した。

今のうちに、恩を売っておくのも悪くはない。

「いいだろう。」

ただし、系列会社として独立させ、その株式を35%引き渡すことが条件だ」

「よかろう。」

……それでは同胞よ、儂はこれで失礼するよ。

会食の予定があるのでね」

フアは本当に重い体を、なんとかソファから持ち上げた。

のたのたと歩き、部屋を出ていく太つちよの背中に、ハテイーユは声を投げかけた。

「我が社を治めるのは我々二人……他にはあり得ない」

その声が、聞こえたのかどうか。

醜い中年は、立ち止まって振り返った。

醜い笑み。

ハテイーユは笑い返し、そして心の中で呟いた。

今に見ている、ブタ野郎め。

貴様のような屑に、何一つくれてやるものか。

全てを支配するのは……わたし一人だ。

*

「……………うそ……………」

住処代わりの倉庫の中で、この主であるリンファは硬直していた。

黒髪に黒い瞳を持つ、アジア人の女。

レイヴンの中でも、かなり名前は知られた方だ。

薄汚い倉庫の中には、3年来の相棒『ペンユウ』がその真紅の巨体を横たえている。ペンユウの上から一人の女性が顔を出した。

北欧系の整った顔立ち。

腰まである赤毛。

相棒のメカニック、エリイである。

今まさに、二人はペンユウの整備をしていたところだったのだ。

まず最初に倉庫に入ってきたのは、黒いコートの根暗男、ヨシユア。

これは別にいい。

幾度と無く共に死線をくぐり抜けて来たパートナー——リンファ自身はただの腐れ縁だと主張して止まないが——である。

しかし、その後に付いてきた二人には非常に問題があった。

神父ハイフォンと、その妻シャオシユエ。

「リンファちゃん！」

シャオシユエは全速力でリンファに駆け寄り、有無を言わず彼女を抱きしめる。

べきばきとなにやら鈍い音。

リンファの顔が痛みで歪んだ。

「か……母さん……痛い……」

「あらあ。やだわ、母さんまたやつちやった」

3年ぶりに見る母は、かつて家出した時と全く変わっていないかった。

何を考えているんだか分からない——おそらく何も考えていない——その笑顔。

一体何なのかは知らないが、鼻をくすぐる不思議な香り。

そして、ベア・ハッグで娘を窒息直前に追い込む癖まで。

だが、リンファには昔を懐かしむ暇はない。

ゆつくりと歩み寄ってくる神父。

畜生、せつかく自由になれたと思っただのに。

こんなところで終わりなのか……

「何しに来たんだよ、馬鹿親父」

エリイとヨシユアが顔を見合わせた。

口調が、明らかにいつものリンファと違う。

確かに普段からあまり言葉遣いが丁寧とは言えないが……

ここまで乱暴な台詞は初めて聞いた。

どうやら、これは。

二人そろって納得する。

相当、親父が苦手らしい。

「リンファ、どうして急に家出なんかしたんだい。

父さんも母さんも、心配していたんだよ?」

「3年経つてもまだ分かつてねえのかよ!?

あたしはもう嫌なんだッ!

何から何まであんたたちに指図されて生きるのはッ!」

「あらあ」

リンファの叫びを遮るように、横手から聞こえてくる声。

目を遣ると、シヤオシユエがエリイの頭を撫でて、その顔を不思議そうに覗き込んでいる。

「この子はだあれ?」

「ん〜とお、えりいはりんふあちゃんのいもうとでえ〜つす」

「あたしより年上だろーが……あんたは……」

全く、人がせつかく真面目な話をしているというのにこの二人は……

緊張の糸がほぐれる。

リンファは胸に溜めていた息を大きく吐き出した。

「まあ！　じゃあわたしはエリイちゃんのお母さんね！」

「わーい、おかーさーん！」

エリイがシャオシユエに抱きつく。

そして優しく髪を撫でる……事情を知らない人間が見たら、この二人が親子だと言つて疑う人はいないだろう。

「まあまあ。エリイちゃんは甘えんぼさんね。」

リンファちゃんもね、プライマリに入ったくらい頃はこうやっていつも甘えてたのよお。

いけないわあ、母さんってだめねえ。

良くないって分かっているのに、つつい甘やかしちゃうの。

あんまり可愛いからあ」

「……はあ」

そんな話をされても困る。

ヨシユアはただ、間抜けな相づちを打つことしかできなかつた。
なるほど。

彼の脳裏に、ある言葉が浮かんだ。

この親にしてこの子有りとは、こういうことを言うのか。

口に出したらリンファは怒るだろうが、よく似ている……傍若無人なあたりが。

「いい加減にしろッ！」

ついに堪忍袋の緒が切れた。

リンファの絶叫。

それは、半分悲鳴に近かった。

ヨシユアにはわかった。

せめぎ合っているのだ。

リンファの中で、相反する二つの自分が。

自分も何年か前に経験したことがある。

心で思っている通りに体が動かない。

それは比類無き苦痛だった。

しかし人は時間と共にそれを忘れてしまう。

おそらくリンファの両親も、エリイもはや覚えてはいないだろう。

「出て行けッ！」

ホウシアンに帰れよッ！

「ここはあたしの家だ！」

「そうはいかないよ。

もう売り払って来たからね。

家財道具全部だ。

……この倉庫の隣、廃ビルになっていたね。

今日から父さん達はそこに住むことにするよ」

リンファは言葉を失った。

家出する前の、15年間の付き合いは伊達ではない。

父親がどういう人間かは、一通り心得ているつもりだ。

そう、一度決めたらても動かない。

そういう男だ。

舌打ちが、自然と口をついて出た。

床に放り投げていたジャケットを拾い上げ、父親の横を通り抜ける。

やることは一つだ。

奴らが出ていかないのなら、自分が出ていく。

リンファはドアを蹴り開けると、外に飛び出した。

「待ちなさい、リン……」

後を追おうとするハイフォンの前を、長い腕が遮った。

黒いコート。

冷たい瞳。

低い声で、ヨシユアは吐き捨てるように言った。

「どうやら、餓鬼の扱いはあんたたちより俺の方が慣れてるらしいな」

つづく。

04 できそこない

ビルの最上階では、実直そうな男が額に汗を浮かべていた。

社長室の空調は、全力で冷たい息を吐き出している。

いつもより遥かに温度設定が低い。

社長がそうしたのだ。

自分がかいている汗が、冷や汗であるとも知らずに。

お陰で秘書は寒くてたまったものではない。

「ノーカー、噂が流れているぞ」

冷や汗をかいている実直そうな男、つまりネーベル・テヒニケン新社長モールは、先代から引き継いだ有能な秘書に愚痴をこぼした。

正確には愚痴でないのだが、秘書のノーカーにとってみれば受け答えは一つである。

「どのような噂です?」

「ハテイーユとファが動いている……長老組と裏協定を結んだらしい」

「荒唐無稽ですな」

社長の懸念を、秘書は一笑に伏した。

「噂はでたらめだと？」

「信じる要素がありません。」

仮にハテイーユ達と何らかの取引をしたとして、一体長老組にどんな利益が生じますか。

利益が無いのなら長老は動かない。ご存知でしょうか？

それに、あのハテイーユとファが手を組むとも考えにくい」

確かに、表面上はそうである。

長老組には何の利益もないし、犬猿の仲で有名な二人にいたっては並んでいる姿を想像することすらできない。

だが実際は違う。オブリッチが会社を支配していた頃は、長老組は何も干渉してこなかった。

彼に任せておけば、自分たちに利益も入り、会社も円滑に動くということを知っていたからだ。

しかしオブリッチが死に、モールが権力を握ると、途端に長老組には金が流れなくなつた。

モールの実直な性格が仇となったのだ。

そうなると、欲望の権化たる老人どもは暗躍し始める。

長老組が動けば、ハテイーユたちにとつても好都合だ。

たとえ会社を二分することになったとしても、自分の手に実権が握られることになるのだ。

そういう流れに気付いていないのは、他ならぬモール自身だけだった。

「大丈夫……なんだな？」

私はお前を信じるぞ」

「光栄ですな」

愚かな。モールは未だ、ノーカーの笑みが嘲笑であることにすら、気付いてはいなかった。

*

からんつ。

グラスの中で、氷が音を立てた。

中を覗き込む。

スコッチはもう一滴も残っていないかった。

「おかわりい」

不機嫌なところに、酔いが絡まっている。

リンファはグラスをカウンターに叩き付けると、自分はそこに突っ伏した。かなり酔っている。

珍しいこともあるものだ。

普段あれほど酒に強いリンファが、数杯のスコッチでこんなことになるなんて。

とても信じられない。

さては。

隣の席でちびちび酒をすすっていたヨシユアは、グラスにスコッチを注ぐ男に目を遣った。

何か細工をしたな、このいんちきマスターめ。

そもそも、紅茶店にどうしてこんな酒が用意してあるのか。

ただ、今は有難かった。

嫌なことがあったときくらい、気持ちよく酔わせてやりたいじゃないか。

「飲み過ぎだぜ」

「うるさいなあ……どつてことないって」

リンファは注がれた酒に口を付けた。
一口、こくと飲み干す。

喉が小さく動くのが、隣のヨシユアにははつきりと見えた。
綺麗だ。

がらにもなくヨシユアはそんな風を感じた。

もちろん口にはださない。

思春期の小娘に、そんな台詞口が裂けても言えない。

「なんで連れてきたのよ」

「あの二人か？」

リンファは大きくかぶりを振った。

随分酒が回っているな。

普通に頷くこともできていない。

「お前の、親だからだ」

「頼んでない！」

グラスを脇に置き、リンファはカウンターに顎を付けた。

すうつと、寂しそうに目を細める。

久しく見えていない表情だった。

「自由になりたかった……」

あたしはただ、自由になりたかったのよ。

でも分かってくれない。

親父も、母さんも、自分の生き方を押しつけるばかり……

もうまっぴらよ。

あたしは誰かの持ち物じゃない。

自分で考えて、自分で決められる。

それなのに、どうして……どうして今更」

自分の酒を一気に飲み干す。

ヨシユアは空のグラスを丁寧にカウンターに戻した。

隣に目を遣る。

眠たそうな瞳で、頬を赤らめ、リンファがこつちを見つめていた。

畜生。

ときどき自分に嫌気がさす。

こんな小娘に惹かれてしまっている自分が、たまらなく情けなかった。

「どんな親だつて、いないよりはましなんじゃないのか」

リンファは目を閉じた。

まどろんできたらしい。

最後の言葉。

呆けた瞳で見つめていた言葉。

火照った肌で受け取っていた言葉。

耳には聞こえていなかったかもしれない。

紙幣をテーブルにおいて、ヨシユアは立ち上がった。

二人分の酒代よりも少し多い。

「目が覚めたら、酔い覚ましに苦いのを飲ませてやってくれ」

紅茶店が本業のマスターは、無言で紙幣をポケットに納めた。

全く、徹底して無愛想なことだ。

レイヴンしか集まってこないのがそのせいだと、気付いているのだろうか。

気付いたところで、急に愛嬌を振りまき始めるような男でないのも確かだが。

からん。

ドアの鐘がなる。

ヨシユアは一人、紅茶店カラサキを後にした。

さて。

少し、野暮用がある。

もうあれから数時間……そろそろ来ていてもおかしくない。
記憶を頼りに歩く。

細い路地。地面の汚物。

眠ったままの浮浪者。

間違いない、この道だ。

そしてあの先にあるのは……

コートの中に手を入れる。

触れるもの、拳銃。

慎重に、ヨシユアは角から向こう側を覗いた。

しばらく前に『坊や』と死闘を繰り広げた通り。

ちようど奴を倒した辺りに、一台の車が止まっている。

ワゴンタイプである。

その後部トランクから、細いホースが伸びている。

二人の男が分担して機械を操作しているのが見える。

吸い取っているのだ。

あの、緑色のどろどろした液体を。

やはり、来ていたか。

死体の——いや、兵器の残骸を回収しに来ているのだ。

あの車には、見覚えがある。

古い型だし偽装もされているが、あの特徴的なシャーシーの形状は、間違いない。

ネーベル・テヒニケンという企業が数年前に発表した、『ゲヒルン』という名の汎用作業車だ。

あれ一台で部隊の「脳」……すなわち「ゲヒルン」を担えるとかで、かなり売れた車である。

大企業、か。

背筋に妙な悪寒を感じ、ヨシユアは身震いをした。

嫌な予感がする。

何かが、自分にとってとてつもなく巨大な何かが、すぐ側まで迫っている。そんな気がした。

*

「どとういうことだ!？」

その暗い部屋に足を踏み入れるなり、ノーカーは声を荒立てた。

恐ろしいくらいの剣幕で迫る先は、一人の金髪の女である。

金髪の女は面倒そうに椅子から腰を上げた。

澄んだ冷たい声が響く。

「どういうこと、つて？」

「C—8居住区のスラムで噂が流れている。

強化人間が現れた、とな。

痕跡は回収したが……なんのつもりだ。

今『ゲシユペンスト』を表に出せばどうなるか、わからないほど馬鹿ではあるまい！」

金髪の女、アシヤンタは妖艶な笑みを浮かべた。

こつり、こつりと靴音を響かせ、ノーカーに歩み寄る。

淡い香水の匂いが鼻をついた。

綺麗な色のマニキュア。

細く白く美しい指がノーカーの頬に触れる。

優しく肌を撫でていった。

「大丈夫……あれは『ゲシユペンスト』じゃないもの。

あいつはただの『ミゼラーベル』」

指が頬から離れた。

代わりに腕をノーカーの首にまわし、そつと引き寄せる。唇と唇が触れ合った。

アシャンタは彼の中に入り込むと、そこで激しくのたうった。無反応。つまらない。

そう感じるなり、アシャンタは舌を自分の口の中に戻して、唇を離した。

「あなたにプレゼントがあるの」

アシャンタはノーカーの手首をつかんだ。

手のひらに一枚のカードを握らせる。

それはIDカードのようだった。

ACなどを操縦するときに、搭乗者が正規の者であるかどうかを判別するために使うカードだ。

『イミタティオン』よ。大切に使つてね。

今夜、あなたにとってまたとない好機が訪れるから
「好機、だど？」

妖艶な笑みが、悪魔の微笑みに変わった。

背筋に走る冷たい感触。

アシャンタは最後にノーカーの首筋にキスをしてから、デスクの横に掛けてあった

コートを手を取った。

ついさつき彼が入ってきたドアの前に立つ。

重い音がして、ドアは勝手に開いた。

向こう側の光が入ってくる。

アシャンタのシルエツトが映し出された。

後光だ。これではまるで。

「楽しい……とっても楽しいパーティーよ」

ドアが再び閉まる。

暗黒を取り戻した部屋の中で、ノーカーはいつまでも、一人佇んでいた。

瞳の光は、決意か、それとも狂気か。

答えを知る者は、どこにもいない。

つづく。

05 娼婦アンジエリカ

不景気という言葉は、こことは無縁だ。

いつの世も、この一帯だけは衰退しない。

いや、むしろ世界が混乱すればするほど、より多くの人間がここに集まってくる。

N-5商業区、通称「ウェブモール」。

いくつもの商店が立ち並んでいる。

大型スーパーマーケット。ドラッグ・ストア。ガン・ショップ。喫茶店やバーもある。

しかしそれらは全て、仮の姿。

裏に回れば、どの店も同じ商売をしているのだ。

すなわち、娼館である。

ヨシユアはコートをはためかせ、ウェブモールを一人歩いていた。

裏通りに入り込み、ある化粧品店の勝手口を押し開ける。

中では派手な化粧をした女が作り笑いを浮かべて待ちかまえていた。

どう見ても30過ぎだが、本人は29歳だと主張してはばからない。

「ようこそ……」

あら、ヨシユア君じゃない。最近熱心ね」

「空いてるか？」

化粧の濃い娼婦はくすくすと笑い、ヨシユアを手招きした。

階段を登り、彼を案内していく。

「丁度良かったわね。」

アンジェリカ姐さんは今日休暇だったのよ」

「高級娼婦が有閑か。」

「こいつは、いよいよ世も末だな」

「あら。」

だめよ、そんな風に言っちゃ。

姐さんはヨシユア君一筋なんだから」

「娼婦はみんなそう言うんだ」

女は肩をすくめた。

彼女のような商売の女が、一番苦手とするのがこの種の男である。

堅くて、影がある色男。

助平な親父の方がまだましだ。

なぜなら……もし彼に惚れ込んでしまったら、もうこの商売が続けられなくなるから。

他の男に抱かれるのが、嫌になってしまふからだ。

やがて二人は奥まった一室の前にたどり着いた。

なんとということのない、質素なドア。

化粧の濃い女が軽くノックする。

「姐さん、ヨシユア君ですよ」

入って。

ドアの向こうからかすかな声が響いてきた。

あまり防音設備が整っていないのは、娼館としては多少問題があるかしれない。

ともかく、女はノブをひねるとすつと押し開けた。

あまり広くもない部屋。

あまり飾り気はないが、どこか上品な雰囲気漂う。

その奥の椅子に腰掛け、鏡台に向かって化粧を直している女。

「じゃ、あたしはこれで」

ここまで案内をしてくれた娼婦は、ヨシユアを部屋に入れるとドアを閉めた。

中にいるのは二人だけ。

ヨシユアは壁に背を預けた。

女が振り返る。

美しい、女。

亜麻色のソバージュ・ヘア。

不気味にも美しく輝く青い瞳。

口紅によつて鮮やかに浮かび上がった唇。

挑発的な肉体。

ウエブモールの……いや、アイザックシティ随一の高級娼婦、アンジェリカ。

持ち前の美貌とその「腕前」によつてここまで上り詰めた、娼婦達の憧れの存在である。

「会えて嬉しいわ、ヨシユア」

「悪いが、俺が買いたたいのはあんたじゃない」

ヨシユアが言い放つと、アンジェリカは少し顔をうつむかせた。

しかし、その悲しげな表情を信じてはいけない。

信じたが最後……それは、男が女郎蜘蛛の餌食となる時である。

「わかつてる。頼まれてたネタが入ってるわ」

「ネーベル・テヒニケン……か？」

「あら。知ってたの？」

やはり、そうか。

ヨシユアは壁から背を離し、ベッドに腰掛けた。

身を屈め、アンジェリカの話に耳を傾ける。

「ネーベル・テヒニケンの社長が交代したそうよ。

昨日、急に。

しかも、新社長になったのは一開発部長だった女」

確かに妙な話だ。

社長交代劇なんてのは、そうそう一朝一夕に起こるものではない。

いくつもの勢力があり、それが鎬を削って、血塗られた争いのあとにようやく訪れるものなのである。

しかも、元々要職になかったような者が就任するなど、前代未聞だ。

「その女の名前が……アシヤンタⅡナスティー」

「アシヤンタ？ アシヤ……」

ヨシユアは目を見開いた。

アシヤンタ……Ashanta Nustea……

まさ……か……

もぅいい。

十分だ。

ヨシユアは立ち上がった。

無言でドアへ向かい、ノブに手を掛ける。

その背に、暖かいものが触れた。

体にまわされた腕。

背中から自分を抱きしめる女。

ヨシユアの眉はびくりとも動かなかった。

腕に力がこもる。

アンジェリカの体は、とても柔らかかった。

「行かないで。」

だって、まだ一度も抱いてくれないじゃない」

ヨシユアは無言でその腕を引き剥がした。

ゆっくりと、優しく。

「どうして？」

あのチャイニーズ・ガールがそんなに大切？」

「……ああ。そうさ」

はつきりと、彼は答えた。

アンジェリカの頬を、冷たい雫が零れていく。

ふと気づき、ヨシユアはコートの内側に手を差し込んだ。

そういえば、まだ金を払っていなかった。

その手を、アンジェリカがつかみ取る。

彼は驚きを顔一杯に現しながら、彼女の涙を見つめた。

「いいわ。今日はおまけしてあげる」

涙を指でぬぐい去る。

妖艶な娼婦……だが今の彼女は、まるで無邪気な乙女のようなだった。

「その代わり、絶対にまた来てね」

*

ベッドに座り込み、アンジェリカは窓から外を眺めた。

忙しく人が通り過ぎていくウエブモールの表道。

颯爽と過ぎ去っていく黒いコートの男。

馬鹿ね。

その眩きは、彼に宛てられたものか。

それとも、自分自身への言葉か。

「ちよつと妬けちやうな。

あのチャイニーズ・ガール」

彼女とこんなにも何度も対面していながら、一度も彼女を抱こうとしなかった男は初めてだ。

でもいつか、彼はわたしを抱いてくれるだろうか。

多分、無理ね。

アンジェリカは苦笑した。

自分は年老いて醜くなる一方だけど、あの娘はこれからどんどん綺麗になるんだもの。

アンジェリカは溜め息を付いた。

そして、小さな携帯電話を手を取った。

「ハアイ、チャイニーズ・ガール」

*

「どういうことだ、ノーカーッ!!」

ネーベル・テヒニケン社長……いや、元社長のモールは、半狂乱でノーカーにつかみかかった。

社長室前の廊下。

モールが連れてきた武闘派の部下5名。

そしてノーカーの後ろに控える、アシヤンタの部下3名。

いずれもダークスーツに身を包み、黒いサングラスで視線を隠している。

「貴様ッ……私を裏切るつもりかッ!!」

「……裏切る……? これは異な事を」

ノーカーはモールの手首をつかみ取った。

見た目にそぐわない力で、その腕をねじ曲げる。

モールの部下が色めき立った。

苦痛のうめき声。

「我が社を支配するに相応しいのはお前ではない。

あの女だ。

お前のような能なしは、さっさと野垂れ死んでしまえばいい」

ダンツ!!

銃弾。

ノーカーの持つ拳銃から、狂気にまみれた銃弾が打ち出された。

狙い違わずモールの心臓を射抜く。

豪華な体が音もなく崩れ去った。

そして、それが引き金となつて、さらなる狂気が撒き散らされる。

ノーカーの部下が放ったサブマシンガンの弾丸は、拳銃を抜こうとしていたモール側の連中をことごとく撃ち抜いた。

あとに残つたのは、6つの死体と血、そして硝煙の臭いのみ。

「お前達は長老組を片づけろ。

わたしは専務のブタ共とけりを付ける」

部下達は無言で走り去った。

有能な暗殺者たち。

どうしてアシヤンタがこんな連中を子飼いにしていたのかは知らない。

ただ、いつか来るであろうこの日をアシヤンタが予測していたのは事実のようだった。

狙っていたのだ。虎視眈々と、自らが支配者となる時を。

さあ。

ノーカーはポケットから一枚のカードを取り出した。

楽しいパーティ、か。

そして走り出す。

ある方向、アシヤンタに教えられた方向に。

ぐちゃり。

奇妙な感覚が足の裏にある。

目を遣ると、そこには彼に踏みつぶされたモールの汚らしい死骸があった。

ノーカーは口の端を吊り上げ、笑った。

そして次の瞬間には、何事もなかったかのように走り始めていた。

つづく。

06 貪り合う獣たち

正直に言っつて、あの時のことはあまり覚えていない。

ただ、気が付いたら自分が血の海の中にいた。

赤く染まった土の上に、俺は座り込んでいた。

手のひら。

膝。

胴体。

そして顔。

順番に見て回った俺の体は、全て真紅のどろどろとした液体でまみれていた。

そして目の前の、あの男も。

父親。

俺の、父親。

かつてレイヴン「ワームウッド」として、世界を震撼させた男。

戦いを捨て、安らぎの中に生きることを選んだ男。
最低の男。

嫌いだった男。

憎んでいた男。

でも心の奥底で、憧れていた男。

父親。

奴は俺の目の前にいた。

うつぶせに倒れていた。

全身のどこにも血で汚れていない場所などなかったが、中でも腹は特に赤く染め上げられていた。

奴は腹を押さえていた。

嫌な臭いが鼻をついた。

これが内蔵の臭いだと知ったのは、ずっと後のことだ。

——あいつを。

奴は呻くように言った。

——あいつを助けてくれ。

俺にはわからなかった。

奴が言っていることの意味が。

あいつ、とは誰だ。

助ける、とはどういう意味だ。

最初は、全くわからなかった。

自分が父親を殺したんだと思って、錯乱していたのだ。

——解き放つてくれ。

ワームウツドの呪縛から。

あいつを、自由にしてやってくれ。

呪縛。

そうか。

これは呪いか。

俺に与えられたこの力は。

受け継がれ、巡り続ける呪われた力。

黙示録の第三のラツパ。

俺は聖書が嫌いだ。

ワームウツドがあるから。

人々を緩慢な苦しみの内に廻り殺す、最低の刑があるから。

——あいつを。

最後にそれだけ言うと、奴は朽ち果てた。

俺は涙を流しながら、辺りを彷徨った。

見つかった死体は二つだった。

父親と、母親。

それを埋葬して、十字架を立てた後で、俺は思った。

一つ足りない。

あいつがいない。

そうか。

あいつも呪われているんだ。

ワームウッドの呪縛を受け継いだのは、俺だけではない。

あいつも、同じ。

解き放つ。

あいつを、呪縛から解き放つ。

ワームウッドがワームウッドを滅ぼす。

それが、俺の使命。

いや、俺の生きる理由。

だから俺はレイヴンになった。

あいつを捜すため。

あいつを解き放つため。

あいつを、この手でくびり殺すため。

〔戦闘モード起動〕

機械の音が響いた。

ワームウッド。

俺の相棒にして、親父の相棒。

そしてそれは俺自身。

俺の中に流れる苦い水。

俺の体を形作るにがよもぎ。

それがワームウッド。

俺はこいつと一つ。

生きるときも死ぬときも。

頼むぜ、相棒。

因果な仕事だが勘弁してくれ。

これが最後の仕事だ。

こいつが俺の、最後の戦いだ。
モニターに巨大な塔が映った。
ネーベル・テヒニケン本社ビル。
そこが、戦いの舞台だ。

*

ヨシユアの指先が軽やかに踊った。
通信機を公共周波数に合わせる。

ビルの中にいる連中にも聞こえるはずだ。

「ネーベル・テヒニケン社員に告ぐ。

俺の名はワームウッド。

今からお前達の企業をぶっ潰す」

その声には何もこもってはいなかった。

憤怒も。殺意も。激情も。

感情と呼べるものは何一つ、その声には入っていないなかった。

それは機械の声に他ならなかった。

ヨシユアは望んだのだ。

自らが、殺戮のための機械となることを。

「死にたくない奴は今すぐ逃げろ」

ウンツ。

低い駆動音。

ヨシユアの駆る青い蜘蛛が動き始める。

共に戦いはじめて、もう5年になる。

リンファよりも、誰よりも、そしておそらく自分よりも信頼している相棒だ。

その相棒「ワームウッド」を、左右から2機のロボットが取り囲んだ。

MT「ハント」。

ネーベル・テヒニケン製の逆間接型2足MTである。

機関砲やミサイルなど、かなりの重武装が施されている。

『そのAC、今すぐ停止しろ！』

さもなくば……』

ガゴウンツ!!

言葉を遮ったのは二つの爆発音だった。

ワームウッドが放った数発の弾丸を食らい、ハント達が燃え上がる。

一瞬、ほんの一瞬の出来事だった。

おそらくパイロットはおろか、ビルで成り行きを見守っているであろう社員たちにも、状況は飲み込めていないだろう。

「逃げろと言ったはずだぜ」

ヨシユアは右手でレバーを引いた。

がぐんという小さな揺れがコックピットを襲う。

ありつたけの弾丸が、腕に内蔵されたガトリングガンに装填されたのだ。

操縦桿に手を掛ける。

ヨシユアは足でペダルを踏みつけた。

ワームウツドの背中に装備されたブースターが、赤い炎を吹き出す。

上昇しながら、ヨシユアは引き金を引いた。

狂気の弾丸。

星の数ほどの弾丸が、容赦なくビルの外装を削り取っていく。

叩き割られ、崩れ落ちる強化ガラスの窓。

悲鳴を上げて必死に逃げまどう人々。

これは威嚇だった。

余計な人間を、ここから追い払うための。

やがて一通り撃ち終わると、ワームウッドは隣のビルの屋上に着地した。肩に装備されたレーザーキャノンが、火を噴く時を今か今かと待ち望んでいた。

*

「くそつ、一体何だというんだ！」

悪態をつきながらもハティーユは懸命に走った。

隣にはフアの姿もある。

でつぷりと太り、額に汗をかきながらも必死に逃げる彼の様子は、ほとんどコメディに近いものがあつた。

もちろん、それを笑っていられるような状況ではないのだが。

昨日の深夜、突然に社長が交代した。

命じたのは長老部の馬鹿共である。

ハティーユたちとの協定も、今までの流れも何もかも無視した信じられない出来事だつた。

しかも新社長は、元は幹部でもなんでもないただの開発部長である。

これで納得できるはずがない。

今日は朝からその対応に追われていた。

そしてフアとの会談の最中に、最悪の事態が起こったのである。

レイヴンの襲撃。

それも、相手はマスターランカー『ワームウッド』だという。

彼はすぐさまありったけの武力をつぎ込むことを命じた。

いくら世界の十本の指に入るといふマスターランカーでも、圧倒的な数の差を以てすれば、制圧できないはずがない。

そう思っていたのだ。

しかしその考えが甘かったということは、すぐに明らかになった。

裏口はすぐそこだ。

外には車が待っている。

逃げなければ。

とにかく、ここから逃げなければ。

本社ビルを失ったとしても、会社がつぶれるわけではない。

幹部と生産ラインさえ残っていれば、損失こそあれ壊滅はありえないのだ。

ふつと、横で風が動いた。

フアがスピードを上げたのだ。

おいおい。

あの重い体で、どこをどうすればあんな速さが出るといふのだ。

火事場の馬鹿力とはこのことか。

一刻も早く逃げ出したいのだろう。

ハテイーユの数歩先で、ファが車に乗り込んだ。

その後に彼も続く……

……と。

ゴガシャアアツ!!

ハテイーユの目の前で、車が踏みつぶされた。

巨大な足。

畜生、レイヴンのACか!

ハテイーユは尻餅を付いた。

腰が抜けている。

立ち上がれない。

彼は上を見上げた。

メタリック・ブルーに輝く巨人……

なに、巨人だと?

目の前のACは人間型の2足ACだった。

情報を信じるなら、襲ってきたレイヴンは四足のACに乗っているはず。

ならば、こいつは別口か!?

次の瞬間、ハテイーユは目を見張った。

青いACの肩に付いているエンブレム。

それは、ネーベル・テヒニケンのエンブレムに他ならなかった。

『何処へ行くおつもりです?』

外部スピーカーから漏れてくる声。

すました敬語口調。

聞き覚えがある。

社長秘書のノーカード。

まさか、奴がこのACを操縦しているというのか。

奴が、ファを圧殺したというのか。

「ノーカード! 一体どういうことだ!?

我々には……我々には、協定があるんだぞ!」

スピーカーから笑い声が聞こえた。

嘲笑だった。

『協定……？』

知りませんな、そんなものは』

ヴィイン。

ACが駆動する。

腕がハテイーユの方に伸びた。

左腕の甲に付いた平べったいユニットが、彼を正面にとらえる。

レーザーブレードの発生装置。

『いい加減に気付くことだな。』

自分が詰みにはまったということに。

……老人共もモールも始末した。

あとはお前を消せば、終わりだ』

地面にはいつくばったままで、ハテイーユは恐怖におののいた。

声が出ない。

腕が動かない。

足が、頭が、肺すらもが動かない。

死の恐怖が全てを凍り付けにしていた。

やがて氷は全てを蝕むだろう。

彼の心臓とて、例外ではない。
ヴンツ。

ノーカーはただ、トリガーを軽く引くだけで良かった。
光の刃が男を貫く。

輝きが収まった頃には、何も残ってはいなかった。

蒸発したのだ。一撃で。

彼自身見たこともないAC……アシャンタが秘蔵していた、自社規格のAC『イミタ
テイオーン』のコックピットの中で、ノーカーは笑っていた。

全ては終わった。

邪魔者は全て排除した。

これで彼の理想が実現される。

オブリッチが目指していた理想の企業が、現実のものとなる。
見ているか。

聞いているか、オブリッチ。

これが俺からの慰めだ。

俺が歌う鎮魂歌だ。

いや。まだ残っていた。

あのレイヴン。

これ以上本社を壊されるのは、さすがに良くない。

このイミタティオンで、奴を止めなければ。

それで全てが終わる。

そして始まる。

あの恐ろしいほどに狡猾な女を頭にすえ、自分がそれを補助するのだ。

ノーカーは操縦桿に手を掛けた。

つづく。

07 一蹴

「AC急速接近中。登録情報なし」

レーザーキャノンを撃とうとしていたヨシユアは、コンピューターの報告に指を止めた。

なるほど。

自社製ACのお出ましか。

これまでに数十体のMTを破壊したが、まだ本命を残していたというわけか。だが、今は暇がない。

そうだな。

彼は腕時計に目を遣った。

長針が丁度「5」の所を指している。

ならば、この針が隣の目盛りにたどり着く前に、かたをつける。

レーダーによると、敵の位置は……真下。

モニターを下に向ける。

青く輝く2足ACだ。

見たこともない型。

自社規格を持っているとは、さすがは天下の大企業である。

そいつは……イミタテイオーンは、こちらを見上げているようだった。

ウンツ!!

ブースターを一気に吹かし、イミタテイオーンが上昇する。

ワームウッドのいるビルの屋上を通り抜け、はるか上空まで昇りきる。

奴の武装は、右腕のライフル、右肩のミサイルポッド、そして左肩には……全く見た

ことのない兵器。

一見すると大口径のキャノン砲のようにも見えるが、そのわりにはチェーン機構らし

きものも見受けられる。

イミタテイオーンが、その謎の兵器を構える。

空中で撃とうというのか。

だとすれば、あのキャノンらしきものはそうとう低反動の代物ということになる。

連続した発射音。

砲弾が雨霰と降り注ぐ。

これは……おそらく、弾丸自体が推進力を持つジェットチェーンキャノン。随分と変わったものを使っている。

さすがは自社規格、といったところか。だが。

ワームウッドが屋根の上を滑る。

当たらなければ、何の意味もない。

砲弾はただ、隣の不幸なビルを砕くだけに終わった。

*

何十発撃つても、ただの一発もかすらない。

何故だ。

ノーカーは焦っていた。

これほどの火力を以てして、なぜしとめられない。

武器をミサイルに切り替える。

十数発のミサイルが、箱の中から飛び出していく。

追尾性能も高い。

これが当たらないはずがない。

巻き起こる爆風。

ワームウツドはその中に完全に巻き込まれていた。

そうだ。

こうでなければいけない。

こうでなければ——

ノーカーは絶句した。

爆炎を切り裂き、飛び上がってくる一体の青い蜘蛛。

無傷の、敵のA.C。

真つ直ぐに、イミタティオーンの方へ迫ってくる。

ノーカーは身構えた。

しかし奴は撃とうとしない。

ただ上昇し、すれ違う。

『残念だったな』

——これは!?

ガクンッ。

イミタティオーンの機体が揺らいだ。

原因は、たった一発の弾丸。

ワームウツドのガトリングガンから飛び出した弾丸。

それが、イミタテイオンのブースターを貫いていた。

*

ズ……ン……

巨体を支える術を失ったイミタテイオンは、ただ無為に大地へと落下した。

衝撃。

アブソーバーだけでは、とても耐えきれなかった。

コックピット内部の隔壁がいたるところで破れ、避けた金属の破片が体を貫く。

ノーカーは血を吐いた。

不思議と恐怖はなかった。

最後に聞いたレイヴンの言葉。

その声。

聞いたことがある声だった。

同じだったのだ。

アシヤンタと。

もちろん、声の質や高さは全く異なる。

それでも、そこに潜む響きや色は、まぎれもなくアシヤンタのそれだった。

彼は理解した。

アシヤンタはあのレイヴンを待っていたのだ。

ネーベル・テヒニケンに乗っ取ることも何でもない。

アシヤンタの目的は、あのレイヴンと会うことだったのだ。

まんまと、利用された。

このわたしが。

これでネーベル・テヒニケンは終わりだ。

そして終わらせたのはわたしだ。

これこそ、お笑い種だな。

我が社のため、ネーベル・テヒニケンのためと、ひたすら苦勞を積み重ねてきたというのに。

オブリツチ。

薄れゆく痛みと意識の中、ノーカーは親友に向かって呟いた。

やはりお前は、死ぬのが早すぎたよ——

*

ワームウッドはそのままネーベル・テヒニケン本社ビルの屋上に着地した。レーザーキャノンを構える。

真下に向かって。

閃光が走り、爆発が起こった。

床……つまりはビルの天井に、大穴が開く。

ヨシユアは二・三のスイッチを操作した。

ACのコアに付けられたハッチが開く。

ワイヤーづたいにワームウッドから降りると、彼は自分が開けた穴へ向かった。

下は広い部屋になっているようだ。

手持ちのワイヤーユニットの端を手近な構造材のなれの果てに縛り付け、穴に飛び込む。

細さのわりに人間一人くらいなら平気で支えてしまうワイヤー。

侵入するには欠かせない道具である。

すん。

靴音を響かせ、最上階の床に着地する。

ここはオペレーションルームか。

人っ子一人いない。

恐れをなして逃げ出したか。

そのほうが都合がいい。

部屋の端にエレベーターを見つけ、スイッチを押す。

動力はまだ生きている。

扉が開く。

無人の室内に入り込むと、ヨシユアは一つ下の階を指定した。

拳銃を構える。

おそらくドアが開いた瞬間に砲撃がくるはずだ。

小さな音がして、ドアが開いていく。

間髪入れず引き金を引く。

数発の銃声。

空しく虚空を裂く銃弾。

誰もいない。

その代わり、廊下には無数の死体が転がっていた。

いずれもダークスーツに身を包み、サブマシンガンや拳銃で武装している。どういふことだ。

俺以外の誰かが侵入したとでもいうのか。

まあいい。

こつちの仕事が楽になるというものだ。

ヨシユアは走った。

内部の構造は大体調べてある。

最初の角を右へ。

次の角を左へ。

T字路を左へ曲がると、一枚の豪勢なドアが目に入った。

ドアの上にかかったプレート。

『社長室』。

ヨシユアはドアを蹴り開け、中に飛び込んだ。

*

「あらあ。母さんったらまたやっちゃったわあ」

今日何度目かの台詞を、シャオシユエは口にした。

その足下には、投げ飛ばされ、首の骨をへし折られたダークスーツの男。手にはしつかりとサブマシンガンを持っている。

そのとなりで、リンファは小さく息を付いた。

一通り邪魔者は片づけたようである。

ネーベル・テヒニケン本社ビルの内部は、これでほぼ制圧した。

それにたつた今、ヨシユアも社長室に入っていったところである。

もう、彼女にできることは残されていない。

「これで、わたしたちにできることは終わりですね」

父親が言う。

確かにそうだ。

ハイフォンの言うとおり、これ以上ヨシユアを助けることはできない。

ここから先は、彼の自分自身との戦いなのだから。

ハイフォンにも、シャオシユエにも助けることはできない。

しかしリンファは――

うつむいたままのリンファに気付いて、シャオシユエは夫の肩を叩いた。

につこりと微笑んで優しく呟く。

「お父さん、帰りましょ。

リンファちゃんにはまだやることがあるもの」

「え？　しかし……」

リンファは顔をあげ、母親を見つめた。

それでいいのだろうか。

自分に何かできるのだろうか。

ヨシユアはもう、遠いところへ行ってしまったのではないのだろうか。

母親は、どんなときでも母親だった。

リンファはまだ子供だ。

知らないことが山ほどある。

母親だって、それは同じ。

知らないことはいくらでもある。

でも、一つだけできることがある。

それは、考えることだ。

「大丈夫よ、リンファちゃん」

母の言葉は優しかった。

「男の子は、みんな寂しがり屋さんなんだから」

つづく。

08 ナターシャ

かちやり。

拳銃が真つ直ぐあいつを捉える。

獣の瞳。

ヨシユアの青い瞳がきらきらと輝いた。

ついにここまで来た。

あいつが、目の前にいる。

目の前の椅子に座り、背を向けているあいつがいる。

終わらせる時が来た。

5年前の呪縛を。

終わらせる時が、来た。

「会いたかったわ、ヨシユア」

あいつが立ち上がる。

流れるような金髪。

あいつが振り向く。

獣のような青い瞳。

全て、ヨシユアと同じだった。

これこそ、呪いの証。

ワームウッドの呪縛を受け継ぐものの証だった。

「姉さんは、ずうつとあなたを待っていたのよ」

姉。

ヨシユアの姉。

5年前に消えた、ずっと探し続けてきた、姉。

憎むべき姉。

父親と母親を殺した、姉。

ナターシャ・オースティン。

簡単なアナグラムだ。Ashanta Nustea。

並べ替えれば、Natasha Austen。

笑い話にもならない。

「一つだけ訊いておいてやる」

ヨシユアの低い声が響いた。

微動だにせず、口だけを動かす。

機械のような単調な声。

目の前にいるナターシャを、殺すためだけに存在する機械の言葉だった。

「何故殺した」

訊く必要など、どこにもなかった。

理由はわかりきっているのだから。

それでも訊かずにはいられなかった。

甘いかもしれない。

自分がその理由に納得して、姉を許すことを望んでいるのかもしれない。

あり得ないとわかっていても。

「だって」

それは一人の少女の声だった。

「飽きちゃったんだもの」

ざわりつ、とヨシユアの首筋が騒いだ。

奔る。

咆吼をあげながら。

黒い獣が奔った。

獣が牙をむく。

弾丸が空を裂いた。

ナターシャが身をひねる。

寸前で銃弾をかわし、逆にコートの中から銃を取り出して放った。

ヨシユアの頬が軽く裂ける。

かまわずヨシユアは拳を繰り返した。

狙いはナターシャの腹。

それも、コートに絡め取られ無駄に終わる。

しかし狙いは別にある。

ヨシユアの足払いが、彼女の脛を弾いた。

カーペットの上に転がるナターシャ。

彼女の銃を持つ右手を、左手で床に押さえつける。

拳銃を姉の顔に突きつけた。

容赦などするいわれはない。

そのまま引き金を――

ずぶりっ。

音と痛みが同時に襲ってきた。

ヨシユアの顔が歪む。

慌てて地を蹴ると、姉の上から飛び退いた。

切り裂かれたコート。

脇腹に血が滲む。

立ち上がったナターシャの左手には、べつとりと血の付いたナイフが握られていた。

ナターシャが、ナイフの刀身を舐める。

恐ろしさを通り越して、艶めかしくも感じられた。

いや。

ヨシユアが恐れているのはそんなものではない。

呪縛に囚われた姉を、一瞬でも美しいと感じた自分自身だ。

「お、お、お」

彼女の舌はヨシユアの血でまみれていた。

お前は天使だ。

ヨシユアは思った。

三番目のラッパを吹いた、残酷な天使だ。

「もっと……欲しいわ」

ナターシャが奔る。

近づかせるのは不利だ。

ヨシユアは姉の眉間に狙いを付けた。

ぐらりっ。

視界がかすむ。

意識が薄れる。

畜生、血を流しすぎたか？

思った頃にはナイフが目前に迫っていた。

慌てて身をひねる。

左腕をかすめていくナイフ。

そして銃声。

ナターシャの銃弾が、ヨシユアの足を撃ち抜いた。

飛び散る血と肉。

硝煙の臭い。

再び襲ってくるナイフ。

痛む左手でナイフを振るう姉の腕をつかみ取った。

見えた。

ナイフの刀身だ。

細かい溝が、無数に彫り込まれている。

そういうことか。

目が眩んだのは傷のせいではない。

これは暗殺者が好んで使うナイフ。

溝は、刃に塗った毒を長く保つたためのものである。

ダンッ！

一際大きな銃声。

弾丸がナターシヤの左肩を貫いた。

それと同時にヨシユアの左腕も撃ち抜かれた。

二人が同時に放った銃弾は、互いの腕を使い物にならなくしてしまった。

ナイフが落ちる。

握ることもできないに違いない。

ナターシヤの腹に蹴りを叩き込み、ヨシユアは三度間合いを取った。

体勢を立て直してから、ふらつく姉の右手に回し蹴りを放つ。

銃が床に落ちた。

ヨシユアが痛む左手で彼女の首をつかんだ。

そのまま押し倒し、顔の位置に銃を突きつける。
これで終わりだ。

ヨシユアは呼吸を整え、引き金に指をかけた。

……と。

それは、唐突に聞こえた。

——みあげてごらん——

歌。

視界が霞んだ。

——すてきなよぞら——

この歌は。聞き覚えのある、この歌は。

——ひとみをとじて　こんやはおやすみ——

歌っているのだ。

姉が。

今も。

昔も。

そして……あの時も。

——きつとどこかで　またあえる——

頭が……痛い……これ……は……

*

立ち上がった。

父親が。

死んだはずの父親が。

たった今、目を閉じて冷たい肉の塊になってしまったはずの父親が。
ゆっくりと立ち上がり、虚ろな瞳で俺を捉えた。

青い瞳。

俺と同じ色の瞳。

やめろ。

そんな目で見ないでくれ！

「お前が殺したんだ」

嘘だ……違う！

俺は殺してない、俺は悪くない！

なんでそんなことを言うんだ！

あんたが頼んだんだ。

姉さんを殺せって！

解き放つてくれって！

だから……だから俺はずつと……！！

ゆらり。

立ち上がった。

母親が。

父親の隣で転がっていた母親が。

母親だったものが。

そして虚ろな瞳で俺を捉えた。

黒い瞳。

俺と違う色の瞳。

「あなたが殺したの」

父親と母親は少しずつ俺に近づいてきた。

怪我をした足を引きずって。

血にまみれた腕を伸ばして。

ぼとり。

腕が落ちた。

父親の腕が、腐つてもげ落ちた。

蛆が湧いていた。

母親の目から無数の蛆虫が飛び出した。

俺は叫んだ。

俺は恐怖した。

迫ってくる。

父親が。母親が。

俺を恨んで。俺を憎んで。

俺を殺そうとして。

体を蛆に喰われながら、肉を地面に撒き散らしながら、全身から血を吹き出しながら、とれかかった眼球を顔に張り付けながら！

「何故殺したんだ」

「お父さんとお母さんに飽きちやったから？」

「殺すのが楽しいか？」

「人の血はおいしい？」

「ヨシユア」

「ねえ、ヨシユア」

俺は涙を流しながら逃げまどった。

声がする。

父さんと母さんの声がする。

俺を蝕む声がする。

俺はもう一度叫んだ。

そして走った。

叫びが意味のある言葉になったのはその後だった。

「俺はやってない……」

俺は悪くない……

全部全部全部全部姉さんがやったんだ姉さんが悪いんだ姉さんが殺したんだあ

あああああああああああッ!!」

「あら」

どくんっ。

俺の心臓が鳴った。

肩に手が置かれる。

腐りかけた手。

蛆がそこから俺の肩に移ってきた。

俺は半狂乱になりながらそれを払い落とした。

後ろに人がいた。

腐って今にも崩れ落ちそうになった姉さんだった。

「本当は、わたしもあの時死んでいたのよ？」

死体。

父親の死体。

母親の死体。

目に入った。

その隣に転がるもう一つの死体。

姉の死体ナターシャの死体姉さんの死体俺が殺した死体俺が殺したのか姉さんを殺したのか父さんも母さんもみんなみんな俺が殺したのかそうなのか誰か誰か誰か答えろオオオオオオオオオオオオオツツ!!

——解き放つてくれ。

*

ナターシャが拳銃を拾う。

ようやくヨシユアは気付いた。

ナターシャが銃を上に向ける。

ヨシユアが銃を下に向ける。

二人が同時に引き金を引く。

ダンツ!!

つづく。

09 流星の墜ちるとき

一つの弾丸は脇腹を貫いた。

もう一つの弾丸は心臓を貫いた。

立ち上がる。

腐っていない、生きた人間が。

黒いコート。

金色の髪。

青い瞳。

ワームウッド。

それは、弟だった。

ヨシユアは荒い息を吐きながら、足下に転がる死体に目を遣った。

ナターシャ。最後の歌……

子供の頃、彼女が歌って聴かせてくれた子守歌。

理屈はどうだか知らない。

だが、あれはナターシャが見せた幻影だ。

大きく息を吸い込み、吐く。

終わった。

何もかも。

5年間——いや、人間が生まれてからずっと存在し続けてきた呪縛が。

ワームウツドの呪縛が、今ようやく解き放たれたのだ。

——父さん。

ヨシユアは今は亡き父を思い起こした。

——意味はあるのか。

一歩、足を踏み出す。

ドアへ向かって。

撃たれた左腕を押さえて。

一歩ずつ、歩く。

——本当に、そこに意味はあるのか。

目が霞んだ。

世界が揺らぐ。

暗転する。

光と闇が入れ替わる。

ふつと背筋に冷たいものが走るようだった。

俺は倒れているのか。

ヨシユアがそれを理解するには多少の時間がかかった。

俺は、死ぬのか。

倒れながらヨシユアは考えた。

それも悪くない。

もう何もかも、終わったのだから。

自分が生きている理由も無くなったのだから。

やっと楽になれる。

死ねばきつと、苦しい事なんて無くなる。

辛い事なんてなくなる。

ああ、だんだん意識が遠のいてきた。

目の前が白く明るくなってきた。

そうか。

これでようやく——

とさつ。

柔らかくて暖かいものが体に触れた。

死神？

いや、何か変だ。

ヨシユアは残った力を込めて、瞼を開いた。

自分は倒れてはいなかった。

抱き留められていたのだ。

一人の、女に。

「ばか。無茶しすぎよ」

リンファ。

どうして、こんな所に。

それは彼にはわからなかった。

娼婦が恋敵に依頼した、なんてことは頭の隅にも浮かばなかったのだ。

ただ、一つだけわかることがあった。

新しい理由が、ここにある。

「……余計な……ことを……」

それが、今の彼にできる最大の強がりだった。
リンファが肩に腕をまわす。

彼女に支えられながら、ヨシユアはゆっくりと足を踏み出した。
まだ、歩ける。

二人は寄り添い、部屋の出口へと歩いていった。

一歩一歩、確かめるように。

きつと、確かめているのは床や足の具合ではないだろう。

ドアまでたどり着いたとき、ヨシユアはふと足を止めた。

肩越しに振り返る。

微動だにしない死体。

ヨシユアはそれに向かって微笑んだ。

そして告げた。

心の中で、最後の別れの言葉を。

——おやすみ、姉さん。

THE
END.

暗い部屋にいくつもの光が点る。

そこにいたのは二人だけだった。

一人は女で、もう一人は男。

女は椅子に座って、目の前のモニターを眺めていた。

モニターには、人の脳を模したコンピューター・グラフィックが描き出されている。

「社長が死んだよ」

その背後に立つ男が、口を開いた。

モニターの放つ光に照らし出されて、彼の顔が映し出された。

細かなしわが目立つ。

髪も既に白いものが混ざり始めている。

そろそろ、中年や壮年を通り越して老年に入ろうかという男だ。

「損害は？」

女が尋ねる。

高く澄んだ、そして無邪気な声。

子供の声のようにも聞こえた。

「ミゼラーベル一匹と、イミタティオーン一機。

全く問題ない」

びっ。

女の前のモニターが、別の画像を映し出した。

それは無数の正方形が並ぶだけの、実にシンブルな画像だった。

ほとんどの正方形は青く光っているが、ごく一部だけは赤い輝きを放っている。

そして、画面の端に居座る「98%」の文字。

「こつちもそろそろ終わる。」

プルの調整さえ済めばいつだって、だ」

女の声は狭い部屋の中に響き渡った。

彼女の髪が揺れる。

鮮やかな漆黒の髪が。

そして女は笑った。

声はあげない。

唇を吊り上げて、まるで悪魔のように。

やがて世界を襲う災厄。

その種が芽を出し始めていることを、人々はまだ——
知らない。

T o b e c o n t i n u e d .

最終話 緋色の瞳のラグ・ドール

01 動き出した狂気

その日は朝から嫌な予感がしていた。

虫の知らせとでも言うのだろうか。

自分の身に何か危険なことが降りかかりそうな気がしてならなかった。

それも、ちよつとやそつとの危険ではない。

命に関わる……いや、下手をすればもつと大きな物にも影響を及ぼしかねない危険。

背中を絶えず駆け回っているむずがゆい感触に耐えきれず、ロレンスはガレージへと向かった。

彼が世界最強の座に着いてから、一体どれほどの年月が経っただろうか。

彼の前に敗北の二文字はなかった。

圧倒的な力で勝ち残り、生き残り、幾つもの命を深淵へと叩き落としてきた。

それはあまりにも重い荷物だ。

最強という名。

ひとたびそれが地に落ちれば、大地は震撼し、数多の人間が押しつぶされる。ガレージの中には一体の鬼が寝そべっていた。

漆黒の肌の鬼。

彼の相棒として永年活躍しつづけてきたA.C、『アビス』である。

光の刃と光の槍を以て、幾重にも群がる敵を片っ端から屠ってきた鬼。

彼はこの相棒を信頼していながら、また逆に恐れてもいた。

いや、恐れの前にいるのは自分自身か。

押さえきれなくなる破壊の欲求。

それを増幅させ、解き放つのがこの相棒だ。

ロレンスはアビスの側に立った。

黒い鬼は微動だにせずに転がっている。

お前は感じないか。

ロレンスは相棒に問いかけた。

この空気はなんだ。

この重みはなんだ。

まるで風を待つ帆船のようだ。

風が吹かなければ、乾いて死ぬ。

たとえ吹いたとしてもそれは嵐かもしれない。

その時、彼は背後に何かを感じた。

物音一つない。

しかし、彼にはわかる。

微かな息づかい。

鼻をくすぐる匂い。

普通の人間なら見逃してしまいそうな僅かな情報も、彼にとっては大声で呼ばれているに等しいものだった。

振り返る。

ガレージの壁に背中を預けて、佇んでいる女。

漆黒の髪。

漆黒の瞳。

知っている顔だ。

少し前に出会ったことがある。

一体あいつが何の用だというのだ。

彼には、全く思い当たる節がなかった。

「ハイ、ミスター・ロレンス」

女は高く透き通った声を投げかけた。

子供のようでも大人のようでもある奇妙な響き。

前に会ったときと同じだった。

ある者はそれを鬱陶しいと感じるだろうし、またある者はそれを美しいと感じるだろう。

「お手合わせ願えるかしら？」

ぞくり。

ロレンスの背筋を悪寒が駆け抜けた。

それがすべて災厄の始まりだった。

*

三人は今、かつてない窮地に陥っていた。

汚れたパイプ椅子二つと、椅子代わりの木箱が一つ。

それぞれに腰掛けているのは二人の女と一人の男。

黒髪に黒い瞳のアジア系の女。

三つ編みにした赤毛と小さな丸眼鏡の北欧系の女。

そして、カトリックの僧服に身を包んだ糸目の男。

珍しくチェックのクロスが敷かれた木のテーブルには、三人分のスープの皿が並べられていた。

不思議な香りが鼻をくすぐる。

そう、不思議な香り。

コンソメともポターージュともトマトとも鶏ガラとも魚醤とも味噌とも醤油ともつかない、目の前のどろどろした謎の液体が放つ香りである。

漆黒で皿の底が見通せないそのスープは、決して三つ星レストランの料理には見えなかった。

ごくろり。

黒髪の女、リンファの喉がなる。

スープが旨そうだったから、ではない。

額を流れる一筋の汗。

それは冷や汗か脂汗か。

どっちにしろ、自分を待ちかまえる過酷な運命を前にして、彼女は神にでも祈りたい

気分だった。

赤毛の女と僧服の男——エリイとハイフォンも、大体似たような様子だった。自分のスプーンを固く握りしめ、黒光りするゲル状の物体を見守っている。果たして、これは口に入れていいものか。

一流大学を首席で卒業したエリイにも、その答えは全く見えなかった。

「さあ、めしあがれえ♪」

母親の言葉。

リンファの母シヤオシユエは、娘のエプロンに身を包み、お玉杓子を手にして佇んでいた。

ずっと顔に張り付いたままの笑みからは、何一つ感情らしきものを読みとることはできなかった。

「……なんで母さんに料理させたんだよっ」

父の耳元に顔を近づけ、リンファが囁く。

三年前に家出するまでは、15年もの間一緒に暮らしてきた仲である。

母親の料理の腕前が如何ほどのものか、知らない道理はなかった。

それは父親にとっても同じ事。

いや……もう20年以上も連れ添っているハイフォンの方が、彼女のことには詳しい

はずである。

「仕方ないじゃないですか……シャオがやりたいって言うんだから……」

問いが問いなら、答えも答えだ。

決してシャオシユエの耳には届かないくらいの小声でぼそぼそと答える。

そこには絶望と諦めと、そして微かな恐怖が混ざっていた。

「ほんとは？」

「……朝起きたらもう終わってました」

「やっぱり……」

ぺきつ。

妙な音が響く。

シャオシユエの方からである。

リンファとハイフォンが、目だけを動かして様子をうかがう。

お玉杓子にはいくつもの亀裂が走っていた。

なんて握力だ。さすがは太極拳の達人。

そしてそれよりも恐ろしかったのは、微笑みを張り付けたまま歩み寄ってくる母の遅

さだった。

「め・し・あ・が・れ〜♪」

まずい。

これは本当にまずい。

今、母が手加減無しのパ・ハググなど繰りだそうものなら……

肋骨が折れるか肺が潰れるか。

いずれにせよ、ろくな結果は待っていない。

しかしこれを食べるといふのは……

「親父……責任もって食べろよ」

「わ、わたしがですか!？」

つつい声のトーンが大きくなる。

背筋に走る悪寒。

彼のすぐ後ろには、妻の平べったい笑顔が迫っていた。

ごくり。

娘がそうしたのと同じように唾を飲み込む。

仕方がない。

覚悟を決めるより他……ない。

「リンファ、父さんのことを忘れないでくださいね……」

別れの挨拶を済ませ、スプーンを手に取る。

ペンダントにした十字架を握りしめ、神への祈りを捧げる。

おお、主よ。

願わくば、この哀れな子羊を救いたまえ。

祈りは終わった。

神や天使が光臨した形跡はない。

やっぱりか。

そうそう都合良く助けてはくれないものだ。

手の震えを抑えながら、ハイフォンはスープをすくい取った。

それは確かに漆黒の液体だったはずなのだが、光を当てる角度を変えると不思議な金

属光沢を放ち始める。

見た目には、水銀か融けた鉛のようである。

それを口元まで持って行ってから、ハイフォンはふと顔を上げた。

娘の愛機『ペンユウ』が、その赤い巨体を横たえている。

お前はいいね。食事しなくて済むんだから。

馬鹿げた妄想にひとしきり耽ってから、ハイフォンはついにスプーンを口の中に入れた。

びたりと、彼の動きがとまる。

見つめるリンファ。

見つめるエリイ。

なぜか見つめるシャオシユエ。

ひくっ。

ヘイフォンのしゃっくりが木霊した。

どさっ。

彼の体は、支えを失って床に倒れ込んだ。

それっきり、びくりとも動かない。

一体、どんな味だったんだ。

父親の無惨な亡骸を見つめつつ、リンファは汗を拭った。

昔エリイの料理を食べて記憶を失った男がいたが、これはそれ以上だ。

食べた瞬間に即死するなど。

いや、それはすでに料理ではなく毒物である。

「まあ！ お父さんってばあんまり美味しくて感動しちゃったのね♪」

「それ絶対違う」

リンファの言葉など、もちろんシャオシユエの耳には全く届いていなかった。

つづく。

02 襲撃

ヴウ……ン……

低いうなり声を上げて電気自動車が停止する。

小型のトラック。

コンテナには大きくツバメのロゴマークが描かれている。

シュヴァルベ運輸といえば、宅配便の業界では指折りの企業である。

「どんな場所へでも荷物を届ける」というのがモットーで、金さえ払えば戦地へ補給物資を運搬することも厭わない。

それ専用に関人かのレイヴンと専属契約しているという噂もある。

今回の運搬先はスラムの一角である。

かの有名な女レイヴンが住んでいるという倉庫だ。

トラックから制服姿の男が降りてきた。

例によってツバメのロゴが描かれた帽子を深々とかぶっている。

コンテナの扉を開き、中から小さな段ボール箱を一つ取り出した。そのまま男は近くの倉庫へ向かった。

入り口は二つ。

大きなシャッターと、小さなドアである。

迷わず男はドアをノックした。軽い音が湿ったスラムに響き渡る。

帽子に隠れた彼の口が、にいつと吊り上がった。

*

こんつ。こんつ。

いきなり聞こえてきたノックの音に、リンファは顔を上げた。

珍しいこともあるものだ。

この倉庫にやってくる客には、ノックをするような礼儀正しい奴は滅多にいない。みんなしてドアを蹴り開けるのである。

立て付けが悪くてそうしないと開かないのだから文句は言えないが。

「お客さん……ですか？」

ヘイフォンがふらふらと起きあがった。

顔が青白い。

まだ後遺症が残っているようである。

しきりに感想を求めるシャオシユエに、彼がしてやれたのは目を伏せて「美味しかった」と言つてやることだけだった。

もちろん、精一杯声の震えを抑えて。

「シユヴァルベ運輸です。

お届け物にあがりましたあ」

「あ、は〜い」

跳ねるように席を立ち、エリイはドアへ向かった。

あいつめ。

上手く逃げやがったな。

宅配便を利用して、なんとかシャオシユエの料理のことをうやむやに済ませるつもりなのだろう。

そうなつてくれれば、リンファにとつても有難いことだが。

エリイはドアノブをひねると、横の壁を蹴りつけた。

衝撃でドアが勢いよく開く。

外から開けるのは簡単なのだが、内側からだといろいろテクニクが必要なのであ

る。

外に立っていた男が、多少面くらいなながらも微笑んだ。

見事な営業スマイルだ。

ああいうサービス業では、微笑み方のマニュアルまであるらしい。

気苦労の絶えない商売である。

ともかく、男はマニュアル通りに小さな段ボール箱をエリイに手渡した。

一体何が入っているのだろうか。

手のひらに載せるにはちよつと大きすぎる、というくらいの箱である。

意外と軽い。

いきなりエリイは箱を振り回した。

音はしない。

しつかりと梱包されているせいだろうか……それにしても乱暴な扱いである。

「受取証にサインをお願いします」

「はい」

男はそういうと、懐に手を入れた。

ごそごそと何かを捜す。おそらくペンか何かだろう。

エリイは荷物を近くのスクラップの上に置いて、再び男に視線を戻——

「!?」

ダンッ!!

銃声が倉庫の中に響き渡る!

男が取り出した拳銃は、エリイの足を狙って弾丸を吐き出した。
血が飛び散る。

苦悶の叫びをあげてエリイは倒れ込んだ。
脂汗を浮かべながら太股を押さえている。

「なッ……!」

「おおっと、動くなよ。」

動くところの綺麗な顔が吹き飛ばぜ」

ついさっきまでの見事な笑顔はどこへ行ってしまったのか。

男の顔は見る影もなく汚れ果てていた。

欲望と慢心に取り憑かれたものの醜い素顔だ。

しかし。

リンファは奥歯を噛んだ。

いくら心の中で罵ろうと、エリイを助けられなければどうしようもない。

「タオ＝リンファ。」

俺が興味あるのはあんたの命だけだ。大人しく殺されりや相棒には……」

リンファの眉がぴくりと動いた。なるほど。

転んでもタダでは起きない。

さすがは相棒である。

リンファは必死に脳味噌を動かした。

愛用の拳銃はどこにしまったっけ。

そうそう、今は確かジャケットの内側にあるはずだ。

ずぶっ。

鈍い音。

小さな刃物が男の右腕に食い込んだ。

うめき声を上げ、銃を取り落とす男。

エリイだつてただ人質になっていたわけではない。

男の一瞬の間を見て、護身用のナイフを突き立てたのである。

そしてそのことに男が気付く前には――

加熱した銃を握ったまま、リンファはエリイに歩み寄った。

横には眉間を撃ち抜かれた襲撃者の死体がある。

馬鹿な奴。一体何を考えたのかは知らないが、あたしに喧嘩を売るには300年早い。

そのままエリイを抱き起こし、肩を貸す。

痛みに顔を歪めるエリイをパイプ椅子に腰掛けさせた。

「ちよつと、失礼しますよ」

ヘイフオンが割り込んで、彼女の太股に触れた。

別にセクハラではない。

傷の様子を見ているだけである。

傷口を刺激しないように太股の裏と表を覗き込み、彼は確信してうなずいた。

「リンファ、消毒薬と包帯を」

「あ……う、うん」

「大丈夫、弾丸は貫通してます。

消毒と止血さえしておけば問題ありませんよ」

リンファが慌てて持ってきた薬を、傷口に吹き付ける。

エリイが小さく喘いだ。

さすがに染みるのだろう。

リンファはともかく、エリイはこういう怪我に慣れていない。

レイヴンになって初めて腕を撃たれた日のことが、ふと頭に浮かんだ。

あの時は確かエリイがこんな風に応急処置してくれた。

「随分……いい手際ね」

「いえ。これも神に仕える者の仕事ですから」

言いながらも処置は進んでいく。

最後にシヤオシユエが包帯を切って、完了である。

リンファは胸を撫で下ろした。

憎たらしいが、もし両親がいなかったらこんな的確な処置はできなかつただろう。

エリイの額に浮かぶ脂汗。

母がそれをふき取った。

しかし疑問は……あの偽宅配便業者がどうしてリンファを狙ったのか、である。

「最近大人しくしてたから、狙われる心当たりなんてないんだけどな……」

「しかし、現に——」

そこで、ハイフォンの言葉は止まった。

聞こえる。

何かの音が。

リンファにとっては馴染み深い音。

この轟音はもしや、ACのブースター音？

そう気付くが早いか――

ゴガシヤアアアツ!!

突然倉庫の天井が崩れ落ちた!

入り口近く、丁度襲撃者の死体があつた辺りに大穴があく。

向こう側に覗く金属光沢。

赤く輝く目。

畜生、なんて事だ。

見たこともないACが、大事な住処をぶち壊しやがった!

そのACが持つライフルは、まごうことなくリンファを捉えていた。

やはり狙いは彼女らしい。

一体何だと言うんだ。

さっきの宅配便といい、今日は厄日か？

『へっへっ、お前がタオ||リンファだな？

ぶっ殺してや……!』

ガガガガガッ!

視界の外から飛来する無数の弾丸！

知らないＡＣの装甲がいたるところで潰れ、剥がれ、一瞬にして鉄屑と化する。ただのゴミと成り果てたＡＣを踏みつぶすように、巨大な青い蜘蛛が姿を現す。なんて絶妙なタイミングだ。

今日ばかりは、助けてくれたことを少しだけ感謝しようと思った。

腐れ縁のレイヴン、ヨシユア。

青い蜘蛛は彼のＡＣ『ワームウッド』である。

そのワームウッドの向こう側に、今度は一台のトラックが現れる。

重要な物資を運ぶときに使う、装甲の厚いトラックである。

運転席の窓が開く。

そこから顔をだしたのは、実に久しぶりに見る男だった。

「コ、コバヤシい!？」

「みなさんっ!」

トラックを運転していた男、シロウコバヤシは、喉を思いつきり震わせて声を放った。

小柄で細身なアジア人が、今日に限っては頼もしくすら見える。

不思議なものだ。

人間の視覚なんてその程度のものか。
「乗ってください！ 逃げますよっ！」

つづく。

03 “最強”を越えた女

ばたんっ！

シャオシユエが力一杯荷台の扉を閉める。

運転席のコバヤシは、頭の後ろに付いている窓で荷台の様子を確かめた。

足に怪我をしているエリイ、見たことのない神父、そして見たことのない女性。リンファがいないが、きっとACに乗り込んだのだろう。

「出しますー！」

ガゴウンツ！

衝撃がトラックを襲った。

幸い大きな被害はない。

どうやら近くに榴弾が着弾したようである。

この装甲トラックをなめてもらっては困る。

並のACよりは断然皮が厚いのだ。

コバヤシは素早くギアを切り替えた。

クラッチから足を外し、アクセルを踏みつける。

モーターの駆動音が心地よく響く。

しかし今は、その不思議な交響曲に聴き惚れている暇はなかった。

トラックはあつと言う間に最高速度まで加速した。

狭いスラムの路地を無茶なスピードで駆け抜ける。

途中で飛びだしてきた浮浪者を引きそうになり、コバヤシは慌ててハンドルを切った。

『一体どうなってんのよ、これ！』

遠くに爆発音が聞こえる。

周囲には無数のACが潜んでいるはずである。

彼らの目的はたった一つ。

タオリンファを殺すことだ。

その中の一機が返り討ちにあつたようだが、同情するいわれは全くない。

コバヤシは右手でハンドルを操作しながら、残った手でスイッチを押した。

通信機が自動で周波数を合わせる。

「昨夜未明、ロレンスが何者かによって倒されました」

ガシユンツ。

コバヤシは目を見張った。

進行方向に一機のA Cが着地する。

襲撃者の内の一人である。

そいつが手に持ったライフルは、間違はなく彼の方を向いていた。

奥歯を食いしばってハンドルを切る。

しかし次の瞬間、爆発したのはA Cの方だった。

視界にちらりと映る青い影。

ワームウツドである。

「本人の話によると、彼を倒したのは」

燃え上がるA Cの残骸の側をくぐり抜け、更にトラックは先へ進んだ。

このまま進めば幹線道路に出るはずである。

行き先は地上。

隠れ場所のあてが一つある。

「黒髪の」

さつきまで痛みを堪えていたエリイが、はっと顔を持ち上げた。

車の運転をしているコバヤシに視線を送る。

驚愕。不信。

それとも同情だろうか。

彼女の心にある感情は。

「黒い瞳の」

大きな衝撃が再びトラックを襲う。

コバヤシは必死でハンドルを固定した。

あわや廃ビルと正面衝突、というところで方向を戻す。

額が汗ばんでいるのがわかった。

冷や汗以外の汗をかくのは久しぶりである。

「アジア人の女性だったそうです。

つまり」

ハイフォンの眉がぴくりと動いた。

しかしそれに気付いていたのは本人だけだっただろう。

彼は必死だった。

自分の心の中の闇、耐え難いひけめを隠し通すことに。

「貴女ですよ。タオ＝リンファ」

*

「大丈夫ですよ、兄様？」

白で統一された清潔な病室。

細く白い花瓶によく似合う赤い花。

時折聞こえる救急車のサイレンが心臓に悪い。

そんな病室で横たえられているのは、見たところ20代後半程度の男だった。

細身に眼鏡、金色の短髪。

知らない人間に見せても、決して信じないだろう。

彼こそが世界最強のレイヴン、ロレンスである。

——いや。最強だった、というべきか。

彼の側に腰掛け白いタオルで汗を拭き取っているのは、妹のジーナである。

兄と同じ金髪。

瞳には心配と焦燥の色が浮かんでいた。

「兄様、本当にリンファ姉さまだったんですのお？」

ベッドに転がったまま、ロレンスは妹の問いを反芻した。

あれは本当にタオ＝リンファだったのか。

腹の傷がうずく。

あの女のことを思い出すたびにだ。

いつの間にか自分が恐怖という感情を抱いていることに気付いた。

漆黒の髪。

漆黒の瞳。

妖艶な笑み。

澄んだ声色。

どれをとつても間違はなくタオⅡリンファだった。

喋り方も、細かな挙動も、身から出る雰囲気も。

以前に戦ったタオⅡリンファと全く同じものだった。

しかし。

また腹がうずく。

あの時感じた恐怖は。

あの時自分の額を流れた冷や汗は。

まるで人間ではないものと相対しているかのようにだった。

そう、神か悪魔のような。

圧倒的な恐怖。

神々しさすらも感じさせるほどの恐怖。
久しく感じたことはなかった。

「ジーナ」

「ほえ？」

ロレンスは、心配そうに自分の顔を覗き込む妹に微笑みかけた。

「大丈夫だよ。」

きつと、全てがうまくいく」

そうだ、タオ||リンファ。

おそらくこれは君の戦い。

わたしのような脇役には、干渉できない戦いなのだ。

自分の力を信じろ。

やがて君を不幸が襲うだろう。

だが君はそれを持ち越えなくてはならない。

他の誰でもない、君自身の手で。

ロレンスにできること。

それは、ただ祈ることだけだった。

*

爆発音。

もう数えるのも嫌になった。

肩で息をしながらリンファは舌打ちした。

馬鹿な奴らだ。

どうせ、ロレンスには勝てなくても女一人になら勝てる、とでも思っているのだろう。

身の程知らずほど迷惑なものはない。

おまけに人違いときた。

エリイ達の乗るトラックは、ようやくスラムを抜け、幹線道路へとさしかかっていた。

このまま進めば地上へのゲートがある。

コバヤシの話では、上に隠れ場所があるらしい。

「この街、こんなにレイヴンいたっけ？」

リンファは引き金を引いた。

単調な作業。

また一つ馬鹿な命が消え去っていく。

爆炎を尻目に見ながらトラックの後を追う。

その横にワームウッドが続いた。

こっちはバック移動しながら後方の敵を蹴散らしている。

どの方向にでも自由に移動できるのが四足の便利どころである。

『この街だけじゃない。』

世界中のレイヴンがお前目当てに集まってきてるのさ』

「……もてる女は辛いわね」

『そういう台詞は、鏡を見てからにするんだな！』

ガガッ！

無駄なく撃ち込まれたガトリングガンの弾丸が、のこる最後のACを粉々に砕いた。

道路の真ん中に巨大な鉄くずが生まれる。

交通の邪魔である。

これだけ騒いでいるのだから、ガードの連中が出てきてくれてもいいだろうに……

どうせあいつら、怖じ気づいて隠れているのだろう。

いくら三流レイヴンとはいっても、ガードの貧弱な武装では、ACを相手にするには

分が悪い。

……と。

ヒヒヒヒヒッ!!

けたたましい音が鳴り、レーダーにいくつもの光が点った。

赤い光点……その数およそ10。

さつきまで全く何もなかった場所に、いきなり反応が現れたのだ。

しかもリンファ達を完全に取り囲んでいる。

その反応通り、近くのビルの影からわらわらと現れるAC達。

『止まれ、タオ＝リンファ！』

通信機を通じて聞こえてくるダミ声。

気配を感じてペンユウが振り向く。

黒いACが、バズーカの銃口をトラックに突きつけていた。

いくら装甲が厚いとはいっても、あんなものをあの距離で食らっては……

黒いACの足下には何かの残骸が転がっている。

漆黒の、巨大な卵の殻のようなもの。

なるほど、そういうことか。

記憶にある。

どこぞの企業が開発した、『ハイドエッグ』とかいうものである。

その実はステルス機能を持った半球形のドーム。

ACなどが頭からかぶり、待ち伏せなどに使うわけだ。

しかし……どうする。

エリイ達を全員人質に取られているようなものである。

おまけにさつきと違つて相手は複数。

一人の気を紛らわせたとしても、すぐに他からフォローが入る。

リンファはワームウツドの方に目を遣つた。

様子見か、それとも何も思いつかないのか。

青い蜘蛛はびくりとも動かなかつた。

『照準ー！』

号令一下、周囲を囲むAC達が動く。

あるものは右腕の銃を構え、またあるものは膝立ちになつてキャノン砲を固定する。

いくらなんでも、これだけの数に囲まれては逃げようもない。

リンファの背中を冷たい汗が流れた。

つづく。

04 もうひとりの「あたし」

『くくく……』

最強のレイヴンの名は、我等マンシヤフト・アングライファーがいただ……』

——瞬間！

キュゴウンツ!!

天空から降り注ぐ光の矢。

ペンユウ達を取り囲んでいたAC達が、次々と爆発を起こす。

これは……レーザーライフル!?

しかし一体誰が？

呆然とするリンファの耳に、どこかで聴いたことのある低い声が響いてきた。

『前口上が長いのだよ、前口上が!』

この声は、まさか!?

リンファは慌ててレーザーを確認した。

すぐ近くに光点が二つ、新たに加わっている。

これは……上？

ペンユウのメインカメラが上を見上げる。

地下都市を照らす照明。

逆光を受けてビルの上に佇む、二機のA C。

A Cが、飛んだ。

100メートル近い高さを一気に飛び降り、着地寸前でブースターを噴かす。

鈍い衝撃とともにA Cが着地した。

砂色の中量2足A C。

右腕に持った高出力のレーザーライフル。

間違いない。奴だ。

『ふふん、苦勞しているようだな、タオ||リンファ』

「ミラーージュ!？」

あんた……生きてたの?」

『最後の一撃はコアから外したからなあ……』

リンファの問いに答えたのはヨシユアだった。

マスターランカー、ミラーージュ。

かつてリンファ、ヨシユアと死闘を繰り広げた男。

この都市では珍しい、アラブ系の男である。

間抜けな奴だが、腕は一流。

敵にするのは御免だ。

もう一機も続いて飛び降りてきた。

こちらはくすんだ青銅色の重量2足A.C.

ミラージュの付き人、カンバービッチが駆る『ステインク』である。

襲撃者の残りが、一斉に飛びかかる。

その先はペンユウではなくミラージュの愛機『サンドストーカー』。

リンファの仲間だと勘違いしたか、それともライバルと認識したか。

いずれにせよ、結果は一つだった。

サンドストーカーの左腕から光の刃が生み出される。

A.C.達はレーザーブレードの一撃で、コアと脚部を切り離されていた。

『さあ、行きたまえ！』

「え？」

ミラージュの声。

リンファは我が耳を疑った。

奴は敵である。

自分たちを助ける理由など、ミラージュにはない。

そのはずだった。

彼女の戸惑いまで、電波に乗って流れていったのだろうか。

ミラージュは再び口を開いた。

『勘違いしてもらっては困る。』

いいかね、君達を倒すのはこのわたしなのだよ。

従って、わたし以外の何者にも破れることは許されないのだ！

わかるかね？ んん？』

見栄はつちやって。

愛機のコックピットの中、カンバービッチは苦笑していた。

惚れてるなら惚れてると、素直に言えばいいのに。

もつとも、言ったところで勝算は限りなくゼロに近い……

いや、間違いなくゼロなのだ。

「礼は言わないわよ」

『期待していいいともー』』

リンファは少しだけ微笑んだ。

そして操縦桿に手をかけた。

トラックがまず走り始める。

それに続くワームウツド。

ペンユウは……少し躊躇って、それからブースターを噴かした。

背中から吹き出す炎。

轟音を撒き散らしながら去っていくその後ろ姿を見つめ、ミラージユは大きく息を吸い込んだ。

『さあ、カンバービッチ君！』

今日は追加弾倉を持ってきているだろうね！』

『当然ですよ、ミラージユさん！』

*

「ふうん……結構人望あるんだあ。あの女」

狭い部屋を満たすのは、闇。

見つめると吸い込まれそうになる。

触れると蝕まれそうになる。

感じる者全てを恐怖させる、闇。

闇の底に彼女は鎮座していた。

闇を吸い込んだ女。

闇を蝕んだ女。

闇すらも恐怖させる女。

彼女は闇の王。

このちっぽけな闇から這いだし、やがては全てを飲み込む。

闇の王の目の前には小さなモニターがあつた。

ある都市の映像。

ビルに挟まれた幹線道路を、ひたすら地上に向かって突き進む赤い影。

ペンユウ。

タオ||リンファが、あの女が駆るA.C.

何が真紅の華、だ。

闇の王は視線をすこしそらした。

モニターの端に表示される数字。

最初99を示していたそれは、やがて姿を変えた。

——100%。

「オズワルド」

闇の王はその男の名を呼ばわった。

闇の中にあるもう一つの玉座。

そこに腰を落ち着けている男。

茶色の短髪。

頬の古傷。

そして何より目を引くのは、人を見下したような瞳の輝き。

この男は自分の三倍近くも生きているが、おそらく友人の一人もいないだろう。

闇の王はそう推測した。

「時間だぞ」

オズワルド、と呼ばれた男はゆっくりと立ち上がった。

冷たい空気が流れる。

オズワルドは細く長く息を吐いた。

ひゅうひゅうと音がする。

嫌な音。闇の王は舌打ちをした。

「やめろ、オズワルド」

「儀式だ」

勘に障る音が止んだ。

代わりに訪れる静寂。

オズワルドは闇の王の方を向くと、口の端をにいつと吊り上げた。
虚ろな瞳。奴はあたしの方を見ていない。

闇の王は確信した。

奴が見ているのはあたしではなく、この闇だ。

あたしの意のままに操られる闇。

「昔から……戦いの前にする儀式……」

俺は決して負けなかった。儀式の力だ」

うるさい男だ。

闇の王はオズワルドを無視して立ち上がった。

奴の横を通り抜け、闇を切り裂く。

しゅつと音がしてドアが勝手に開いた。

光が闇を蝕む。

そうか。

闇の王は感じた。

闇を蝕むのが光なら、あたしは光に違いない。

「あたしはあの男を殺してくる」

「黒き疾風……ブラックゲイル、か」

闇の王が光の中に消えていって、部屋は再び闇に包まれた。

オズワルドは笑った。

せせら笑った。

黒き疾風。

小さき雪。

嶺に咲く華。

そして。

か細き華よ。

お前はどこへ行く。

闇を喰らって、お前はどこへ行くこうというのだ。

笑いが大きくなった。

何者も、逃れることはできない。

支配？ 統治？

それがなんだというのだ。

オズワルドの望みはたった一つ。

恐怖。猜疑。激昂。

言い換えるならば、それは。

闇。

途切れることのない哄笑は、いつまでも闇の中に木霊していた。

*

ふうっ。

ガレージの壁にもたれかかり、リンファは小さくため息をついた。

コバヤシに案内されてやってきたのは、地上の廃工場だった。

確かに地上ならそう簡単には見つからないだろうし、ここにはACを隠す広いスペー

スと、整備用具、そして弾薬まで供えてある。

コバヤシの話では、知り合いのレイヴンが隠れ家になっている場所らしい。

もつとも今、そのレイヴンは遠くの地下都市まで出張に出ているそうだが。

奥には人が暮らせるスペースもあつたが、さすがに狭い。

ベッドにエリイを寝かせ、シャオシユエが看病に付いている他は、みんなこのガレー

ジにたむろしていた。

機体の整備に余念がないヨシユア。

ハンディパソコンをいじっているコバヤシ。

そして、椅子代わりの木箱に腰掛け、十字架を見つめたままぴくりとも動かないハイフォン。

「親父」

リンファは、側に座っている父親に声をかけた。

ハイフォンの顔が上がる。

拳銃。

リンファ愛用の銃が、その口を父親の方へ向けた。

かちやりという小さな音。

その様子に気付いているのは、彼女ら二人だけのようだった。

「知ってるんだろ？」

「何のことです」

「とぼけるな」

銃を懐にしまい込む。

リンファは腕組みをした。

黒い瞳が冷たい輝きを放つ。

ロレンスの敗北。

世界最強となったリンファ——いや、黒髪の女。

自分ではない。

そんなことをした覚えはない。

それなら、可能性はただ一つ。

「もう一人いるんだ。あたしが」

つづく。

05 災悪

ヘイフオンは何も答えなかった。

目を伏せ、十字架を握りしめる。

舌打ちをして、リンファは父親の胸ぐらをひつつかんだ。

抵抗すらしようとしない父親を、壁に乱暴に叩き付ける。

異変に気付いたヨシユアとコバヤシが、慌てて二人を引き剥がした。
流れる沈黙。

「止めろ、リンファ……」

一体何を狼狽えているんだ。

お前らしくもない」

「狼狽える……?」

狼狽えるって何よ。

あたしがおかしいっての!?

覚えもないのに狙われて、エリイが撃たれて！

こいつが悪いのよッ！

親父が来てからいいことなんて一つもないじゃないッ！」

ヨシユアに羽交い締めにしたまま、リンファは藻掻いた。

目を見開き、顔に怒りを露わにして。

理由のない激昂。

気分が高ぶって、冷静な判断ができなくなっているのだ。

その姿は、どこか幼さを感じさせた。

収まる気配のない激情を感じ取って、ヨシユアは彼女を椅子に押しつけた。

肩をしっかりと押さえつけられてはびくりとも動けない。

リンファはようやく大人しくなった。

ふと、その瞳が目に付いた。

小さな輝き。

まさか。

ヨシユアは目を見張った。

涙が、彼女の瞳に浮かんでいる。

そのままリンファは彼の胸に顔をうずめた。

一体どうしたというのだ。

この程度のこととて、泣くような女じゃなかったはずだ。

もしヨシユアが心理学者だったなら、彼女の心で起こっていることに気付いていたかもしれない。

「わたしは——」

ハイフォンがなにやら口を開こうとした、その時。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

小さな電子音がガレージの中に響き渡った。

コバヤシが懐を探る。

小型の携帯電話を取り出し、スイッチを押す。

機敏な動作でそれを耳に押し当てた。

聞こえてくる声。

どうやら、アリーナ管理委員会の同僚かららしい。

「なんでですってッ!?!」

いきなりあがつた甲高い叫び声に、全員が顔を上げた。

*

「主任」

オペレーターは椅子から顔だけを後ろへ向けた。

アイザックシテイ・ガード、第二管制室。

ガードに寄せられた通報の内、ACやMTによる凶悪テロに関する情報はここに集められる。

いわば、管制官にとっての花形である。

数十人のオペレーターが集う中に、その一報が飛び込んできたのだ。

「所属不明のACが多数、C区画で破壊活動を行っているようです」

「また、例のレイヴンじゃないのか？」

管制主任は報告を入れたオペレーターに歩み寄った。

彼の前のモニターを覗き込む。

ACが出現したのは、丁度さつきまでレイヴンたちが喧嘩を繰り広げていたあたりである。

一度おさまったようだが、また暴れ出しても不思議はない。

「いえ……今度の奴は、全機が同じ型のようにです。

しかも未登録機のようにですね。

規格もネストとは異なっています。

どこかの企業の自社規格か、でなければ密造品かと……」

「映像は出せるか？」

「今ロード中です……来ました。」

メインモニターに出します」

管制室の中央にあった巨大なモニターに、映像が映し出された。ざわり。

誰からともなく、ざわめきが起こる。

映像はアイザックシティ・C地区の一角である。

周囲の喧噪を遠くに聞きながら、主任は画面に見入った。

そんな馬鹿な。

これの何処が破壊活動だ。

これは、これではもはや。

「地獄だ……」

誰かが呟いた。

そうだ、あれは地獄の光景だ。

青く塗られた、奇妙な形状の2足AC。

その手の銃が火を噴く。
吹き飛ばされる建造物。

逃げまどう人々。

画面は、A Cに踏みつぶされる親子の姿を鮮明に映し出した。

誰かの悲鳴。

火。

赤い火。

もはや人も街も、原型をとどめてはいなかった。

一面の焼け野原。もうもうと立ちこめる煙が、地下都市に充満する。

やがて、青いA Cがこちらを——いや、カメラの方を向いた。

単眼が不気味に光る。

銃口が画面一杯に映し出され——

映像は、そこで途切れた。

管制室には沈黙が流れた。

データだけが次々と流入してくる。

F地区。

T地区。

アイザック・シテイのいたるところが襲撃を受けている。

全てのACを合わせれば、おそらく100近いだろう。

信じられなかった。

一体どんな勢力だというのだ。

アイザック・シテイそのものを襲撃するなど！

最初に正気を取り戻したのは、管制主任だった。

「何をしている！」

早くガード全機に出撃命令を出せ！」

「り……了解！」

*

ドアが音を立てて開く。

顔を出したのはエリイだった。

松葉杖の代わりにシャオシユエの肩を使い、ふらつきながらも歩いてくる。

そして、一同が集まって見つめている画面に目を遣った。

コバヤシが持っていたハンディ・パソコン。

その画面は今や即席のシアターと化していた。

もつとも、みていると胸くその悪くなる最低の映画だが。

炎と、怒号と、悲鳴と、銃弾と、血と、煙と、巨大な青い悪魔と、死。

画面にはそれが満ちていた。

次々と映像が切り替わり、アイザック・シテイ各所の様子を映し出していく。

100機近い数のAC達は、まるで作業のように都市を破壊していく。

「アイザックの全区域に、謎のACが出現……」

無差別な破壊活動を行っています。

……いや、アイザックだけじゃない。

わたしの同僚の言葉を信じるなら……

世界中の全ての地下都市で、これと同じ事が起こっている」

コバヤシの額を、汗が流れ落ちた。

あっさりといい放ちはしたものの、冷静に考えれば尋常なことではない。

全ての地下都市にそれぞれ100機のACを配置するとなると、総戦力は数千機に及ぶ。

一体どこの企業が、そんな戦力を持ちうるというのだ。

一方でヨシユアは、画面に映ったACの姿を凝視していた。

目がすうつと細まる。

同じだ。

あの青いACCと。

かつてネーベル・テヒケン本社ビルの前で、襲ってきたあのACCと。

これはお前の仕業なのか、ナターシャ。

まだ終わっていないというのか。

「そんな……」

ハイフォンが声をあげた。

顔を覆い、床に崩れ落ちる。

全員の視線が集まる。

エリイを椅子に座らせたシャオシユエがその背に手を触れた。

「どうして……どうして今更『ゲシユタルト』が……」

『あの子』が……まさか本当に、あの子が！」

——あの子!?

リンファが問いただすよりも早く——

ゴガアアアアアアアツ!!

ガレージの天井が崩れ落ちた!

上から降ってくる赤い影。

巨人が舞い降りる。

真紅の巨体。

2足AC！

追っ手……ではない。

リンファは目を見開いた。

ただの追っ手なはずがない。

だって、あのACは。

あの赤いACは。

「ペンユウ……！」

空から舞い降りた災悪、もう一機のペンユウ。

そんな馬鹿な。

何から何まで信じられなかった。

襲ってきたACは、まぎれもなくペンユウ。

武装は変更されているが、基本構造は全く同じ。

リンファは直感した。

こいつがもう一人のあたしだ。

ロレンスを倒したのは、こいつなのだ。

「シーファ……！」

ハイフォンは立ち上がった。

虚ろな瞳。

不確かな足取り。

ふらふらとA Cに歩み寄っていく。

何をするつもりだ。

シーファとは一体何なんだ。

リンファは呼び止めようとした。

しかし動かなかった。

足が動こうとしなかった。

見たことがある。

自分は、この光景を前に見たことがある！

そして、ハイフォンは手を大の字に開いた。

のどの奥から声を絞り出す。

「シーファ……君なのか」

ヴウンツ。

ペンユウは右手を掲げた。

巨大なレーザーライフル。

その銃口が、小さな小さなヘイフォンを捉える。

ヘイフォンの肩は震えていた。

恐怖ではない。

泣いている。

あの父親が泣いている。

「ごめんよ……シーファ……」

わたしは、君に許してくれなんて言えない……

でも」

震えが、止まった。

「わたしはリンファまで失うわけにはいかなかったんだッ！」

「何処見て言ってるんだこの屑がッ！」

銃声。

つづく。

06 細華（シーファ）

その瞬間一体何が起こったのか、リンファには把握できなかつた。ただ、事実があるだけ。

真後ろからいきなり聞こえてきた声。

銃声。

弾丸。

女が一人、飛び出す。

ハイフォンの名を呼びわりながら。

シャオシユエが。

母親が。

自ら飛び、そして。

弾丸はシャオシユエの胸板を貫いた。

美しい肢体が床に落ちる。

ぴくりとも動かない。
血が床を彩っていく。

それは汚らしい染みのようでもあったし、美しい絵画のようでもあった。
リンファにはただ、見つめることしかできなかつた。

凄まじい形相で妻に駆け寄る、父親の姿を。

「チツ……外したか」

声は後ろから響いてきた。

歯を食いしばり、振り返る。

そこには一人の女がいた。

黒髪。

黒い瞳。

少し吊り上がった目尻。

それは、リンファだった。

リンファは目の前に自分がいるのを見て、そして自分の手をまじまじと見つめた。

再び目を戻す。

それは自分に違いなかつた。

ヨシユアは慌てて銃を突きつけた。

リンファに……いや、突然現れた黒髪の女に。

足に狙いを付け、引き金を――

「何処狙ってんの？」

声はまた、後ろからだった。

消えた。

瞬き一つする間に、女の体が消えた！

肩に手を触れる者がいる。

一瞬で後ろに回り込んだ、女の手だった。

「愛してるわ……ヨシユア」

ゴツ！

ヨシユアは床に倒れ込んだ。

何だ。

一体何をされた!?

ただの肘打ち一発だったはずだ。

それなのに、まるで鉄の棒で殴られたかのようだ。

息苦しい。

体が動かない。

こんなことで破れるなんて！

女は地面に転がるヨシユアをうつとりと見つめ、唇を吊り上げた。

高笑いが響き渡る。

「あら、冗談よ。

本気にしちゃったかしら？

ヒヤツハハハ！」

この女ッ！

リンファの金縛りがようやくやく解けた。

懐から銃を取り出す。

もう一人の自分に向かってそれを突きつける。

妙な気分だった。

自分で自分を撃とうとするなんて。

リンファは自分を睨み付けた。

「この偽物ッ！

生かしてはおかないッ！」

「動くんじゃねえ！」

女が叫びに呼応して、赤いACが動いた。

さつきまでハイフオンを狙っていたライフルが、リンファに狙いを帰る。畜生。

これでは動くに動けない。

どう頑張ってみたところで、拳銃でAC用レーザーライフルに勝てるわけがない。それを見て満足したのか、女はゆっくりと歩き出した。

エリーの横を通り抜け、コバヤシの前を歩き過ぎ、妻の死体を抱いて涙を流すハイフオンに歩み寄る。

ハイフオンは涙に濡れた顔を持ち上げた。

リンファには、それが純粹な悲しみの表情には見えなかった。

まるで怯える子羊のような瞳。

「久しいなあ、黒風……いや、ブラックゲイル。

嶺華はあたしのことを忘れちまったみたいだが……

まさかあんたまで忘れたってことはねえよな？

ああん？」

がっ。

女が蹴る。シャオシユエの死体を。

「馬鹿だよなあ、コユキムラクモも。

敵対企業の一流エージェント、ブラックゲイルとの逃亡劇！
ハッ！

泣かせる話じゃないか！

ラスト・シーンが最愛の夫をかばっての死、だなんてな！」
女が銃を取り出す。

まっすぐに、銃口はハイフォンの額に向けられた。

涙を拭く。

ハイフォンは立ち上がった。

妻の体を、優しく横たえて。

そうだ、もう逃げることはできない。

過去の罪。

今の罪。

未来の罪。

全てをこの瞬間に、清算する。

さあ、わたしを裁いてくれ。

君の手で。

ハイフォンは目を閉じた。

悲しみも怒りも、もはやなかった。

ただ安らぎ、死を待つ自分がそこにいた。

リンファ。

彼は最後に、最愛の娘に心の言葉を投げかけた。

君はこの場面を見たことがあるだろう。

そしてすぐに思い出すだろう。

受け入れなさい。

自分の過去を。

そして考えなさい。

自分に今何ができるのか。

自分が何をすべきなのか。

自分自身の過去を、どう清算するのかを。

唇がつりあがった。

*

ハイフオンは地に斃れた。

妻の上に。まるで互いをかばい合っているかのように。頭ではなく心臓を撃つたのは、女の最後の情けだったのかもしれない。

*

「プルス。帰還するぞ」

女が命じると、ACは女に左手を差し出した。

人間とは思えない跳躍力で、その手のひらに飛び乗る。

女は上からリンファを見下ろした。

唇がにいつと吊り上がる。

リンファは恐怖している自分に気付いた。

もうレーザーライフルの狙いは外されているというのに、一歩も動くことはできなかつた。

ただ、あの女を凝視しているだけだ。

「ポイント021335—S。」

そこに、大破壊以前の工場施設がある」

女は高らかに言った。

それは詩のようでもあった。

「待っているぞ。リンファ姉さん」

ACが飛び上がる。

ブースターが生み出す突風が頬を撫でた。

ああ、なんてことだ。

知っている。

あたしはこれと同じ光景を知っている。

敵がいなくなると同時に、悲しみがこみ上げてきた。

リンファはふらふらと両親に歩み寄った。

膝をつき、父親の頭を抱きしめる。

「何やってんだよ……こんな所で寝てたら風邪引くだろ……?」

なあ……起きろよ……親父……親父……馬鹿親父っ!」

リンファの頬を涙が伝った。

ヨシユアが立ち上がる。

しかし、どうしようもなかった。

何もしてやれなかった。

悲しみを分かち合うなんて、できるわけない。

それはエリイも、コバヤシも。

見ていることしかできない。

悲しみなんて、言葉でどうこうできるものじゃないんだ。

「父さん……」

最後の声はかすれていて、本当に口から出たのかどうかも怪しかった。
全部思い出したよ。

あの女のこと。

15年前のこと。

ずっと忘れていたこと。

父さんのこと。

母さんのこと。

幸せってこと。

悲しいってこと。

畜生。

なんで今まで忘れてたんだ。

なんでこんな大切なことを忘れてたんだ！

あたしは……あたしはあたしはあたしはあたしはあたしはッ!!

「う……ウアアアアアツアアアアアアアアアアツ!!」

絶叫が、ただ木霊する。

*

あたしは、一人じゃなかった。

ずっと一緒だったんだ。

生まれたときから。

ううん、母さんのお腹の中にいる時から、ずっとあの子と一緒にだった。

あたしたちは一緒に生まれて、一緒に育った。

かわいいあの子。

双子の妹、シーファ。

あたしの名前は父さんがつけて、妹の名前は母さんがつけた。

あたしは、嶺に咲く華のように気高く強く育つように。

妹は、野に咲く細さな華のように、優しく穏やかに育つように。

嶺華と、細華。

リンファとシーファ。

いい名前だと思う。

あたしはこの名前が好き。

だって、あたしの名前だから。

父さんはアジア人が集まる和郷市——ハウシアン・シティで、神父の真似事をして
いた。

スラムの子供達を集めて読み書きを教えたり、怪我人や病人の手当をしたり。

結構近所では有名だった。

みんなが父さんを頼ってきた。

でもあたしは——あたしたちは知っていた。

父さんが本当は神父じゃないってことを。

なんだかわからないけど、父さんは神父様と呼ばれるとき、すごく嬉しそうで、す
ごく悲しそうだった。

母さんは一生懸命父さんの手伝いをしていた。

あんまり手先が器用じゃないから苦労してたけど、母さんには父さんには真似できな
いことができた。

微笑み。

につこり笑うと、それだけでどんな子供も泣き止んだ。

悲しい大人は楽しくなった。

すごいなって、子供心に思ってた。

シーファがある時言っただ。

母さんみたいになりたいって。

だからあたしは答えた。

父さんみたいになりたい。

あたしたちは約束した。

ずっと一緒にいようね。

二人だったらなんでもできるから。

父さんと母さんみたいに。

でも、あたしたちが三歳の時。

あいつはやってきた。

紅い、角の生えたACに乗って。

つづく。

07 蘇る過去

茶色い短髪。

頬の傷。

そいつはオズワルドと名乗った。

父さんに会いたい。

そう言ったんだ。

あたしたちは断った。

そいつの目が嫌いだったから。

ぎらぎらと、まるで獣みたいな光を放つ、目。

オズワルドはあたしたちを突き飛ばすと、教会の中へ入っていった。

そして父さんと話をしていた。

父さんは怖い顔をしていた。

何を話していたのかは、よく覚えていない。

ただ、少しだけ覚えていることもある。

父さんがクロームのエージェントだったってこと、母さんがムラクモ・ミレニアムの社長令嬢だったってこと、そしてオズワルドが強化人間製造のための最高のモルモットを探しているってこと！

いきなり、あたしたちの首筋を黒服の男がつかんだ。

父さんは僧服の中から銃を取り出すと、黒服の男を撃ち抜いた。

あたし達は床に落ちた。

近くにいた母さんがあたしを抱きかかえた。

でも、シーファを抱いたのは父さんじゃなかった。

オズワルド。

その男がシーファの体をつかんだ。

あたしは泣き叫んだ。

シーファも泣き叫んだ。

離れたくない。

そう思った。

でも父さんは……逃げ出した。

母さんもその後を追った。

オズワルドとシーファの姿はどんどん遠くなっていった。あたしは想像もしていなかった。

それっきり、シーファと会えなくなるなんて。

父さんと母さんが、シーファを見捨てるなんて！

そしてあたしは記憶を閉じた。

父さんと母さんを許すために、全てを忘れ去った。

でも本当は忘れられなかったんだと思う。

だから、あたしは家出するはめになったんだ。

父さん達と一緒にいると、記憶が蘇りそうだったから。

でも、今なら？

今なら父さんと母さんを許せる？

父さんの判断は正しかった。

オズワルドはきつと、何人もの部下を引き連れていただろう。

シーファを取り戻そうとして戦いになれば、父さんも母さんも殺され、あたしとシー

ファの両方が実験台にされていただろう。

でもそう思うのは、あたしが「選ばれた方」だからだ。

もしあたしがシーファだったら？

父さんに見捨てられて、強化人間の実験台にされていたら？

あたしは間違いなく両親を恨む。

憎む。

絶対に許さない。

そう思う。

だから、行かなきゃ。

あたしはもう迷わない。

狂わない。

忘れない。

シーファ。

15年間の空白は長すぎるけど、きっと埋められる。

いつかきっと、また会える。

*

「浮かない顔だな」

オズワルドは帰ってきたシーファを眺め、呟いた。

殺したのだろう。

あの愚かな夫婦を。

しかし、復讐を果たしたというのにこの顔はなんだ？

まるで悲しんでいるかのようにではないか。

見境のない強化によって、普通の人間としての感情すらも失ったこの女が？

シーファは自分の指定席にどっかりと腰を下ろした。

頬杖を付き、ぶっきらぼうに言い放つ。

「『ゲシユタルト』のテストは？」

「順調だ。」

何も問題ない。

『ゲシユペンスト』の安定率も99.8%。

ゲシユタルトの限界性能を完全に引き出している。

現在は全機を一時撤退させて調整中だが……」

「明日は本番だな？」

「そうだ。」

だが、明日はここに残ってもらおうぞ」

ここにきて、はじめてシーファはオズワルドの顔を見た。

眉をひそめた、今にも痲癩を起こしそうな顔。

こりっ。

シーファの歯軋りの音が、闇に響いた。

「何だと？」

「『ジュステーム・ゲシユタルト』の形成率が低い。

やはり、『核』はここに待機していなければならぬようだ。

『ガイステイツヒ・ヴェレ』の増幅機がある。それを使用するのだ」

「あたしに問題があるってのか？」

「そうではない。

所詮、一人の『プルス』が放つ貧弱なガイステイツヒ・ヴェレでゲシユタルト全機を操作するなど、不可能なのだ。

いくらゲシユペンストの助けがあるとは言ってもな」

シーファは舌打ちをすると、椅子に手を付いて立ち上がった。

気分が悪い。

だんだん自分の感情が高ぶっていくのがわかる。

『楽しい』と感じている自分がある。

明日の壮大なパーティを、『楽しみ』にしている自分がある。

胸くそが悪い。

そんな感情は、とうの昔に捨て去ったというのに。

「明日は客が来る」

彼女の言葉は冷たく、鈍かった。

「盛大にもてなしてやれ」

「……心得た」

男の答えを聞くより早く、シーファは部屋を飛び出していた。

*

地上の夜は重く、暗い。

分厚い大気に阻まれて、星の一つも見えはしない。

風が吹き抜けていく。

巻き上げられた砂埃が二つの十字架を包み、そして消えていった。

木で組まれた簡素な十字架。

名前すらも彫り込まれてはいない。

ただ、二つの墓標は寄り添うように佇んでいた。

まるで幸せな夫婦のように、ひっそりと。

花すらも供えられていない墓標を、また風が包んでいく。

*

辺りがすっきり暗くなったのを見計らって、リンファは起きあがった。

自分を包んでいたシーツをはぎ取り、床から立ち上がる。

部屋の端のソファでは、エリイがすうすうと寝息を立てている。

傷の具合は良好のようである。

足音を立てないように、ゆっくりとリンファは部屋を出た。

広いガレージ。

青い蜘蛛のそばに佇んでいる紅い巨人。

それに歩み寄り、見上げる。

3年間、リンファはこいつと一緒だった。

戦場に立つとき、リンファはこのペンユウと一体となっていた。

無機質な装甲板が自分の素肌のようにだった。

それを心地よいと感じるようになったのは、いつの頃だったか。

ごめんね。

答えるはずもない巨人に、リンファは心の声を投げかけた。

今度ばかりは帰ってこれないかもしれないけれど、最後まであたしと戦って。

リンファは答えを聞いたような気がした。

地獄の底へだつて付いていく、と。

その時、リンファは彼の存在に気付いた。

ペンユウの足に背中を預け、腕組みをして佇んでいる。

いつもの黒いコート。

見慣れた金髪。

綺麗な青い瞳。

ヨシユアだった。

リンファは驚きを顔に出さないように気を付けながら、彼に歩み寄った。

「行くのか」

低い声が耳に届いた。

子守歌のようで、とても気持ちのいい声。

リンファはうつむいて答えた。

「うん」

そして、自分の頭を彼の胸に埋めた。
暖かい。

腕を背にまわす。

力一杯彼を抱きしめた。

彼もまた、それに応えた。

匂いが鼻を衝いた。

コートに染み付いた、淡い煙草の匂いだった。

いつもは苦手なその匂いも、今はたまらなく愛おしかった。

言葉なんて出てこない。

だからリンファは心の中で言った。

ありがとう、ヨシユア。

あたしは、あなたに会えて幸せだった。

だから、いつ死んだって後悔しない。

もちろん死にたいわけじゃない。

でも、あなたと一緒にいた時間がとつても楽しくて、嬉しくて、好きだったから。

だから、死ぬことなんて怖くないの。

いつだってあたしは、精一杯に生きてきたから。

あなたと一緒に生きてきたから。

リンファは顔を上げた。

そして瞳を閉じた。

唇に柔らかくて暖かいものが触れるのを感じた。

力が抜けていく。

感覚がなくなっていく。

自分の存在が曖昧になって、そして痛いほど確かになっていく。

まるで自分はそこにしか存在していないかのようにだった。

彼と触れ合っているその一点だけで、自分は存在している。

そんな気がした。

口づけの時間は長かったのか、短かったのか。

誰にもそれはわからなかった。

リンファは唇を離すと、彼の手に小さな物を渡した。

それは十字架だった。

ヘイフォンがいつも肌身離さず持っていた、あの十字架だった。

「あなたが持ってた」

それだけ言うと、リンファは彼の横を通り過ぎた。

コックピットへと向かい、駆けていく。

「リンファ」

その背に、再び低い声がかかった。

ヨシユアは十字架を握りしめ、まじまじと見つめていた。

しかしその瞳が捉えていたのは、金属の塊ではない。

その向こうにいるもの。

その向こうにあるもの。

「誰のためだ」

リンファは肩越しに振り返った。

しばらく黙ってから、小さく口を開いた。

その表情は苦笑しているようにも見えた。

「誰のためでもない。あたしのためよ」

それを聞いて、ヨシユアは少しだけ笑った。

笑って、そして投げた。

手の内にある小さな金属の塊。

そう、たった今渡されたばかりの十字架を。

リンファは慌ててそれを受け止めた。

どうして。

瞳を見る。

青い瞳は真っ直ぐに、あまりにも真っ直ぐにこっちを見つめていた。

「お前のためなら、俺にも理由がある」

つづく。

08 邂逅

エリイはシートにくるまったまま、外の音を聞いていた。
A Cの駆動音。

廃工場から遠ざかっていく二機のA C。

その足音を遠くに聞きながら、エリイは寝返りを打った。
天井。

昔のことが頭をよぎる。

そう、初めてリンファと出会ったときのこと。

リンファちゃん。

彼女は相棒の名を呼んだ。

あなたにあげたペンユウは、わたしがムラクモを抜けるときに失敬してきたものなの。
の。

でもそれも、本来はムラクモの機体じゃなかった。

クロームが極秘裏に製造していた二機の新型ACのうち、一機を奪取したものだつたのよ。

これも運命なのかな。

巡り巡って、同じ二機が今、戦いに身を投じる。

不思議ね。

神様が本当にいるみたい。

でも、ここから先は誰にも予想なんてできない。

どっちが勝つか、どっちが生き残るか、誰にも決めることなんてできない。

だから、リンファちゃん。

必ず帰ってきて。

わたしはここでこうして待ってるから。

明日の朝目覚めたら、何事もなかったみたいにリンファちゃんが微笑んで、馬鹿みたいに騒いで、笑って、そして時々依頼をこなしたりして……

待ってるからね。

だってリンファちゃんはわたしの友達だから。

相棒だから。

親友だから。

一番大切な仲間だから。

*

もうじき夜が明ける。

シーファは椅子に腰を下ろした。

それは彼女の玉座だった。

広大なドーム状の空間。

その中央にある、闇の王の玉座。

そしてその後ろに控える騎士。

真紅の巨人、『プルス』。

強化人間専用に使われたAC。

シーファのためだけに造り出されたAC。

だからこのACはこう名付けられたのだ。

強化人間——プルスと完全に一つになるために。

いや。

シーファの脳裏を嫌な光が駆け抜けていった。

造られたのはプルスの方ではない。
あたしだ。

あたしが、このACに乗るために造られたのだ。
究極の強化人間として。

完璧な強化人間として。

ジュステーム・ゲシュタルトの核として。

かつてはクローム社によって。

その滅亡後は、意志を受け継いだナターシャとオズワルドによって。

見境のない強化を受けたのだ。

もはや、本来の肉体はほとんど残っていない。

人工組織ばかりになってしまった。

脳の中に至るまで。

世間では存在自体が認められていない強化人間に、自分だけがなったというのは快感だった。

そして同時に耐え難い苦痛でもあった。

もうシーファに仲間はいないのだ。

だって、彼女はもう人間ですらないかも知れないのだから。

*

『これだな？』

大破壊以前の工場つてのは』

通信機から、ワームウッドを駆るヨシユアの声が伝わってきた。

目の前にある巨大な建造物。

分厚い外壁に、気密性が高そうなゲート。

明らかに補修と改装の手が加わっている。

それもごく最近に。

リンファは目を細めた。

なぜかはわからない。

でも感じる。

シーファはこの中にいる。間違いなく。

「ヨシユア、穴開けて」

『乱暴だな、全く……』

ワームウッドがレーザーキャノンを放つ。

閃光と爆音が無秩序にばらまかれる。

もうもうと立ちこめる砂埃。

それが収まった頃には、堅く閉じられたゲートに大穴が穿たれていた。

AC2機程度なら並んで通れそうなくらいの穴である。

赤い巨人と青い蜘蛛は、工場の中に滑り込んだ。

長い通路。

ACが出入りしやすいように、広めに造られている。

レーダーを確認する。

映り込む妙なノイズ。

どうやら電波障害が起こっているらしい。

これでは、レーダーは使い物にならない。

慎重に歩みを進めていく。

一体何処で何が待ちかまえているやら分かったものではないのだ。

分かれ道はない。

途中にはいくつか閉じたゲートもあったが、完全にロックされているようだった。

そして、おあつらえ向きに用意された一本だけの道。

誘っているのだ。

悪魔が、地獄の底へと。

やがて二機は広い部屋にたどり着いた。

ACが本気で暴れ回っても何ら差し支えないほどの広大な空間。

見たところ立方構造になっているようだった。

びくり。

レーダーよりも鋭い、リンファの鼻がそれを感じ取った。

*

来たか。姉さん。

玉座に座ったまま、シーファは息を吸い込んだ。

余計な邪魔者が付いてきている。

奴には大人しくして貰わなくてはならない。

このためにゲシユタルトを待機させておいて正解だった。

「Plus befehlte euch」

シーファの口から浪々たるドイツ語が飛び出した。

ジュステーム・ゲシユタルトの操作コマンドは、全てドイツ語によるのだ。

「Loscht den Hindelichen！」

*

ヴンツ。

低い駆動音。

立方体の部屋のいたるところで、無数のハッチが扉を開いていく。

十数個のハッチの向こうには、それぞれ一機ずつ控える青い2足AC。

あの、世界中で暴れていたACである。

なるほど。

まずは雑魚で歓迎、ということか。

『聞こえるか、リンファ』

「何よっ。」

今にも先制攻撃のトリガーを引こうとしていたリンファを、彼の声が押しとどめた。

出鼻をくじかれ、リンファは顔をしかめた。

『アイヒは俺が引き受ける。』

『お前は奥に行け』

「ちよつと、そんなこと……」

『いいから行けッ!』

びくっ。

リンファの肩が震える。

彼の怒鳴り声なんて、久しぶりに聞いた。

嫌な気分だった。

荒つぽいヨシユアは、あんまり好きじゃない。

でも次に聞こえてきた彼の声は、まるで底が見えない海のように優しかった。

どこまでも青かった。

『お前にはやることがあるだろう。』

こんなところで立ち止まるな。

行つて、ケリを付けてこい。

お前自身の過去、全てに』

そうだ。

ヨシユアはいつだって、あたしより一步先を見ている。

リンファは思った。

何度彼に助けられただろう。

感謝しようと思つているのに素直になれなかったことが、何度あつただらう。だから今は。

リンファは心の中で決意した。

彼に一言、言わなくては。

「……ありがとう」

ふつと、息を吐くような音が聞こえた。

笑つたのだ。

ありがとう。

もう一度心の中で繰り返し、そしてリンファは操縦桿を倒した。

奥の通路へと、全速力でペンユウが駆けていく。

待っている、シーファ。

——すぐにそこへ行く！

*

シーファは唇の端を吊り上げた。

聞こえたのだ。

姉の声が、今。

もうじきあの女はここへくる。

最後の戦いが待つ、この場所へとやってくる。

その時こそ審判が下されるとき。

彼女の復讐が終わりを告げるとき。

シーファは足下に転がる肉の塊に目を遣った。

さつきまでオズワルドだったそれは、血の気を失って青ざめていた。

愚かな男だ。

強化人間の力を支配できるなどという、思い上がりを持った挙げ句がこれだ。

あたしは忘れてなどいない。

お前があたしに何をしたか。

手術がどれほどの苦痛だったか、知らないとは言わせない。

屑め。

お前は親父と同じだ。

最低の屑野郎だ。

死して当然の男だ。

そしてリンファ。

あたしの双子の姉。

ぬくぬくと幸せに暮らしてきた姉。

お前はあたしの敵。

この力で、空白の15年があたしに与えた力で、お前を殺す。

お前の男も殺す。

お前の相棒も殺す。

みんな殺す！

あたしを助けてくれなかった奴ら全員、あたしとプルスとゲシユペンスとゲシユタルトの力で跡形もなく消し去ってやる！

——来い！ リンファア！

*

リンファアの頬を汗が伝い落ちた。

聞こえた。

今、妹の声が。

確かに聞こえた。

原理など知るものか。

だが、心に伝わってくるこの声は、まぎれもなくシーフアだ。
彼女にはわかる。

彼女のどす黒い感情の奔流が。

つづく。

09 ラスト・バトル（前編）

細く長い通路を抜け、ペンユウは再び広大な空間へとたどり着いた。さつきとは違う、ドーム状の空間。

あまりにも巨大な空間。

このドームに比べたら、ACなど豆粒のような物だった。

そしてその中央に、静かに佇む紅い巨人。

自分と同じ姿をした巨人。

右手に持ったレーザーライフル。

左肩のレーザーキャノンと、右肩のミサイルポッド。

大した重武装だ。

リンファにとっては、その姿がまるで天使のようにも見えた。

——『プルス』。

「待っていたぞ、姉さん。」

今日、この時を」

通信機からではなかった。

シーファの声は、直接彼女の耳に届いた。

不思議と不信感はなかった。

まるでそれが当然のことであるかのように感じている自分がいた。

それを疑問に思おうとすらも考えなかった。

「あたしはあんたの姉じゃない」

リンファは応えた。

機械の助けなど借りてはいない。

ただ声を出すだけで、それはシーファの元まで届くのだ。

「なくしたぬいぐるみを探しに来た、ただの女よ」

微かな笑い声が聞こえた。

甲高いシーファの声だった。

なくしたぬいぐるみ。シーファ。

あたしはあんたを探しに来た。

そう、ずっと探していたんだ。

15年前の、あの日から。

「さあ」

シーファは言った。

静かに、穏やかに、冷たく。

「始めようか」

*

口火を切ったのはマシンガンの掃射だった。

雨霰と降り注ぐ弾丸が、プルス of 装甲をかすめていく。

プルスは右に飛んだ。

右腕のレーザーライフルが、光の槍を撃ち出す。

死をもたらす輝き。

リンファは慌てることもなく操縦桿をひねり倒した。

ペンユウのブースターがこれでもかと炎を吹き出す。

前へ。

一気に間合いを詰める。

火力で劣るペンユウにとって、唯一プルスを上回っているのは機動力だ。

近距離で、相手を攪乱するしかない。

おざなりにマシンガンで牽制しつつ、プルスを壁際に追い込んでいく。瞬間、プルスが宙へ舞い上がった。

肩のレーザーキャノンを構える。

射出される光の砲弾。

あんなもの、まともに喰らったらひとたまりもない。

マシンガンで砲弾を撃ち落とす。

衝撃を受けた光の弾は、周囲に爆炎を撒き散らしながら消滅した。

「ヒヤハッー」

シーファの歓声。

爆炎を切り裂いて姿を現す真紅の機体。

プルス。

奴の左腕が輝いた。

レーザーブレードだ。

ペンユウが身をひねる。

光の刃が胸の装甲をかすめた。

「おおッー」

それに応えるようにリンファが吠える。

自らもブレードを生み出し、プルスへと斬りかかる。

プルスが左腕を振るった。

ぶつかりあう光と光。

激しい衝撃。

飛び散る無秩序な光。

ペンユウは自らの意志で力に流された。

はじき飛ばされ、間合いが広がる。

ピピピッ。

電子音。

FCSが総力を挙げてプルスを捉えていく。

ロックオンが終了するなり、リンファはトリガーを引いた。

肩のポッドから打ち上げられる四発のミサイル。

それが頂点に到達するよりも早く、ペンユウはマシンガンを放った。

プルスが横に飛んでこれかわす。

着地。

衝撃で一瞬プルスの動きが止まる。

ミサイルが降り注いだのは丁度その瞬間だった。

「みえみえなんだよ馬鹿姉があッ!!」

プルスは突如レーザーキャノンの砲身を真上に向け、光の砲弾を放った。

ミサイルと衝突し、再び爆炎が巻き起こる。

残り三発のミサイルもその炎に巻き込まれ、誘爆を起こした。

そのままプルスは肩のミサイルを放った。

飛来する一発のミサイル。

それが中空で4つに分裂した。

拡散ミサイルだ。

マシンガンが火を噴く。

四発のうち上空から迫る2発を撃ち落とし、低空を飛ぶ2発を飛び上がってかわす。

上空から降り注ぐマシンガンの弾丸。

プルスの回避行動が一瞬遅れた。

弾丸が肩をかすめる。

ジョイントを貫かれ、弾け飛ぶミサイルポッド。

シーファの舌打ちが聞こえる。

プルスはペンユウを追って空中に飛び上がった。

レーザーライフルを連射する。

キャノン砲並の威力を持つ光の槍が真下からペンユウを襲う。

しかしそんなもの、ペンユウの機動性を以てすれば回避するのは容易い。

ブースターの微かな動きだけで、全てを見事にかわしきる。

ペンユウの左手に点る光。

レーザーブレードを構え、下のプルスに向かって急降下する。

ガッ！

ブレードは、プルスの左肩をかすめた。

レーザーキャノンが切り離され、地面に落ちる。

しかしその瞬間ペンユウの動きも一瞬止まった。

それを見逃すシーファアではない。

レーザーライフルの光。

光の槍はペンユウのミサイルポッドを貫いた。

巻き起こる誘爆。

衝撃で二機は大地に叩き付けられた。

「強化人間がどういふものか知ってるかッ！」

シーファアが叫ぶ。

プルスはペンユウを蹴り飛ばして間合いを取った。

すぐさまレーザーライフルを乱射する。

ペンユウが斜め後ろに飛んで光をかわしきる。

「あたしは知ってる。

毎日体を切り刻まれたッ！

15年間毎日だ！」

リンファは歯を食いしばった。

知ったことか。

お前の15年間がどうであろうと、今することはたつた一つ。

お前をこの場で殺すことだけだ！

ペンユウがマシンガンを撃ちながら走った。

「だがな、麻酔は使わないんだ。

人工器官が拒絶反応を起こすからな！

わかるか！

お前にわかるかッ！

手足を縛られ、口を塞がれ、はつきりした意識の中で延々体を切り刻まれる気ががッ

!!」

ペンユウの足が、一瞬止まった。

コックピットの中でうずくまるリンファ。

痛い。

何だこれは！

腹が痛い！

まるで刃を差し込まれているかのようだ。

シーファが言葉を紡ぐたび、シーファと心が繋がるたび、リンファの体に閃光のよう
な痛みが走っていく！

「痛いだろう！

苦しいだろう！

それがあたしの痛みだ。

あたしが毎日感じてきた痛みだ！

見えるかッ！

あたしが見ていた光景がアッ！」

気が狂いそうだ！

目の前に見たこともない光景が浮かぶ！

白衣を着た男。

白い灯り。

煌めく刃。

腹に刃が食い込んだ。

激痛。

飛び散る血で白衣が汚れる！

あたしの血。

紅い血！

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いこんなことが昨日も今日も明日も明後日もその次も毎日毎日毎日毎日ツ！

「ウアアアアアアアアアアツ!!」

ペンユウは狂ったように走った。

光の刃を生み出して、プルスに正面から斬りかかる。

プルスの腕にも刃が生まれた。

耳を劈くほどの轟音が鳴り響き、世界が反転するほどの衝撃が二機を襲う。

刃と刃は互いに弾かれ合った。

もう一度。今度はお互いに突き上げるような一撃を繰り返す。

衝撃。

レーザライフルが根本から斬り飛ばされた。

マシンガンがその真ん中を突き刺された。

小さな爆発が二機を揺らす。

このままで終わらせてなるものか。

リンファはもう一度操縦桿をなぎ倒した。

ペンユウの左手が横に振られる。

ザンツ!!

手応え。

プルスの頭部が消し飛んでいた。

シーファの目の前のモニターが一瞬砂嵐を映し出す。

直後にコアに内蔵されたサブセンサーが起動する。

畜生。

よくもやりやがったなツ!

プルスの左手が縦に振るわれた。

ゴツ!

鈍い音。

ペンユウの右腕が、肩口で切り落とされていた。

その残骸が弾け飛び、地面に転がる。

一瞬、ペンユウのバランスが崩れた。

「リンファアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

プルスの右腕がペンユウを殴り倒した。

地面に転がる巨体。

プルスはその上に馬乗りになり、狂ったように両手を振り下ろした。
拳がコアに食い込む。

つづく。

ペンユウは立ち上がった。

ゆつくりと。地獄の亡者のように。

「リンファ……」

シーファは歌った。

「あたしの痛みを知れッ!!」

ウンッ。

プルスを持つもう一つの機能が、唸りながら動き始める。

シーファの口を吐いて出る言葉。

コマンド・ワード。

「Plus befehlt euch」

そこで、シーファは一度言葉を句切った。

黒かったはずの彼女の瞳は、今や緋色に変色していた。

大きく息を吸い込み、そして悲鳴にも近い叫び声を挙げる。

「Lasst den Narren die Engelsen horen

n !」

*

キ……イイイイイイイン……

音？

いや、もはや人間の耳では音とも判断できない。

ただ、ヨシユアは空気が細かく振動しているのを感じた。

ついさつきまで彼と激闘を繰り広げていた『ゲシユタルト』たちが、一斉に奇妙な音を放ち始めたのだ。

いぶかしがるより先に、激痛が走った。

脳に直接痛みが走る。

頭の中を何かが駆け抜けていく。

頭が痛い。

まるで何かに脳を掻きむしられているかのようだ！

ヨシユアは耳を押さえた。

もしこの場にエリイがいたら、何が起こっているのか気付いていたかもしれない。

*

「うっぐううあああああつ!!」

リンファは激痛に絶えかねて叫び声をあげた。

頭が痛い。

割れそうだ。

リンファにはわかった。

これは、シーファが発している心の声だ。

痛いのは心だ。

黒く染まっっていく。

リンファの心が壊れていく。

妹と同じ、狂った墮天使へと、リンファは一步一步歩み寄っていた。

「う……………ぐ……………あ……………」

震える手を、必死に動かす。

操縦桿を握る。

全身から吹き出す冷や汗。

リンファは歯を食いしばった。

動け!

あたしの体よ、動け!

ヴンツ。

小さな駆動音。

シーファは目を見張った。

ペンユウが動いたのだ。

馬鹿な、何故動ける!?

完全に脳の機能は停止しているはずだ。

彼女が放つ強力なガイスティツヒ・ヴェレ——脳内電流によって生じた電磁波を増幅したもの——によって、脳内電流を混乱させられて。

動けるはずがないのだ。

ただ、痛みを感じることはできないはずなのだ。

シーファが記憶している痛みを！

一歩。

確かにペンユウは歩いた。

幻覚ではない。

何故かは知らないが、奴にはガイスティツヒ・ヴェレが通用しない。

それなら。

シーファは唇の端を吊り上げた。

光の刃が互いの命を求めて煌めく！

*

——男が、そこにいた。

*

ぎい　ぎい　ぎい　ぎい　んっ！！

瞬間、紅い巨人のコアは真つ二つに切り裂かれていた。

*

「な………う？」

ヨシユアは我が目を疑った。

脳をかき乱していた奇妙な音が止まった。

そしてその音を発し続けていた『ゲシユタルト』たちも。

ワームウツドを十重二十重に取り囲んでいた青いAC達は、今やただの巨大なモニユメントと化していた。

どうして……？

ヨシユアはまだふらつく頭を必死で働かせた。

何故止まったのだ。

理由は一つしか思いつかなかった。

「そうか……リンファ」

*

——どうして

心の声が、彼女に伝わってきた。

そこに、さつきまでの狂気はかけらも感じられなかった。ただ、純真な少女が一人、自分の心をさらけだしている。

それだけだった。

取り戻したのだ。

本当の自分を、死の間際で。

——どうして、あたしは負けたの

リンファは、妹の声を目を閉じて聞いていた。

シーファ。

灼き切られたコアの中で、今にも息絶えようとしている妹。

何もしてやれない自分が齒痒かった。

自分にはただ、終わらせることしかできない。

何も創らず、何も産まず、過去を清算するだけ。

妹を助けもせずに、その狂気を消し去ってしまうことしかできなかった。

「理由なんて……ない」

せめて最後は姉らしく。

リンファは静かに言った。

言葉に優しさを込めようとしている自分に気付き、彼女は目を開いた。

「あんたとあたしじゃ格が違う。それだけよ」

すうっと、妹の心は消えていった。

安らかに。

眠るように。

妹は消えていった。

そして、リンファはもう一度目を閉じた。

小さな美しい雫が、彼女の頬を優しく伝い落ちていった。

n. The real love still remains to be seen.

エピソード

フルカラー・フュージョン

最も目立つのは巨大なモニターだった。

そこそこの広さを持つ部屋。

明るい上品な作りの部屋だ。

その中にはいくつもの椅子が並べられている。

丁度、モニターを見るのにいい位置である。

その内の一つに、ある女性が腰掛けていた。

長い赤毛を一つの三つ編みに纏めた北欧美人。

高い鼻にかけた丸眼鏡が妙に目を引く。

派手なピンクのジャケツトとスカート。

彼女の名はエリイという。

今日はVIP席で優雅に観戦、である。
がーっ。

音がして、部屋のドアが開いた。

現れたのは、アジア系の男。

飾り気も何もあつたものではないネズミ色のスーツ一式。

いかにも企業戦士その一といった風貌だが、実はそうではない。

彼の名はシロウコバヤシ。

アリーナ管理委員会という、それなりに影響力のある組織のメンバーである。

「いやあ、お早いですね」

「ええ。今日を楽しみにしていたんだもの」

エリイの隣の椅子に、コバヤシは腰掛けた。

ずれた眼鏡を人差し指で直す。

「実は今日、委員会に辞表を叩き付けてきました」

「……え？ 一体どうして……？」

コバヤシはふつと、自嘲気味に笑みを浮かべた。

自分の持つていたアタッシュケースを神経質にも膝の上に乗せる。

これだけ広い場所があるというのに。

日系人のこういう気の使い方には、少し付いていけないところがあつた。

「大した理由はありませんよ。」

まあ、刺激がなくて退屈していた、とても言いませうか。

……その件について、後でお話があります」

「今じゃいけないの？」

「ええ、だめです。」

みんなが揃ってからでない」と

その言葉が終わるか終わらないかの内に、再びドアが開いた。

今入ってきたのは、一組のカップルだった。

背の高い銀髪の男と、彼の腕を必死につかむ金髪の女性。

堅い信頼関係が、傍目にも伝わってくる。

「やあ、司くん。それにアヤメさん」

「奴の試合はまだ始まっていないのか？」

銀髪の男……司の問いに、コバヤシは首を縦に振った。

アヤメと並んで、エリイの後ろの席につく。

実際に会うのは初めてだが、噂は聞いている。

宝条司といえば、最近ノーマルアリーナのトップに立った、一流のレイヴンである。

マスターアリーナ入りも遠くないと噂されている。

たしか相棒のハッカーがいるという話だが、隣の女性がそうなのだろうか。

そして、扉が三度開く。

だんだんと部屋がにぎやかになってきた。

今度は、アラブ系の顔の濃い男と、日系の気弱そうな男である。

これはエリイにとつても知った顔だ。

マスターランカーのミラージュと、その付き人のカンバービッチである。

「む？ あ的女はどこに行つたのかね？」

「何言つてんですか……控え室に決まつてるでしょう」

「う……そ、そうか。そうだったな」

きよろきよろと辺りを見回しながら、ミラージュはコバヤシの横に腰掛けた。

その後ろにカンバービッチも座る。

周囲に自分と同じ日系人が二人もいることに気付いて、彼はコバヤシとアヤメに順番

に挨拶をしてまわつた。

もつとも、アヤメに関しては声を掛ける前に司に睨まれ、あえなく断念したのだが。

さあ、もうすぐ時間だ。

しかしその時、部屋に駆け込んできた二人組がいた。

よく似た金髪の男女。

彼の顔を知らない者などいない。

世界最強のレイヴン、ロレンス。

そしてその妹のジーナである。

「少し遅れてしまったな」

「ごめんなさいですう」

二人が席につき、ようやく全員がそろった。

時は満ちた。

今から始まるのだ。

誰もが待ち望んでいた瞬間が。

*

黒髪の女は、リフトの駆動音を聞きながらシートに身を預けていた。狭いコックピットの中。

しかし、他の何処よりも心地よい空間。

彼女の匂いが染みついた、彼女だけの空間である。

リンファは、自分が浮かれていることに気付いた。

おかしな話だ。

これから戦いに赴くというのに。

このリフトが上のドームにたどり着いた瞬間、命を懸けた戦いが始まるというのに。こんなにわくわくしているなんて。

ちよつと不謹慎だろうか。

ザ……ザア……

一瞬ノイズを拾ってから、通信機は声を発し始めた。

聞き慣れた低い声だ。

『よう』

「あーら、これはヨシユアさん。

なんのご用かしら」

わざと嫌みつたらしく言い放つ。

リンファが女性語を使う時なんて、嫌みか、でなければ騙そうとしているときくらいしかない。

彼も、ヨシユアもその点は心得たものだった。

苦笑しつつ、声をかける。

『全く、本当に口の減らない女だ』

「……やめてくんない、その言い方」

はて。

リンファは不思議な既視感にかられた。

どこかで聞いたような言い回しだ。

自然と次の言葉が口を吐く。

「いちいち『女』って強調しないでよ」

ここに来て、ようやくヨシユアも気付いた。

この言葉は。

あの時と同じだ。

二人が初めて出会ったとき、戦いの前に交わした言葉と。

『安心しろ。手加減は絶対にしない』

ふっ。

リンファの口から笑いが漏れた。

それはヨシユアにも伝染した。

少しずつ、二人の笑い声は大きくなっていった。

楽しい。

二人が二人とも、同じ事を考えていた。

自分たちのやりとりが妙に可笑しくて、笑いは止まることを知らなかった。

やがて、笑い疲れたヨシユアは静かに言った。

「さあ」

リンファの笑いも止まった。

「決着をつけようぜ！」

「望むところよ！」

ズン……

重い音を立て、リフトはドームへとたどり着いた。

紅い巨人。

青い蜘蛛。

ドームの端と端に立ち、互いを見つめ合っている。

「READY」

モニターに、文字が大映しにされる。

リンファとヨシユアは、それぞれの操縦桿を握りしめた。

どんな戦いになるだろう。

最初の攻め方は？

相手の出方は？

可能性は無限だ。

未来なんて誰にも決められはしない。

ただ一つ言えるのは、自分の目の前にある今を精一杯生きるってこと。それだけだ。

緊張が高まっていく。

冷たい汗が額を濡らす。

そして、その時は来た。

「GO！」

H o p i n t o t h e n e x t !

次回予告

「ああ……『赤鬼』。ああ、知ってるとも……」

男は絞り出すように語り出した。その手が小刻みに震え、すがり付く先を求めて空中を泳ぐ。荒れ野の如く伸び散らかした髪の毛の隙間から、片方の瞳がちらりと覗く。鼠を思わせる目だ。追い詰められ、怯え、すくみ上がり、逃げ出そうという意味さえ失ってしまった哀れな鼠の目。

尋問官が、煙草を差し出した。男は飛びついた。溺れかけた小動物が、流れてきた麦藁に飛びつくようにだ。咳込むほどに煙を吸い込み、あつという間に一本を吸い尽して、ようやく彼は思い知る。自分が掴んだものが、頼りない枯れ草に過ぎなかったのだと。

それでも、少しの間恐怖を和らげる程度の役には立った。

「話してくれるかい」

尋問官が優しく問うと、男は頬をひくつかせて笑った。

「あんた、ほんとに聞きたいかい……」

*

その日、テロリストの一団が、とある企業の研究施設を襲った。狙いは当時開発が進んでいた新型発動機のサンプルだ。研究データが手に入ればなお良い。

その施設に大した警備が敷かれていないことは、事前調査ではつきりしていた。それにひきかえ、テロリスト側の戦力はMTが5機にACが2機。ちよつとした軍隊にもひけをとらない。

精鋭をぶつけて、ぱつと襲い、さつと奪い、すつと立ち去る。手に入れた物の売却先にも複数アタリを付けてある。実に楽な仕事。組織の資金源となっている、いつも通りの簡単なルーティンワークだ。

誰もがそう思っていた。

“奴”が現れるまでは。

針葉樹林を進むテロリストたちの頭上に、“奴”は突如出現した。

と思った時にはもう、何もかも終わっていた。彼に見えたのは駆け抜ける一筋の赤、ただそれだけ。一瞬の後、ACが爆発した。

——なんだ？

と言いつ切る暇さえなく、彼のMTは腰のジョイントを粉碎され、緩やかに弧を描いて墜落した。

いつのまにか真正面に肉薄していた、あの赤いアーマード・コアの拳によって。

恐怖が襲ってきたのはそれからだ。彼は震えた。叫んだ。泣いた。だが誰も助けには来てくれない。狂乱するあまり彼はハッチを開く操作さえ満足にこなせず、獣のように叫びながらコンソールを叩き回った。

——出してくれ！　ここから逃げさせてくれ！

なのにモニタは無慈悲に外の光景を映し出す。赤が走る、夜の林を。剣のように美しい機影が翻るたび、仲間たちがゴミクス同然に砕けていく。ひとり。またひとり。あらゆる反撃の試みは見当違いの場所を撃ち抜くだけに終わり、頼みの綱のACさえもがろくに動けもしないうちに潰された。

彼は息を呑んだ。

見ている。『奴』が、こちらを見ている！

彼は恐怖に狂った鼠の動きで、狭いコクピットを転げまわった。見咎められた、このMTがまだ生きているということ。胴と脚を切り離されてなおジェネレーターだけは動いていた——その事実が『奴』を呼んでしまった。『奴』が止めを刺しに来る、確実

に息の根を止めに来る！

「嫌だ！ 殺さないでくれエエッ!!」

その願いが神に通じでもしたのだろうか。

偶然にも彼の手がハッチの開閉スイッチに触れ、彼は冷たい夜風の中へ転がり落ちた。装甲板にぶつかり、跳ね、地面にしたたか背中を打ち付ける。呻き声と猛烈な吐き気が腹の底から湧き出した——その途端。

“奴”が閃光を放った。

高圧縮低速レーザー砲、エナジーバズーカ。蒼白の光弾は寸分たがわずMTのジエネレータを撃ち抜き、爆炎が迸った。

彼は木の葉のように吹き飛んだ。泥まみれになり、夜露に濡れ、無数の擦り傷切り傷に痛めつけられ、彼は泣きながら起き上がった。

そして、見入った。

炎を浴びて輝く真紅の巨人に——いや。

そのコクピットから現れた、一人の美しい——少女の姿に。

*

「悪魔……みたいなものかな」

尋問官が煙草に火を付けながら言う。男はかぶりを振った。

「違うさ。悪魔なんかじゃない。」

あれは神の使いなんだ。

心もなく、しがらみもなく、ただ地上を飛び回り、悪い奴らに罰を与えて回る。あれは世界の法則そのものだ。因果応報。全ては神の御心。誰も勝てない。止められやしない」

じつと、尋問官の目が男を捉えた。今や男の目は、両方とも露わになっており、そこには明らかな狂気の色が見て取れた。尋問官が煙を吐く。この詰問は時間の無駄だったかもしれない、との思いにとらわれて。

だが男は上機嫌に微笑み、予言者めいた囁きを洩らした。

「ねえあんた、分かるかい……」

あの子はきつと天使なんだよ。だから怖いんだ」

新連載

アーマードコア2 EXCESS

“聖少女覚醒”
2017年初頭、
始動。